

国立国語研究所学術情報リポジトリ

大都市の言語生活 分析編

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001261

国立国語研究所報告 70-1

大都市の言語生活

分析編

SOCIOLINGUISTIC SURVEY
IN
TOKYO AND OSAKA

三省堂

© 1981 The National Language Research Institute
Sanseido Publishing Co., Ltd. Tokyo, Japan

printed in Japan

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所は創立以来各地の地域社会において、言語生活の実態を知るための社会調査を実施し、その都度報告書として公表してきた。しかし、これらの地域はせいぜい中都市の規模に止まった。一方、国民全体の言語生活にますます重みを増している大都市における言語状態を明らかにすることの必要性を、われわれは長い間痛感していた。幸いに昭和49年度に課題名「大都市における言語生活の実態調査」（代表者野元菊雄）として文部省科学研究費（総合研究A）の交付を受けることができ、東京及び大阪で総計1,500名の市民を対象として調査を実施した。

調査には所員のほか、企画段階から言語の面で筑波大学・岩手大学・東京大学、社会学の面で東京大学新聞研究所・東京都立大学・大阪市立大学、統計の面で文部省統計数理研究所の研究者が参加された。実施に当たってはさらに、琉球大学・広島大学・大阪教育大学・大阪樟蔭女子大学・四国女子大学の研究者も加わられた。また、その他諸大学の学生の協力を得た。

本書はその調査結果の報告書である。複雑でとらえにくいとされていた大集団の実態調査に初めて取り組んだ意図とその成果について、理解と批評を得られれば幸いである。

この種の調査は、調査地域の方々、被調査者の方々の熱意ある協力がなければ十分に運営できないものである。この調査も例外でないことは言うまでもない。報告書の完成に当たり、関係各位に謹んでお礼を申し上げたい。

この報告書の構成と執筆者は、目次に掲げるとおりであるが、研究所外の参加者として、筑波大学教授林四郎氏、大阪樟蔭女子大学教授杉藤美代子氏にも執筆をわずらわした。なお概要の英文翻訳にはノートルダム清心女子短大講師のジョイス・マクファーレン・前田氏の協力を得た。

なお、この報告書は印刷製本の都合上、『分析編』（国立国語研究所報告70-1）と『資料編』（同報告70-2）とに分けて刊行する。本冊は、その『分析編』であるが、『資料編』と合わせて利用されるようお願いする。

昭和56年 3 月

国立国語研究所長 林 大

目 次

第1章 調査の概要

- 1.1. 目的と意義……………野元菊雄…………… 1
- 1.2. 調査の方法……………江川清……………19
- 1.3. 調査実施状況の分析……………江川清……………56
- 1.4. 被調査者の属性……………米田正人……………70

第2章 社会構造と言語生活

- 2.1. 大都市の性格……………江川清……………85
- 2.2. 東京人意識・大阪人意識……………渡辺友左……………94

第3章 言語使用とその意識

- 3.1. 言語意識……………野元菊雄…………… 107
- 3.2. ことばのイメージ……………江川清・米田正人…………… 128
- 3.3. 1日の言語生活……………林四郎…………… 149

第4章 アクセントの実態

- 4.1. 東京のアクセント……………南不二男…………… 163
- 4.2. 大阪のアクセント……………杉藤美代子…………… 192
- 4.3. 東京・大阪を比較して……………南不二男…………… 221

第5章 語彙・文法の実態

- 5.1. 「あさっての翌日」と「あさっての翌々日」……………佐藤亮一…………… 225
- 5.2. 可能表現をめぐって……………佐藤亮一…………… 235
- 5.3. 副詞、及び方言的な言い方……………沢木幹栄…………… 244
- 5.4. サ変動詞をめぐって……………真田信治…………… 255

第6章 敬語使用の実態

- 6.1. 人称代名詞の使い分け……………飛田良文…………… 263
- 6.2. 敬語の使い方……………飯豊毅一…………… 277
- 6.3. あいさつ行動……………林四郎…………… 307

第7章 相関分析

- 7.1. ことばのイメージのパターン分類……………米田正人…………… 314
- 7.2. 言語行動の類型化……………米田正人・江川清…………… 324
- 7.3. アクセントの型の形成要因……………江川清…………… 330

第8章 調査結果のあらまし……………野元菊雄…………… 339

英文概要…………… 351

索 引…………… 356

CONTENTS

Chapter I	Outline of the Survey	
1. 1.	Aims and Meanings	I
1. 2.	Methods of the Survey	19
1. 3.	Analysis of the Execution of the Survey	56
1. 4.	Social Attributes of the Surveyees	70
Chapter II	Social Structure and Language	
2. 1.	The Character of Large Cities	85
2. 2.	Surveyees' Consciousness of Belonging to Tokyo or Osaka	94
Chapter III	Linguistic Usage and Consciousness	
3. 1.	Attitudes to Language and Language Use	107
3. 2.	Images of Types of Language	128
3. 3.	Linguistic Activities in One Day	149
Chapter IV	Accent	
4. 1.	Accent in Tokyo	163
4. 2.	Accent in Osaka	192
4. 3.	Comparison of Accent in the Two Cities	221
Chapter V	Vocabulary and Grammar	
5. 1.	Words for "Three Days from Today" and "Four Days from Today"	225
5. 2.	On Potential Expressions	235
5. 3.	On the Usage of Some Adverbs	244
5. 4.	On the Conjugation of the Irregular Verb "Suru"	255
Chapter VI	Honorific Expressions	
6. 1.	The Proper Usage of Personal Pronouns	263
6. 2.	Usage of Honorific Expressions in Various Situations	277
6. 3.	Greeting Behaviour	307
Chapter VII	Correlative Analysis	
7. 1.	Pattern Grouping of Images of Language	314
7. 2.	A Model of Typological Classification of Linguistic Behaviour	324
7. 3.	Formative Elements of Accentual Patterns	330
Chapter VIII	Outline of the Results of the Survey	339
Summary		351
Index		356

1. 調査の概要

1.1. 目的と意義

1.1.1. 目的

戦後、地域社会における言語生活の実態調査は、国立国語研究所の実施したものを初めとして、いくつかあり、大きな成果を得ている。しかし、この種の調査はまだ大都市において実施されたことはなかった。

一方、ここ数年の社会変動は著しい。いわゆる地方での過疎現象とそれを裏返した都市における過密現象である。すなわち、大都市への人口集中によって、大都市の全国に対するウェイトは著しく増大した。そこで、一般的な地域社会としての大都市における言語生活、および方言社会から方言を持ってその大都会に来て生活を始めた人々の言語生活の実態を知る必要性はますます高まった。この調査は、これを知ることによって、共通語あるいは標準語はどう変わるかを推測し、それに対処する効果的な言語教育の施策立案の学問的根拠を得ることを目的とする。

大都市としては、東京区部および大阪市を調査することとした。これは、以上の目的に照らして当然考えられることである。なお大都市としての東京・大阪の違いを明らかにするとともに、その言語の違いをも明らかにすることをめざらした。東京の方に重点はあるものの、日本はなお大阪をも無視することのできない二極構造を持った社会であると考え、将来の日本語の姿を予測するためにはこの両都市をなるべく同時にとらえておきたいと考えたからである。

今まで、大都市における言語生活が真の意味で研究されなかったのは、被調

2 1. 調査の概要

査者の捕捉がむずかしいなどの理由で、種々の困難があろうと予測されたためである。そしてこの予測は相当程度適中したことは調査を通じてわれわれの痛感したところである。

しかし、社会学を初めとして、他の学問分野では大都市住民の調査が始まっている。これらの分野でも困難は同様であろうが、今やこの困難故のためらいを許さない必要性が痛感されるに至ったのであろう。われわれの当面している言語の分野でも、今や調査に着手すべき時が来たと思われる。この調査は言語面については初めてのことでいろいろな方法論上の進展が実施の過程で予想される。この、大都市における言語の実態研究についての方法論確立もこの調査の大きな目的といっている。

先に、東京と大阪の両都市を比較することも目的である、と述べたが、この比較を図1-①に示すような五つについて調査することを目ざす。すなわち、

- (i) 東京在住者と大阪在住者との比較
- (ii) 地元出身者どうしの比較
- (iii) 他地域からの移住者どうしの比較
- (iv) 東京在住者、大阪在住者のうち出身地を同じくするものどうしの比較
- (v) それぞれの都市における、地元出身者と移住者との比較

である。

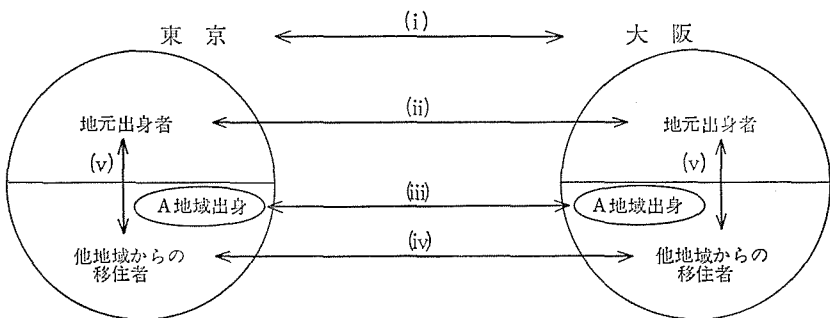


図1-① 比較の種類

1.1.2. 調査についての基本的な考え方

この調査でとった方法については、1.2.などで述べるが、ここではその前提としての考え方について述べておくこととする。

(1) 言語の学際的研究と社会言語学

言語学の分野では、今、隣接科学からの、いわゆる学際的な接近が図られていると同時に、ことばのシステム面の研究に加えて、言語行動を含む人間の社会的行動一般の持つプロセス面への研究が大きく進展している。

これは、少し古いがソシュール学の用語を使って説明すれば次のようになるであろう。ソシュールは、われわれが漠然と「言語」とか「ことば」とかいていたものを三つに分けて、これを厳密に区分しなければならない、とし、それぞれを対象とした学が存在し得るし、また存在しなければならない、とした。殊に、ラングとパロールの区別は重要である。また、ソシュールは、言語を体系自体として考察する科学を内的言語学と名付け、体系に直接の関係を持たない民族史・政治・地理的な広がり、その他と言語との関係を考えるのを外的言語学と名付けた。彼は、言うまでもなく、ラングの学および内的言語学をそれぞれ、パロールの学および外的言語学に優先する、とした。

これは重要な指摘であり、それ以後の言語学に大きな影響を与えた。直接の影響を受けた構造主義言語学、あるいは記述言語学は方法としては帰納的であったが、これへのアンチテーゼとして出発した演繹的方法をとる生成文法も、要するに内容としてはソシュールが優先を与えた面のことである。

しかし、厳重に区別されなければならないとした、一方の面だけの研究では全体像は浮かんでこないということは自明である。今まで軽視されていた他の面にも、今までの一つの面と同じ価値を与えて、いわば車の両輪のようになってはじめて言語は解明できるものであろう。この今まで軽視されていた方面をおおうものとして社会言語学がある。

パロールの面は社会的動物としての人間の行動に関するものであるので、その研究はどうしても社会的な見方をしなければならない。社会的に見る、とい

4 1. 調査の概要

うことは、どうしても内的言語学だけの見方ではいけない、ということである。したがって当然、他の学問とのつながりができて、学際的研究となる。いろいろな言語学にとっての周辺科学でも、言語について言語行動を含む人間の社会的行動一般への興味が共通に盛り上がってきている。

社会言語学は最近アメリカで盛んになってきた。これについてはいろいろの原因が考えられるが、そのうちの一つとしては、一国内の少数言語への対応の変化というものがある。これはより一般的な社会の傾向としての弱者への配慮ということも関係がある。それまでのアメリカは、よきアメリカ市民になるためには、英語ができなければならない、という前提を設けて、それに到達できない人間は構わず切り捨てるという方向をとってきた。しかし、より高い統一ということを考えると、すべての人をその第1言語によって教育し、その上でのアメリカ人としての統一ということが必要だ、ということになったのではないかと思う。各人に基本的人権として、その第1言語で教育を受ける権利があると考え、その基礎の上に英語での教育をしていくと考える。こうして、二言語教育ということをはじめたわけであるが、これを有効に実施するに当たっては、いうまでもなく、英語以外の言語と英語との二言語使用の実態を把握するところから出発しなければならない。この実態把握は社会言語学の担当すべきところである。

日本では、この意味の二言語使用に関しては全くないわけではないが、特に大きな問題はない。しかし、国民や国家の中央志向の強さからいって、方言と標準語との二言語使用の問題はある。標準語の普及ということは、明治維新以来日本の文教政策の大きな目標であった。

普及ということと直接の結びつきは意図していなかったが、方言と標準語との二言語使用の実態を調査するということは、われわれ国立国語研究所の設立当初からの主な調査題目となっており、この面での報告書も比較的多く出ている。しかし、これらは、主として地方の中小都市、特に小都市での調査であった。ある方言の地方的中心地である小都市での調査とともに、ちょうど逆の立場で大都市でのこれら二言語使用の実態を調査することが必要である。今回の調査を企画した目的の一つはここにある。

さて、言語学は科学の一部門である。ということは哲学であってはならない、ということである。つまりは、思弁的な研究ではなく、科学的・実証的な研究であるべきだ、ということになる。哲学と科学とは方法論が根本的に違っている。次元が違うわけであるから、どちらの次元が高いかということは無論いえない。哲学には、科学の存立する基礎といったものを説き明かすことが重要な役目としてあるのであるが、個別科学と知の量を争うべきものではない。

最初に述べたように、言語については、現在、学際的な科学研究が盛んになっている。社会言語学はその学際的研究の一つの中心をなしていると思うが、その周辺には、生理的なもの、心理的なものがある。生理も心理もともに極めて個体的なものであり、この点で言語の個人差を中心課題とする社会言語学とは関係が深い。言語現象を、時には心理的・生理的なものとの関わりのある言語現象を、社会的文脈においてとらえるのが社会言語学である。こうして言語学は、心理学・社会学とともに三角のような位置に立って互いに影響し合っているところがあると思う。

(2) ことばの個人差

以上のことをいわば序説として、ことばの個人差のことを考える。「社会言語学」というように「社会」の語がありながら、個人ということをいうのは、上記のように、社会言語学はパロールの言語学である、とするならば、パロールは個人的事実であるので当然ということになる。そこで、まず個人差について考えてみることにする。

まず第一に、人間は社会的に決められた体系としての言語を使って自己を表現するが、その心には、やはり陳腐を嫌うという感情が強く働いている。すなわち、自分が今言おうとしていることは、あるいは書こうとしていることは、自分自ら体験した、あるいは考えた、かけがえのないギリギリ決着のものである。したがって、どうしてもありきたりの表現では満足できない気持ちになるのが普通であろう。ところが、そうだからといって、日常のことばから非常に外れた表現をしたら、わからない、ということになる。つまり、通達という言語の主な役割を果たさなくなることになる。

このようにして、われわれのことばは、絶えず斬新な表現をしたいという欲

6 1. 調査の概要

求、いわば遠心力と、そのままにしておくところかへ飛んでいってしまうようなものを、通達機能を考えて一つの中心、ラングというものに繋ぎとめようとする求心力との張り合いの上に成り立っているものであろう。おそらく、古来の表現に頼り切ってしまって、何の生みの苦しみもなく書き流したようなものには大した文章はなく、上に述べたような、二つの力の張り合った緊張関係が眼に見えるような文章が名文なのであろう。

このような名文というものが存在するのは、言語の使用が人によって違う、ということを前提としている、といっている。そして、もう一つの前提として、ある発話間には、価値の上下があり得る、ということになるのではないかと思う。

以上によって、ことばには個人差があることが明らかになるわけであるが、この個人差はどういうところに理由があって生ずるか、ということについて述べてみよう。

まず、生理的な理由が考えられる。

話の内容がわからなくても、隣の部屋で話している人が知っている人であれば、だれかを当てることができる。これは声の人ごとに違っている、ということを出発点としている。人の顔が人ごとに違う、ということと、このことは決して無縁ではない。顔が違えば、唇の大きさも厚さも違い、口むろ・鼻むろの大きさも違うことは当然である。唇の大きさが違えば、音声の出口が違うことになるから音声は当然違ってくる。口むろ・鼻むろの大きさが違うということは、音声の共鳴室の大きさが違うということで、音声は当然違ってくる。その他、発音器官すべてが人ごとに同一でないはずである。

以上は生理的な原因によることばの個人差の一例としてあげたものである。

次に社会的な理由がある。その人の属している社会集団によることばの違いがある。これは社会言語学のもっとも大きな問題であるから、本報告書でもこの点に一つの主眼を置いている。

なお、地域社会固有の言語については普通は方言学が扱う。その他に、これらとは違う社会的な理由もある。その人がどういう環境で育ったか、どういう教育を受けたか、などがこれである。このようなものを総合して、個人の生活

経歴の差がことばの個人差を生み出した、と言いかえることができる。

結局は上に述べた社会的な原因に帰することになるが、なお、心理的な要因が考えられる。同じ場面に立たされて同じ事態を表現する場合にでも、ことばに個人差があるのは、社会的な原因の他に、その場面にあって、どういう心理状態に立っているか、という差の反映である場合がある。ある場合に当たって、どういう心理的立場をとりがちであるかは、気質・パーソナリティに影響されるところが大きいと思われる。内気な人、そうでない人で、どういう語を選んで表現するか、どういう表現法をとるかに違いがあることは常識でも想像がつく。この点から心理的なものの調査が必要であるが、今のところ方法論が確立しておらず、われわれの今回の調査でもこのところはやや不足の感を免れない。今後の研究課題である。

隣りの部屋の人が知っている人であればだれが話しているかがわかる、と前に述べたが、知らない人であっても、年齢についておよその見当はつく。これは人の音声の声帯などの変化が大体同じ方向でしかもそう違わない速度を持っているからである。しかし、その間にも当然ある差があり、そこに個人差が考えられる。一体、ことばの個人差といったとき、大体同じぐらいの年齢を切り取って考えているわけである。以上のような生理的なものだけでなく、生活経歴の時間の軸による変化も考えられる。こうして、個人のことばを比較してみたとき、発達段階を完全に消去することができない以上、これをもことばの個人差の一原因に数えなければならない。

以上、ことばの個人差の原因を四つの面から眺めてみた。この四つは、しかし、すべて同じ次元のものではない。

はじめの、生理的・社会的・心理的の三つの原因は、いわば共時的に考えたもので、発達の観点からする原因はこれに対して通時的なものといえよう。したがって、はじめの三つのものはすべて発達のにも眺めることができる。

共時的と考えた三つの原因のうちでは、生理的原因がやや孤立している。これに対してあとの二つ、社会的・心理的の二つの原因は、からみ合う場合が多い。そして、生理的原因が純粋なことばの個人差を生み出すのに対して、あとの二つ、特に社会的原因は、社会集団によることばの違いと融け合うところが

8 1. 調査の概要

ある。というか、それを通じてしか抽出できないのである。この報告書で、前に述べたように、ここに重要な視点が据えられたのは、社会言語学的調査としてはここに中心を置くべきである、と考えたからである。

ことばの個人差の個々の事例についてはここでは省略する。しかし、これらの原因は、人間にとって不可避なものが多い。したがって、ことばの個人差も人間にとって不可避的なもの、ということになる。

(3) 個人差とラングの問題

以上のように、われわれのことばには個人差が多く見られるが、これがその人の属する社会集団とどういう関係にあるか、ということは、なかなか分離しがたい点がある。これが社会言語学の中に個人差というものを考慮の中に組み込まなければならない理由である。

人間はある社会に属しているから人間であって、社会から孤立した人間というものは考えられない。しかし、その属している社会は一つとは限らない。むしろ一つだけに属している人間はいない。その属するそれぞれの社会にはそれぞれのラングがあると考えられる。このような社会と個人との関係はどうであろうか。あるいは個人差との関係はどうであろうか。ラングと個人のことばとの関係、といってもいい。

わかりやすい例として語彙を考えてみよう。ある社会のラングはおそらく、その社会の成員の持っている語彙の異なりの総和と考えるというのが、一つの考え方である。成員それぞれは、語彙の豊富な人、貧弱な人が当然いる。こうしたとき、すべての成員に共通する語彙だけがそのラングの語彙である、とする考え方も成立し得るが、それをはみ出したものはラングに属しない、とするのも妙なものである。それより、前者のように考えて、異なりのすべての語彙とした方がいいと思う。そして、それをラングの語彙とする。ラングの語彙としてはこのように考えるが、ある個人はそのうちのあるものを知らないこともあり得るとして、理想としてはそれをも習得すべきものとするべきである。しかし、現実問題としてはこれを各成員に求めるのは無理であろう。

音韻や文法についても、これとほぼ同様なことが言えると思う。ラングでは、個人をとった場合、語彙で言えば理解語彙と使用語彙とがあって、前者は後者

よりずっと広いと考えられるが、この広狭の差といったものも、その人が持っている語彙の広狭のほかにもあることになる。

このように考えてくると、一つの言語社会に属する、といっても、個人差というものは相当大きい、とせざるを得ないようである。ということは、ラングというものは、漠然とわれわれが思っているようにはコンクリートなものではない、ということになる。ラングは非常に具体的なものである、ということになっているけれども、このような評判にもかかわらず具体的ではなくて、何だかあやふやで、つかまえどころのないようなものである。確実にあるのは、個人の言語ではなかろうか。これをラングといえるかどうかは、ラングの定義上からも疑問ではあるけれども、具体的にわれわれがイメージすることができるのは、こうした個人の頭の中にある“個人的ラング”ではないか。ここで定義上疑問だとしたのは、一つにはラングは社会と結びつけて考えるとところへ、個人的というのは矛盾と思われるからである。

こういう難点はあるものの、仮にこれを認めたとしても、この“個人的ラング”を、では具体的にはどうしてつかむか、ということはむずかしいところである。文法的に見るならば、各人の文法体系をつかむというのは比較的やさしいとは思いますが、これについては二つの問題がある。

一つは文法体系はつかみやすいとしても、上述のように語彙となるとなかなかつかみにくいところがある点である。一体、人はどのくらいの語彙を知っているのか、というようなことはなかなかむずかしい。国立国語研究所では創立早々のころに、「竹原スタンダード和英辞典」の見出し語のうち、被調査者が知っていると思うものにしるしをつけさせるという方法で、人がどのくらいの語彙を持っているかを知ろうとしたことがある（国立国語研究所、1951）。結果は、大変個人差のあることがわかったが、これは調査の常として調査した限りでしかわからないわけで、この辞書に出ていなくて知っている語も当然ある。この調査はしかし、どの程度知っているときに知っているとするべきか、という自己判定の規準が人によって違うのではないか、ということも考えられる。この点についての調査は必要であるけれども、しかしこの調査は非常にむずかしいであろう。

もう一つは、文法体系をつかんだと思っても、その個人のラングが決して固定したものではなくて、果たして“個人的ラング”というものがあるかどうかは疑問である。ある表現が文法的であるかどうかについては、ボーダーラインにあるものとなると、一個人の中でも揺れている、ということがある。

以上のように考えるならば、社会的なラングよりは少し実体がありそうであるけれども、これは程度問題で、実体は依然としてはっきりはしていない。

こういうことからするならば、一番実在のはっきりしているのは、一回一回の発話ではなかろうか。これだけは絶対確実に存在する。そこで科学的な分析の対象としてはこれしかないと思われる。こう考えるならば、パロールの言語学こそ価値があることになる。

ある文が文法的文であるか非文法的文であるかはよく問題になるが、このことも、これと関係があろう。もちろん、ほとんど全員が一致して文法的あるいは非文法的とする文もあるであろう。しかし、中にはそうでないものもある。分析者が多少の反対はあっても、ある文を文法的として考察するならば、これは“個人的ラング”を基礎としていると考えざるを得ない。結局のところ、その段階に止まらざるを得ない。しかしこの“個人的ラング”は前述のように心細いものである。文法的か非文法的かが問題になるのは、要するに分析者が自分の頭で例を作るところからである。これは、用例を集める時間と労力を惜しむ、というところからきているわけで、この労をいとわず、用例実例主義をとるならば、少なくとも存在はしたわけで、文法的・非文法的という不毛の論はしなくてすむ。実例があるということは、パロールとして実現したのである。

もちろんこのように述べたところで、ラングの言語学がまったくいけないといっているのではない。これはもちろん価値がある。ただ自らが思っているほど大したものではないということである。少なくともこれだけで言語がわかるものではない。社会言語学はこのことを認識したところから出発したのである。

(4) 社会言語学について

言語は構造的なものであるから、何も今さら構造言語学といわなくてもよさそうなものである、と思われるのと同様に、言語は社会的なものであるから、これもことさら社会言語学といわなくてもよさそうに思われる、というのの一

理あることである。そこで、ここでは、たとえば、家族構成といったような一つの社会的なものが、どのように言語面に反映しているか、というようなことは、これを構造としての語彙体系という見地から見る限りは言語学そのものであって、ラングのある面を解明しようとしているわけで、これは社会言語学には入らない。少なくとも社会言語学の主流ではない。

社会言語学は、言語の実態の調査・考察から出発する。そして、その実態または実体というものは結局、今まで考察したように、個人的なパロール的な面にしかあらわれないから、そこを調査することになる。言語を出発点とし、社会学的な出発はしない。

このようなことで社会言語学は、言語の具体的な使い方というものの調査である。この使い方についての実際を知ることをこの調査の目的とする。ただし、この際、個々のデータでは一致度が高くない。ことばの個人差というのは、大変はなはだしいので、なかなかつかまえることができない。ある程度まとめて集団というものとして調査していかざるを得ないところがある。これについてここでは考える。

まず、その個人差は何に基づいているのか、ということを次に考えてみよう。

個人というものは前述したように、多重的にいろいろな社会に属している。たとえば、男であるか女であるか、年齢は、受けた教育は、現についている職業は、などなど。この社会集団的な見地からまったく同じ多重的社会集団に属している個人というものは幾人もいるものではない。

たとえば、1953年の国立国語研究所の愛知県岡崎市における敬語の調査で、全被調査者434人中、男・30歳代・中等学校卒業、という3条件を同じくしている人は8人にすぎない。以下この章におけるこの調査については、野元(1958)による。この8人(a, b, ……, h)について、被調査者が何モーラで反応したかを調べてみると、図1-②のようになる。これは、まったく同じ事実を表現するのに、長く言う人と短く言う人とがいるのではないかと考えるからである。いわゆるオシャベリかオシャベリでないか、ということである。オシャベリは、われわれがいつも感じているように、いつもオシャベリか、ということである。これを各場合最もモーラ数の多かったものを100として、最

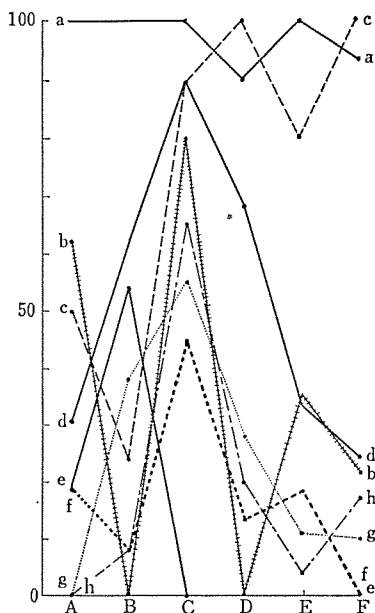


図1-② 反応文の長さの個人差(その1)

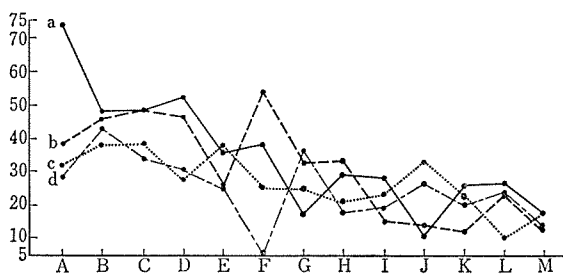


図1-③ 反応文の長さの個人差(その2)

も少なかったものを0として、各人各場面ごとの数を出して図に示したものである。

この図1-②によると、線の交わらないものは次の被調査者である。

(i) aとc以外のもの

(ii) cとf, h

(iii) dとe, f, g, h

このように交わることが互いにはないものが、一部にあるのとは、オシャベリはいつもオシャベリである、という傾向が一方では確かにあることを示している。aはオシャベリで、fはそうではない、とは言えよう。しかし、一方では複雑に線が交錯しているので、個人によって一定の傾向があるわけでは

はない、ということも示している。このような二面性はことばの個人差にはいつもついてまわるのでそこに個人差の研究がむずかしく、したがって発達しない理由がある。

図1-②は、性・年齢・学歴の三つの社会的要因が同じであるにすぎない。この三つ以外のものが大きく影響したかもしれない。

女・30歳代・中等学校卒業・中流・三河で生まれ育った、という5条件を満たすのは、上の434人中4人いた。この人々が調査した13場面面で反応したモー

ラ数を数えて、場面（A, B, …… , M）を4人の総モーラ数の多い順に並べると、図1-③のようになる。

これは図1-②と違って実数によっているが、やはり線は非常に交錯している。この交錯の原因を追究するのが社会言語学の一つの方向であるが、これはまだじゅうぶんではない。

交錯は一つには場面が違うことによって起こったものであろうか。場面もまた一つの社会的環境であるから、社会的な面からとらえ直さなければならない。偶然かどうか、この図1-③では、F場面のよう、4人の差が大きく広がるものもあり、B場面のよう、差が小さいものもある。

この交錯はまた、この4人の上の5条件以外の社会的条件の違いを反映するものであるかもしれない。たとえば、婚姻関係とか、子どもの有無とか、またさらにパーソナリティといったものの差が反映していることもある。しかし、こうなったら、しょせん人間はバラバラで個人差のあるのは当然である、ということになる。

なお、以上のような個人差を支えているものは、言語というものの多様性ではないか、と思う。つまり、それが原因となり結果となって、個人差とともに、複雑にからみ合うために、ことばは非常にバラエティに富んだものとなる。

たとえば、上記の敬語の調査では、ある場面でどうか、という問への反応を見ると同じ反応文はほとんどない。柴田（1979）によれば、ある場面については、被調査者246人で245通りの発話が記録されている、という。

子ども連れで歩いているとき、昔習った先生に会って、その子どものことを聞かれて返事する場面の反応文は、主なところだけを抽出すると、

これは わたしの こども です あの
 A——— B——— C——— D——— E———
 のような五つの部分に分け得る。Bの部分は「わたくしの」「ぼくの」「じぶんの」「てまえの」「あたしの」「うちの」の七つが、さらに多くの形の中から主なものとしてあげられる。同様に、Aが四つ、Cが七つ、Dが八つ、Eが五つ、となっている。そこで、この主なものだけでも、組み合わせは、理論的には、 $4 \times 7 \times 7 \times 8 \times 5 = 7840$ 、となる。言語の場合は、組み合わせだけでなく、その順序も問題となる。すなわち「あのこれはこどもですわたしの」でも

いい。そこでその数はほとんど無数となる。実際は、この例で言えば、C-Dはこの順序を崩すことはほとんどなかったりして、それほど数はあられもないが、それでも相当の多様性を示す。

以上のように、人というものは、同じ場面で同じ事態を同じ相手に言うものでも、非常に違った言い方をするものである。これらの場合は、音素記号だけで反応を記録しているのであるから、いわば音素連続が同じというところまでしか区別できず、細かい発音記号を使つての発音の差、イントネーション、プロミネンスの記録、早さの表示などはしていない。身振り、表情なども加えるとするれば、ここでは同じ反応文としているものでも決して同じではないであろう。

このように、個人差は非常に大きい上に、同じ個人でも場面によってことばが大変違う。その違い方は、ともすれば、個人間の差よりも大きいことさえあるであろう。たとえば、公式の場面では、ざっくばらんなときとはまったく違った発声法をとるであろうし、用語もおそらく堅苦しいものを選択するであろう。こういう個人の中でのことばの違いも社会言語学ではとらえるべきものである。しかし、今のところでは、このような個人の中のことばの違いを計算に入れると、ことばの多様性は、今の社会言語学の水準では收拾がつかないように大きくなる。このようなことまで考えていくと、ことばというものは人間ごとにバラバラである、ということになろう。これはことばというものが本来そういうものであるから、というのでは研究はそこでストップしてしまう。

ストップさせないためには、このようなものをどう扱ったらいいかについて、次のように考える。

つまり、少し多量に調査してみてもどうか、ということである。たとえば、幾人かを男と女とに分けたらどうであろうか。男の中にもいろいろな人がいるし、女の中にもいろいろな人がいる。若い人も年寄りもいる。その年齢という点で見ていくと、若い人も年寄りも両方いるから、大ざっぱにいて、この点ではプラス・マイナス・ゼロとなつて、年齢の要因は消去されることになる。正確に言えば、女性の平均年齢は、男性より5歳上であるから、ゼロにまで消去されることは不可能であるかもしれない。しかし、ある程度まで消去できる

とは認めていいのではないか。こうして年齢だけでなく、その他についても消去されるので、男という社会集団、女という社会集団についての言語というものの、より正確に言えば、パロールというものがわかるのではないか、というわけである。

しかし、ゼロに近く消去するためには、ある程度大量について調べなければならぬまい。そうでないと、多少のゆがみが出るおそれがある。少ないと老人に偏るとかいうことが起こり得ると思われる。

もちろん以上のことは、少々単純にした、図式化した考え方である。たとえば、学歴の男女別構成は少なくとも昔は同じではなかった。そこで、今でも中年以上については大きな差があるはずで、この差が、つまり社会的要因のうちの学歴というものの差が、男女の差にあらわれている、という面がないとは言えない。つまりは、純粋な性による差があらわれているのか、という点については疑問がある。もっとも、これには、こういうものの違いをも含んだものが男女の差そのものである、という考えもあり得よう。このほか、職業から見た構成も男女では相当違っているはずであるし、それ以外でも大きい違いが当然あることになる。

このように見ていくと、たとえば、男性についてだけ学歴別の結果を出す方が、男女込みで出すよりはいいし、さらには、男性でも同じ職業についている人について学歴別の結果を出した方がいい、ということになる。しかし、こうしていくと、一つのグループに入る人数は大変少なくなる、ということについては前に述べたことによって明らかである。このように、一つのボックスに入る人数が少なくなると、もともと個人差の大きな言語であるから、散らばりの度が大きくなってしまって、平均などの意味がなくなってくる。この散らばりは結局、それまでにインデックスとしていない社会的要因に基づくものも一部にはある、と考えられる。

そうした欠点を除くためには、ある程度的人数を調査対象としなければならない。しかしこのような調査をするためには、費用・労力・時間が大いにかかる、ということになる。これをセーブするためには人手を要することになろう。もちろん、人手の動員にはまた費用がかかる。さらに、多くの人が一つの調査

に当たるためには、調査によるゆがみが生じるおそれがあるから、なるべく少なくした方がいい。以上のようないろいろの要素を考えて、調査の規模を考えることになる。けれども、このような調査を一人でするのは大変であるから、必然的に共同調査ということになる。共同調査というものは何も言語の社会調査には限らないけれども、その典型はやはりここにある、としていいかと思う。

以上のようにして、いろいろな社会的要因ごとのことばの使い方をもしきわめ尽くしたとしても、まだ個人差というものは残るに違いない。これが予測困難な社会的要因であることも考えられるが、それは仮になかったとしても、なお、おそらく心理的要因が残るであろう。

心理的要因、そのうちのパーソナリティはことばと重大な関連があろうということとは既に述べた。社会とは関係のあまり深くない個人差をこの点は引き起こすであろう。もちろん、心理的要因もまた社会というものにかかわる場合があることも既に述べた。たとえば、オシャベリかどうか、ということは、多くはパーソナリティに関係するものであると思うが、それでも、われわれは何となくオシャベリな地方というようなものがあるような気がする。東北人は寡黙なような気がするし、大阪人は関東人からすれば口数が多いと思っている。つまり、地域社会というものは、少なくとも、他の社会の人に接するときは差がありそうに思う。しかし、東京人と大阪人との口数の多さの比較は今回の調査では企画しなかった。

以上のようなものを除いてもしかし、やはりわれわれは純粋に心理的な要因を、生理的な要因の外にも、社会とのかかわりの比較的少ないものとして考えなければならない。実は、ことばの個人差に及ぼす、この面の研究が今のところ非常に手薄であると思わざるを得ない。体系としての言語の研究でない、パロールの研究はこれから大いに発展しなければならないのである。

(5) 調査の結果について

以上のような理念に立ってこの調査を企画し実施した。調査の結果は、客観的に整理しなければならない。整理は生の数で出す場合もあるが、客観的であるための一つの目安として、できる場合は数量化する。もちろん数量化だけが科学的ということでもないし、また数量化しにくいものもある。

調査というものは、常に調査したものしかわからないのである。したがって何を調査すべきかは大切である。このようなわけで、調査の企画・実施に当たっては、何を調べるかについて、綿密に検討しなければならない。

なお、調査というものは、調査したものしかわからないと同時に、調査したところで、それですべてわかるとは限らない、という宿命を持っている。こうなると効率が悪いものであって、このあたりに調査に対する不信論の出てくる理由がある。

また、調査の結果が、本当の姿の反映であるかどうかははっきりしないのが普通である。たとえば、選挙の予想調査では、選挙の結果と比べることによって、調査が正しかったかどうかを検定することができる。しかし、一般の社会調査では、このような検定するよすがを持たない。そこで、サンプリング調査のような場合、わかっている母集団の性比、年齢比などがサンプルのそれとどの程度一致するかを見て、一致すればそれらから得た調査の結果は正しいであろうと推定するわけである。

また一方、調査でわかることはすべて常識的なことばかりである、という意見の人がいる。しかし、われわれの常識はきわめて大ざっぱなものであり、また、その程度の大ざっぱであるが故に、予測的知識をいろいろと得ることもできるのである。

常識的なことがわかっただけのために、大きな費用と時間とをかけるのはつまらない、と考える人は多い。標準語を使う能力は、学歴が高ければ高い、という結論を出した国立国語研究所の1950年の山形県鶴岡市の調査の報告書(国立国語研究所, 1953)を読んだとき、これは常識であって、こんなことを出すために調査をしたのか、という声があった。しかし、20年後の同じ調査では、この結論は修正されなければならなかった(国立国語研究所, 1974)。最初に常識的と評した人は、20年後にはそれが常識ではなくなると予見したであろうか。否である。したがってわれわれは、今回のこの調査について、常識的なものが出ている、という批評を予め拒否する。

何事も調査によらなければわからない。常識さえもそうである。

1.1.3. 意義

以上のような考え方のもとに今回の調査が企画・実施された。もちろん、参加者すべてが同じ考えを持っているわけではない。その必要もない。しかし、ここでは、国立国語研究所の報告書では比較的触れるところの少なかった、社会言語学的調査の基礎になる理念についてやや異例ながら述べておいた。ある群の社会調査での指導的な考え方である。無論、国立国語研究所のすべての調査をおおうものではない。しかし、調査はすぐれて人間的なものであるし、また、あるリーダーシップのもとに行なわれるべきものであるから、このことはどこかで述べておくべきものであった。

この調査はこのような考えの下に行なわれたものであって、ここにこの調査の一つの意義があるのである。

また、既に述べたように、大都市での調査をしなければならない必然的な理由があった。予想どおりこの実施はかなり困難なものであった。この点では実施したということ自身にも意義があったといえよう。

この調査では東京と大阪との比較を試みた。日本は東京と大阪との二極構造をなしているということを先に述べた。しかしこの両都市は決して同じウエイトを持っているのではない。今このウエイトがどのくらいの差であるかは必ずしもはっきりしない。したがって、将来の日本語の姿もはっきり示すことは現在のところではできない。調査した限りについては、東京および大阪の個々についてはある程度将来の姿ははっきりするであろう。けれども、調査はこれ1回ではない。鶴岡市における前後2回の調査のように、将来も大都市での調査はしなければならないであろう。この将来の調査のための基礎的なデータを提供する、ということも、今回の調査の大きな意義であろう。

1.2. 調査の方法

1.2.1. 調査の手順

この調査は前節で述べたように、東京都民と大阪市民、また、その土地で生育した人々と他地域から移住してきた人々の言語生活の実態を比較検討し、これらを通じて大都市で営まれている言語生活の実態を解明しようとするものである。

調査は東京都区内および大阪市内に居住する15～69歳の住民を対象とし、次の手順に従って行なわれた。

- ① まず、東京および大阪の両地域をよく代表するようにサンプリングを行ない、調査対象となる個々の被調査者を抽出し
- ② 各被調査者に対し、郵送留置法による『言語生活調査票』への記入を求め
- ③ その後、調査員が被調査者を訪ね、②の調査票を回収するとともに、その場で面接して調査を行なった。

なお、各段階ごとの具体的な方法や調査票の内容は別項で示すことにして、以下ではこの手順の経過だけを示しておく。

A. サンプリング関係	東京調査	大阪調査
第1段サンプリング（地点抽出）	1974年10月29日	1974年12月18日
区役所・出張所への住民票閲覧依頼 状発送	11月6日	1975年1月14日
第2段サンプリング（個人抽出）	11月11日 ～15日	1月24日 ～30日

B. 実地調査関係

調査対象者宛に調査への協力依頼状 および『言語生活調査票』発送	11月20日	2月7日
面接調査のための最終打合わせ	11月21日 ～22日	2月13日
面接調査実施※	11月26日 ～12月9日	2月14日 ～24日
調査の反省会	12月11日	3月12日

※期間後も一部実施した。

1. 2. 2. 研究組織

この研究は昭和49年度文部省科学研究費補助金総合研究(A)の研究課題「大都市における言語生活の実態調査」(研究代表者 野元菊雄。課題番号 931096)として、280万円の交付を受けて実施した。

この研究を進めるに際しては、企画から本書をまとめるまでの各段階で多数の研究者が参加し、それぞれ分担してきた。その主な分担者を各段階ごとに示すと以下ようになる。なお、各分担者の所属は調査終了時(1975年3月)のものである。

(1) 研究分担者

この研究に企画当初から正式に研究分担者として参加した者は下記の23名であり、それぞれが3班に分かれて各課題を分担し研究を行ってきた。

◎総括(代表者): 野元菊雄(国立国語研究所)

◎国語班: 飯豊毅一, 江川清, 工藤浩, 佐藤亮一, 高田誠, 徳川宗賢, 中村明, 飛田良文, 米田正人(以上国立国語研究所), 井上史雄, 上野善道(以上東京大学), 林四郎(筑波大学), 本堂寛(岩手大学), 南不二男(東京外国語大学)

◎社会班: 渡辺友左(国立国語研究所), 倉沢進(東京都立大学), 鈴木裕久(東京大学新聞研究所), 山本登(大阪市立大学)

◎統計班: 鈴木達三, 西平重喜, 林知己夫, 林文(以上文部省統計数理研究所)

(2) サンプリング

調査対象者のサンプリングに当たっては、東京での調査に関しては統計班の林知己夫・鈴木達三の指導のもとに、国立国語研究所の研究補助員の小高京子、沢村都喜江、鈴木美都代、塚田実知代および2名のアルバイトが実施した。

また、大阪での調査に関しては社会班の山本登の指導のもとに、大阪市立大学の学生アルバイト4名が実施した。

(3) 面接調査

東京および大阪で行なった個別面接調査には、飯豊毅一、上野善道*、江川清、工藤浩*、佐藤亮一、高田誠、野元菊雄、林四郎*、南不二男*、米田正人および渡辺友左の11名の他に、下記の21名が研究協力者として参加した。

岩田純一*、宮島達夫（以上国立国語研究所）、江端義夫[°]、吉田則夫[°]（以上広島大学）、近藤碩二[°]（四国女子大学）、佐藤虎男[°]（大阪教育大学）、真田信治[°]（椋山女学園大学）、杉藤美代子[°]（大阪樟蔭女子大学）、中松竹雄*（琉球大学）

志部昭平*、辻星児*（以上東京教育大学大学院生）、杉戸清樹[°]（名古屋大学大学院生）、加藤弘*、亀卦川誠也*、小島基次*、平野紳二郎*、安井清孝*（以上東京外国語大学学生）、高橋守*（一橋大学学生）、藤田克彦*（東京大学学生）、船津隆一（明治大学学生）、前田均（東京教育大学学生）

また、調査本部要員として国立国語研究所の研究補助員の塚田（旧姓林）実知代と磯部（旧姓堀江）よし子の両名が参加した。

なお、上記氏名の右肩の*印は東京調査のみ、[°]印は大阪調査のみ、無印は両調査に参加したことを示す。

(4) 調査資料の整理・集計

調査資料全般の整理・集計には主として国立国語研究所の江川清・米田正人が当たり、これを研究補助員の磯部よし子・塚田実知代が助けた。

また、アクセント資料の録音聴取およびその整理には、東京調査については分担者の南不二男、大阪調査については協力者の杉藤美代子が行なった。

このほか、臨時の手伝いとして、山岐孝子、田中ハル子、土居園子が資料の整理などに従事した。

(5) 本書の執筆者（執筆順。*印は編集幹事）

以上に示してきたように、本研究は多くの研究者が参加し共同で行なってきたものであるが、そのうち下記の12名が代表して本書の執筆を行なった。（所属は執筆時現在）

野元菊雄*	国立国語研究所日本語教育センター長
江川 清*	国立国語研究所言語行動研究部第二研究室長
米田正人*	国立国語研究所言語行動研究部第二研究室員
渡辺友左	国立国語研究所言語行動研究部長
林 四郎	筑波大学文芸言語学系教授
南不二男	国立国語研究所言語体系研究部長
杉藤美代子	大阪樟蔭女子大学文芸学部教授
佐藤亮一	国立国語研究所言語変化研究部第一研究室長
沢木幹栄	国立国語研究所言語変化研究部第一研究室員
真田信治	国立国語研究所言語変化研究部第一研究室員
飛田良文	国立国語研究所言語変化研究部第二研究室長
飯豊毅一	国立国語研究所言語変化研究部長

1.2.3. 面接調査

この調査では東京・大阪の両地域での言語生活の実態を比較することを主目的としているので、両地域での調査項目はできるかぎり同一になるように構成した。しかし、後に述べるようにそれぞれの地域での言語状況が異なるため直接比較しえない項目もいくつか含まれている。

まず、東京での調査で用いた面接調査票を示し、各項目ごとのねらいを述べる。次いで、大阪での調査票のうち東京とは異なる部分のみを示すことにする。

(1) 面接調査票

東京・大阪の両調査で用いた面接調査票はそれぞれA5判12ページから成り立っている。以下は、東京の調査で使用したものであるが、調査票とは別冊になっていたリストの選択肢を該当箇所に配したため実物とは多少異なってい

る。また、設問番号の左肩に付した*印の項目は東京と大阪で質問の内容またはリストの内容が異なることを示している。

大都市(74)

面 接 調 查 票

調査員No. _____

001. 氏 名 _____ 1. 男・2. 女 No. _____

002. 生年月日

1. 明治	(1. 明治	
2. 大正____年____月____日		2. 大正____年____月____日)
3. 昭和		3. 昭和

003. 現住所 _____ 区 _____ 町 _____ 丁目 _____ 方

004. 本 籍 現住所に同じ 都道府県 区市郡

005. <言語生活調査の回収後> どうもありがとうございました。これは御自身でお書きになりましたか。それとも、ほかの人に書いてもらいましたか。だれに書いてもらいましたか。

1. 自身

2. 他 人

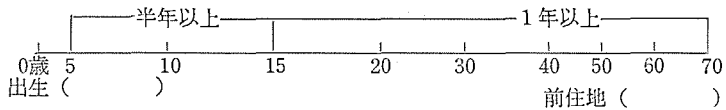
3. 調査員

4. 回収できなかった（理由 ）

006. 調査月日 1回___月___日 3回___月___日
 2回 月 日 4回 月 日

007. 開始時刻 午前 _____ 時 _____ 分
 午後 _____ 時 _____ 分

101. ずっとここにお住いですか。お生まれは？ そこからすぐこちらへいらっし
やったのですか？



102.

-1 [移住者]《リスト》東京(大阪)に移ってきた理由は、このうちのどれですか。

1. 本人または家族の仕事が見つかった(就職・転職)のため
2. 本人または家族の転勤のため(会社・事業所の移転を含む)
3. その他本人または家族の職業上の理由(具体的に)
4. 結婚・養子縁組みのため
5. 家族と同居するため(家族の世話や看病など)
6. 親類・知人がいたため
7. その他家族・親族上の理由(具体的に)
8. 本人または、家族の入学・勉強のため
9. 本人または、家族の通勤・通学に便利のため
10. 地方での生活がいやになったため
11. 戦争疎開、引揚げのため
12. その他(具体的に)

-2 誰に連れられてこられましたか。

1. 本人の意思で 2. 家族()に連れられて 9. () 0. NA

103. 失礼ですが学校はどこまでおいでになりましたか。

1. なし 2. 小 3. 高小 3. 新中 4. 旧中 4. 新高
5. 旧高 6. 専 7. 大 9. () 0. NA
1. 卒 2. 中 3. 在 0. NA

その学校は何県(何市)にありましたか。()

104. 《リスト》あなたの、ふるさと(故郷)のことについてお尋ねします。

-1 ふるさとには、親・祖父母などの墓が

1. ある 2. ない

-2 ふるさとには、自分または家族の者所有の資産(田畑・山林・家屋など)が

1. かなりある 2. 少しある 3. 全然ない

-3 ふるさととは、資産以外の経済的な生活の面でも結びつきが

1. かなり強い 2. 少し強い 3. 全然ない

-4 ふるさとには、親しい友人・知人が

1. かなりいる 2. 少しいる 3. 全然いない

-5 ふるさとには、現在でも愛着心を

1. 強く覚える 2. かなり強く覚える 3. 少し覚える 4. 全然覚えな
105. 「故郷・現住所」《リスト》 ふるさに住んでみたいと思いますか。

それとも住みたくないと思いますか。

1. 住んでみたいと強く思っている
2. まあ住んでみたいと思っている
3. どちらともいえない
4. あまり住んでみたいとは思わない
5. 全然住んでみたいとは思わない

- *106. 《リスト》あなたは御自身のことを考えた場合、どの程度東京人（大阪人）だと思いますか。

1. 完全な東京人（大阪人）だと思っている
2. かなり完全に近い東京人（大阪人）だと思っている
3. 半分程度は、東京人（大阪人）になっていると思う
4. 少しは、東京人（大阪人）になっていると思う
5. 東京人（大阪人）だとは全然思っていない

201. これから、あなたがふだんどんなことばをお使いになっているかをお聞きしたいと思います。いまから、いろんな場合をひとつひとつお聞きしますから、そういうとき、実際あなたの話していらっしゃるとうりおっしゃって下さい。では、こんな場合はどうですか。

- 1 恩師の長寿（88歳—米寿）の祝賀会を催しています。控室等にいる人々に対して、「これから会を開きますから、どうぞ会場に来てほしい」というとき、「来てほしい」という部分をあなたなら何と言いますか。

1. オコシクダサイ 2. オイデクダサイ 3. イラッシャツテクダサイ
4. キテクダサイ 9. その他（ ）

- 2 きわめて尊敬している目上の人から、仕事を手伝ってほしいと頼まれ、「承知した」というとき、あなたは何と言いますか。

1. カシコマリマシタ 2. ショーチイタシマシタ 3. ショーチシマシタ
4. ワカリマシタ 9. その他（ ）

- 3 珍しい絵を手に入れたので、それを尊敬している目上の人に見せようとし
す。「珍しい絵を見せましょう」という場合に「見せましょう」という部分をあなたなら何と言いますか。

1. ゴランニイレマショー 2. オミセイタシマショー
3. オミセシマショー 4. オメニカケマショー 9. その他（ ）

- 4 きわめて尊敬している人に、自分の友達の噂をしようとしす。「○○の噂をききましたか」という場合に、「ききましたか」の部分あなたなら何と言

ますか。

1. オミミナサイマシタカ 2. オキキナリマシタカ
3. オキキナラレマシタカ 9. その他 ()

-5 きわめて尊敬している目上の人から「〇〇さんの住所を知っているか」と尋ねられ、「知らない」と答えるとき、あなたなら何と言いますか。

1. ズンジマセン 2. シリマセン 3. ワカリマセン
9. その他 ()

-6 きわめて尊敬している目上の人に対してあいさつします。「御病気だと先日奥さまからききましたがいかがですか」という場合、「ききましたが」の部分をあなたなら何と言いますか。

1. ウカガイマシタ 2. オウカガイタシマシタ
3. オキキシマシタ 4. オキキイタシマシタ 9. その他 ()

-7 尊敬する目上の人、何かの本を読んでいます。そこで「何を読んでいるか」と尋ねる場合に、あなたなら何と言いますか。〔左右の番号を線で結ぶこと〕

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. オヨミニナル | 1. イラッシャイマスカ |
| 2. オヨミナサル | 2. オラレマスカ |
| 3. ヨマレル | 3. イマスカ (イルンデスカ) |
| 4. ヨム | 9. その他 () |
| 9. その他 () | |

-8 町内会とか同窓会とかの世話役を引き受けることになり、あいさつします。「僭越ですが、これからわたしがこの会の世話をする」というとき、「世話をする」の部分をあなたなら何と言いますか。

1. オセワオ サセテイタダキマス 2. オセワオ イタシマス
3. オセワオ シマス 9. その他 ()

-9 尊敬している先生が、あなたの先輩の中村さんに会いにきました。「あいにく中村さんは出かけていますが、まもなく帰るからどうぞ待ってほしい」というとき、「まもなく帰るから待ってほしい」という部分をあなたなら何と言いますか。〔左右の番号を線で結ぶ〕

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. オカエリナリマス | 1. オマチニナツテクダサイ |
| 2. カエラレマス | 2. オマチクダサイ |
| 3. カエリマス | 3. オマチイタダケマセンカ |
| 9. その他 () | 9. その他 () |

-10 -(1) テレビなどで学生が先生に尋ねる場面があります。そのとき、「先生は何時の急行にお乗りいたしますか」と言ったら、あなたはその言葉をきいてどう感じますか。おかしい言葉づかいだと思いますか。おかしくないと思いますか。

1. おかしい 2. おかしくない

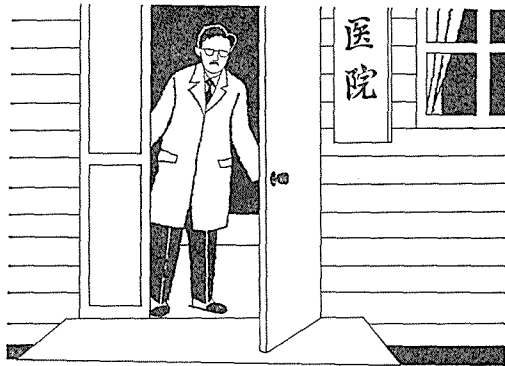
-(2) あなたなら何と言いますか

1. オノリニナリマスカ 2. オノリニナラレマスカ
3. オノリデスカ 4. オノリイタシマスカ 9. その他 ()

- 11 《絵》あなたがバスに乗っていると、この人（中年）が、かさを忘れて降りて行きかけました。この人は、あなたの知らない人です。あなたは、何と言って、この人にかさを忘れたことを注意しますか。〔全反応文を書きとる〕



- 12 《絵》あなたの家の近所の人が急病になりました。あなたが頼まれて、お医者さんの家に行くと、お医者さんが玄関へ出て来ました。このお医者さんに、すぐ来てもらうには何と言って頼みますか。〔全反応文を書きとる〕



テープ収録

- *202. 《リスト》今から文をお見せしますから、できるだけふだんお読みになるのと同じように読んで下さい。〔読んだ文をチェックすること〕

1. 庭が広い 2. 音がする 3. 山が見える

- | | | |
|--------------|--------------|-------------|
| 4. 窓が大きい | 5. 春が過ぎた | 6. 色が薄い |
| 7. 箱が小さい | 8. 針が細い | 9. 傘がほしい |
| 10. 歌が聞こえる | 11. この音がする | 12. この窓が大きい |
| 13. この庭が広い | 14. この山が見える | 15. この春が過ぎた |
| 16. この箱が小さい | 17. この歌が聞こえる | 18. この色が薄い |
| 19. この傘がほしい | 20. この針が細い | |
| 1. 帆が白い | 2. 巣が小さい | 3. 苺が甘い |
| 4. 朝日が昇る | 5. 林が見える | 6. 柱が太い |
| 7. 卵が大きい | 8. 頭が大きい | 9. 鉄が切れる |
| 10. 坂が見える | 11. 熊が出る | 12. 雷が鳴る |
| 13. 食べものがほしい | 14. どんぐりがある | 15. 電車が来た |
| 16. 赤とんぼが飛ぶ | | |

どうもありがとうございました。それでは質問を続けます。

203. あなたは御自分のことをいうとき（＝一人称単数）,ふつつ何といいますか。

〔そのほかには言いませんか〕

ワタクシ ワタシ アタシ ボク オレ ワシ ウチ 自分
姓 名 他（ ）

204. それはどんな相手や場合に使いますか。〔一つずつ質問〕

205. では、相手を指しているとき（＝二人称単数）,何と言いますか。〔そのほかには言いませんか〕

アナタ アンタ キミ オマエ お宅 自分 姓 名 地位（ ）

206. どんな相手や場合に使いますか。〔一つずつ質問〕

207. 今のお話のように日本語では、場合によって、自分のことを、「わたくし」とか「ぼく」などと言います。また相手の人のことは「あなた」「君」などと使いわけます。しかし、英語ではどんな場合でも自分は I 相手のことは you と言えればいいそうです。あなたは日本語も場合や相手によって使いわけないですむほうがいいと思いますか。それとも、場合や相手によって使いわけたほうがいいと思いますか。

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 使いわけたほうがいい | 2. 使いわけないほうがいい |
| 3. どちらでもいい | 0. NA |

テープ収録

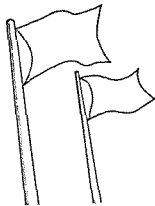
*208. 《絵》絵をみてお答え下さい。これは何ですか。〔次ページ参照〕

-1	ハタ	1. タ	2. ダ	9. ()	0. NA
-2	ヒヤク	1. ヒヤ	2. ファ 3. シャ	9. ()	0. NA
-3	アセ	(夏働くと背中からだらだら流れるものを何と言いますか)			
		1. セ	2. シェ	9. ()	0. NA
-4	マド	1. ド	2. ンド	9. ()	0. NA
-5	イキ	(口からハーツとはくもの、これを何と言いますか)			
		1. イ	2. エ 3. イ〜エ	9. ()	0. NA
-6	エントツ	1. エ	2. イ 3. イ〜エ	9. ()	0. NA
-7	スミ	1. ス	2. シ	9. ()	0. NA
-8	ウチワ	1. チ	2. ツ 3. チ 4. ツ	9. ()	0. NA
-9	カガミ	1. ガ	2. カ°	9. ()	0. NA
-10	ヒバチ	1. ヒ	2. シ	9. ()	0. NA
-11	タマゴ	1. ゴ	2. コ°	9. ()	0. NA
-12	ヒト	1. ヒ	2. シ	9. ()	0. NA
-13	カゴ	1. ゴ	2. コ°	9. ()	0. NA
-14	ヒガシ	(西の反対の方角を何と言いますか)			
		1. ヒ	2. シ	9. ()	0. NA
-15	スシ	1. スシ	2. シシ 3. スス	9. ()	0. NA
-16	新宿	1. シンジュク	2. シンジク	9. ()	0. NA
-17	手術	1. シュジュツ	2. シジツ	9. ()	0. NA
-18	(「やさしい」の反対を何と言いますか)				
		1. ムズカシイ	2. ムツカシイ	9. ()	0. NA

*209. 《リスト》おそれいますが、先ほどと同じ文をもう一度読んで下さい。

- | | | |
|-------------|--------------|-------------|
| 1. 庭が広い | 2. 音がする | 3. 山が見える |
| 4. 窓が大きい | 5. 春が過ぎた | 6. 色が薄い |
| 7. 箱が小さい | 8. 針が細い | 9. 傘がほしい |
| 10. 歌が聞こえる | 11. この音がする | 12. この窓が大きい |
| 13. この庭が広い | 14. この山が見える | 15. この春が過ぎた |
| 16. この箱が小さい | 17. この歌が聞こえる | 18. この色が薄い |
| 19. この傘がほしい | 20. この針が細い | |

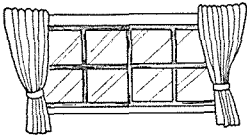
-1



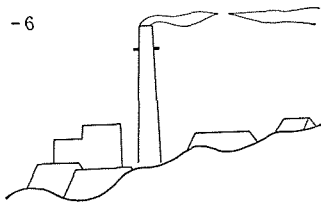
-2

97, 98, 99,

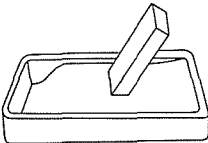
-4



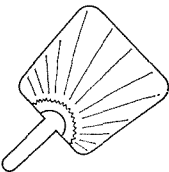
-6



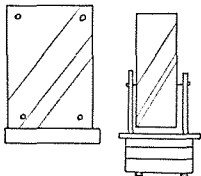
-7



-8



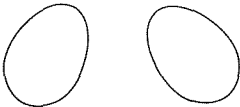
-9



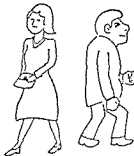
-10



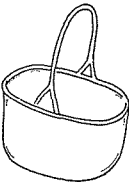
-11



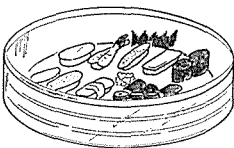
-12



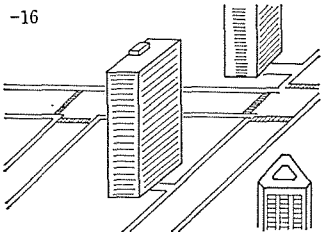
-13



-15



-16



-17



210. あなたは次の言い方のうち、どちらをお使いになりますか。

-1 察する・察する「察する」と言いますか。それとも「察する」ですか。以下同様に質問]

- | | | | | |
|-----|--------|--------|---------|--------|
| 察する | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |
| 察する | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |

-2 感じる・感ずる

- | | | | | |
|-----|--------|--------|---------|--------|
| 感じる | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |
| 感ずる | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |

-3 (国を) 愛さない人はいない・(国を) 愛しない人はいない

- | | | | | |
|------|--------|--------|---------|--------|
| 愛さない | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |
| 愛しない | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |

-4 (国を) 愛す人・(国を) 愛する人

- | | | | | |
|-----|--------|--------|---------|--------|
| 愛す | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |
| 愛する | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |

-5 勉強する・勉強する

- | | | | | |
|------|--------|--------|---------|--------|
| 勉強する | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |
| 勉強する | 1. だけ | 2. 多い | 3. ～も使う | 4. 少ない |
| | 5. 使わぬ | 9. () | | 0. NA |

211. 今日の次は、あしたです。あしたの次はあさってです。では、その次の日のことを何といいますか。

- | | | | |
|-----------|----------|---------|-----------|
| 1. シアサッテ | 2. シガサッテ | 3. ササッテ | 4. ヤナアサッテ |
| 5. ヤノアサッテ | 6. ヤナサッテ | 9. 他() | |

212. では、その次の日は何といいますか。

- | | | | |
|----------|----------|-----------|-----------|
| 1. シアサッテ | 2. ササッテ | 3. サラサッテ | 4. ゴアサッテ |
| 5. ゴヤサッテ | 6. ゴガサッテ | 7. ヤナアサッテ | 8. ヤノアサッテ |
| 9. ヤナサッテ | 10. 他() | | |

32 1. 調査の概要

213. あなたは、次のような言い方をしますか。[「しない」場合は、その言い方はおかしいですか、おかしくないですか]

- | | | | |
|-----------------------------|--------|-----------|---------|
| -1 全然すばらしい | 1. 使う | 2. おかしくない | 3. おかしい |
| | 9. () | | 0. NA |
| -2 全然だめだ | 1. 使う | 2. おかしくない | 3. おかしい |
| | 9. () | | 0. NA |
| -3 とてもできない | 1. 使う | 2. おかしくない | 3. おかしい |
| | 9. () | | 0. NA |
| -4 とても大きい | 1. 使う | 2. おかしくない | 3. おかしい |
| | 9. () | | 0. NA |
| -5 ちっとも平気だ | 1. 使う | 2. おかしくない | 3. おかしい |
| | 9. () | | 0. NA |
| -6 ちっともよくない | 1. 使う | 2. おかしくない | 3. おかしい |
| | 9. () | | 0. NA |
| -7 てんでうまい | 1. 使う | 2. おかしくない | 3. おかしい |
| | 9. () | | 0. NA |
| -8 てんで話にならない | 1. 使う | 2. おかしくない | 3. おかしい |
| | 9. () | | 0. NA |
| *9 あの人から手紙がなかなかきかないから心配している | | | |
| | 1. 使う | 2. おかしくない | 3. おかしい |
| | 9. () | | 0. NA |

*214. あなたは「失敗してしまった」と言うとき「してしまった」の部分を何と言いますか。

1. シテシマッタ 2. シチャッタ 3. シチマッタ 9. () 0. NA

215. あなたは「見ることができる」ことを「見れる」と言いますか, 「見られる」と言いますか。

1. 見ラレル 2. 見レル 3. 両方 9. () 0. NA

216. それでは「起きることができる」ではどうですか。「起きれる」ですか, 「起きられる」ですか。

1. 起キラレル 2. 起キレル 3. 両方 9. () 0. NA

*217. 東京の山の手とはどんな所だと思いますか。[地域イメージ]

1. () 区など | 2. 高級住宅 3. 上流階級・ブルジョア
4. ビル街 5. 個人主義 6. 環境よい 9. () |

0. わからない

*218. では、下町とはどんな所ですか。〔地域イメージ〕

1. () 区など | 2. アパート 3. 庶民的 4. 商店
5. 人情味ある・連帯感 6. 環境悪い 9. () |
0. わからない

*219. 山の手のことばと言ったら、どんなものを思いうかべますか。

1. 上品 2. 冷たい 3. ざあます 4. きざ 5. ていねい
9. () 0. わからない

*220. 下町のことばではどうですか。

1. 親しみやすい 2. 暖かい 3. べらんめえ 4. チャキチャキ
5. はぎれよい 6. ヒトシの混同 9. ()
0. わからない

*221. 〔219でNAは省く〕《リスト》山の手のことばについてどんなふうに感じますか。

- | | | | | |
|----------|----------|----------|-------|------|
| 1. 重苦しい | 2. 軽快 | 3. どちらとも | 0. NA | 質問せず |
| 1. 聞きやすい | 2. 聞きにくい | 3. どちらとも | 0. NA | |
| 1. きれい | 2. きたない | 3. どちらとも | 0. NA | |
| 1. 好き | 2. きらい | 3. どちらとも | 0. NA | |

*222. 〔220でNAは省く〕《リスト》では、下町のことばについてはどうですか。

- | | | | | |
|----------|----------|----------|-------|------|
| 1. 重苦しい | 2. 軽快 | 3. どちらとも | 0. NA | 質問せず |
| 1. 聞きやすい | 2. 聞きにくい | 3. どちらとも | 0. NA | |
| 1. きれい | 2. きたない | 3. どちらとも | 0. NA | |
| 1. 好き | 2. きらい | 3. どちらとも | 0. NA | |

*223. 《リスト》関西弁についてはどうですか。

- | | | | |
|----------|----------|----------|-------|
| 1. 重苦しい | 2. 軽快 | 3. どちらとも | 0. NA |
| 1. 聞きやすい | 2. 聞きにくい | 3. どちらとも | 0. NA |
| 1. きれい | 2. きたない | 3. どちらとも | 0. NA |
| 1. 好き | 2. きらい | 3. どちらとも | 0. NA |

224. 《リスト》テレビ・ラジオのアナウンサーのことばについてはどうですか。

- | | | | |
|---------|-------|----------|-------|
| 1. 重苦しい | 2. 軽快 | 3. どちらとも | 0. NA |
|---------|-------|----------|-------|

34 1. 調査の概要

- | | | | |
|----------|----------|----------|-------|
| 1. 聞きやすい | 2. 聞きにくい | 3. どちらとも | 0. NA |
| 1. きれい | 2. きたない | 3. どちらとも | 0. NA |
| 1. 好き | 2. きらい | 3. どちらとも | 0. NA |

301. あなたは_____についてのニュースを何から知りましたか。

- 1 直接, ラジオニュース (臨時・定時), テレビニュース (臨時・定時), テレビの字幕で, 新聞の夕刊 (家に配達のもの・駅売りのもの・電車などで他人が見ていたもの), 電光ニュース

人に聞いて知った, その人はあなたの〔 _____ 〕 (妻とか友人とか具体的に)

この場合その人は何で知っていましたか。

ラジオニュース (臨時・定時), テレビニュース (臨時・定時), テレビの字幕で, 新聞の夕刊 (家に配達のもの・駅売りのもの・電車などで他人が見ていたもの), 電光ニュース, 他の人に聞いた→〔 _____ 〕

- 2 知ったのは何時ごろでしたか。

_____時ごろ, 翌日

- 3 どこで知りましたか。

自宅 (下宿を含む)・勤務先 (学校で)・帰宅の途上・その他→〔 _____ 〕

302. [移住者]《リスト》あなたの出身地 (ふるさと, 故郷) には, 現在このうちのどんな身内が住んでいますか。

- | | | | |
|----------|-------|------------------|----------|
| 1. 父 | 2. 母 | 3. 子ども (むすこ・むすめ) | 4. きょうだい |
| 5. 祖父 | 6. 祖母 | 7. 孫 | 8. おじ・おば |
| 9. いとこ | | | |
| 0. だれもない | | | |

303. [移住者] 出身地には1年にどのくらい { お帰りになりますか
いらっしゃいますか

[回答で「行く」か「帰る」かに注意]

- | | | |
|-----------|--------------|--------------------|
| 1. まったくない | 2. _____回くらい | 0. NA |
| 1. 帰る | 2. 行く | 3. 行く・帰る使わない |
| | | 9. (_____) 0. NA |

304. [移住者] あなたは野球の好き嫌いは別として, 甲子園の高校野球大会で東京 (大阪) 代表のチームとあなたの出身県の代表チームとが対戦した場合, どちらのチームに声援を送りたいと思いますか。

- | | | |
|--------------------|----------------|--------------|
| 1. 絶対出身県 | 2. どちらかといえば出身県 | 3. どちらともいえない |
| 4. どちらかといえば東京 (大阪) | 5. 絶対東京 (大阪) | 0. NA |

305. あなたのお仕事は？

具体的に _____

306. その職場（学校）はどこにありますか。お宅からここまで何時間（分） ぐらい かかりますか。

1. 現住所 2. 同じ区 3. _____区 4. _____府県 _____市

5. 無職 0. NA

_____時間 _____分ぐらい

307. [本人≠世帯主]世帯主の方のお仕事は？ 具体的に _____

1. 本人＝世帯主 2. 本人≠世帯主 0. NA

308. その職場はどこにありますか。

1. 現住所 2. 同じ区 3. _____区 4. _____府県 _____市

5. 無職 0. NA

309. あなたのお父さんの出身地はどちらですか。

	都道府県	区市郡	区町	
それではお母さんは？	//	//	//	
父方のおじいさんは？	//	//	//	知らない
母方のおじいさんは？	//	//	//	//
父方のおばあさんは？	//	//	//	//
母方のおばあさんは？	//	//	//	//
配偶者は？ 0. なし	//	//	//	

310. あなたは現在お住まいの町内の町内（自治）会長の名をご存知ですか。

1. 知っている 2. 聞いたことあるが 3. 知らない
4. 町内会はない

311. では、区長さんの名をご存知ですか。[何という名の人ですか]

知っている (1. 氏名正しい 2. 氏名誤り 3. NA)

4. 聞いたことがある 5. 知らない 0. NA

*312. <リスト>ここで行なわれている選挙の中で、あなたがいちばん関心をおもちなのはどれですか。

1. 衆議院議員選挙 2. 参議院議員選挙 3. 東京都（大阪府）知事選挙
4. 東京都（大阪府）議会議員選挙 5. 区長（市長）選挙

6. 区議会（大阪市）議員選挙

1. 自民 2. 社会 3. 民社 4. 公明 5. 共産
6. () 7. 支持なし 0. NA

- 〔年間総収入を聞く〕 知らない 0. NA

315. 「住居の形態が明確でない場合は質問すること」

1. 持家 2. 民営借家 3. 公的借家 (都営・府営・市営・公団・公務員公社)
4. 社宅 5. 下宿 6. 寮 9. ()

- 正しい 共通語だがどこ 共通語が 共通語を 共通語が
共通語 となくちがう 混ざる 話さない 通じない

1. 積極的 2. ふつう 3. 消極的 4. 拒否的

- 1 調査した場所 1. 自 宅 2. 勤務先 3. ()
- 2 // 1. 部屋の中 2. 玄関先 3. 店 先 4. ()
- 3 同 席 者 1. 本人のみ 2. 配偶者 3. ()
- 4 反応までの時間 1. 長いほう 2. 普 通 3. 短いほう
- 5 質問に対する 1. 多いほう 2. 普 通 3. 少ないほう
問いかえし

終了時間 午前 _____ 時 _____ 分 所要時間 = _____ 分
午後 _____ 時 _____ 分

使用録音器番号＝ _____ テープ No. ＝ _____ A 面
B 面

〔被調査者の氏名をテープに吹き込むこと〕

(2) 調査票の説明・調査上の注意

001. ～004. 調査対象者名簿により必要な事項を予め二重枠内に記入しておいて、それを調査実施時に確認する。

005. 『言語生活調査票』を回収し、記入もれの点検を行なう。

006. 訪問月日の記入。同一日に2度以上訪問した場合は日の後にその回数を記入する。

007. 分単位で記入。

100. 居住経歴を尋ねるものであり、後の分析に不可欠の項目である。とくに、言語形成期といわれる5～15歳時の居住地は重要。

102. 「移住者」とあるのは、東京都区内（大阪での調査では大阪市）以外の地域からの転入者への質問の意。303.，305. も同様。ただし、その地域の出身者であっても一度他の地域に転出した者にも尋ねる。

また、「リスト」とあるのは、別冊の選択肢を呈示して回答を求める項目の意。104. ～106. なども同じ。この項目では複数回答を認めている。その場合、主たる理由を◎で囲むこと。

103. 最終学歴を尋ねる項目であるが、戦前・戦中の学制は頻繁に変わっているので注意。また、学歴の判断が困難な場合はその学校のフルネームを記入し、在学合計年数または卒業時の年齢を尋ねる。

104. ふるさととのつながりの程度を尋ねる項目。-3の「資産以外の……」とは、ふるさとの親からの生活面での援助、ふるさととの経済的な取引活動などを指す。

105. ～106. 上の項目同様、ふるさととのつながりの程度を尋ねる項目。

201. 敬語の使い方に関する項目。調査票には例示回答が示されているが、それと少しでも異なる場合はそれが分かるように記入すること。

また、-11, -12で《絵》とあるのは別冊の絵を見せながら質問を行なう項目

の意である。なお、-12 は回答の種類が多く、比較的長いので録音する方が望ましい。

202. 名詞部分のアクセントを調べる項目であり、別冊のリスト（漢字はルビつき）をできるだけ自然に読ませること。これは2系列からなり、最初の20はアクセントの五つの類から2語ずつ示されており、被調査者のアクセントの東京化の程度をみるためのものである。また、後半の16は東京でゆれているといわれているアクセントの実態を調べるためのものである。

なお、設問番号の左肩の*印はこの項目が大阪での調査とは一部異なっていることを示している。208. ～209. も同じ。

203. ～206. 主として、自称・他称の代名詞の使用状況とそれを用いる相手や場面などを尋ねる項目。ふだん使用するものだけを記入すること。複数回答の場合は、第1反応を◎で示すこと。

207. 人称代名詞の使い分けの是非を尋ねる項目。条件を限定した回答があった場合はその条件も記入すること。

208. 音声（とくに、下線部）を調べる項目。-3, -5などを除き、原則として絵（刺激図の項参照）を見せてそのものの名を尋ねる。念のためにテープに収録すること。

209. 202. の前半部に同じ。

210. サ変、上一段・五段のどちらの言い方を使うかを調べる項目。両方使う場合にはその程度を尋ねる。

211. ～212. あさっての次の日、さらにその次の日のことをどう言うかを尋ねる。質問はできるだけ続けて行なうこと。

213. 副詞の使い方を尋ねる項目。ただし、-9はカ変動詞。選択肢2.の「おかしくない」は本人は使わないがそれを聞いてもおかしいとは思わないの意。

なお、-9の前の*印は大阪の調査では他の質問に置き換えられていることを示す。214. および217. ～223. も同じ。

214. 「してしまった」という意味のことを話しことばでどう言うかを尋ねる。

215. ～216. 上一段動詞の可能動詞化現象の実態を調べる。

217.～218. 山の手・下町の地域とそのイメージを求める。区名・町名しか答えない場合にはイメージを尋ねる。また、逆にイメージしか答えない場合には場所を尋ねる。

219.～220. 山の手ことば・下町ことばのイメージ一般を尋ねる。

221.～222. 山の手・下町のことばのイメージをリストを示して尋ねる。ただし、219.～220.で「わからない」と回答した者に対してはこの質問は省く。

223.～224. 関西弁、アナウンサーのことばについてのイメージをリストを示して尋ねる。

301. 調査期間中に大事件が発生した場合に、そのニュースの伝達経路を調べるために用意したが、実際には使用しなかった。

302. ふるさととのつながりを調べる項目。

303.～304. ふるさととの心理的なつながりを調べる項目。303.では「行く」と答えるか、「帰る」と答えるかに注目。なお、この項目の設問中の「お帰りになりますか」、「いらっしゃいますか」の部分は被調査者ひとりおきに言い替える。

305.～308. 被調査者および世帯主の職業と職場の所在場所を尋ねる。

309. 両親、祖父母、配偶者の出身地を尋ねる。

310.～312. 地域社会とのつながりの程度を調べる項目。

313.～315. あくまで参考事項であるから回答を強要しない。

316. 調査全体の印象に従って判定し、その記入は矢印の上またはその中間に○印をつける。矢印はその上に書いてあるものよりもわずかに矢印の方向に傾いていることを示す。なお、この項目以降は、終了時間を除いて、被調査者と別れてから記入するものである。

317. 被調査者の調査に対する態度を示す。調査の途中で態度が変わった場合は、その推移に従って矢印で示す。

318. -4および-5は調査員の判定による。

(3) 大阪独自の項目

以下の項目は、大阪での調査だけに用いられた項目および東京とは一部分が異なるものである。

テープ収録

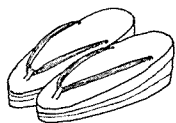
202. 《リスト》今から文をお見せしますから、できるだけふだんお読みになると同じように読んで下さい。〔読んだ文をチェックすること〕

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| 1. 庭 庭が広い | 2. 音 音がする | 3. 山 山が見える |
| 4. 窓 窓が大きい | 5. 春 春が過ぎた | 6. 色 色が薄い |
| 7. 箱 箱が小さい | 8. 針 針が細い | 9. 傘 傘がほしい |
| 10. 歌 歌が聞こえる | 11. 蚊 蚊がとんでる | 12. 毛 毛がかたい |
| 13. 木 木が生えてる | 14. 胃 胃がおもい | 15. 手 手がある |
| 16. 血 血が出た | 17. この音がする | 18. この窓が大きい |
| 19. この庭が広い | 20. この山が見える | 21. この春が過ぎた |
| 22. この箱が小さい | 23. この歌が聞こえる | 24. この色が薄い |
| 25. この傘がほしい | 26. この針が細い | 27. この蚊がとんでる |
| 28. この血が出た | 29. この毛がかたい | 30. この胃がおもい |
| 31. この木が生えてる | 32. この手がある | 33. 謎 謎がとけた |
| 34. 嘘 嘘がばれた | 35. 父 父がおこった | 36. 草 草が生えてる |

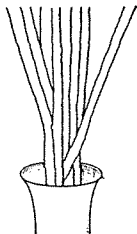
テープ収録

208. 《絵》絵をみてお答え下さい。これは何ですか。〔《絵》は前出*208.のもの(30ページ)も参照〕

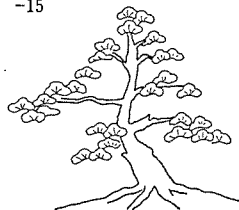
-11



-13



-15



- | | | | | |
|---|------|-------|--------|-------------------------|
| -1 ハ <u>タ</u> | 1. タ | 2. ダ | 9. () | 0. NA |
| -2 ア <u>セ</u> (夏働くと背中からだらだら流れるものを何と言いますか) | 1. セ | 2. シェ | 3. ヘ | 9. () 0. NA |
| -3 マ <u>ド</u> | 1. ド | 2. ンド | 3. シンド | 9. () 0. NA |
| -4 <u>イ</u> キ (口からハーッと吐くもの、これを何と言いますか) | 1. イ | 2. エ | 3. イ〜エ | 9. () 0. NA |
| -5 エントツ | 1. エ | 2. イ | 3. イ〜エ | 9. () 0. NA |
| -6 <u>ス</u> ミ | 1. ス | 2. シ | | 9. () 0. NA |
| -7 ウ <u>チ</u> ワ | 1. チ | 2. ツ | 3. ズ | 4. ズ 5. ti 9. () 0. NA |

- 8 カガミ 1. ガ 2. カ° 9. () 0. NA
 -9 カジ 1. カ 2. クッジ 9. () 0. NA
 -10 タマゴ 1. ゴ 2. コ° 9. () 0. NA
 -11 ゴウリ 1. ゴ 2. ド 3. ロ 9. () 0. NA
 -12 カゴ 1. ゴ 2. コ° 9. () 0. NA
 -13 クキ 1. ク 2. ク[△] 9. () 0. NA
 -14 ミズ (水道の蛇口をひねると出るもの、これを何と言いますか)
 1. ズ 2. du 3. ル 9. () 0. NA
 -15 マツ 1. ツ 2. ケ 3. tu 9. () 0. NA
 -16 エリ (実物を見せて質問する)
 1. エ 2. イエ 3. ジェ 9. () 0. NA
 -17 ↔「暑い」 1. サムイ 2. サブイ 9. () 0. NA
 -18 ↔「やさしい」 1. ムズカシイ 2. ムツカシイ 9. () 0. NA
 -19 デス・マス (観察) 1. ス 2. ス[△] 9. () 0. NA
 -20 七五三 (11月15日に3歳、5歳、7 (ナナ) 歳の子どもに晴れ着を着せて氏神様におまいりするお祝いのことを何と言いますか)
 1. シ 2. ヒ 9. () 0. NA
 -21 質屋 (品物を預けてお金を借りる店のことを何と言いますか)
 1. シ 2. ヒ 9. () 0. NA

209. <<リスト>>おそれいりますが、先ほどと同じ文をもう一度読んで下さい。

- | | | |
|---------------|--------------|--------------|
| 1. 庭 庭が広い | 2. 音 音がする | 3. 山 山が見える |
| 4. 窓 窓が大きい | 5. 春 春が過ぎた | 6. 色 色が薄い |
| 7. 箱 箱が小さい | 8. 針 針が細い | 9. 傘 傘がほしい |
| 10. 歌 歌が聞こえる | 11. 蚊 蚊がとんでる | 12. 毛 毛がかたい |
| 13. 木 木が生えてる | 14. 胃 胃がおもい | 15. 手 手がある |
| 16. 血 血が出た | 17. この音がする | 18. この窓が大きい |
| 19. この庭が広い | 20. この山が見える | 21. この春が過ぎた |
| 22. この箱が小さい | 23. この歌が聞こえる | 24. この色が薄い |
| 25. この傘がほしい | 26. この針が細い | 27. この蚊がとんでる |
| 28. この血が出た | 29. この毛がかたい | 30. この胃がおもい |
| 31. この木が生えてる | 32. この手がある | 33. 謎、とけた |
| 34. 嘘、ばれた | 35. 父、おこった | 36. 草、生えてる |
| 37. 渦、まいている | 38. 岸、近い | 39. 牡、生まれた |
| 40. 蚊、とんでる | 41. 毛、かたい | 42. 木、生えてる |
| 43. 胃、おもい | 44. 手、あれてる | 45. 血、出た |
| 46. 渦、渦がまいている | 47. 岸、岸が近い | 48. 牡、牡が生まれた |

42 1. 調査の概要

49. 娘 娘が多い 50. 鏡 鏡がくもる 51. 東 東が明るい

213. あなたは、次のような言い方をしますか。[「しない」場合は、その言い方はおかしいですか、おかしくないですか]

-9 そんなことしたらあかんや(わ)

1. 使う 2. おかしい 3. おかしい 9. () 0. NA

-10 そんなことあんじょう直しといてや

1. 使う 2. おかしい 3. おかしい 9. () 0. NA

214. 物の値段を尋ねる時、ふつう何と言いますか。「このまんじゅうはひとつ〜」それから何と言いますか。

1. イクラ 2. イカホド 3. ナンボ 9. () 0. NA

215. いらなくなった物をごみためへ持って行って、どうすると言いますか。

1. ステル 2. ホカス 3. ホル 9. () 0. NA

216. 「字が読めない」と言う時、ふつう何と言いますか。

-1 「暗いさかい字(が)〜」それから何と言いますか。

1. ヨメナイ 2. ヨマシマヘン 3. ヨメヘン 4. ヨマヘン
5. ヨマレヘン 9. () 0. NA

-2 それでは「むつかしきさかいこの字(は)〜」

1. ヨメナイ 2. ヨマシマヘン 3. ヨメヘン 4. ヨマヘン
5. ヨマレヘン 9. () 0. NA

219. 船場(島之内)のことばと言ったら、どんなものを思いうかべますか。

1. 上品 2. きれい 3. ていねい 4. 商家 9. () 0. NA

220. 河内のことばではどうですか。

1. らんぼう 2. きたない 9. () 0. NA

221. [219でNAは省く]《リスト》船場のことばについてどんなふうに感じますか。

1. 重苦しい	2. 軽快	3. どちらとも	0. NA	質問せず
1. 聞きやすい	2. 聞きにくい	3. どちらとも	0. NA	
1. きれい	2. きたない	3. どちらとも	0. NA	
1. 好き	2. きらい	3. どちらとも	0. NA	

222. [220 でNAは省く]《リスト》では、河内のことばについてはどうですか。

1. 重苦しい	2. 軽快	3. どちらとも	0. NA	質問せず
1. 聞きやすい	2. 聞きにくい	3. どちらとも	0. NA	
1. きれい	2. きたない	3. どちらとも	0. NA	
1. 好き	2. きらい	3. どちらとも	0. NA	

223. 《リスト》京都弁についてはどうですか。

1. 重苦しい	2. 軽快	3. どちらとも	0. NA
1. 聞きやすい	2. 聞きにくい	3. どちらとも	0. NA
1. きれい	2. きたない	3. どちらとも	0. NA
1. 好き	2. きらい	3. どちらとも	0. NA

調査中に気づいた大阪弁

(例) ～ノトチャウカ ワカラヘン ギョーサン

(4) 調査票の説明・調査上の注意

202. アクセントを調べる項目。リストの内容が一部異なっているが、原則として東京の202.と同じ。ただし、1.の「庭 庭が広い」のように単語と文との間に空白部が置かれているものについてはその間を区切って読むように指示すること。また、11.～16.および27.～36.（これは大阪でアクセントがゆれているとされているもの）の文の末尾には、被調査者が最も自然だと思う文末助詞を補って読むように指示する。

208. 音声を調べる項目。内容が一部異なるが、他は東京の208.と同じ。

209. 202.と同じ。

213. -9～215. 特定の関西弁の使用状況をみる項目。

216. 状況不能と能力不能との言い分けのあるなしを調べる項目。

219. ～223. ことばのイメージを尋ねる項目。東京の219.～223.の代替。

「調査中に気づいた大阪弁」 質問に対する間返しや調査中の雑談時の被調査者のことばを観察し、その中で使用された大阪弁を記録する。

1.2.4. 言語生活調査

前項で示した面接調査は調査員が被調査者のひとりひとりと面談しながら必要な情報を入手する方法である。これは一般の社会調査で最も多く用いられている方法で、個人の発音を調べたり微妙なニュアンスを聞き取る必要のあることばの調査にとって最も有力な調査法といえる。

しかし、本研究のようにランダムに抽出した被調査者を対象に調査を行なうとした場合、ひとり平均の面接時間には自ずと制限がある（経験上、30～40分程度が最大限）。そこで、当初予定していた調査項目のうち、とくに面接を必要としない事項については以下の調査票（留置調査）に委ねることにした。

(1) 言語生活調査票

この調査票は東京・大阪での両調査に共通して用いたものである。

言語生活調査

大都市(74)

1. あなたは、きのう、どんなことをしましたか。つぎの中から思い出して番号に○をつけてください。いくつつけてもかまいません。ほかに特別のものがあつたら、余白に書いてください。

〔家で話をしましたか〕

1. 相談 2. 言い争い 3. 家人に注意やごと 4. 用事の話
5. さしずした 6. さしずされた 7. 御用聞き・集金人・セールスマン等
と応待 8. その他お客と応待
(家人との雑談は) 1. 朝食のとき 2. 昼食のとき 3. 夕食のとき
4. お茶、夜食のとき 5. その他

〔職場や学校や会合で話をしましたか〕

1. 先生や上役の人と 2. 友だちや同僚と 3. 部下や生徒と 4. 客と
5. あまり心安くない人と 6. はじめての人と
1. 質問 2. 相談、打合せ 3. 交渉、話し合い 4. 会議
5. さしずした 6. さしずされた 7. 雑談

〔その他のところで話をしましたか〕

1. 買い物で店の人と 2. 受付や窓口で 3. 待合室で
4. 電車やバスの中で 5. レストラン・喫茶店等で 6. 医師や看護婦と

7. 弁護士や会計士などと 8. 隣り近所の人と

1. 人の家を訪ねて 2. 連れと歩きながら 3. 立ち話

4. 道などを聞いた 5. 道などを教えた

〔大勢の人にむかって話しましたか〕

1. マイクを使って 2. メガホンで

1. 演説 2. 講義・訓話・説教など 3. 案内・お知らせ

4. 宣伝・広告 5. 報告・説明 6. さしず

〔電話で話しましたか〕

1. 電話をかけた 2. 電話を受けた

〔聞きましたか〕

1. ラジオ 2. テレビ 3. 宣伝カーの放送 4. その他の街頭放送

5. 外国語

1. 演説 2. 講義・訓話・説教 3. 駅などの案内・お知らせ

4. 放送のニュース 5. 注意やごと

〔読みましたか〕

1. 新聞 2. 週刊誌 3. その他の雑誌 4. 教科書・参考書 5. 辞書

6. 外国語 7. 小説の本 8. 漫画 9. その他の本 10. テレビの字幕

1. はがき・手紙 2. 書類 3. 掲示 4. 回覧板 5. 広告のちらし

6. ポスター 7. 看板

〔書きましたか〕

1. 日記 2. はがき 3. 手紙 4. ポスター・掲示板

5. 職場での書き物 6. 署名 7. その他の文章

1. 伝票 2. 帳簿 3. 家計簿 4. メモ 5. ノート

6. 届, 申込みその他の書類

2. あなたは、次の場合に例えば「おはよう」「いただきます」のような、きまったことばで、あいさつをしますか。するものを○でかこんでください。

1. 朝起きたとき 2. 夜寝るとき 3. 食事のはじめ 4. 食事のおわり

5. 家を出るとき 6. 家に帰ったとき 7. 家人のだれかが帰ってきたとき

8. 人を送り出すとき 9. 人と別れるとき 10. 人を迎えるとき

1. 朝のうち、人に会ったとき 2. ひるま、人に会ったとき

3. 晩、人に会ったとき 1. おめでたのあった人に会ったとき

2. 不幸のあった人に会ったとき

3. 「標準語で話す」と話の真実味が少ない」という人がいます。あなたは、この意見に賛成ですか。

1. まったく賛成である 2. どちらかといえば賛成である

46 1. 調査の概要

3. どちらかといえば反対である 4. まったく反対である
4. 「方言まるだしでも話を通じればよい」という人がいます。あなたは、この意見に賛成ですか。
 1. まったく賛成である 2. どちらかといえば賛成である
 3. どちらかといえば反対である 4. まったく反対である
5. あなたは、自分の昔のことばと同じようなことばを聞いたとき、どう思いますか。
 1. その人に話しかけて、ともに故郷のことを話し合う 2. 安らぎをおぼえて安心する 3. 親しみを感じるが、それを他の人に知られまいとする 4. あまり愉快的感じはしない 5. 非常に不快な感じがし、その場から逃げ出したくなる 6. 何とも感じない 7. その他（具体的に）
6. あなたは、他人と話をするとき、自分のことばが気になるほうですか。
 1. 非常に気になる 2. 少し気になる 3. あまり気にならない
 4. 全然気にならない
7. あなたは、人前で話ができるほうですか。
 1. できる 2. どちらかといえば、できる
 3. どちらかといえば、できない 4. できない
8. あなたは御近所の方とどの程度のおつきあいがありますか。
 1. あいさつをかわす程度の人だけ 2. 世間話をする程度の人だけ
 3. 親しくつき合っている人が数人いる 4. 親しくつき合っている人がかなりいる 5. ほとんどつき合いがない
9. あなたは次の意見のどちらに賛成ですか。
 1. 現在の日本では男性のことばと女性のことばはあまり変わらないようになってきている 2. 男性と女性のことばは今でも大いに違っている
10. 9で1と答えた人におたずねします。男女のことばがあまり違わなくなった理由は次のうちのどれだと思いますか。
 1. 男性のことばが女性化してきたから
 2. 女性のことばが男性化してきたから
 3. 男性のことばが女性化し、女性のことばも男性化したから

11. それでは将来の標準語の男女のことばの違いはどうなると思いますか。
 1. 今よりも違いが大きくなるだろう
 2. 今よりも違いが小さくなるだろう
 3. 今と変わらないだろう
12. それでは将来の標準語では男女のことばの違いはどうなるべきだと思いますか。
 1. 今よりも違いが大きくなるべきだ
 2. 今よりも違いが小さくなるべきだ
 3. 今のままでよい
13. 東京と大阪とではどちらが男女のことばの差が大きいと思いますか。
 1. 東京の方が大きい
 2. 大阪の方が大きい
 3. どちらも同じぐらいだ
 4. よくわからない
14. ことば以外身なりや態度での男女の差についてはどうですか。
 1. 男女の差が大きくなってきている
 2. 男女の差が小さくなってきている
 3. 今までと同じだ
15. あなたは自分が教わった先生に手紙を出すとき、宛名に次のどれを使いますか。
 1. 先生
 2. 様
 3. 殿
 4. その他（具体的に ）
16. あなたは、小学生のころ、御両親をどう呼んでいましたか。
父を_____, 母を_____と呼んでいた
17. -1 次ページに 15 対の言葉が右と左にはなれてなっています。
一般の東京の人について考えた場合、あなたは東京人の性格についてどう感じていますか。
それぞれの組合せで、ここにあげた 5 段階のうち、もっともよくあてはまるところに○印をつけてください。
17. -2 また、大阪人についてはどうですか。次ページの組合せの表にもっともよくあてはまるところに×印をつけて下さい。

	非常に (イ)	かなり (ロ)	どちらでもない (ハ)	かなり (ニ)	非常に (ホ)	
1. 勤勉な	1	2	3	4	5	怠ける
2. とっつきにくい						とっつきやすい
3. 素朴な						よなれている
4. おおらか						こまかい
5. 反抗的						従順な
6. 楽天的						悲観的
7. 利害をよく考える						打算を無視する
8. 無骨な						繊細な
9. あっさりしている						しつこい
10. 消極的						積極的
11. 保守的						進歩的
12. 思慮深い						向うみず
13. あきっぱい						粘り強い
14. 話下手						話上手
15. 独創的						模倣的

18. かりに、日本中どこでも好きな所に住んでいい、ということになったら、あなたはどこに住みたいと思いますか。

1. いま住んでいる区 2. 他の場所（具体的に）
3. とくに住みたい所はない

19. あなたは次の二つの意見のいずれに賛成しますか。

1. 東京都知事は、東京人の気質に合った地元出身の候補者をおくべきだ
2. 東京人といっても、全国からの人の寄り集まりであるから、他府県出身の候補者であってもかまわない

20. それでは大阪府知事についてはどうですか。
1. 大阪府知事は、大阪人の気質に合った地元出身の候補者をおくるべきだ
 2. 他府県出身の候補者であってもかまわない
21. あなたは次の二つの意見のどちらに賛成なさいですか。
1. 国会や中央官庁は国民全体の利益をはかるものであるから、何も東京になればならない理由はない
 2. 東京は日本全体を代表した大都会であるから、東京においておく必要がある
22. 東京や大阪などのような大都市の良い点は、どのようなところにあると思いますか。いくつでも結構ですからあげて下さい。
1. いろいろな職場や仕事がある
 2. レジャー施設が多くある
 3. 文化の恩恵を受ける機会が多い
 4. 子どもの教育上便利
 5. 交通が便利
 6. 買物が便利
 7. 新しいニュースが早く得られる
 8. 人とのつき合いがわずらわしくない
 9. その他（具体的に ）
 10. 良い点はない
23. それでは、大都市の欠点については、どうでしょうか。いくつでも結構ですからあげてください。
1. 住宅事情がよくない
 2. 風紀がよくなく、犯罪が多い
 3. 自然に恵まれない
 4. 公害がひどい
 5. 交通が混雑している
 6. 物価が高い
 7. 人情が薄い
 8. 人が多く、うんざりする
 9. その他（具体的に ）
 10. 悪い点はない
24. かりに、現在の日本全体を上、中の上、中の下、下の上、下の下の中の五つの層に分けるとすれば、あなた御自身はそのどれに入るとお考えですか。
1. 上
 2. 中の上
 3. 中の下
 4. 下の上
 5. 下の下
25. この一年間に一泊以上の御旅行をなさいましたか。もしなさったとしたら、合計何日ぐらいですか。
1. 国内旅行をした。合計 日ぐらい
 2. 海外旅行をした。合計 日ぐらい
 3. 旅行はしなかった
26. あなたの家族のかたと、あなたとの続柄を次ページの欄に記入して下さい。また、その方が現在あなたと同居していれば、1. 同居に○印を、もし、別居であれば、2. 別居に○印をつけて下さい。

下の欄に書ききれないときは余白に書いて下さい。

続柄	同居・別居の区別	
	1. 同居	2. 別居
	1. 同居	2. 別居
	1. 同居	2. 別居
	1. 同居	2. 別居
	1. 同居	2. 別居
	1. 同居	2. 別居

どうもありがとうございました。このアンケートに御記入下さったのはいつですか。

____月 ____日の朝・昼・夕方・夜ごろ

国 立 国 語 研 究 所

(2) 調査票の説明

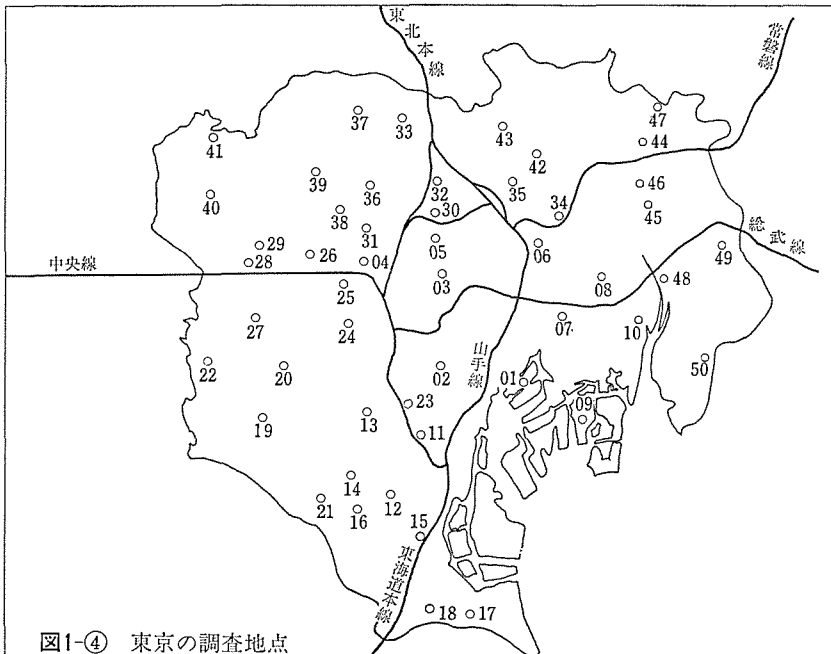
1. 言語生活のうち、記入日前日の話す・聞く・読む・書く行動の内容を調べる。
2. 一定の場面でのあいさつ行動の定型の有無を尋ねる。
- 3.～5. 標準語・方言に対する意識を調べる。5. はとくに地方からの移住者を対象としている。
- 6.～7. 話す行動についての内省を求める。
8. 近所づき合いの程度をみる。
- 9.～13. 男女のことばの差異についての意識や意見を尋ねる。
14. ことば以外の面での男女差をみるもので、9.～13. の参考項目。
15. 恩師への手紙の宛名で用いる敬称の使用意識を調べる。
16. 子どもの頃の両親に対する呼びかけのことばを尋ねる。
17. SD（意味微分法）によって、東京人・大阪人についてのイメージを調べる。

- 18. ～21. 地元意識を尋ねる
- 22. ～23. 大都市の長所・短所を尋ねる。
- 24. 階層帰属意識を尋ねる。
- 25. 旅行の日数を尋ねる。
- 26. 家族構成を尋ねる。

1.2.5. サンプリング

以上の調査は、東京都区内および大阪市内の 15～69 歳（1974 年 10 月 1 日現在）の住民を母集団とするサンプリングによって得られた調査対象者に行なわれた。なお、予算の関係上、東京での調査では 1,000 名、大阪では 500 名を対象とした。

(1) 調査地点の抽出



東京や大阪のような大都市で調査を行なおうとした場合、いきなり個々の調査対象者を抽出することは不可能である。また、かりに行なったとしても得られた調査対象者の居住地域が点々とし、実際の面接調査の能率が著しく悪くなる。そこで、調査地域を500人ずつからなるブロックに区分けし、そのブロックを抽出する方法を用いた。この結果得られた（第1段抽出）調査地点は、東京では図1-④および表1-①に示す50地点、大阪では図1-⑤および表1-②に示す20地点である。

表1-① 調査地点と面接調査の回収数（東京調査）

地 点	男	女	全体	地 点	男	女	全体
01 中央区勝どき2丁目	7(1)	7	14(1)	27 杉並区浜田山4丁目	6(1)	6	12(1)
02 港区六本木6丁目	4(1)	10(2)	14(3)	28 " 天沼1丁目	9	5	14
03 新宿区改代町	10	5	15	29 " 下井草1丁目	3	9(1)	12(1)
04 " 上落合3丁目	3	3	6	30 豊島区北大塚3丁目	10	5	15
05 文京区大塚6丁目	5	8	13	31 " 南長崎3丁目	8	3	11
06 台東区根岸2丁目	7	6	13	32 北区王子本町～岸町	6	3	9
07 墨田区千歳1丁目	5	6	11	33 " 赤羽北3丁目	4	8	12
08 " 押上3丁目	10(1)	6	16(1)	34 荒川区南千住5丁目	6(1)	9(1)	15(2)
09 江東区辰巳1丁目	4	7	11	35 " 東尾久8丁目	7	6(1)	13(1)
10 " 大島8丁目	6	8	14	36 板橋区大谷口 上町～北町	7	5	12
11 品川区上大崎3丁目	3	7	10	37 " 蓮根1丁目	3	3	6
12 " 旗の台3丁目	6(2)	13(1)	19(3)	38 練馬区旭丘1丁目	11(1)	6	17(1)
13 目黒区上目黒5丁目	7	7	14	39 " 早宮1丁目	6	5	11
14 " 大岡山1丁目	7	8	15	40 " 石神井6丁目	7(3)	9	16(3)
15 大田区山王3丁目	8	8	16	41 " 北大泉町	7(1)	7	14(1)
16 " 雪谷大塚町	6	12	18	42 足立区本木東町	6	9(1)	15(1)
17 " 羽田3丁目	3	11	14	43 " 江北3丁目	6	8	14
18 " 南蒲田1丁目	4	8	12	44 " 中川4丁目	5	9	14
19 世田谷区桜3丁目	6	8	14	45 葛飾区立石7丁目	8(1)	4	12(1)
20 " 松原3丁目	7(1)	4	11(1)	46 " 白鳥2丁目	8(1)	5	13(1)
21 " 奥沢6丁目	6	7	13	47 " 水元猿町	6	7	13
22 " 上祖師谷1丁目	6	8	14	48 江戸川区松島2丁目	6	8	14
23 渋谷区恵比寿4丁目	7	9	16	49 " 南小岩2丁目	9	9	18
24 " 本町5丁目	7	5	12	50 " 桑川町	7(1)	10	17(1)
25 中野区中央3丁目	5(2)	5(1)	10(3)				
26 " 野方1丁目	5(1)	8(1)	13(2)				

(注) () の数字は面接調査票のみの回収数

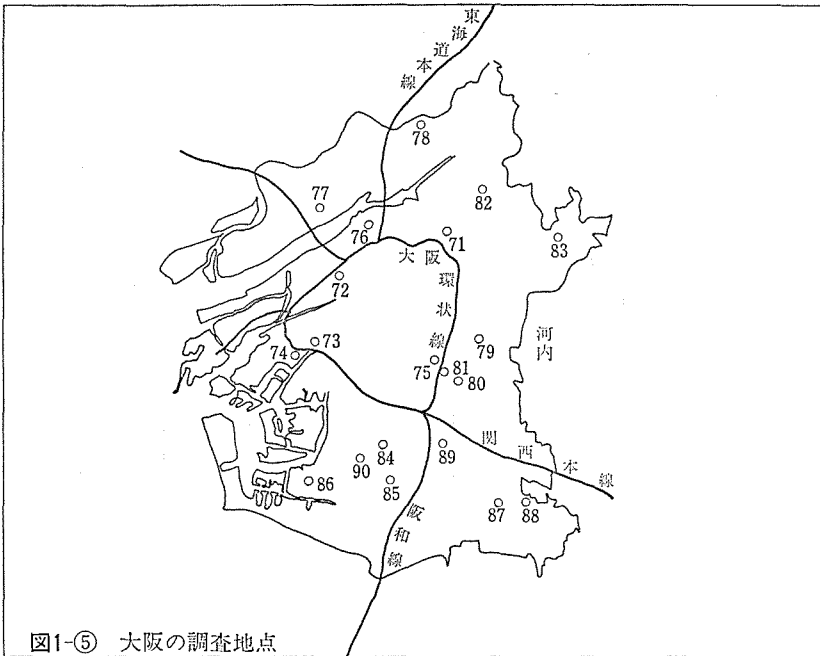


表1-② 調査地点と面接調査の回収数（大阪調査）

地 点	男	女	全体	地 点	男	女	全体
71 都島区北通2丁目	8	12	20	81 生野区桃谷1丁目	8	5	13
72 福島区上福島中1丁目	12	5	17	82 旭区大宮2丁目	8	9	17
73 西区九条南1丁目	11	9	20	83 鶴見区茨田諸口町	6	9	15
74 港区南市岡町2丁目	6	6	12	84 阿倍野区相生通2丁目	8	4	12
75 天王寺区東上町	10	8	18	85 住吉区万代東2丁目	9	9	18
76 淀川区長柄中通1丁目	13	9	22	86 住ノ江区西加賀屋1丁目～4丁目	12(1)	7	19(1)
77 淀川区十三元今里2丁目	9	9	18	87 平野区喜連	11	11	22
78 東淀川区下新庄町3丁目	16	6	22	88 " 長吉出戸町	12	9	21
79 東成区今里1丁目	14	8	22	89 東住吉区田辺東之町2丁目	9	11	20
80 生野区勝山北4丁目	9(1)	10	19(1)	90 西成区玉出中町1丁目	5	9	14

(注) () の数字は面接調査票のみの回収数

(2) 個人の抽出

上記の調査地点のそれぞれの中から住民登録台帳に基づき、東京では20名ず

表1-③ サンプル構成(性、年齢別)

	東 京 調 査				大 阪 調 査			
	国勢調査(1975年)		サンプル数		国勢調査(1975年)		サンプル数	
全 体	6,513,221 ^人	100.0 [%]	1,000 ^人	100.0 [%]	2,040,124 ^人	100.0 [%]	500 ^人	100.0 [%]
男	3,298,431	50.6	503	50.3	1,010,141	49.5	275	55.0
女	3,214,790	49.4	497	49.7	1,029,983	50.5	225	45.0
15～19歳	619,017	9.5	86	8.6	196,347	9.6	48	9.6
20～24	1,030,956	15.8	141	14.1	255,947	12.5	57	11.4
25～29	1,013,781	15.6	176	17.6	284,756	14.0	60	12.0
30～34	771,289	11.8	124	12.4	233,556	11.4	56	11.2
35～39	653,647	10.0	100	10.0	214,565	10.5	56	11.2
40～44	616,312	9.5	99	9.9	212,137	10.4	63	12.6
45～49	526,836	8.1	82	8.2	183,798	9.0	43	8.6
50～54	417,757	6.4	60	6.0	144,767	7.1	40	8.0
55～59	332,830	5.1	48	4.8	117,250	5.7	20	4.0
60～64	298,107	4.6	42	4.2	109,488	5.4	35	7.0
65～69	232,689	3.6	42	4.2	87,513	4.3	22	4.4

つ、大阪では25名ずつ抽出し、最終的な調査対象となる個人を選び出した。このようなサンプリングを「2段抽出法」という。

2段抽出の結果得られた調査対象者の性、年齢別の割合とこの調査に最も近い時点での国勢調査の結果とを対照させたのが表1-③である。全体としては、サンプリングの結果は国勢調査の結果に類似しているといえようが、大阪のほうには男女の構成比が異なるなど若干問題が認められる。この原因ははっきりしないが、一つにはサンプリングの手続き上に多少問題があったとも考えられる。東京では1,000名の調査対象者を得るために、まず50のブロック(調査地点)を抽出し、各ブロック20名ずつ選んでいる。これと同様に大阪の500名を得るには25ブロック各20名抽出すべきであるが、調査効率を上げるため(ブロックごとに調査員を割当てている)、実際には20ブロック各25名を抽出する方法をとった。このようにブロック数を減らし、ブロック当たりの抽出数を増やしたことが若干の片寄りを生んだのかもしれない。

もう一点は住民台帳にあるともみられる。住民票は転居の度に届けることになっているが、そのままになっているケースはかなり多いと聞いている。これが大阪でとくに多かったように思われる。というのは、調査前に発送した依頼状などが調査対象者に届かずそのまま戻ってきたり(東京の20通に対し、大阪

では 33 通), 現地調査で該当住所を訪ねた結果, 調査対象者はかなり前に転居してしまっていたというようなケースが大阪でとくに多かったからである。恐らく, この二つのことが錯綜した結果が大阪のサンプル構成をひずませたのであろう。

1.3. 調査実施状況の分析

1.3.1. 調査票の回収

前節で述べたように、東京都区内と大阪市内の2地域で、サンプリングにより得られた調査対象者に対し、言語生活調査と面接調査とを行なった。この2種類の調査は同一対象者に実施したのであるが実際にはその一方しか得られなかった場合もあり、両調査票の回収率には若干の差異がある。以下、各調査票の回収状況を見てみよう。

(1) 両都市での回収率の比較

表1-④に示すように、言語生活調査票の回収率は東京で65.8％、大阪で74.6％、また、面接調査票は東京で66.7％、大阪で72.2％である。また、両調査票を揃って回収することのできたものは東京では63.9％、大阪では71.8％と

表1-④ 調査票の回収率(性、年齢別)

	東 京 調 査					大 阪 調 査				
	割 当 て サンプル数	言語生活調査票		面 接 調 査 票		割 当 て サンプル数	言語生活調査票		面 接 調 査 票	
		回収数	回収率	回収数	回収率		回収数	回収率	回収数	回収率
全体	1000	658(⑥)	65.8 ^②	667(⑦)	66.7 ^②	500	373(④)	74.6 ^②	361(⑤)	72.2 ^②
男	503	305(⑤)	60.6	315(⑥)	62.6	275	204(③)	74.2	196(④)	71.2
女	497	353(⑦)	71.0	352(⑧)	70.8	225	169(④)	75.1	165	73.2
10代	86	63	73.3	65(②)	75.6	48	40	83.3	40	83.3
20代	317	191(⑤)	60.3	196(⑥)	61.8	117	87(②)	74.4	85	72.6
30代	224	154(③)	68.8	154(③)	68.8	112	82(③)	73.2	79	70.5
40代	181	123(⑦)	68.0	123(⑦)	68.0	106	81(③)	76.4	78	73.6
50代	108	74(②)	68.5	75(③)	69.4	60	45(③)	75.0	42	70.0
60代	84	53(③)	63.1	54(③)	64.3	57	38(③)	66.7	37(②)	64.9

(注) 回収数の後の()内の数字はその調査票だけを回収したものの数である。

なっている。

いずれの場合も大阪のほうが数パーセント回収率が高くなっている。これは、性、年齢などいろいろな属性別に見ても程度の差はあるが、ほぼ同じ傾向となっている。

東京に比べて大阪のほうが回収率が高かった理由には種々のことが考えられる。一口に大都市とはいっても、東京と大阪とではその規模が違いうし性格も異なっている（これについては2.1.を参照されたい）。このことが回収率の差を反映した一つの理由とも考えられるが、調査の実施上の問題に関係することとして少なくとも次の3点を指摘することができる。

まず考えられるのは、調査対象者への働きかけの程度に大きな差があったことである。東京では、国立国語研究所長名による調査協力依頼状を郵送して、対象者の協力を求めるだけであった。一方、大阪ではこれに加えて、調査前から期間中にかけて各種マスコミを通じて数度にわたり協力を呼びかけた。この効果の客観的な測定資料はないが、初めは拒否的であった調査対象者のうち、報道に接した後に態度を変えて調査に協力してくれたケースがいくつかみられるなど効果があったことは事実である。なお、この調査への呼びかけは以下の機関によって行なわれた。

新聞：朝日新聞，サンケイ新聞，毎日新聞，読売新聞

テレビ：NHK，読売テレビ

ラジオ：朝日放送，大阪放送，毎日放送

第2点は、調査実施時期の違いにあると考えられる。東京の調査は11月26日から12月9日の14日間（当初予定は5日まで）、大阪は翌年の2月14日から24日までの11日間に実施された。大阪のほうは時期的にはあまり問題がなかったのに対し、東京は調査が年末にかかったため商店などで協力を得にくいという事情があった。

第3点は、調査期間中の調査員相互の情報交換のしやすさの程度にあるといえる。この調査は国立国語研究所の所員が中核となって実施したわけであるが、その勤務先が東京にあるため、東京の調査では宿泊費の支給が認められず調査員はやむなく自宅から調査に通うことになった。そのため相互の連絡は一部を

除いて、国語研究所内の調査本部を介して行なうしか術がなかった。

調査を経験した者にはよくわかることだが、調査対象者が面接に応じうる日時が重なってしまうことがよくある。また、調査を拒否する者の中にもその理由や程度によっては別の調査員が訪ねると応じる可能性がある場合も見られる。これらの場合には、他の調査員が代行する必要があるが、調査本部を介しての電話連絡だけでは時機を得た措置を講ずるのが難しい。この点で、大阪では調査員が同じホテルに宿泊して調査を行なうことができたためほとんど問題がなかったといえる。

以上の諸条件が重なり合った結果、大阪のほうが東京よりも回収率が高くなったと考えられる。

なお、細かく見れば、それぞれの都市内でも調査地点（第1段抽出で得られ

表1-5 調査日別面接調査票回収数(東京調査)(性、年齢別)

	11月 26	27	28	29	30	12月 1(日)	2	3	4	5	6	7	8(日)	9	10日 以降	合 計
全体	68	100	54	88	70	79	47	46	42	14	7	11	27	6	8	667
男	24	43	23	40	27	47	25	24	19	7	5	6	19	3	3	315
女	44	57	31	48	43	32	22	22	23	7	2	5	8	3	5	352
10代	5	14	6	8	9	7	5	5	3	1		1	1			65
20代	14	30	11	26	22	27	13	11	16	3	3	4	13		3	196
30代	15	19	15	21	16	13	14	10	12	3	4	5	2	3	2	154
40代	14	16	13	15	11	16	8	11	6	3		1	6	2	1	123
50代	11	13	4	7	10	11	3	4	5	3			3		1	75
60代	9	8	5	11	2	5	4	5		1			2	1	1	54

(注) 11月26日の回収数には調査開始日以前(24日)に実施された3票を含んでいる。

表1-6 調査日別面接調査票回収数(大阪調査)(性、年齢別)

	2月 14	15	16(日)	17	18	19	20	21	22	23(日)	24	25日 以降	合 計
全体	35	44	64	41	47	35	26	17	24	15	9	4	361
男	11	21	41	18	28	19	16	9	16	10	6	1	196
女	24	23	23	23	19	16	10	8	8	5	3	3	165
10代	2	7	4	3	9	2	3	2	5	1		2	40
20代	7	12	17	7	8	9	8	3	5	6	3		85
30代	13	4	14	9	13	10	5	4	2	2	3		79
40代	6	14	12	9	8	7	7	6	6	3			78
50代	3	4	10	5	5	4	2		2	3	3	1	42
60代	4	3	7	8	4	3	1	2	4			1	37

たブロック)ごとに回収率は異なっている。その回収状況は1.2.の表1-①,表1-②に示した通りである。ただし、この数値は面接調査の結果だけを示したものである。

以下、とくに断わらないかぎり、面接調査票を回収しえた被調査者(東京 667名、大阪 361名)を対象とする。

(2) 調査日・調査時刻ごとの回収

表1-⑤と表1-⑥は、東京・大阪の両都市での調査日ごとの回収数である。これによると、調査日数や調査員の数が異なるにもかかわらず、両都市とも、調査第4日目までで全体の約半数が回収されている。この期間の回収は、性別では日曜日を除いてすべて女性のほうが多く、年齢別では東京の10代を除き高齢層のほうに片寄っている。つまり、初期の頃に女性や高齢層の調査が進行し、男性や若い人の調査は調査

の後半以降まで残されている。これは各層ごとの在宅率の違いを反映するものと考えられる。

同様のことは、調査が行なわれた時間帯の別にも見られる。

表1-⑦は両都市における調査開始時刻の分布を示したものである。東京と大阪とでは若干の違いがあるが、女性は午後の早い時期を頂点とするほぼ正規分布となっているのに対し、男性のほうは午後と夕食後の両時間帯を頂点とする双峰性分布に近くなっている。

次に、調査開始時刻と年齢の関係を見てみよう。図1-⑥は東京の10代、30代、50代の3年

表1-⑦ 調査を始めた時刻

開始時刻	東 京 調 査			大 阪 調 査		
	全 体	男	女	全 体	男	女
6:30～7:29	2([△] 0.3) ⁵⁰	2				
7:30～8:29	2([△] 0.3)	1	1			
8:30～9:29	12([△] 1.8)	7	5	2([△] 0.6) ⁵⁰	1	1
9:30～10:29	38([△] 5.8)	15	23	24([△] 6.6)	18	6
10:30～11:29	55([△] 8.4)	22	33	46([△] 12.7)	24	22
11:30～12:29	57([△] 8.7)	24	33	23([△] 6.4)	9	14
12:30～13:29	57([△] 8.7)	26	31	40([△] 11.1)	24	16
13:30～14:29	73([△] 11.1)	26	47	36([△] 10.0)	16	20
14:30～15:29	57([△] 8.7)	19	38	44([△] 12.2)	12	32
15:30～16:29	51([△] 7.8)	18	33	37([△] 10.2)	19	18
16:30～17:29	37([△] 5.6)	21	16	22([△] 6.1)	10	12
17:30～18:29	66([△] 10.0)	34	32	20([△] 5.5)	15	5
18:30～19:29	48([△] 7.3)	26	22	27([△] 7.5)	21	6
19:30～20:29	55([△] 8.4)	36	19	29([△] 8.0)	18	11
20:30～21:29	38([△] 5.8)	26	12	7([△] 1.9)	6	1
21:30～22:29	8([△] 1.2)	7	1	2([△] 0.6)	2	
22:30～23:29	1([△] 0.2)	1		2([△] 0.6)	1	1
23:30～24:29	1([△] 0.2)	1				
不 明	9	2	7	0	0	0
合 計	667	315	352	361	196	165

(注)「全体」の%は不明を除いた数を100とした場合である。

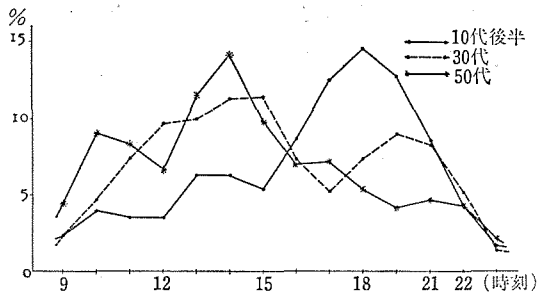


図1-⑥ 調査開始時刻の年齢別分布図(東京)

年齢だけを图示したものである。この図から、開始時刻の分布（これは在宅時刻と相関がある）は被調査者の年齢によって著しく異なることがわかる。つまり、若い層では日中での調査は少なく、年齢が高くなるにつれて日中の調査も容易となっている。中間の30代は二つの峰をもっており、日中でも調査しうるグループと夕刻以降でなければ捕捉しえないグループとに分かれている。恐らく前者は主に在宅の女性層であり、後者は勤め人が主体となっているのであろう。図には示さなかった年齢層についていうと、20代は10代と30代とを合成

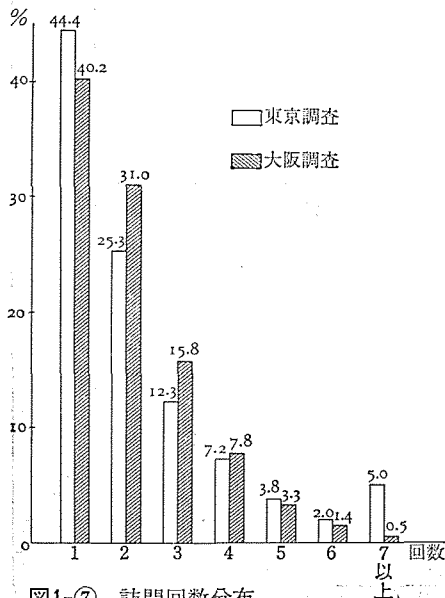


図1-⑦ 訪問回数分布

した形に近く、40代は30代をやや押しつぶした形の分布になっている。また、60代は夕刻に頂点があるものの全体としては平坦な曲線を描いている。

なお、図1-⑥は生の数値を描いたものではなく、移動平均法による平滑化を行なった結果であることを断わっておく。

(3) 回収までの訪問回数

ひとりの被調査者に対して、調査を行なうまでに何回足を運んだかを示したのが図1-⑦である。最初の訪問で調査ができた

のは、東京では44.4%，大阪では40.2%であった。両都市とも半数以下であるが、これは鶴岡市で行なった調査(国立国語研究所，1974)でもほぼ同様の44.8%であったことを考えると決して小さい数値とはいえないようである。これに2回目の訪問で調査ができた被調査者を加えると全体の約7割となる。以下、訪問回数が増えるにつれて占める比率は小さくなっており、全体としてはJ字型分布となっている。

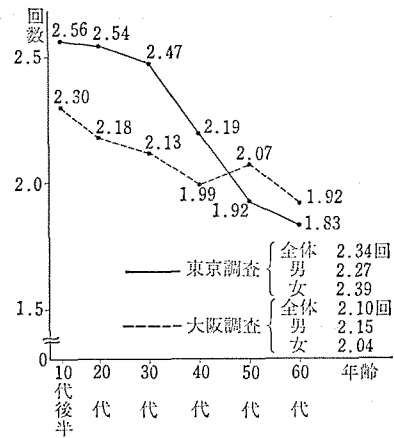


図1-⑧ 平均訪問回数(年齢別)

しかし、7回以上訪問してやっと調査にこぎつけたというのが東京で5%を占めていることが注目される。これは、一つには調査員が意地になったことも考えられるが、他方それだけ調査対象者の捕捉が困難だったともいえよう。

捕捉の難易度ということでは図1-⑧に見られるように調査対象者の年齢が関係している。図は調査を行なうまでの平均訪問回数を示したものであるが、訪問回数と年齢とは逆比例の関係にあることがわかる。つまり、若い人に対しては何度も足を運ばなければ調査ができないのに対し、年齢が高いほど訪問回数

表1-⑧ 調査場所——自宅・勤務先の別(性、年齢別)

	東京調査				大阪調査			
	自宅	勤務先	その他	人数	自宅	勤務先	その他	人数
全体	91.7 ⁵⁵	6.5 ⁵⁵	1.8 ⁵⁵	661 ^人	91.3 ⁵⁵	6.2 ⁵⁵	2.5 ⁵⁵	355 ^人
男	88.2	9.9	1.9	314	89.1	7.8	3.1	193
女	94.8	3.5	1.7	347	93.8	4.3	1.9	162
10代	89.2	1.5	9.2	65	87.2	7.7	5.1	39
20代	88.7	9.8	1.5	194	88.0	6.0	6.0	83
30代	92.1	7.3	0.7	151	88.5	11.5		78
40代	91.8	7.4	0.8	122	96.2	3.8		78
50代	94.7	4.0	1.3	75	97.6	2.4		42
60代	100.0			54	91.4	2.9	5.7	35

(注) 無記入は表から除いてある。

は少なくてすむということである。これは(2)で見たような高年齢層の在宅率の高さに加え、若者に比べ一定の年齢以上の人の場合は、本人の帰宅時間など種々の情報が家族から得やすく調査員が無駄足を踏むことが少ないためであろう。

(4) 調査を行なった場所

この調査が行なわれた場所について見ると、表1-〔8〕に示すように、両都市とも90%以上が自宅であった。また、自宅での調査の割合は、性別では女性に多く、年齢別では高年齢層に多くなっている。この傾向は上で見てきたことと一致している。これと裏返しになるのが勤務先やその他の調査であり、性別では男性に、年齢別では若いほうに多くなっている。なお、ここで「その他」としたものの多くは自宅または勤務先近辺の喫茶店などで行なったものであり、とくに10代に多くみられる。また、調査場所が、部屋の中だったか、玄関先だったかを示したのが表1-〔9〕である。調査員を部屋の中にあげて調査に応じたのは東京では全体の54.2%と半数を上まわっているが、大阪では10%近く低い45.2%であった。両都市での調査が寒季であったとはいえ、見知らぬ調査員を半数近くが部屋に通したということは調査に対する協力の強さを示すものといえよう。一方、玄関先での調査は全体の約4割であるが、性別では女性に、年齢別では10代と50代とに多くみられた。これは調査員が（大阪の1名を除いては）男性であったということと無縁ではなからう。

表1-〔9〕 調査場所——部屋の中か玄関先か(性、年齢別)

	東 京 調 査					大 阪 調 査				
	部屋の中	玄関先	店 先	その他	人 数	部屋の中	玄関先	店 先	その他	人 数
全体	54.2 [%]	38.0 [%]	5.5 [%]	2.3 [%]	653 ^人	45.2 [%]	43.2 [%]	9.3 [%]	2.3 [%]	354 ^人
男	61.1	30.2	5.8	2.9	311	50.8	36.8	9.8	2.6	193
女	48.0	45.0	5.3	1.8	342	38.5	50.9	8.7	1.9	161
10代	46.2	47.7	3.1	3.1	65	41.0	48.7	5.1	5.1	39
20代	55.2	35.9	6.3	2.6	192	45.8	37.3	9.6	7.2	83
30代	58.1	35.1	6.1	0.7	148	48.1	44.2	7.8		77
40代	59.2	35.0	3.3	2.5	120	43.6	44.9	11.5		78
50代	44.0	44.0	8.0	4.0	75	38.1	50.0	11.9		42
60代	52.8	39.6	5.7	1.9	53	54.3	37.1	8.6		35

(注) 無記入は表から除いてある。

表1-10 調査への態度〔調査員判定〕(性, 年齢別)

	東 京 調 査				大 阪 調 査			
	積極的	ふつう	消極的 拒否的	人 数	積極的	ふつう	消極的 拒否的	人 数
全体	37.3 [%]	51.3 [%]	11.4 [%]	657 ^人	39.5 [%]	47.9 [%]	12.6 [%]	349 ^人
男	42.8	49.8	7.3	313	41.9	45.5	12.6	191
女	32.3	52.6	15.1	344	36.7	50.6	12.7	158
10代	18.5	70.8	10.8	65	36.8	47.4	15.8	38
20代	41.1	50.0	8.9	192	41.5	54.9	3.7	82
30代	32.5	51.7	15.9	151	46.1	44.7	9.2	75
40代	38.8	50.4	10.7	121	33.3	46.7	20.0	76
50代	45.9	43.2	10.8	74	29.3	46.3	24.4	41
60代	44.4	44.4	11.1	54	48.6	43.2	8.1	37

(注) 無記入のものは表から除いてある。

表1-11 調査の場への同席者(性, 年齢別)

	東 京 調 査							大 阪 調 査						
	本人のみ	子ども	配偶者	両親	その他の 家族	同 族 その他	計	本人のみ	子ども	配偶者	両親	その他の 家族	同 族 その他	計
全体	65.5 [%]	7.8 [%]	13.0 [%]	7.2 [%]	3.7 [%]	2.9 [%]	656 ^人	65.8 [%]	7.1 [%]	16.9 [%]	5.6 [%]	1.1 [%]	3.4 [%]	354 ^人
男	66.3	1.3	19.6	6.1	2.2	4.5	312	66.3		25.9	4.7		3.1	193
女	64.8	13.7	7.0	8.1	4.9	1.5	344	65.2	15.5	6.2	6.8	2.5	3.7	161
10代	65.6		1.6	26.6	1.6	4.7	65	74.4			20.5		5.1	39
20代	66.7	9.9	7.8	9.9	1.6	4.2	192	68.7	10.8	10.8	7.2		2.4	83
30代	50.0	20.7	19.3	3.3	2.0	4.7	150	61.0	15.6	16.9	1.3	1.3	3.9	77
40代	74.2		16.7	3.3	5.0	0.8	120	66.7	3.8	19.2	3.8	2.6	3.8	78
50代	70.7	1.3	20.0		8.0		75	71.4		23.8	2.4		2.4	42
60代	79.6		9.3	1.9	9.3		54	51.4	2.9	37.1	2.9	2.9	2.9	35

(注) 無記入のものは表から除いてある。

なお、参考のため、被調査者の調査に対する態度を表1-10に示しておく。

次に、調査の場所に誰が同席したかを示しておこう。表1-11に見られるように、全体の約3分の2は「本人のみ」(別の部屋に家族などが居る場合も含む)であったが、残りの3分の1には誰かしらが同席していた。男性では配偶者が、女性では子ども(とくに幼児)が多く、また、10代(とくに女性)の場合は両親が同席するなど属性別の特徴がよく表われているといえよう。

(5) 調査所要時間

それぞれの被調査者への面接調査に要した時間は図1-9に示したように、正

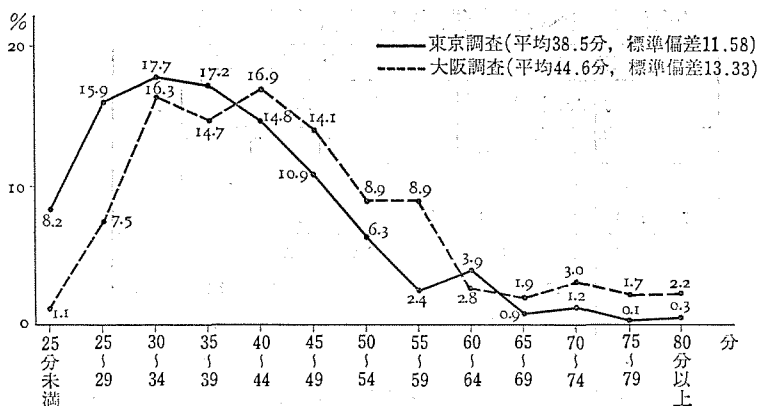


図1-⑨ 調査所要時間分布

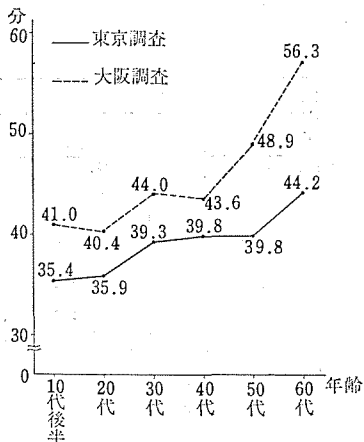


図1-⑩ 平均調査所要時間 (年齢別)

の歪度 (右方に尾を引く) をもつ正規分布となっている。これを地域別に見ると、東京では約半数が25～39分の範囲内にあり、平均所要時間は38.5分 (男37.8分、女39.0分) であった。これに対して、大阪では約半数が30～44分の間にあり、平均は44.6分 (男43.9分、女45.2分) と東京より約6分時間がかかっている。これは大阪のほうが調査票の内容 (とくにアクセント項目) が多かったためと思われる。調査

時間を年齢別に見ると、図1-⑩に示すように、年齢が進むにつれて調査時間も長くなっている。この傾向は大阪でとくに顕著であり、60代では若い層よりも15分以上も長くなっている。

調査時間の長さに関連して、質問に対し被調査者からの回答が得られるまでの長さ (反応の速さ) の調査員の主観による判定結果を表1-⑫に示しておく。また、同じく調査員判定による、質問に対する問い返しの多少を示したのが表1-⑬である。この二つの表は、調査時間の長さとはほぼ平行関係にあり、高年齢層ほど反応までの時間は長く、また問い返しの量も多くなる傾向が認められている。

表1-12 回答が得られるまでの時間(調査員判定)(性,年齢別)

	東 京 調 査				大 阪 調 査			
	長いほう	ふつう	短いほう	人 数	長いほう	ふつう	短いほう	人 数
全体	22.3 %	58.0 %	19.7 %	660 人	19.4 %	60.4 %	20.2 %	351 人
男	23.3	56.2	20.4	313	20.4	62.3	17.3	191
女	21.3	59.7	19.0	347	18.1	58.1	23.8	160
10代	16.9	58.5	24.6	65	7.7	53.8	38.5	39
20代	12.4	63.4	24.2	194	10.8	69.9	19.3	83
30代	22.7	57.3	20.0	150	13.0	61.0	26.0	77
40代	25.4	59.0	15.6	122	32.9	52.6	14.5	76
50代	29.3	52.0	18.7	75	28.6	61.9	9.5	42
60代	46.3	46.3	7.4	54	26.5	58.8	14.7	34

表1-13 質問に対する問い返しの量(調査員判定)(性,年齢別)

	東 京 調 査				大 阪 調 査			
	多いほう	ふつう	少ないほう	人 数	多いほう	ふつう	少ないほう	人 数
全体	14.7 %	64.2 %	21.1 %	660 人	15.4 %	61.5 %	23.1 %	351 人
男	16.3	62.6	21.1	313	16.2	62.8	20.9	191
女	13.3	65.7	21.0	347	14.4	60.0	25.6	160
10代	12.3	58.5	29.2	65	5.1	56.4	38.5	39
20代	8.2	64.9	26.8	194	4.8	75.9	19.3	83
30代	14.0	67.3	18.7	150	14.3	55.8	29.9	77
40代	18.0	67.2	14.8	122	23.7	61.8	14.5	76
50代	21.3	56.0	22.7	75	26.2	57.1	16.7	42
60代	25.9	64.8	9.3	54	23.5	50.0	26.5	34

(注) 上下両表とも無記入のものは表から除いてある。

(6) 言語生活調査票の記入

以上、面接調査について見てきたが、もう一方の調査である言語生活調査について見てみよう。

この調査は面接調査までに被調査者本人が記入する(自記式)ように予め依頼しておいたものである。面接調査時に本人が既に記入してあったものは表1-14に見られるように、東京では73.9%、大阪では58.8%であった。ただし、この数字は言語生活調査票の他に、面接調査票のほうも回収できたものについての結果である。これ以外にこの調査票だけが回収されたのが東京で19、大阪

表1-④『言語生活調査票』記入者構成(性,年齢別)

		被調査者 自 身	被調査者 + 調 査 員	調 査 員	他 人	人 数
東 京 調 査	全体	73.9 ⁵⁵	6.1 ⁵⁶	18.6 ⁵⁵	1.4 ⁵⁵	639 ⁵⁶
	男	75.7	5.1	18.2	1.0	296
	女	72.3	7.0	19.0	1.7	343
	10代	87.3	1.6	11.1		63
	20代	80.6	6.5	12.4	0.5	186
	30代	70.9	7.3	21.2	0.7	151
	40代	76.7	7.8	14.7	0.9	116
	50代	65.3	4.2	27.8	2.8	72
	60代	47.1	5.9	39.2	7.8	51
大 阪 調 査	全体	58.8	13.9	25.9	1.4	359
	男	58.8	13.4	26.8	1.0	194
	女	58.8	14.5	24.8	1.8	165
	10代	60.0	15.0	25.0		40
	20代	69.4	16.5	14.1		85
	30代	64.6	13.9	20.3	1.3	79
	40代	60.3	10.3	28.2	1.3	78
	50代	38.1	21.4	35.7	4.8	42
	60代	40.0	5.7	51.4	2.9	35

で14ある。これらがすべて被調査者自身によって記入されていたと仮定すると、自記率は東京では74.6%,大阪では60.3%と若干ずつ多くなることになる。しかし、いずれにせよ大阪のほうが自記率が少ないといえる。これは調査票が届いてから面接調査までの期間が大阪のほうが東京より短かったためと思われる。このことは、被調査者が一部分の記入は終えていたが面接調査時点にはまだ完成していなかったため、調査員が読み上げるなどして完成を手助けした「被調査者+調査員」のカテゴリーが東京より多いことにも関係していよう。なお、「調査員」

とあるのは、調査票の初めから終りまで調査員が読み上げて被調査者の回答を記入したものの意である。また、「他人」とあるのは被調査者以外の家族が記入したものであり、この調査票については本人の意見がそのまま反映されているか否かは明らかではない。

この調査票の自記率を属性別に見ると、性別ではあまり差がないが、年齢別に見ると一定の傾向が見られる。つまり、当然ながら年齢が若いほど自記率は高く、高年になるにつれて低くなるということである。

次に、この調査票がいつ記入されたかを見てみよう。記入日を曜日ごとに示したのが図1-⑩である。東京で金曜日と土曜日の比率が高いのは面接調査票の回収(表1-⑤参照)と関係しており、この要素を差引くと曜日による差はあまりなく、全体として平均している。一方、大阪では月曜日に集中しているが、

この理由は明らかではない。

また、記入日の時間帯ごとに集計してみると図1-⑫のようになる。これによると、両都市とも昼間は女性が、夜は男性が多く記入していることがわかる。これは先述の調査時刻（表1-⑦）などの結果と一致している。また、ここでは示さなかったが、年齢別に見ても調査開始時刻とほぼ同一の分布となっている。

(7) 被調査者のことばの印象

最後に、調査中の被調査者の発話が共通語的か否かの調査員評定結果を示しておく。

評定は36ページに示す7段階となっているが、共通語の程度の高い順に1点から7点を与え平均点で示すと、全体では東京2.42、大阪4.16と当然ながら東京のほうが共通語的

であった。

性別では、男（東京2.47、大阪4.29）、女（東京2.37、大阪4.01）と両都市とも女性のほうが僅かに共通語的であった。

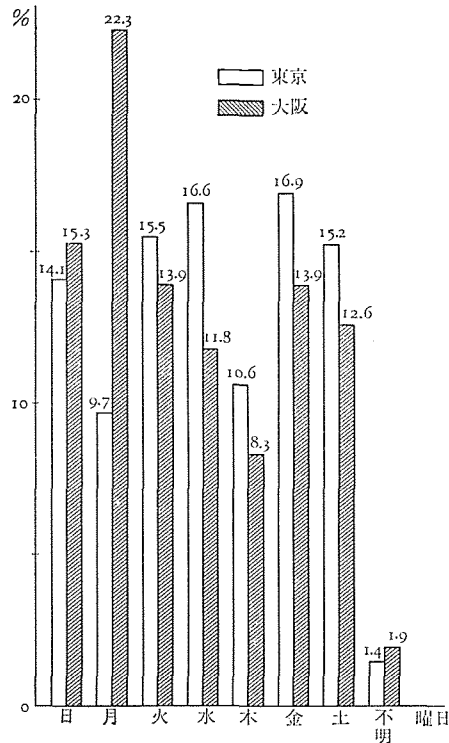


図1-⑪ 曜日別言語生活調査票記入状況

		人数	朝	昼	夕方	夜	不明
東京	全体(658)	97%	27.4 %		22.3 %	36.3 %	4.3 %
	男(305)	9.8	23.9		21.6	40.7	3.9 %
	女(353)	9.6	30.3		22.9	32.6	4.5
大阪	全体(373)	12.3	29.5		18.5	34.3	5.4
	男(204)	11.8	25.0		20.1	38.7	4.4
	女(169)	13.0	34.9		16.6	29.0	6.5

図1-⑫ 時間帯別言語生活調査票記入状況

1.3.2. 調査不能

表1-15 面接調査回収不能数(性別)

	東 京 調 査			大 阪 調 査		
	割当て数	不能数	不能率	割当て数	不能数	不能率
全体	1000 [△]	333(9) [△]	33.3 [△]	500 [△]	139(4) [△]	27.8 [△]
男	503	188(9)	37.4	275	80(4)	28.8
女	497	145(0)	29.2	225	59(4)	26.8

(注) 不能数の後の()内の数字は、言語生活調査票だけが回収されたものの数である。

表1-16 調査不能理由(性・年齢別)

	東 京 調 査						大 阪 調 査					
	病 気・ 障 害	転 出・ 転 居	不 在	拒 否	そ の 他・ 不 明	合 計	病 気・ 障 害	転 出・ 転 居	不 在	拒 否	そ の 他・ 不 明	合 計
全体	27 [△]	53 [△]	78 [△]	160 [△]	15 [△]	333 [△]	8 [△]	33 [△]	14 [△]	51 [△]	33 [△]	139 [△]
男	12	32	51	83	10	188	8	24	9	21	18	80
女	15	21	27	77	5	145	9	5	30	15	59	118
10代		1	6	13	1	21		2	2	3	1	8
男		1	4	6	1	12		2	1		1	4
女			2	7		9			1	3		4
20代	8	32	35	40	6	121	1	11	1	11	8	32
男	2	19	21	19	5	66	1	9	1	5	3	19
女	6	13	14	21	1	55		2		6	5	13
30代	3	12	14	40	1	70	2	9	1	13	8	33
男	1	7	12	24		44	2	5	1	6	6	20
女	2	5	2	16	1	26		4		7	2	13
40代	6	3	13	33	3	58	3	6	7	5	7	28
男	5	2	7	16	2	32	3	5	5	2	4	19
女	1	1	6	17	1	26		1	2	3	3	9
50代	3	2	8	18	2	33		3	2	9	4	18
男	2	1	5	7		15			1	3	4	8
女	1	1	3	11	2	18		3	1	6		10
60代	7	3	2	16	2	30	2	2	1	10	5	20
男	2	2	2	11	2	19	2	2		5	1	10
女	5	1		5		11			1	5	4	10

それぞれの性・年齢別の人数を示したものが表1-16である。

病気・障害……「障害」には、言語障害・難聴の他に、精神的な障害が含ま

全調査対象者のうちで、面接調査に応じてもらえなかった者(調査不能)の数は表1-15に示す通りである。また、調査不能の理由を以下の5種類に分類し、

れる。

転出・転居……転勤や住民票だけが存在するが本人はその住所に住んでいない者もここに含めた。

不在……出張や長期の旅行の他に、調査対象者に一度も会えなかったものが含まれる。これには、調査期間がずれていれば応じてもらえる可能性の高いものが多い。

拒否……完全な拒否の他に、「多忙」を理由とするものが多く含まれている。後者は上と同様調査期間によっては応じてもらえる場合と、それを口実にした場合との双方が認められる。

その他・不明……「その他」は調査員が調査対象者と日時の約束をしたにもかかわらず他と重複し実際の調査が行なえなかったものである。また、「不明」は調査員による調査不能の理由の報告がなかったものである。

調査不能の理由を性別に見ると、東京・大阪ともに女性に「拒否」が多く、男性に「転出・転居」および「不在」がやや多くみられている。

1.4. 被調査者の属性

前節までに述べたような方法及び計画に基づいて、東京・大阪の両地域で調査が実施された結果、面接調査票・言語生活調査票の両方とも回収することができたのは、東京で 639 名、大阪で 359 名であった。この他に、面接調査票あるいは言語生活調査票の一方のみを回収することができたものが若干あるが、各分析結果の比較を容易にするためには、分析項目ごとの被調査者の総数が統一されていることが望ましいと考えて、この面接及び言語生活の両調査に回答した被調査者の資料のみを、以降の分析の対象とすることにする。従って、最終的な回収率は東京 63.9%，大阪 71.8%ということになる。

ここでは、これらの被調査者（東京 639 名、大阪 359 名）の属性（社会言語学的属性）について、まず、そこで用いた用語の意味を明確にし、次に、各属性ごとの目立った傾向を概観することにする。次に、本籍、居住経歴、父母・祖父母の出身地などの属性に触れ、最後に、これら属性間の関連を見るためのクロス集計表を示すことにする。

1.4.1. 属性に関する用語の定義

面接調査票のはじめとおわりの部分にある、いわゆるフェイスシート項目の中で、性・年齢・学歴・職業・世代・出身地などの基本的な属性は、分析を進めていく上で非常に重要な意味を持っている。また、これら基本属性の各カテゴリー（例えば、性については男と女）は、以下のすべての分析に共通のものである（但し、分析の観点により、多少の統合、分割を行なったものが若干ある）。そこで、これら属性及び各カテゴリーに対して使った用語を、まず最初

に定義しておくことにする。

(1) 年齢

被調査者の年齢は 15 歳から 69 歳までに分布するが、ここでは、「15～19 歳」、「20～24 歳」といったように、5 歳きざみで 11 段階に分けた。

(2) 学歴

学歴は、新制中学卒業相当以下を「低学歴」、旧制中学・新制高校の段階を「中学歴」、それ以上を「高学歴」というように、3 段階に分けた。中退、在学中は卒業と同等に扱った。

(3) 職業

職業は、商店や小規模な工場の経営者などを「経営者」、いわゆるサラリーマンを「給与生活者」、親の仕事（多くは商工業）の手助けをしているものを「家業従事者」とし、「主婦」、「学生」、「無職」、「その他」を加えて七つのカテゴリーに分けた。パート・アルバイトなどは「無職」と同等に扱った。また、農業（東京で 1 名）や無回答などは「その他」に含めた。

(4) 世代

世代とは、被調査者またはその親族（父母・祖父母）が調査地域（東京都あるいは大阪府）に移住してきて何代経過したかを表わすものとする。ここでは、以下の四つのカテゴリーに分けた。

「1 世」：被調査者が調査地域以外の出身であることを示す。

「2 世」：被調査者自身が調査地域の出身で、両親はともに調査地域以外の出身であることを示す。

「3 世」：被調査者及び両親のうちの片方または両方が調査地域の出身であり、かつ、すべての祖父母が調査地域以外の出身であることを示す。

「4 世以上」：被調査者及び両親のうちの片方または両方が調査地域の出身であり、かつ、祖父母のうちのいずれかが調査地域の出身であることを示す。従って、「1 世」は移住者を、「2 世」以上はえぬき（東京出身者あるいは大阪出身者）を意味している。

(5) 出身地

出身地は、ここでは出生地ではなく、いわゆる言語形成期とされている 5 歳

から15歳の主な居住地を用い、全国47の都道府県を以下のような11のブロックに分けた。

東京都／大阪府：東京調査では東京都、大阪調査では大阪府を意味し、「南関東」、「近畿」からそれぞれ分離させた。

北海道・北東北：北海道、青森県、岩手県、秋田県

南東北・北関東：宮城県、山形県、福島県、茨城県、栃木県

南関東：神奈川県、千葉県、埼玉県、群馬県、（東京都）

北陸：新潟県、富山県、石川県、福井県

中部：山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県

近畿：三重県、滋賀県、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県、（大阪府）

中国：鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県

四国：徳島県、香川県、愛媛県、高知県

九州・沖縄：福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、
鹿児島県、沖縄県

その他：外国、地域不明など

この11のカテゴリーのうち、最初の「東京都／大阪府」は“はえぬき”を意味する。従って、世代の「2世」から「4世以上」までの合計と同じになる。また、これ以外の「北海道・北東北」から「その他」までは“移住者”を意味し、その合計は「1世」と同じになる。

(6) 在住年数

在住年数とは、被調査者が調査地域に住んでいる年数のことである。ここでは、30年までを「5年以下」、「6～10年」といったように、5年きざみで6段階に、それに「31～40年」、「41年以上」、「不明」を加えて9段階に分けた。被調査者によっては調査地域と他府県を何度も出入りしているものがある。例えば、東京で生まれて5年間居住し、5歳で山形県に転出し、18歳で宮城県の大学に入学し、卒業と同時に22歳で東京に就職のため転入した25歳の被調査者の場合、在住年数は5年と3年を加えた8年ということになる。つまり、調査地域にいた年数を合計して在住年数としてある。

1.4.2. 被調査者の属性一覧

表1-17は、東京・大阪の両調査地域で最終的に得られた被調査者（東京 639名、大阪 359名）の属性を一覧表にまとめたものである。

性別では、東京では、男 46.3%，女 53.7%と女性が7.4%多くなっているが、大阪では、男 54%，女 46%と、逆に男性が8%多くなっている。

年齢は、東京・大阪共に、44歳以下の被調査者が多くなっている。この分布をグラフに表わしたものが図1-13である。東京は大阪とは対称的に滑らかな山型の分布になっているのがわかる。平均年齢（算術平均）は、東京 36.3歳、大阪 37.3歳、中央値では、東京 33.8歳、大阪 36.1歳であり、わずかではあるが東京のほうが大阪より低年齢であることがわかる。

学歴では、「低学歴」は東京 26.0%，大阪 41.8%と東京より大阪のほうが

表1-17 被調査者の属性一覧

		東 京		大 阪	
全 体		639 ^人	100.0 [%]	359 ^人	100.0 [%]
性	男	296	46.3	194	54.0
	女	343	53.7	165	46.0
年 齢	15～19歳	63	9.9	40	11.1
	20～24	78	12.2	39	10.9
	25～29	108	16.9	46	12.8
	30～34	82	12.8	41	11.4
	35～39	69	10.8	38	10.6
	40～44	65	10.2	48	13.4
	45～49	51	8.0	30	8.4
	50～54	40	6.3	28	7.8
	55～59	32	5.0	14	3.9
	60～64	26	4.1	23	6.4
	65～69	25	3.9	12	3.3
学 歴	低学歴	166	26.0	150	41.8
	中学歴	289	45.2	160	44.6
	高学歴	184	28.8	49	13.6
職 業	経営者	79	12.4	55	15.3
	給与生活者	249	39.0	138	38.4
	家業従事者	25	3.9	22	6.1
	主婦	137	21.4	77	21.4
	学 生	74	11.6	39	10.9
	無 職	60	9.4	21	5.8
	その他	15	2.3	7	1.9

		東 京		大 阪	
世 代	一世	351 ^人	54.9 [%]	168 ^人	46.8 [%]
	二世	139	21.8	158	44.0
	三世	55	8.6	12	3.3
	四世以上	94	14.7	21	5.8
出身地	東京都/大阪府	288	45.1	191	53.2
	北海道・北東北	44	6.9	2	0.6
	南東北・北関東	85	13.3	1	0.3
	南関東	65	10.2	3	0.8
	北陸	33	5.2	8	2.2
	中部	45	7.0	8	2.2
	近畿	14	2.2	58	16.2
	中国	14	2.2	22	6.1
	四国	13	2.0	29	8.1
	九州・沖縄	32	5.0	34	9.5
	その他	6	0.9	3	0.8
在住年数	5年以下	80	12.5	27	7.5
	6年～10年	72	11.3	19	5.3
	11年～15年	62	9.7	39	10.9
	16年～20年	97	15.2	64	17.8
	21年～25年	73	11.4	49	13.6
	26年～30年	61	9.5	33	9.2
	31年～40年	80	12.5	53	14.8
	41年以上	113	17.7	75	20.9
	不 明	1	0.2		

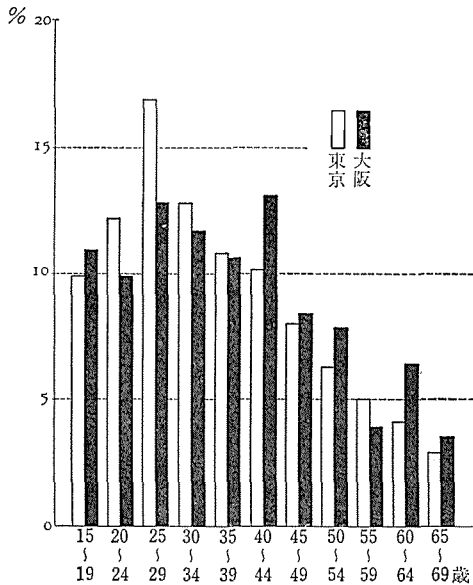


図1-13 年齢の分布

約16%多く「高学歴」は東京28.8%, 大阪13.6%と大阪より東京のほうが逆に15%多いことが注目される。

職業では、東京・大阪の両地域とも「給与生活者」が一番多く、40%弱を占めている。また、両地域ともほぼ同じような分布ながら、「経営者」、「家業従事者」の両カテゴリーとも大阪のほうがわずかずつではあるが東京を上回っており、「商業の町大阪」の面目躍如といったところであろう。

世代では、「1世」、つまり移住者は、東京54.9%, 大阪46.8%と東京のほうが大阪より8.1%多くなっている。逆に、「2世」以上のはえぬきは、東京45.1%, 大阪53.2%と大阪のほうが東京より多くなるが、内訳を見ると、大阪では、特に「2世」に分布が集中しており（東京21.8%, 大阪44.0%）、逆に、「3世」以上では、東京23.3%, 大阪9.1%と東京のほうが大阪より多くなっている点が興味深い。

出身地でも興味ある傾向が表われている。ここで仮に、北海道、東北、関東、中部、北陸を「東日本」、近畿、中国、四国、九州、沖縄を「西日本」とした場合、移住者（東京351名、大阪168名）に関して、東京では東日本出身者が272名（77.5%）、西日本出身者が73名（20.8%）となり、東日本出身者が多数を占めている。大阪では、東日本出身者はわずか22名（13.1%）、西日本出身者は143名（85.1%）となり、東京とは逆に、西日本出身者が多数を占めている。このように、人口移動の形態が、東京と大阪では全く異なっている点が注目されよう。なお、これについては、2.1.を参照されたい。

1.4.3. その他の属性

ここでは、被調査者の本籍、出生地、居住経歴及び父母・祖父母の出身地などの、既に述べた基本属性に比べて、やや間接的と思われる属性について触れることにする。

表1-18は、被調査者の父母及び祖父母の出身地の一覧表である。「知らない」という回答は「その他」に含まれている。東京は、中部・北陸以北に、大阪は、北陸・近畿以西に多く分布している。両調査地域とも、祖父に比べて祖母のほうが、「その他」が多くなっている。つまり、祖父に比べて祖母の出身地を知らないものが多いということになり、このことは興味ある結果である。

表1-18 父母・祖父母の出身地〔人数〕

	東 京						大 阪					
	父	母	父方の 祖	母方の 父祖	父方の 母祖	母方の 祖母	父	母	父方の 祖	母方の 父祖	父方の 母祖	母方の 祖母
東京都/大阪府	127	113	81	61	73	54	72	72	54	51	39	44
北海道・北東北	45	47	37	44	35	39	2	5	1	2	3	2
南東北・北関東	124	128	112	109	94	96	5	2	5	2	5	2
南 関 東	84	113	80	94	75	90	6	8	4	7	2	6
北 陸	61	56	62	61	55	53	31	18	30	19	29	16
中 部	67	70	70	69	62	60	16	10	16	12	14	13
近 畿	29	22	30	18	22	19	102	110	90	95	85	85
中 国	16	21	16	21	15	17	31	38	27	31	27	29
四 国	17	14	17	14	15	14	47	49	45	45	43	46
九州・沖縄	49	46	43	42	37	39	40	38	36	35	31	32
そ の 他	20	9	91	106	156	158	7	9	51	60	81	84

表1-19は、「出生地」、「5歳から15歳までの主な居住地」、「16歳から25歳までの主な居住地」、「26歳以上の主な居住地」、「直前地」、「本籍地」を一覧表にしたものである。ここで「主な居住地」とは、その年齢間隔の中で、一番長く住んでいた地域を示してある。26歳以上の「その他」が多くなっているが、これは、まだその年齢に達していない被調査者が含まれているためである。また、「直前地」は、調査地域に住みつく前の都道府県を示し、調査地域内での転居は無視してある。

表1-19 居住経歴と本籍〔人数〕

	東 京							大 阪						
	出 生 地	5 ～ 15 歳 の 主 な 居 住 地	16 ～ 25 歳 の 主 な 居 住 地	26 歳 以 上 の 主 な 居 住 地	直 前 地	本 籍 地		出 生 地	5 ～ 15 歳 の 主 な 居 住 地	16 ～ 25 歳 の 主 な 居 住 地	26 歳 以 上 の 主 な 居 住 地	直 前 地	本 籍 地	
北海道	17	18	11	5	19	11		1	1			2	1	
青森	6	5	3		7	1			1					
岩手	8	10	6		6	7								
秋田	9	11	4		8	6								
宮城	15	11	7	1	13	6						1		
山形	12	11	3		11	9								
福島	23	21	11		19	12							1	
茨城	23	20	13		18	11								
栃木	25	22	10		23	15		1	1	1		1		
群馬	22	22	10		21	14		1		1			1	
埼玉	21	13	8	2	40	9						1	1	
千葉	23	23	12		36	13								
東京	257	288	424	448	196	399		5	3	5		10	1	
神奈川	9	7	9		29	8				1		1		
新潟	20	20	4	1	23	14								
富山	6	7	1		2	1		3	3	1		3	5	
石川	4	4	2		6	4		1	1	2		3	2	
福井	2	2	1		3	1		5	4	1		4	5	
山梨	4	4	4		8	5								
長野	18	16	9		17	11		2	3			1		
岐阜	2	2	2	1	2	2		1					3	
静岡	11	12	6	2	14	12		2	1			2		
愛知	12	11	5	5	12	4		2	4	5	1	11	3	
三重	4	4	1		4	2		5	4	2		2	5	
滋賀			1					6	5	1		4	7	
京都	4	1	3	1	4	4		11	10	6		13	3	
大阪	4	3	5		8	3		175	191	268	259	160	218	
兵庫	5	6	2		12	5		18	16	11	3	26	15	
奈良			1			3		10	13	6		15	9	
和歌山								13	10	4		14	7	
鳥取	2	2	1		2			1	1			2	2	
島根	3	3	1	1	5	3		6	6			1	2	
岡山	2	2	2			1		3	4	2	1	3	8	
広島	4	3	3		5	2		12	10	2		9	12	
山口	3	4	4		3	2			1				1	
徳島						1		11	10	3		11	6	
香川	4	3	2		3	2		7	6	5	1	8	8	
愛媛	7	7	1		5	5		9	7	2	1	8	5	
高知	3	3	3	1	4	2		6	6	2		4	3	
福岡	4	5	3		5	2		4	4	5	1	6	3	
佐賀	3	3	1		2	4						2	1	
長崎	5	4	2		6	8		7	7	3		4	6	
熊本	4	2	2		3	3		3	4	2	1	4	3	
大分	8	8	2	1	6	3		2	2	1		2	1	
宮崎	1	1	1		2			3	2	1		3	2	
鹿児島	5	5	3		4	5		13	14	6	1	6	8	
沖縄	4	4	3		3	4			1			1		
外国	10	5	7		18			10	3	4		10		
その他	1	1	20	170	2					6	90	1	1	

1.4.4. クロス集計

ここでは、今まで述べてきたような属性について、属性と属性との間の関連を調べるために、クロス集計表を作成してみることにする。単純集計ではわからなかった種々の傾向が浮かび上がってくることがある。クロス集計表を見る場合、期待値と実現頻度との差をとってみるのが、傾向を正確につかむための一つの有効な手段となろう。例えば表 1-20 は、A 項目と B 項目の 2×2 のクロス集計表である。実現頻度 n_{11} が大きく見えた場合、これが真に大きいかどうかは、周辺分布から期待値を計算してみればよい。A 項目のカテゴリー A_1 と B 項目のカテゴリー B_1 との交点の期待度数は $n_{1.} \times n_{.1} / N$ となり、これと n_{11} との差が大きければ大きい程、その傾向は強いと言える。ここでは、このようにして特に著しい傾向が表われた場合にだけそれについて言及することとし、あとはクロス集計表を呈示するにとどめる。

表 1-20 クロス集計表 (2×2)

A \ B	B_1	B_2	計
A_1	n_{11}	n_{12}	$n_{1.}$
A_2	n_{21}	n_{22}	$n_{2.}$
計	$n_{.1}$	$n_{.2}$	N

(1) 性×年齢：表 1-21 参照。

被調査者の性・年齢別構成を示したものである。本表以下は末尾に一括掲載した。

(2) 学歴×性・年齢：表 1-22 参照。

大阪では学歴の男女差はほとんど見られない。東京では、女性は中学歴が多く高学歴が少ないのに対して、男性は逆に高学歴が多く中学歴が少ない点が目立つ。

(3) 職業×性：表 1-23 参照。

両地域とも男性の 80 % 近くが「給与生活者」と「経営者」で占められているのに対し、女性は「家業従事者」を含めても東京 33.2 %、大阪 35.7 % と大幅に少なくなっている。

(4) 職業×学歴：表 1-24 参照。

(5) 職業×年齢：表 1-25 参照。

(6) 所属産業×性：表 1-26 参照。

(7) 職務内容×性：表 1-27 参照。

(8) 世代×性・年齢 : 表 1-28参照。

(9) 世代×学歴・職業 : 表 1-29参照。

大阪1世の低学歴が目立つ。これは1世に学生がほとんどいないこととも関連があろう。

(10) 出身地×性 : 表 1-30参照。

(11) 出身地×学歴 : 表 1-31参照。

(12) 出身地×職業 : 表 1-32参照。

(13) 出身地×出生地 : 表 1-33参照。

(14) 出身地×本籍地 : 表 1-34参照。

(13, 14)では、主対角線上に頻度の高い反応が並んでいる。これは当然のことではあるが、出身地と出生地、出身地と本籍の間には強い相関があることを示している。

(15) 在住年数×性・年齢 : 表 1-35参照。

(16) 調査地域に住みついた時の年齢×性・年齢 : 表 1-36参照。

これは、被調査者が最後に調査地域に入ってきた時の年齢を性・年齢別の構成として示したものである。1.4.1.(6)の例でいえば、就職のために東京に転入してきた時の年齢で22歳ということになる。生まれてからずっと調査地域に住んでいるものは、東京173名(27.1%),大阪131名(36.5%)と、比率の上で大阪のほうが多くなっている。この人たちが方言調査でいう、いわゆるネイティブに相当し、生粋の東京人であり大阪人である。東京出身者、大阪出身者の、それぞれ60.1%, 68.6%に相当する。

表1-21 性と年齢〔人数〕

	東 京			大 阪		
	男	女	計	男	女	計
15～19歳	31	32	63	23	17	40
20～24	42	36	78	25	14	39
25～29	48	60	108	18	28	46
30～34	33	49	82	20	21	41
35～39	28	41	69	22	16	38
40～44	28	37	65	24	24	48
45～49	26	25	51	20	10	30
50～54	23	17	40	13	15	28
55～59	15	17	32	8	6	14
60～64	8	18	26	15	8	23
65～69	14	11	25	6	6	12
計	296	343	639	194	165	359

表1-22 学歴と性・年齢〔人数〕

	東 京				大 阪			
	低学歴	中学歴	高学歴	計	低学歴	中学歴	高学歴	計
全 体	166	289	184	639	150	160	49	359
男	71	109	116	296	86	82	26	194
女	95	180	68	343	64	78	23	165
15～19歳	8	42	13	63	6	32	2	40
20～24	8	35	35	78	3	21	15	39
25～29	18	47	43	108	15	27	4	46
30～34	31	33	18	82	22	14	5	41
35～39	23	35	11	69	17	16	5	38
40～44	10	41	14	65	24	15	9	48
45～49	14	17	20	51	12	13	5	30
50～54	18	10	12	40	14	12	2	28
55～59	12	13	7	32	12	2		14
60～64	14	8	4	26	14	7	2	23
65～69	10	8	7	25	11	1		12

表1-23 職業と性〔人数〕

	東 京			大 阪		
	男	女	全体	男	女	全体
経 営 者	68	11	79	48	7	55
給与生活者	166	83	249	105	33	138
家業従事者	5	20	25	3	19	22
主 婦		137	137		77	77
学 生	42	32	74	23	16	39
無 職	7	53	60	10	11	21
そ の 他	8	7	15	5	2	7
計	296	343	639	194	165	359

表1-24 職業と学歴〔人数〕

	東 京				大 阪			
	低学歴	中学歴	高学歴	全体	低学歴	中学歴	高学歴	全体
経 営 者	26	34	19	79	32	20	3	55
給与生活者	55	103	91	249	55	60	23	138
家業従事者	9	12	4	25	10	10	2	22
主 婦	39	76	22	137	33	35	9	77
学 生	7	35	32	74	3	26	10	39
無 職	25	24	11	60	13	8		21
そ の 他	5	5	5	15	4	1	2	7
計	166	289	184	639	150	160	49	359

表1-25 職業と年齢〔人数〕

	東 京							大 阪								
	経営者	給生活与者	家事従事者	主婦	学生	無職	その他	計	経営者	給生活与者	家事従事者	主婦	学生	無職	その他	計
15～19 歳	8			1	53	1		63	7				31	2		40
20～24	44		2	6	19	5	2	78	23		2	5	8		1	39
25～29	3	55	4	33	2	8	3	108	3	22	2	17		2		46
30～34	13	32	2	21		11	3	82	8	13	5	14		1	1	41
35～39	9	31	6	19		4		69	8	16	1	8		2	3	38
40～44	15	17	4	17		9	3	65	9	22	4	12				48
45～49	8	25	1	10		5	2	51	9	13	2	6				30
50～54	10	19		10			1	40	7	9	4	6		1	1	28
55～59	10	7	3	10		2		32	4	6	1	3				14
60～64	6	4	3	5		8		26	6	5		3		8	1	23
65～69	5	7		5		7	1	25	1	2	1	3		5		12
	79	249	25	137	74	60	15	639	55	138	22	77	39	21	7	359

表1-26 所属産業と性〔人数〕

	東 京			大 阪		
	男	女	全体	男	女	全体
製 造 業	78	31	109	52	19	71
卸売・小売業	51	32	83	38	19	57
サービス業	31	40	71	21	14	35
不動産業・金融業・保険業	13	13	26	6	5	11
運輸業・通信業	19	6	25	13		13
建 設 業	18	2	20	13	1	14
公 務 員	10	5	15	1	1	2
電気・ガス・水道	8		8	5		5
農業・漁業	2		2			
無職(学生主婦)	66	214	280	45	106	151
計	296	343	639	194	165	359

表1-27 職務内容と性〔人数〕

	東 京			大 阪		
	男	女	全体	男	女	全体
技能・単純労働	73	33	106	68	12	80
事 務	33	53	86	16	18	34
販 売	41	17	58	36	17	53
専門的・技術的	36	20	56	6	8	14
サービス業	16	20	36	11	5	16
管 理 的	26	1	27	11		11
運輸・通信	12	1	13	10	1	11
農業・漁業	2		2			
保安・サービス	2		2			
無 職	55	198	253	36	104	140
計	296	343	639	194	165	359

表1-28 世代と性・年齢〔人数〕

	東 京					大 阪				
	1世	2世	3世	4以上	計	1世	2世	3世	4以上	計
全 体	351	139	55	94	639	168	158	12	21	359
男	161	59	29	47	296	85	86	7	16	194
女	190	80	26	47	343	83	72	5	5	165
15～19歳	17	19	15	12	63	3	30	4	3	40
20～24	44	15	5	14	78	14	20		5	39
25～29	60	23	9	16	108	26	17	3		46
30～34	55	14	4	9	82	24	12	1	4	41
35～39	50	12	5	2	69	21	14	2	1	38
40～44	30	18	6	11	65	20	25	1	2	48
45～49	22	14	5	10	51	13	16		1	30
50～54	19	11	3	7	40	17	9		2	28
55～59	18	9	1	4	32	10	1	1	2	14
60～64	17	3	1	5	26	11	11		1	23
65～69	19	1	1	4	25	9	3			12

表1-29 世代と学歴・職業〔人数〕

	東 京					大 阪				
	1世	2世	3世	4以上	計	1世	2世	3世	4以上	計
全 体	351	139	55	94	639	168	158	12	21	359
低 学 歴	108	30	8	20	166	93	47	2	8	150
中 学 歴	149	74	29	37	289	58	80	10	12	160
高 学 歴	94	35	18	37	184	17	31		1	49
経 営 者	38	14	11	16	79	27	23	3	2	55
給与生活者	157	44	16	32	249	65	54	3	16	138
家業従事者	13	4	1	7	25	9	11	1	1	22
主 婦	85	33	7	12	137	48	28	1		77
学 生	21	21	17	15	74	2	31	4	2	39
無 職	28	20	2	10	60	11	10			21
そ の 他	9	3	1	2	15	6	1			7

表1-30 出身地と性〔人数〕

	東 京			大 阪		
	男	女	全体	男	女	全体
東京都／大阪府	135	153	288	109	82	191
北海道・北東北	19	25	44	1	1	2
南東北・北関東	36	49	85		1	1
南 関 東	25	40	65	2	1	3
北 陸	15	18	33	3	5	8
中 部	22	23	45	4	4	8
近 畿	9	5	14	28	30	58
中 国	7	7	14	13	9	22
四 国	6	7	13	17	12	29
九州・沖縄	17	15	32	15	19	34
そ の 他	5	1	6	2	1	3
計	296	343	639	194	165	359

表1-31 出身地と学歴〔人数〕

	東 京				大 阪			
	低学歴	中学歴	高学歴	全 体	低学歴	中学歴	高学歴	全 体
東京都/大阪府	58	140	89	287	57	102	32	191
北海道・北東北	7	26	11	44	1		1	2
南東北・北関東	38	30	18	86				1
南関東	28	18	19	65	2	1	1	3
北 陸	15	15	3	33	7	1		8
中 部	11	22	12	45	3	3	2	8
近 畿	1	5	8	14	31	20	7	58
中 国	1	7	6	14	6	11	5	22
四 国	2	6	5	13	21	8		29
九州・沖縄	4	18	10	32	22	11	1	34
その他	1	2	3	6		3		3
計	166	289	184	639	150	160	49	359

表1-32 出身地と職業〔人数〕

	東 京								大 阪							
	経営者	給生活与者	家事業者	主婦	学生	無職	その他	全体	経営者	給生活与者	家事業者	主婦	学生	無職	その他	全体
東京都/大阪府	40	92	12	52	53	32	6	287	28	73	13	29	37	10	1	191
北海道・東北	4	19	3	11	3	2	2	44		1		1				2
関東・東北	12	36	3	22	3	6	4	86				1				1
南関東	6	28	3	19	1	7	1	65		2	1					3
北陸	6	16		7	2	2		33	4	2		1				8
中部	4	21	3	11	2	4		45		3		3	1		2	8
近畿		9		3	1	1		14	12	21	4	18	1	2		58
中国	1	3	1	1	5	1	2	14	3	10	1	5		1	2	22
四国		8		3		2		13	3	13		9		3	1	29
九州・沖縄	4	14		8	4	2		32	4	13	2	10		4	1	34
その他	2	3				1		6	1		1			1		3
計	79	249	25	137	74	60	15	639	55	138	22	77	39	21	7	359

表1-33 出身地と出生地〔人数〕

出身地 \ 出生地	東 京											大 阪										
	東京都	北海道	東北	関東	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄	大阪府	北海道	東北	関東	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄
東京都/大阪府	244	3	11	12		6	3	1		5	3	288	168			2	2	8	3	4	2	2
北海道・東北	2	36	2	1			1			1	1	44	1									1
関東・東北		1	84									85		1								1
南関東	2		1	61							1	65			3							3
北陸	1				32							33	1			7						8
中部	2			1		40	1				1	45			2		5					1
近畿	1					1	11			1		14	4		1			53				58
中国	1						1	12				14					2	19			1	22
四国									13			13								29		29
九州・沖縄	3						1			27	1	32	2								29	3
その他	1									1	4	6										3
計	257	40	98	75	32	47	17	14	14	34	11	639	175	1	1	6	9	7	63	22	33	32

表1-34 出身地と本籍地〔人数〕

本 籍 出身地	東 京										大 阪												
	東京 都	北海 道	東北 道	関東 道	北 陸	中 部	近 畿	中 国	四 国	九州 ・ 沖縄	計	大阪 府	北海 道	東北 道	関東 道	北 陸	中 部	近 畿	中 国	四 国	九州 ・ 沖縄	不 明	計
東京都/大阪府	241	1	9	12	4	10	3	1		7	288	141			2	6	3	19	11	5	3	1	191
北海道・東北	18	22			1		1	2			44	1	1										2
関東・東北	37	1	42	2			2	1			85	1											1
南 関 東	40			1	24						65	2			1								3
北 陸	17	1				14		1			33	3				4				1			8
中 部	20		1	3			19			1	45	6					2						8
近 畿	4					1		8		1	14	37				1		20					58
中 国	7								6	1	14	7						1	13	1			22
四 国	4							1		8	13	10	1		1	1	1	1	1	14			29
九州・沖縄	11				1		1	1		18	32	9						5		1	19		34
そ の 他					1	1	1		1	2	6	1									2		3
計	399	25	53	44	20	34	17	8	10	29	639	218	1	1	3	12	6	46	25	22	24	1	359

表1-35 在住年数と性・年齢〔人数〕

	東 京										大 阪										
	0 5年	6 10	11 15	16 20	21 25	26 30	31 34	41 40	上 年以	不 明	計	0 5年	6 10	11 15	16 20	21 25	26 30	31 34	41 40	上 年以	計
男	35	25	35	44	38	28	37	53	1	296	14	8	17	36	25	15	35	44		194	
女	45	47	27	54	35	33	42	60		343	13	11	23	29	23	18	17	31		165	
15～19歳	16	3	10	34						63	2	1	7	30							40
20～24	31	11	4	8	24					78	11	1	1	8	18						39
25～29	20	29	10	4	17	28				108	7	8	10	2	8	11					46
30～34	4	17	19	13	6	6	17			82	2	3	11	5	6	4	10				41
35～39	3	5	10	21	7	4	19			69	1	3	4	7	4	2	16	1			38
40～44	2	4	6	9	7	5	9	23		65		1	3	7	5	3	12	17			48
45～49		2	1	5	5	7	8	22	1	51	1	1		3	3	3	5	14			30
50～54	2	1	1	2	2	6	7	19		40	1	1	1	1	3	8	2	11			28
55～59	1				2	4	9	16		32			1	1		2	4	6			14
60～64	1			1	1		6	17		26	1		1	1	1		2	17			23
65～69			1	1	2	1	4	16		25	1		1				1	9			12
計	80	72	62	98	73	61	79	113	1	639	27	19	40	65	48	33	52	75			359

表1-36 住みついた時の年齢と性・年齢〔人数〕

性・年齢	住みついた 時の年齢	東 京										計	大 阪										計
		0 歳	5 歳	10 歳	16 歳	21 歳	26 歳	36 歳	46 歳以上	不明	0 歳		5 歳	10 歳	16 歳	21 歳	26 歳	36 歳	46 歳以上	不明			
男		6	16	37	72	30	31	11	7	85	1	296	10	3	28	33	12	25	9	4	70	194	
女		9	14	22	77	59	52	15	7	88		343	6	5	10	25	28	18	9	3	61	165	
15～19歳		3	2	9	12					37		63	8	1	2	1					28	40	
20～24		1	3	7	31	9				27		78	1		3	13	2				20	39	
25～29		6	8	7	28	22	9			28		108	3	2	8	10	6	3			14	46	
30～34			5	13	19	17	12			16		82		1	8	8	4	8			12	42	
35～39			5	9	21	12	11	3		8		69		3	8	5	5	5	1		11	38	
40～44		1	1	6	8	11	9	8		21		65	1		2	11	6	7	2		19	47	
45～49		1	2	2	8	6	11	3	1	16	1	51		1	3	2	4	5	2		13	30	
50～54		2			4	7	11	4	4	8		40	2			2	9	5	4	1	5	28	
55～59		1	2		6	2	12	2	3	4		32	1		2	1	1	5	2	1	1	14	
60～64			2	3	4	3	5	3	2	4		26			2	3		3	5	2	8	23	
65～69				3	8		3	3	4	4		25				2	3	2	2	3		12	
計		15	30	59	149	89	83	26	14	173	1	639	16	8	38	58	40	43	18	7	131	359	

参 考 文 献

- 国立国語研究所 1951 『国立国語研究所年報2』 秀英出版, 95～107 pp.
 国立国語研究所 1953 国立国語研究所報告5『地域社会の言語生活——鶴岡における実態調査——』 秀英出版
 国立国語研究所 1974 国立国語研究所報告52『地域社会の言語生活——鶴岡における20年前との比較——』 秀英出版
 柴田武 1979 敬語と敬語研究 (月刊『言語』Vol. 8 No.6 大修館, 2～8 pp.)
 野元菊雄 1958 ことばの個人差『講座現代国語学Ⅲ ことばの変化』筑摩書房, 1～20 pp.)

2. 社会構造と言語生活

2.1. 大都市の性格

2.1.1. 大都市の人口動態

(1) 人口構成から見た大都市の特色

1975年の国勢調査によると、同年10月1日現在の日本の人口は1億1194万人であり、そのうちの20.8%に当たる2,327万人が10大都市に居住している（東京都特別区部は7.7%、大阪市は2.4%）。つまり、国民の5人に1人は10大都市の市民という勘定になる。

10大都市の人口の全国に占める割合は、1950年の16.1%に対し、55年18.6%、60年21.1%、65年22.2%と次第に高まってきたが、70年には21.9%（沖縄を含むと21.7%）と若干低くなっている。また、東京都区部および大阪市の人口の推移を、1950年を100とする指数をもとに見ると、

	1955年	1960年	1965年	1970年	1975年
東 京	129	154	165	164	161
大 阪	130	154	161	152	142

と、1965年を境にそれまで増加し続けてきた人口が減少し始めている。しかし、この間でも「自然増」（出生数と死亡数との差）は全国平均の7%を大きく上まわっているわけで、それを相殺して余りある「社会減」（転入出者の差）が両都市の人口の減少をもたらしているのである。

なお、この社会減だけについて見ると、表に現われた人口減よりも早く、大阪では1960年頃から生じており、また、東京ではこれよりやや遅れて1964年頃

から始まっている。

この傾向は、札幌・横浜などを除く他の大都市でもみられるようになっていく（ただし、自然増でカバーされているため人口減にまでは到っていないが人口の絶対数はほぼ横ばいになってきている）。

このような大都市における社会減の大きな理由として、都心部に企業のビルなどが集中し、その周辺から住宅が追いやられたり、地価の高騰によりマイホームを求めて他市町村に転出せざるを得なくなったことなどがあげられる。ちなみに、東京・大阪ともに0～10キロ圏（都庁・市役所を起点とする）では人口増加率はマイナスに転じており、東京では30～40キロ圏、大阪では20～30キロ圏の人口増加率が著しく高くなっている。これは「ドーナツ現象」と呼ばれるものであり、大都市の大きな特徴の一つである。

大都市のもう一つの特色として、「夜間（常住）人口」の停滞または減少にもかかわらず「昼間人口」はより過密化していることがあげられる。すなわち、周辺市町村からの通勤・通学による流入超過である。1975年の国勢調査によると、夜間人口100人当たりの昼間人口は10大都市平均では115と15%増となっている。これは大阪市内で136と最も高く、以下、東京124、名古屋市114、福岡市113と続いている。これが100を下まわっている（つまり、流出超過）のは横浜市（91）と川崎市（96）の2市だけである。この二つの都市は東京在勤者のベッドタウンとしての側面が強いからであろう。

以上のように、夜間・昼間を問わず巨大な人口が国土全体の僅か2.3%に過ぎない狭小な市域にひしめき合って生活を営んでいるのが大都市の姿である（人口密度でいえば、全国平均の300に対し、10大都市の平均は4,898と16倍強である。また、東京は14,882、大阪は13,353となっており、両都市の人口密度は著しく高い）。

このほかの大都市の人口構成の特異点を簡単に示しておこう。

まず「人口性比」（女性100名に対する男性の数）では、全国平均は96.9であり、平均寿命の長い女性のほうが多いのに対し、10大都市ではこの関係が逆転し100.8となっている。一般に、人口性比は人口規模の大きい都市ほど大きくなる傾向がある。また、性比は市民の年齢構成とも密接な関係があり、性比

の大きい都市ほど若年齢層人口が多い。

日本人全体の年齢構成は、0～14歳が24.3％、15～64歳が67.7％、65歳以上が7.9％となっており、平均年齢は32.5歳（年齢中位数30.6歳）である。これを10大都市で見ると、0～14歳22.4％、15～64歳70.9％、65歳以上6.6％で平均年齢は31.5歳となっている。両者を比較すると、10大都市は全国平均に比べて、0～14歳と65歳以上が少なく、15～64歳の生産年齢人口の割合が高くなっている点に特色がある。つまり、大都市は比較的働き盛りの年齢層の多い都市ということができよう。

産業別就業者の割合では、大都市では第1次産業従事者が著しく少なく（0.9％、全国平均13.8％）、その分第3次産業従事者（63.0％、全国平均51.8％）が多くなっている。また、職業別ではホワイトカラー層の比率が高くなっているなど大都市での産業や職業上の特徴が指摘されている。

他にもいくつかの特色が考えられるがここでは省略する。

(2) 東京・大阪への移住者

上で見た人口動態に関連することであるが、大都市の大きな特徴の一つとして、人口の移動性が高く、土着市民がきわめて少ないことがあげられる。

1970年の国勢調査によると、出生時から現住居に継続して住んでいる者の割合は全国平均の31.0％に対し、10大都市の平均は18.3％と著しく低くなっている。この割合はまた都市ごとに異なり、京都（24.7％）、名古屋（21.7％）、大阪（19.3％）など古い都市で高く、札幌（12.0％）、福岡（15.8％）など人口急増都市では当然ながら低い。なお、東京は17.5％である。

これと裏腹のことではあるが、前回の国勢調査（1965年）以降の5年間に移住した者の割合は全国平均の35.1％に比べ、10大都市の平均は45.1％と10％高くなっている。とりわけ、札幌が61.8％と著しく多く、福岡・川崎がこれに次ぎ過半数を超えている（東京・大阪それぞれ44.9％、38.8％）。ただし、この国勢調査の分類では区内や市内での転居も全て移動に含まれるので、本調査での東京（大阪）出身者（＝2世以上）と移住者（1世）の割合を比べることはできない。そこで、別の調査結果と比較してみよう。

本調査の結果は、東京出身者45.1％、東京人1世54.9％となっている。つ

まり、東京都民といってもその半数以上は地方出身者というわけである。

類似の調査に磯村・奥田(1963)らが東京都の委託により1962年に実施したものがある。これは東京都区部内の20歳以上の成人1,500名を抽出して行なったものである(回収率55.3%)。また、これと同様の方法で統計数理研究所が1971年に行なった調査もある(成人1,200名を対象。回収率66.3%)。

東京出身者の割合は、磯村らの調査では45%、統計数理研究所(1972)では44.9%となっており、われわれの調査を加えた三つの結果はぴったり一致している。調査時期の違いもさることながら、われわれは言語形成期(5~15歳)の主な居住地、磯村らは出生地、統計数理研究所は小学校卒業地と測度が異なっているにもかかわらずである。この一致は、この三つの測度間の相関が比較的高いからであろう(1.4.参照)。

大阪市では、大阪出身者は53.2%、大阪人1世は46.8%と東京とは反対に地元出身者の割合が半数を超えている。これは上で見た国勢調査の結果で大阪のほうが東京よりも生まれてからずっと同じ場所に住んでいる割合の高かったことと関係していると思われる。なお、この数値は、NHKが1978年に全国で行なった「日本人の県民性」調査の大阪出身者の割合(56.6%)と比較的類似している(NHK放送世論調査所, 1979)。

次に、両都市への転入者の前住地を見よう。図2-①は1971年の1年間だけに限って、その年に東京都区部または大阪市に移動して来た者の前住都道府県別の比率を図示したものである。

まず、東京都区部への移動について見ると、3%以上を占めるのは南関東の各都県と北海道・新潟・福島の3県である。このうち、南関東からの移動者の割合は著しく高く、神奈川の11.5%を筆頭に、東京都下、埼玉、千葉と続き、この4都県だけで全体の4割となっている(逆に、東京都区部からこれらの地域への流出率の合計は65.8%である)。

図全体を見ると、東京都区内への移動の前住地は「糸魚川~静岡構造線」の東部の全域が中心になっており、西側では人口規模の大きい府県と九州の数県が加わっている。

一方、大阪市への流入者は大阪府下からの流入者が32.9%と圧倒的に多く、

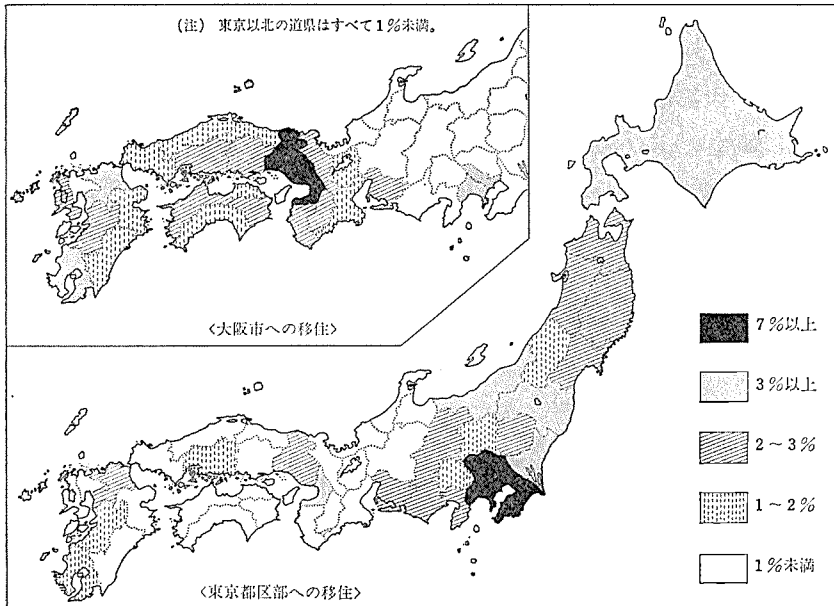


図2-① 東京都区部・大阪市に移住した者の全国分布図

これに兵庫県が続きこの2府県で全体の44%を占めている(反対に大阪市からこの2県への流出率は6割強である)。

一般的に見ると、大阪市への流入は佐賀県を除く近畿地方以西に片寄っており、東部では人口規模の大きい東京、神奈川、愛知の3都県が加わっているだけであり、東京よりは吸引圏は狭いといえる。

以上から、東京・大阪の両都市の人口吸引圏はかなりはっきり区分されていることがわかる。これはたった1年間の、しかも出身地とは直接には関係しない前住地からの移動状況の実態であるが、東京と大阪をそれぞれ中心とする二つの文化圏の状況が浮きぼりにされている(出身地別の状況については1.4.の表1-⑨を参照されたい)。

なお、両都市への移動者の割合がともに1%以下である5県について、これを細かく見ると次のようになる。すなわち、どちらかといえば富山県は東京、福井県・佐賀県は大阪に傾いており、石川・岐阜の両県は両都市で占める割合はほぼ同率となっている。

2.1.2. 大都市の長所・短所

先に見たように、大都市にはいろいろな層の人々が住んでいるが、彼らは大都市での生活の長所・短所をどう見ているのであろうか。これを調査資料によって見てみよう。

(1) 大都市の良い点

本調査では、以下の八つの事項を示し、大都市の良い点と思われるものをチェックするように求めた。両都市における全体の結果は次の通りである。

	東京	大阪
① 交通が便利	78.4%	79.9%
② いろんな職場や仕事がある	74.6	75.7
③ 買物が便利	67.6	73.8
④ 文化の恩恵を受ける機会がある	49.5	46.5
⑤ 子供の教育上便利	45.4	46.2
⑥ 新しいニュースが早く得られる	44.4	43.2
⑦ レジャー施設が多くある	38.7	44.8
⑧ 人とのつき合いがわずらわしくない	34.7	30.4

大都市の良い点とする事項は東京での回答率順に示したが、この順位は大阪でも6位と7位とが入れ替わっているだけで他は全く同じである。また、両都市での回答率もよく似ているといえよう。

内容別に見ると、1位から3位に日常生活を営む上での便利さがあげられており、これらは最低でも3分の2以上の圧倒的な支持を得ている。この3項に関しては、「買物が便利」で女性が男性を約10%上まわっていることを除くと、性別・年齢別など属性別に見てもほとんど差がなく一様に長所としてあげられている。

4位から6位には教育・教養上の便利さが集中している。

④の「文化の恩恵」を指摘する者は、年齢別では50歳以上の高齢層に多く（東京64.2%、大阪63.6%）、学歴別では高学歴層に多い（東京65.8%、大阪

53.1%)。また、性別では男性のほうが多く、この傾向は東京で著しい(男性 54.1%、女性 45.5%)。

⑤の「子供の教育」について見ると、性別では当然ながら女性のほうが多い(東京 50.1%、大阪 49.1%)。また、年齢別では 35 歳以上の中・高年齢層に多く(東京 62.0%、大阪 56.3%)、学歴別では低学歴層に多い(東京 47.3%、大阪 51.8%)。

⑥の「新しいニュース」では属性による差はほとんど認められていない。

第 7 位は娯楽に関するものである。これをあげた者を属性別に見ると、年齢別では予想通り 24 歳以下の若い者に多く(東京 49.6%、大阪 62.0%)、これに関連し職業別で学生に多くなっている(東京 50.0%、大阪 66.7%)。また、性別では東京で男性が 43.6%と女性より 10%弱多いが、大阪では全く差がみられない。

最後の「人とのつき合いがわずらわしくない」をあげるものは全体では 3 割強に過ぎないが、年齢別では 10 代に少なく(東京 12.7%、大阪 12.5%)、反対に 50 歳以上の高年齢層に多い(東京 49.6%、大阪 44.2%)。これは生活経験の差によるものと思われる。

このほか上記以外の長所として、「何でも手に入る」「活気がある」などがあげられている。

なお、ここで大都市の長所として取り上げたものと類似の項目を先述の NHK の「日本人の県民性」の調査から抜粋して結果だけを示しておく。

	全国平均	東京都区部	大阪市
バスや鉄道などの交通の便がよい	67.0%	89.5%	87.0%
買物の便がよい	69.4	85.7	89.8
図書館、公民館などの文化施設が利用しやすい	34.9	45.9	33.3
レジャー、娯楽施設がととのっている	23.0	35.5	36.1
近所づき合いがわずらわしくない	40.5	61.5	66.7

(2) 大都市の悪い点

反対に、大都市の短所を尋ねてみたところ以下の結果が得られた。

	東京	大阪
① 自然に恵まれない	77.2%	77.2%
② 公害がひどい	76.5	73.3
③ 住宅事情がよくない	75.7	67.4
④ 交通が混雑している	74.2	67.4
⑤ 物価が高い	66.2	57.9
⑥ 風紀がよくなく犯罪が多い	52.1	52.6
⑦ 人が多くうんざりする	50.7	33.1
⑧ 人情が薄い	45.5	42.3

ここでも東京と大阪での回答の順位は最後の二つを除いては一致しているが、いくつかの項で比率が異なっている。

内容別に見ると、1位から3位に自然・住宅環境の劣悪さが指摘されている。これをあげる者は全体の約4分の3であり、性・年齢別などの属性別に見てもほとんど差はみられない。なお、「日本人の県民性」の調査では「騒音、臭気、大気や河川の汚れなどの公害は少ないか」という質問に対して、「そうは思わない」（つまり多い）と回答する者は全国平均の21.6%に対し、東京27.9%、大阪33.8%と大都市住民のほうが公害を気にする結果となっている。

また、住宅事情について1975年の国勢調査の1人当たりの畳数で見ると、全国平均の7.3畳に対し、東京は6.1、大阪は5.7畳と大都市の住環境の悪さがそのまま現われているといえよう。

第4位には長所の第1位の「交通が便利」の裏返しとしての「交通の混雑」があげられている。これに関しては地元出身者のほうが地方出身者よりもこれを指摘する割合が10%前後多い（東京で79.4%、大阪で71.2%）点を除くと属性による差はあまりみられない。

次いで「物価が高い」があげられているが、これについても属性別で特記されるような違いはみられない。

6位から8位には人情や人の多さなどがあげられている。この3点に関しては高年齢層にとくに多く、「人が多くうんざりする」を除き学歴が低い者ほどこれを指摘する傾向がみられている。

なお、長所と異なって短所では東京と大阪とで比率に差のあるものが多く、全般的には東京在住者のほうがより多く短所を指摘している。

以上のほかに短所として、「ゴミ問題」や「人々がせかせかしている」などの回答が見られた。

以上を総合してみると、大都市は全国から数多くの人口を吸引しながら膨張を続け、経済的・文化的施設は充実し日常の生活を営む上では非常に便利な都市といえる。しかし、その裏返しとしての欠点も多く、物理的・人間的環境が破壊され、コミュニティ機能を失った都市ともいえる。

このような長所・短所の中で行なわれる言語生活はわれわれが以前から調査してきた中小都市の場合と種々の面で異なることが予想されよう。

2.2. 東京人意識・大阪人意識

面接調査では、東京都民の東京人意識、大阪市民の大阪人意識をいくつかの質問にわたって尋ねている。そこから知り得た結果を次のようにまとめて報告する（くわしい数値は、すべて『資料編』を参照されたい）。

(1) 全体

東京都民・大阪市民を全体として見た場合、その東京人意識・大阪人意識ははなはだ低い（たとえば、完全な東京人だと思っている者 26%，完全な大阪人だと思っている者 30%）。

(2) 世代差

東京人意識・大阪人意識は、同じ東京都民・大阪市民でも、1世と2世以上の間に大きな断層がある（たとえば、完全な東京人だと思っている者 1世 7%，2世以上 49%。完全な大阪人だと思っている者 1世 13%，2世以上 46%）。2世と3世以上の間にも、小さな断層があった。

2世以上でも、東京人意識・大阪人意識の低い者がかなりいる。2世以上なのということで、私には驚きの一つであった。東京人・大阪人とは何かの尺度が、人によってかなり厳しいものである場合があるからだと思う。改めて、東京人(大阪人)とは何かについての研究・討議と、それに基づく新たな社会調査が必要になる。今後に残された課題の一つである。

(3) 1世の出身地差

同じ1世でも、東京では南関東出身1世の東京人意識が、全体として他地域出身1世の東京人意識よりも高い。大阪では近畿出身1世の大阪人意識が他地域出身1世の大阪人意識よりも全体的に高い。つまり東京や大阪に近い地方の出身1世は、他地方出身1世よりも全体として東京人意識・大阪人意識が高い

ということになった。このことの裏には、次のような事実が存在する。

- (i) 東京では、南関東出身1世が他地方出身1世よりも、ふるさとに対する愛着心が全体的に弱い。大阪では、近畿出身1世がそうである。
- (ii) ふるさとに住んでみたいという1世の願望は、相対的な比較の上でのことだが、東京では南関東出身1世が弱く、大阪では近畿出身1世が弱い。
- (iii) 東京人1世がふるさとへ《帰る》というか、《行く》というかに注意してみると、南関東出身1世は、他地方出身1世よりも、《行く》というのが多く、《帰る》というのが少ない（たとえば、「いらっしゃいますか」と尋ねたのに対する回答で《帰る》は南関東出身1世 27%，北海道・東北・北関東出身1世 43%，近畿以西出身 59%，北陸・中部出身 36%。なお、大阪人1世については調査が失敗した）。
- (iv) 甲子園の全国高校野球大会で、東京（大阪）代表チームと出身県の代表チームとが対戦することになった場合、どちらのチームに声援を送りたいと思うか。1世にこう尋ねてみると、東京では南関東出身1世は、他地域出身1世に比べて、出身県の代表チームに声援を送るというのが少なかった（南関東 72%，北関東以北 84%，北陸・中部 80%，近畿以西 84%）。大阪では近畿出身1世がそうであった（近畿 62%，中国以西 81%）。そして、どちらも、その分東京（大阪）代表チームに声援を送るというものや、どちらともいえないという中立的回答のものが多かった。つまり、出身県代表チーム離れの傾向が相対的に強かったのである。東京では南関東出身1世、大阪では近畿出身1世に、以上に要約したような興味ある事実が存在する。これらの事実は、要するに南関東出身1世の東京人化、近畿出身1世の大阪人化が他地域出身1世の東京人化・大阪人化よりも進んでいることを物語っているのだろう。

裏返しに言えば、東京では南関東出身1世は、他地域出身1世よりも、東京人化という文化変容現象を受け入れやすい素地を持っている。大阪では近畿出身1世がそうだとということになるのであろう。

受け入れやすい素地とは、要するに彼ら1世が東京（大阪）へ移住するまでに出身地で身につけた文化（言語を含めて）や行動様式の問題である。

(4) 年齢差

全世代をこみにして年齢層別に見ると、東京では、わずかではあるが、差が認められた。年齢層が上がるにつれて、東京人意識が全体として高まる（たとえば、完全な、およびかなり完全に近い東京人だと思っている者は、青年層（15～29歳）38%，中年層（30～49歳）42%，高年層（50～69歳）57%。

大阪ではこのような年齢層差は認められなかった。

次に、1世と2世以上に分けて、それぞれを年齢層別に東京人意識・大阪人意識を調べてみた。そうすると、1世については、東京・大阪ともに、きわめてはっきりとした年齢層差が確認された。東京が特に著しかった（たとえば、完全な、かなり完全に近い東京人だと思っている者は、青年層8%，中年層19%，高年層45%）。

ところが、2世以上については、1世の場合のような、きちんとした年齢層差はなかった。つまり、全世代をこみにして見た場合に、東京で確認されたゆるやかな年齢層差は、実はこの1世のシャープな年齢層差に影響されたものである。大阪で、全世代をこみにして見た場合に年齢層差がはっきりと出なかったのは、1世の年齢層差が全世代の中に拡散されてしまったからだ。

2世以上の東京都民や大阪市民の東京人意識・大阪人意識には、それほどはっきりした年齢層差は認められなかった。これは、考えてみれば当然のことである。

これに対して、1世の東京人(大阪人)意識には、顕著な年齢差が認められた。これも、考えてみれば当然のことである。1世の年齢差は、1世がふるさとを離れた年数の差、または東京(大阪)で生活している年数の差ときわめて高い相関がある、と考えられるからである。

1世がふるさとを離れて、東京(大阪)へ移住してきた理由を尋ねると、就職のためと答えるものが圧倒的に多い（東京41%，大阪47%）。

わが国では、この就職は新卒就職の形で行なわれる。そして、そこで終身雇用される。これがわが国の一般的な雇用の形であるからだ。ひとくちに「住めば都。」というけれど、1世の東京人意識・大阪人意識を高める要因として最も有力なものは、この東京・大阪に住む年月の長短であると思う。次に述べる事実

は、どれもこの年月の持つ重みというものをしみじみと感じさせるであろう。

さて、1世の東京人(大阪人)意識に見られるこのような年齢層差の背後には次のような事実が存在する。

(i) ふるさとに自分または家族の者所有の資産(田畑・山林・家屋など)がかなり、または少しあるという1世は、若い層ほど多い(東京では、青年層79%、中年層75%、高年層51%。大阪では、青年層84%、中年層65%、高年層40%)。反対に、資産が全然ないというのは高い年齢層ほど多い(東京では、青年層20%、中年層24%、高年層48%。大阪では、青年層9%、中年層32%、高年層55%)。

なお、ふるさとに資産がないという1世は、あるという1世よりも東京人意識・大阪人意識が高いという調査結果も出た。

(ii) ふるさととは資産以外の経済的な生活の面でも、結びつきがかなり強い、および少し強いというのは若い年齢層ほど多い。結びつきが全然ないというのは高い年齢層ほど多い(青年・中年・高年の3年齢層での比較である。以下同じ)。東京・大阪ともに、1世の回答はここでも年齢層と高い相関を示した。

なお、このことに関連して、ふるさととこの面で結びつきがないという1世はあるという1世よりも、東京人意識・大阪人意識が高いという調査結果も出ている。

(iii) ふるさとに親しい友人・知人がかなり、または少しいるというのは、東京では若い年齢層ほど多く、高い年齢層ほど少ない。全然いないというのは、その反対である。大阪でも、ほぼ同じ事実が認められた。

これに関連して、ふるさとに親しい友人・知人が全然いないという1世は、かなりいる、あるいは少しいるという1世よりも、東京人意識・大阪人意識がかなり高いという調査結果も出ている。

(iv) ふるさとに対して現在でも愛着心をいだいているというのは、全体として高年齢層に少ない。この年齢層のふるさとへの愛着心は、全体としてかなり薄らいでいる。

これに関連して、ふるさとに対する愛着心が薄らいでいる1世は、そうでない1世よりも、東京人意識・大阪人意識がかなり高いという調査結果も出てい

る。

(v) ふるさとに住んでみたいと思うかということでも、東京ではかなりはっきりした年齢層差が出た。高い年齢層ほど、住みたいというのが減り、住みたくないというのが増える。大阪では、東京のようなはっきりした年齢層差は出なかった。

また、ふるさとに住んでみたいと思わないと答えた1世は、住んでみたいと思うと答えた1世よりも、全体として東京人意識・大阪人意識がかなり高いという調査結果も出ている。

(vi) ふるさとに現在どんな身内が住んでいるかということでは、父・母のところできわめてはっきりとした年齢層差が出た。現在ふるさとに父や母がいるという1世は、年齢層が上がるにつれて減少する。特に高年齢層で激減する。東京・大阪ともにそうであった。

これに関連して、ふるさとに父母を含めて身内は誰もいないという1世は、ふるさとに父母がいるという1世よりも、全体として東京人意識・大阪人意識がかなり高いという調査結果も出ている。

(vii) 1世の住居形態を尋ねてみると、それには東京・大阪ともにきわめてはっきりとした年齢層差のあることがわかった。高い年齢層ほど持家比率は急増し、民営借家比率は急減する。

また、次のことも明らかになった。持家に住んでいる1世は、民営借家に住んでいる1世よりも、全体として東京人意識・大阪人意識が高い。東京では特にこの傾向が強かった。青年・中年・高年の3年齢層がすべてそうであった。

(viii) 東京人1世がふるさとへ《帰る》というか、《行く》というかに注意してみると、実に見事なまでに年齢層差が出た。高年齢層になるほど、《帰る》が急減し、代わって《行く》が急増する（たとえば、「お帰りになりますか」と尋ねたのに対して、《帰る》と答えたものは、青年層73%、中年層62%、高年齢層30%。同じ質問に対して、《行く》と答えたものは、青年層27%、中年層38%、高年齢層70%）。

また、ふるさとへ《行く》という1世は、《帰る》という1世よりも、東京人意識が全体としてかなり高いという調査結果が出ている。

(ix) ふるさとへ全然帰らない、めったに帰らない、または2～3年に1回くらいしか帰らない、という1世は、東京・大阪ともに高年齢層ほど多い（たとえば、東京では青年層16%，中年層31%，高年齢層41%）。

また、こういう1世は、1年に1～2回以上帰る1世よりも、全体として東京人意識が高いという調査結果も出ている（大阪では、この点ははっきりした結果はでていない）。

(x) 甲子園の高校野球の質問では、東京・大阪ともに、高年齢層ほど出身県代表チームに声援を送るという1世が少なくなる。その反対に、東京(大阪)代表チームに声援を送るという1世が増えてくる。出身県、東京(大阪)のどちらともいえないという中立的回答をする1世も増えてくる。要するに年齢層が上がるのに対応して、出身県代表チーム離れが進むのである。

(5) 職業差

1世を含めて全被調査者の中から経営者と給与生活者をとり出し、両者の東京人意識・大阪人意識を比較してみると、東京では経営者の方が、全体として東京人意識がかなり高かった（たとえば、完全な、かなり完全に近い東京人だと思っている者は、経営者56%，給与生活者40%）。大阪は、東京と違って、二つの職業層の間にほとんど差がなかった。

次に、1世と2世以上に分けて、それぞれの中で経営者と給与生活者を比較してみた。1世は、東京・大阪ともに、経営者の方が、東京人意識・大阪人意識がかなり高かった（たとえば、完全な、かなり完全に近い東京人だと思っている者は、経営者37%，給与生活者20%。完全な、かなり完全に近い大阪人だと思っている者は、経営者41%，給与生活者29%）。同じ1世でも、経営者の方が東京人(大阪人)化が進んでいるということなのであろう。

2世以上は、東京では全く差がなかった。大阪は、1世の場合とは逆に、全体として給与生活者の方が大阪人意識が高かった。

つまり全世代をこみにした場合に東京で見られた二つの職業間の差は、1世の影響によるものである。大阪で、二つの職業間に差がなかったのは、1世と2世以上の相反する方向の差が相殺し合ったためである。

さて、1世の二つの職業間に見られる東京人意識・大阪人意識の差の背後に

は、次のような事実が存在する。

(i) ふるさとに自分または家族の者所有の資産があるか、ないか。こういう意味でのふるさととの結びつきは、全体として、経営者の方が弱い。東京・大阪ともにそうである。大阪が特にそうである（たとえば、資産が全然ないと答えた者は、東京では、経営者 42 %，給与生活者 24 %，大阪では、経営者 52 %，給与生活者 23 %）。

(ii) 資産以外の経済的な生活の面でも、ふるさととの結びつきが強い、弱い。経営者は、この点でも結びつきが給与生活者よりも弱い。東京・大阪ともにそうである（たとえば、結びつきが全然ないと答えた者は、東京では、経営者 89 %，給与生活者 68 %，大阪では、経営者 89 %，給与生活者 51 %）。経営者は、この面でもふるさととの結びつきが弱い。

(iii) ふるさとに親しい友人・知人がいるか、いないか。この点でのふるさととの結びつきも、やはり経営者の方が弱い。東京・大阪ともにそうである（たとえば、友人・知人が全然いないと答えた者は東京では、経営者 24 %，給与生活者 8 %，大阪では、経営者 19 %，給与生活者 6 %）。

(iv) ふるさとに対して愛着心を現在もいだいているか、どうか。この愛着心という面でのふるさととの結びつきも、東京ではやはり経営者の方が弱い（たとえば、愛着心を強く覚えると答えた者は、経営者 24 %，給与生活者 48 %）。大阪では両者ほぼ同じ。

(v) ふるさとに住んでみたいと思うか、住みたくないと思うか。この質問を通してふるさととの結びつきを見ても、東京ではやはり経営者の方が弱い（たとえば、住んでみたいと思う者は、経営者 47 %，給与生活者 56 %）。

(vi) ふるさとに現在どんな身内がいるか。この身内ということでのふるさととの結びつきを見ても、やはり経営者の方が弱い。東京・大阪ともにそうである。たとえば、ふるさとに身内は誰もいないというのは、経営者の方が多い（東京では、経営者 11 %，給与生活者 8 %。大阪では、経営者 19 %，給与生活者 11 %）。

最も近い身内である父・母がいるというのも、経営者の方が少ない（たとえば、父がいるものは、東京では、経営者 16 %，給与生活者 49 %。大阪では、

経営者 30 %，給与生活者 49 %)。

(ⅳ) 住居形態を見ると，持家比率は，東京・大阪ともに経営者の方がはるかに高い（東京では，経営者 72 %，給与生活者 43 %。大阪では，経営者 55 %，給与生活者 40 %）。

(ⅳ) ふるさとへ《行く》というのは経営者に多く，《帰る》というのは給与生活者に多い（たとえば，「いらっしゃいますか」と尋ねたのに対して，《帰る》と答えたものは，経営者 12 %，給与生活者 50 %。同じく《行く》と答えたものは，経営者 89 %，給与生活者 50 %）。

(ⅳ) 甲子園の高校野球大会で，同じ 1 世でもふるさとの県代表に声援を送るとするのは給与生活者に多く，東京(大阪)代表に声援を送るとするのは経営者の方が多い。どちらともいえないというのも，経営者の方が多い（ふるさとの県代表へ声援を送ると答えた者は，東京では，経営者 69 %，給与生活者 82 %。大阪では，経営者 71 %，給与生活者 83 %。一方，東京代表へ声援を送ると答えた者は，経営者 13 %，給与生活者 5 %。大阪代表へ声援を送ると答えた者は，経営者 7 %，給与生活者 6 %。どちらともいえないと答えた者は東京では，経営者 16 %，給与生活者 10 %。大阪では，経営者 15 %，給与生活者 5 %）。

(6) 性差

1 世と 2 世以上をこみにして，東京人意識・大阪人意識の性差を見てみると，わずかだが男性の方が高かった。1 世だけについて見ると，これもわずかだが，男性の方が高かった。2 世以上は，東京も大阪も性差がなかった（2 世以上に性差がないというのは，常識的に見ても当然のことかも知れない）。つまり 1 世と 2 世以上をこみにして見た場合に存在した性差は，1 世の性差の影響によるものである。

この 1 世の東京人意識・大阪人意識の性差の背後には，次の事実がある。

(i) ふるさに親しい友人・知人がいるというのは，全体的に男性の方が少ない。東京・大阪ともにそうである（たとえば，かなりいると答えた者は，東京では，男 46 %，女 55 %。大阪では，男 41 %，女 57 %）。

(ii) ふるさとに対する愛着心は，大阪では男性の方が弱い（たとえば，強く愛

着心を覚えると答えた者は、男 40 %、女 55 %)。ただし東京では性差はない。

(iii) 最も近い身内である父・母が現在もふるさにいるというのは、東京・大阪ともに男性の方が少ない（父がいると答えた者は東京では、男 39 %、女 46 %。大阪では、男 35 %、女 45 %。母がいると答えた者は、東京では、男 50 %、女 61 %。大阪では、男 46 %、女 51 %）。

(iv) ふるさとへ帰る回数は、ごくわずかだが、男性の方が少ない（たとえば、1年に1回以上帰ると答えた者は、東京では、男 68 %、女 73 %。大阪では、男 60 %、女 73 %）。

(7) 学歴差

1世と2世以上をこみにして、東京人意識・大阪人意識の学歴差を調べてみると、東京・大阪ともに差が存在した。学歴が上になるほど、全体として、東京人意識・大阪人意識が高くなる（たとえば、完全な、かなり完全に近い東京人だと思っている者は、低学歴層 34 %、中学歴層 45 %、高学歴層 51 %。完全な、かなり完全に近い大阪人だと思っている者は、低学歴層 43 %、中学歴層 54 %、高学歴層 59 %）。

次に、1世と2世以上に分けて調べてみると、1世は、東京では学歴が上がるにつれて、わずかではあるが東京人意識が高くなる。2世以上をこみにした場合と同じである。

大阪では、この関係がくずれ、大阪人意識の高さは、高学歴層——低学歴層——中学歴層の順となった。

2世以上は、東京では東京人意識の高さは、差はわずかだが、高学歴層——中学歴層——低学歴層の順となった。大阪では、これもわずかの差だが、中学歴層——高学歴層——低学歴層の順となった。

1世と2世以上の、この学歴層差が合わさって、東京・大阪の全体的な学歴層差ができあがったのである。

2世以上でこのような結果になったのは、2世以上の場合、学歴の上下は東京人意識・大阪人意識の高い・低いを決める直接的な要因の一つにはなりにくいということを示しているのだと思う。また、1世の場合は、2世以上とは違って、高学歴であることがその人の東京人意識・大阪人意識を高める直接の要

因の一つになっていることを示しているのだと思う。

(8) まとめ

最後に、若干まとめのことばを述べておく。

1世の東京人意識・大阪人意識の形成にプラスの働きをする社会的な要因としては、たとえば、次のようなものが考えられる。

- (i) 1世の東京(大阪)での在住年数。
- (ii) 1世の言語・言語行動様式、およびその他の行動様式の東京(大阪)化。
- (iii) 1世の住居形態の持家化。
- (iv) 1世の職業。
- (v) 1世の高学歴層化。

(i)の1世の東京(大阪)での在住年数は、原則として長ければ長いほど、その東京人意識・大阪人意識は高まっていくはずだ。ことわざにも、「住めば都。」「郷に入っては郷に従う。」などという。ただし、このことの検証は今回の報告には間に合わなかった。別に報告の機会を得たい。

しかし、前にもいったとおり、1世の東京・大阪での在住年数の長い・短い、1世の年齢とかなり高い相関を持っていると思われる。そして、この1世の年齢層とその東京人意識・大阪人意識の間には、全体としてきわめてはっきりとしたプラスの相関関係があった。1世全体の立場から見れば、1世の年齢こそは、その東京人意識・大阪人意識を規定する最も強力な要因であった。これは報告したとおりである。

(ii)の1世の言語・言語行動様式、およびその他の行動様式の東京(大阪)化の問題。このことと無関係に、または、このことを抜きにして、1世の東京人(大阪人)意識だけが形成されるということは、一般的にはあまりないことだと思う。

このうち1世の言語の東京(大阪)化と東京人(大阪人)意識の形成との関連の問題は、本報告書では扱うまでには至らなかった。この両者は、お互いにどのように、そして、どの程度かわり合っているものなのか。言語社会学(社会言語学)の上からは、きわめて興味のある問題である。分析を進めて、別の機会に報告をしてみたい。

言語行動様式を含む行動様式全般の東京(大阪)化の問題は、今回の私たちの調査では扱わなかった。これも私たちにとって将来に残された課題となった。

1世の文化変容現象(acculturation)の問題として、ぜひとり上げてみたい研究課題である。

(iii)の1世の住居形態の持家化の問題について。1世が持家に住んでいるか、それとも借家、その他に住んでいるかということが、1世の東京人意識・大阪人意識の形成にかなりの程度かわりを持っていることは、すでに私たちの調査が立派に検証済みのことである。だから、1世の東京人意識・大阪人意識を高めることが自治体の行政を進めていく上で望ましいことであるのなら、東京都や大阪市、それに国は、そのためにも東京都民や大阪市民に対する住宅政策、とりわけ持家化政策をもっと強力に推進すべきであると思う。

(iv)の1世の職業といっても、ここでは経営者と給与生活者の二つをとり上げたにすぎない。この二つの職業層の東京人意識・大阪人意識は、全体として経営者の方が高かった。これには、経営者と給与生活者という職業の違いが影響していると見てよい。

もっとも経営者は、給与生活者よりも年齢が全体的に上だと推測される(たとえば、給与生活者には高校新卒でもなれるが、経営者にはあまりなれないだろう。給与生活者には定年があるが、経営者にはない)。したがってこの年齢差も少なからず影響していると思われる。

(v)の1世の高学歴層化。1世の東京人意識・大阪人意識は、どちらも高学歴層が高かった。これは、ひとつには高学歴であることが、1世の東京人(大阪人)化という文化変容現象にプラスの働きをしているからだと考える。

1世の東京人意識・大阪人意識の形成にマイナスの働きをする社会的な要因としては、何よりもまず第1に1世のふるさととの結びつきの強さ・弱さが増えられる。一般的に言って、ふるさととの結びつきが強ければ、それにひかれて東京人意識・大阪人意識の形成のスピードは鈍る。反対に、ふるさととの結びつきが弱まれば、それだけ東京人意識・大阪人意識の形成のスピードは早まるだろう。

1世のふるさととの結びつきということでは、たとえば、次のようなものが

考えられる。

- (i) ふるさに親・祖父母などの墓がある。
- (ii) ふるさに親・きょうだいなどの肉親がいる。
- (iii) ふるさに親しい友人・知人がいる。
- (iv) ふるさに自分または家族の者所有の資産がある。
- (v) ふるさととは資産以外の経済的な面でも結びつきがある。
- (vi) ふるさに現在でも愛着心を覚える。
- (vii) ふるさに住んでみたいと思っている。

(i)(ii)(iii)は、1世とふるさととの人間的な結びつきであり、(iv)(v)は、1世とふるさととの経済的な結びつきである。そして、(vi)(vii)は、1世とふるさととの情情的な結びつきであるといえるだろう。

以上の1世とふるさととの結びつきがどのようなものであり、それが1世の東京人意識・大阪人意識の形成と具体的にどのようにかかわっているか。それは、これまで報告してきたとおりである。

要するにごく大ざっぱにいて、1世の東京人意識・大阪人意識は、これまで述べてきたようなプラスの要因とマイナスの要因とが綱引きをし、そのバランスがとれたところに形成されていくものなのであろう。

参 考 文 献

- 磯村英一・奥田道大 1963 東京都における市民意識の調査ノート（『都市問題』54巻7号）
 NHK放送世論調査所編 1979 『日本人の県民性——NHK全国県民意識調査』日本放送出版協会
 総理府統計局 1972 『住民基本台帳人口移動報告年報』
 統計数理研究所 1972 『県民性の統計的研究』（数研研究リポート30）

3. 言語使用とその意識

3.1. 言語意識

いわゆる留置調査によって調べた「言語調査」には、被調査者の言語意識に関するものがある。ここでは、それを三つのグループに分けてまとめてみる。

3.1.1. 標準語と方言

(1) われわれの調査

標準語と方言に関する最初の質問は次のものである。

「標準語で話すと話の真実味が少ない、という人がいます。あなたは、この意見に賛成ですか」(回答結果は表3-①参照)

表 3-①「標準語で話すと話の真実味が少ない」[%]

	無 答	全 賛 成	どちらか といえは 賛成	どちらか といえは 反対	全 反 対	どちら でもな い	その他
東 京	7.7	5.5	27.1	35.4	20.0	2.5	1.9
大 阪	5.6	12.3	40.9	30.1	10.3	0.8	0.0

標準語に近い地帯である東京では半数以上が反対であり、方言地帯である大阪で半数以上が賛成である、という結果は予想どおりではあるが、差は思ったほどではなかった。次の質問は以下のようなものである。

「方言まるだしでも話が通じればよい、という人がいます。あなたは、この意見に賛成ですか」(回答結果は表3-②参照)

表3-② 「方言まるだしでも話が通じればよい」[%]

	無 答	全 賛 成	どちらか といえば 賛 成	どちらか といえば 反 対	全 反 対	どちら でもな い	その他
東 京	2.2	28.3	39.6	22.7	5.2	1.6	0.5
大 阪	1.7	34.0	36.5	22.8	4.5	0.6	0.0

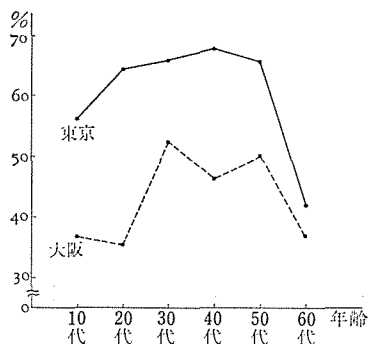


図3-① 「標準語で話す」と「真実味が少ない」に反対

この表によれば、大阪の方がやや賛成に傾いているものの、そう大きな差はなく、両都市とも70%前後が賛成している。この意味では表3-①の方が両都市の性格をはっきり示しているといえよう。

最初の「標準語で話す」と話の真実味が少ない」という意見への意見について、要因別に見てみよう。以下は、し

ばらく「全く賛成」と「どちらかといえば賛成」と合わせ、「どちらかといえば反対」と「全く反対」とを合わせ、前者を「賛成」、後者を「反対」として、それだけについて計算してみる。すなわち、上記の四つの回答をした者だけを二つに分けて集計したものである。

まず、性について見ると、この意見に「反対」の人の割合は、東京で、男63.1%、女62.9%で、ほとんど同じであるといってい。大阪でも男44.6%、女41.4%と、あまり差はない。

年齢別に見ると図3-①のようになる。

この図によれば、反対の人は東京では40代を最高として、上下にはじめゆるく下がり、両端では大きく下がるという一つのタイプをとっている。一方、大阪は大ざっぱに言えば東京と似ているといえなくもないが、あまり年齢によって一定の傾向にない、と見るのが正しいであろう。

それよりも、ある傾向が両都市を通じて見られるのは学歴別の意見である。これを図3-②に示してみよう。この図によれば、学歴が高いほど反対が多く、しかも、これは東京の方がはなはだしい。つまり、どちらかという、学歴の

高い方が標準語的といえるのであるが、これは、後にも述べるように、一般的には学歴の高い方が方言に同情的な意見が多いのとは反していることになる。しかし一方、ある呈示された意見への反対意見は高学歴に多いという、これも一般的傾向があり、この相反する二つの傾向のうち、この場合両都市とも標準語的になっていることは注目していいことである。

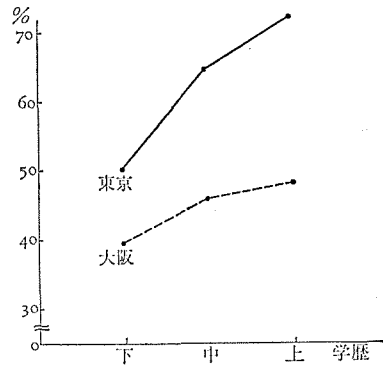


図3-2 「標準語で話すと真実味が少ない」に反対

この反対の人を世代別に見ると両都市の差がはっきりする。すなわち、大阪では、大阪1世が42.9%、大阪出身者が43.4%であり、ほとんど差がないのに対して、東京では、東京1世が57.8%が反対であるのに対して、東京出身者は69.1%とより多くなっている。これは、常識的に考えて、東京出身者が標準語的であろうと思われるのと、一致するわけである。しかし、これは、後に述べるような一般的傾向とは逆であろうと思う。大阪で反対が少ないのが一般的傾向に反しているのである。

上に述べた以外の属性別の、職業・出身地では表3-3のようになっている。

職業の方では家業従事者が、東京ではもっとも反対が高く、大阪ではもっとも低いことが注目されるが、この理由についてははっきりしない。

出身地では大阪で数値のあげてないところは出身者が非常に少ないところであるが、南関東までの出身者は、反対意見が強いようでやはり標準語志向が高いうのである。西の方では、両都市とも、近畿・四国が反対が少なく、中国・

表3-3 「標準語で話すと真実味が少ない」に反対(職業、出身地別)(%)

	職 業						出 身 地									
	経 営 者	給 与 生 活 者	家 業 従 事 者	主 婦	学 生	無 職	調 査 地	北 海 道	北 東 北	南 東 北	南 関 東	北 陸	中 部	近 畿	中 国	四 国
東京	69.1	63.1	75.0	59.1	62.3	57.7	69.1	63.9	57.5	55.4	45.8	65.9	42.9	75.0	46.2	58.1
大阪	54.5	44.9	27.3	36.7	40.5	23.8	43.4	—	—	—	—	50.0	38.0	57.1	23.1	57.6

表3-④ 「標準語—方言」の相關表(東京)[実数]

		「標準語で……」		計
		賛成	反対	
だ し …… 」	賛成	157	231	388
	反対	49	116	165
	計	206	347	553

表3-⑤ 「標準語—方言」の相關表(大阪)[実数]

		「標準語で……」		計
		賛成	反対	
だ し …… 」	賛成	145	93	238
	反対	42	50	92
	計	187	143	330

九州が多いのが注目される。四国の方言は近畿方言に近いという点からこのようになったものかと思われる。九州の方言は東京や関西とは大いに違っているために、一般的傾向によって反対が多くなって標準語志向となったものであろう。この点で、関西方言の話し手は、一般の方言の話し手とは違った標準語に対する精神構造を持っているのであろう。

次に上の二つの問題について「賛成」、「反対」に分けた相關表を作ってみる。これが、表3-④および表3-⑤である（すべ

て無答などは省いてある）。

この二つの表について χ^2 検定をすると、東京の方は $\chi_0^2=5.29$ 、大阪の方は $\chi_0^2=5.69$ であり、自由度それぞれ1で、東京は $Pr(\chi^2 \geq 5.29) = 0.02 \sim 0.05$ 、大阪は $Pr(\chi^2 \geq 5.69) = 0.01 \sim 0.02$ となり、ともに、無相關の仮説を棄却できる。すなわち、この両問は、関係がある、と断定しても、間違いをおかす危険は、東京で5%、大阪では2%以下である。

次の問題も、一部は標準語と方言とに関するものと考えられる。

「あなたは、自分の昔のことと同じようなことばを聞いたとき、どう思いますか」

この問題は東京1世、大阪1世の人向きの問と見るのが一番ぴったりしていることになる。答えをコードとともに次に示す。

1. その人に話しかけて、ともに故郷のことを話し合う
2. 安らぎをおぼえて安心する
3. 親しみを感じるが、それを他の人に知られまいとする
4. あまり愉快的感じはしない
5. 非常に不快な感じがし、その場から逃げ出したくなる
6. 何とも感じない
7. 親しみを感じる（程度）

表 3-⑥ 「自分の昔のことばを聞いたとき……」
(全体)(%)

	無答	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.
東京	18.0	21.0	20.7	4.9	2.0	0.3	26.4	3.6	1.4	1.7
大阪	15.6	19.5	25.6	6.1	3.6	0.0	22.8	4.7	0.0	1.9

表 3-⑦ 「自分の昔のことばを聞いたとき……」
(1世)(%)

	無答	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.
東京	2.3	32.5	27.6	7.1	2.6	0.6	17.4	5.4	2.6	2.0
大阪	4.8	33.9	32.1	6.5	4.2	0.0	10.7	4.7	0.0	3.0

8. なつかしく思う

9. その他

結果は表 3-⑥に示す。この表で見るところでは、両都市間に基本的な差はないようである。ただ、上に述べたように、この問題は、地方で言語形成期を過ぎてから両都市に移住した人向けのものであるので、両都市の1世の人の答えを表 3-⑦として示してみる。

前の表 3-⑥とこの表とを比べたとき、両都市出身者と1世とで大変違うことがはっきりわかる。1世の方がずっと、いわば方言寄りになるのである。1世の方がずっと無答が少なく、また「何とも感じない」も少なくなっている。

以上のように、1世と両都市出身者との間で大変違っているので、ここでは属性別に見ていくことは省略する。

次に、この問題と、先の「方言まるだしでも話を通じればよい」についての賛否との相関表を表 3-⑧、表 3-⑨として作

表 3-⑧ 二つの間の相関表
(東京)(実数)

	「自分の昔のことばを聞いたとき……」			計
	方言的	中立	反方言的	
だし「方言まる」				
賛成	198	137	3	338
反対	67	56	9	132
計	265	193	12	470

表 3-⑨ 二つの間の相関表
(大阪)(実数)

	「自分の昔のことばを聞いたとき……」			計
	方言的	中立	反方言的	
だし「方言まる」				
賛成	111	87	5	203
反対	48	32	8	88
計	159	119	13	291

ってみた。この際今の間で、コードの1.と2.と8.とを合わせて「方言的」とし、3.と6.とを合わせて「中立」とし、4.と5.とを合わせて「反方言的」としてみる。これらの表によると、「反方言的」というのが数少ないのであまりよくはわからないが、関係は多少はあるということはわかる。

(2) NHKの調査との比較

NHKでは、その「国民世論調査」の一環として、1979年9月に「ことばに関する意識」の調査を実施し、結果を同年11月から発表している（日本放送協会、1980）。

この調査は、同年9月8日（土）および9日（日）に、全国の16歳以上の国民3,600人を対象とした個人面接法によるもので、調査有効数として2,639人を得た。これは率として73.3%に当たる。

この調査の中で標準語について関係のある問は三つある。

まず「ことばの教育」に関してのもの。

「学校でのことばの教育についておたずねします。リストにあげる二つの意見のうち、あなたのお考えは、しいていうと、どちらに近いですか」（第11問）
呈示したリストは次のものである。

1. 方言のよさを見直す教育をすべきだ
2. 標準語の教育に力を入れるべきだ

次は「地方向けの放送」について。

「この地方向けの放送で、季節の話題や身近な暮らしの話題を紹介する場合、標準語で放送するのと、この土地の方言で放送するのとでは、どちらがよいと思いますか」（第12問）

他に、「親しみをもてる」、「どろくさい」など「標準語のイメージ」についての問題があったが、これはここでは直接の関係がないので触れないことにする。

このNHKの第11、12問について、「どちらとも言えない」という中間的な答えや無答などを除いて、第11問は「方言のよさを見直す教育をすべきだ」、第12問は「方言で」という、ともに方言の方に傾いている答えの比率を計算すると、表3-10のようになる。

表によると、第12問はあまりいい数字となっていない。第11問の方は、わ

表 3-10 NHKの調査「標準語と方言」〔%〕

	全 体	性		年 齢										学 歴			
		男	女	15	20	25	30	35	40	50	60	70	中学以下	高校・旧中	高専・短大	大学卒以上	
				19	24	29	34	39	49	59	69						
第11問	27.6	32.6	23.2	40.1	39.3	44.4	30.5	31.2	24.6	17.5	13.0	13.1	19.2	27.7	31.5	48.7	
第12問	12.3	14.3	10.6	17.1	12.9	13.4	11.9	6.3	11.4	12.9	13.8	18.5	13.7	11.0	4.8	12.1	

れわれの調査とはある観点からするならば、考えられる結果が出ている。すなわち性では女性が、年齢では若い方が、学歴では低い方が標準語的である。学歴別では前述したように、ある意見に反対という立場から標準語的になるときは、高い方が標準語的となるのであるが、この第11問での限りでは高い方が方言的となるのである。

しかし、これは、意見であって、このような人がどのようなことばを使っているか、ということとは全く別のことである。NHKの調査でも、第20問として、同居家族のいる人に対して、

「あなたは、ふだん、家庭の中では標準語を使っていますか。それとも、方言を使っていますか」

と聞いている。答えは、

1. 標準語だけ
2. 標準語のほうが多い
3. 方言のほうが多い
4. 方言だけ

と分けると、全体としては、1. 17.0%、2. 39.0%、3. 37.0%、4. 5.6%となっていて、その他1.5%の「わからない、無回答」がある。このうち「わからない、無回答」を除いて、3., 4. を「方言」として、率を出すと表3-11のよ

表 3-11 NHKの調査「家族と標準語で話すか方言で話すか」(方言)〔%〕

	全 体	性		年 齡										学 歴			
		男	女	15	20	25	30	35	40	50	60	70	中学以下	高校・旧中	高専・短大	大学卒以上	
				19	24	29	34	39	49	59	69						
第20問	43.2	44.6	42.1	47.7	42.8	41.8	40.4	37.2	45.6	44.1	46.3	48.1	51.8	39.7	28.7	27.4	

うになった。

この表では、男女差はさほど大きくないが、男性の方が方言的である点では他のデータと同じである。年齢別では、35～39歳が一番標準語的であって、両側に行くに従って方言的となる。この点はこの報告書のその他のものとは違っている。これは自分の言語生活を反省しての答えを集めたものであるが、われわれの調査は、実態とはいうものの幾分かは標準語についての知識があらわれるところがあるからであろう。学歴別では、学歴の高いほど方言的でないことはあきらかである。しかし、前から述べているように、学歴の高い人は意見としては親方言的である。結局のところ高学歴者は心情的に方言を支持しているだけであって、自分の生活は非常に標準語的である。彼らは生活上方言のため困ったこともあまりないので、方言を観念的に見ているのである。

このことは、地域別の結果を見てもわかる。第11問の方で、方言的な答えをした者は、東京・大阪区部で、27.8%であるのに対して、町村では、23.3%となっているが、この第20問では、東京・大阪区部の25.5%に対して、59.4%が家庭内で方言を使っている。いつも方言を使っているからこそ、もっと学校教育では標準語教育に力を注いでもらいたい、と考える、というのは自然であろう。

3.1.2. ことばとつきあい

このことに関しては、留置調査では、三つ聞いている。この結果を順にあげてみよう。

(1) 「ことばが気になる」「人前で話せる」

まず、

「あなたは、他人と話をするとき、自分のことばが気になるほうですか」

というのがある。答えとしては、

1. 非常に気になる
2. 少し気になる
3. あまり気にならない

4. 全然気にならない
 の四つとしてある。全体の結果を無答を除いて出すと表3-12のようになる。

表3-12 「自分のことばが気になるか」(全体)(%)

	1.	2.	3.	4.
東京	5.8	32.9	35.8	25.4
大阪	6.2	31.6	41.8	20.4

結果は大きく見るならば、あまり両都市での差は大きくないということになる。

表3-13 「自分のことばが気になるか」(年齢別)(%)

上の答えのコード1.と2.とを合わせて「気にする」ということにして以下いくつかの被調査者属性によって見てみることにする。

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
東京	47.6	41.9	39.1	40.5	29.2	21.6
大阪	27.5	44.0	40.3	40.8	33.3	28.6

性では、東京で、男32.5%、女44.1%が、大阪で、男35.0%、女41.3%が「気にする」と答えている。これによると、東京よりも大阪の方が性差が小さいということになる。しかし、大阪でも女性の方が気にしているわけで、これは一般的に男性の方が自分のことばをあまり気にしない傾向が見られる。

年齢別の「気にする」人の率を表3-13に示す。

この表によると、大阪の10代が異常に低いほかは、ほぼ年齢が高くなるにつれて気にする人が減っていることがわかる。大阪では、20~40代は東京とほぼ同じなのに、50代以上で、東京より減少の程度が軽いのが目される。これはおそらく大阪という関西方言の地域であることが関係あろう。

なお、学歴別にはあまりきれいな結果が出ない。世代別では、1世が東京で35.8%、大阪で35.2%、それぞれの都市出身者が東京で42.3%、大阪で40.2%と、ほぼ同じ結果となっているのもおもしろい。

次は、

「あなたは、人前で話ができるほうですか」

という問である。答えは、

1. できる
2. どちらかといえば、できる
3. どちらかといえば、できない

表3-14 「人前で話ができるか」〔%〕 4. できない

	1.	2.	3.	4.
東 京	20.5	36.3	36.2	7.0
大 阪	18.5	33.0	39.3	8.2

である。その他の答えをした者が東京に一人いたが、これを無答とともに除外すると、表3-14のようになる。表によれば、やや東京ができる方に傾いているがそう

大きな違いではない。

なお、これにはNHKの前述の調査に類似のものがある。問は「あなたは、人前でも平気で話せるほうですか」であり、答えもわれわれの調査とは少し違っているが、全体としては、「そう思う」36.6%、「そうは思わない」52.6%、「どちらとも言えない」9.9%、「わからない、無回答」1.0%となっている。

このNHKの結果は、われわれの方でいえば「できない」方に少し傾いているようである。これは一つにはNHKの調査が全国調査であるのに対して、われわれの調査が東京・大阪だけであったのに関係があろう。このことに関連しては、NHKの方の地域別の集計では、東京・大阪区部の「そう思う」は40.4%となっている。しかし、われわれの調査結果の1.と2.とを合計し、東京・大阪を合計した「できる」人、54.9%よりもこれは低い。答えのまとめ方の違いであろう。なお、NHKの地域別集計では、町村というのが「そう思う」34.6%で一番低くなっている。

われわれの調査で、1.と2.とを合わせた率を以下出して属性別に少し見てみよう。

性別では、東京が男62.2%、女51.9%、大阪が男56.2%、女45.9%となっている。男女とも東京の方が6.0%高いのは偶然ではあろうがおもしろい。NHKの調査では全国で、男45.0%、女29.4%が「そう思う」と答えており、

表3-15 「人前で話ができるか」(年齢,学歴,世代別)(%)

	年 齢						学 歴			世 代	
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	低	中	高	1世	2世以上
東京	52.4	58.2	55.3	58.8	52.9	62.0	42.1	55.8	71.6	54.5	59.6
大阪	65.0	53.0	46.2	51.4	43.9	54.3	42.6	57.7	59.6	47.2	55.3

性差はわれわれの調査よりもはなはだしい。

さて、われわれの調査で、人前で話せるかについて、年齢・学歴・世代別に前と同じように計算すると表3-19のようになる。

ここでは、年齢では一定の傾向は認められない。学歴別では高くなるにつれて人前で話せる人が多くなるが、これが低学歴ではほとんど同じ率でありながら、そのあと高学歴へ移るにつれての上がりが大阪では鈍い。すなわち、大阪では、中と高との差がほとんどない。世代別では、両都市以外の出身者は自信が少し足りない、ということになる。

これらについてNHKの調査ではやはり年齢では一定の傾向がない。ここでは10代の人は比較的話せない方で、高年齢の方が話せるとなっていて、これはわれわれの調査の東京の方と似ているとはいえる。しかし、大阪では若い人が一番話せると思っているという点で上にも一定の傾向がない、と述べておいたのである。NHKの場合、学歴では高いほど話せる率が高くなることはわれわれの調査と同様である。一部の数字をあげれば、「中学・旧小学」では、37.9%、「大学・大学院卒」では、61.0%が話せるとしている。

NHKの調査にあって、われわれの調査にはないものとしての地域別集計では、「東京・大阪区部」44.9%、「東京・大阪周辺」42.2%、「50万以上の市」45.1%、「10万以上の市」40.1%、「10万未満の市」41.0%、「町村」38.6%となっていて、多少の変動はあるものの、大体住んでいるところの都会化が進んでいるほど人前で話せる率が高くなるようである。

(2) 近所とのつき合い

次は、ことばとの直接の関係はさらに薄くなるが、

「あなたは御近所の方との程度のおつきあいがありますか」

と聞いている。答えは、

1. あいさつをかわす程度の人だけ
2. 世間話する程度の人だけ
3. 親しくつき合っている人が数人いる
4. 親しくつき合っている人がかなりいる
5. ほとんどつき合いがない

となっている。ここで、1. から 4. までは 1 点から 4 点と点を与えて、5. を 0 点として、つき合いの程度を近似的にあらわす、ということを考えた。これは便宜的に考えたものであるから、ただ傾向だけを見るにとどめることにする。

全体では、東京 1.97, 大阪 2.01 で大阪の方がつき合いの程度が高いが、大きな差ではない。性別では、東京が 男 1.78, 女 2.14, 大阪が 男 1.87, 女 2.16 と、いずれも女性の方がつき合いの程度がいい。以上 2 点はいずれもわれわれの常識と一致する結果である。

年齢別と学歴別との結果は表 3-16 に表示する。この表によると、年齢別では、若い方は両都市ともつき合いがよくないことをまず示している。また、東京ではそれほど著しい傾向ではないが、大阪では（60～64 歳のところを除いて）年齢が高くなるにつれてつき合いがよくなるという一定の傾向を示しているようである。学歴別では両都市とも高くなるほどつき合いは悪くなる。これもある程度常識を裏書きするようである。

表 3-16 つき合いの程度(年齢, 学歴別)

	年 齢											学 歴		
	15 }	20 }	25 }	30 }	35 }	40 }	45 }	50 }	55 }	60 }	65 }	低	中	高
	19	24	29	34	39	44	49	54	59	64	69			
東京	1.42	1.36	1.73	2.14	2.23	2.15	2.16	2.59	2.25	2.46	2.28	2.30	1.99	1.66
大阪	1.49	1.71	1.86	1.90	2.08	2.31	2.27	2.29	2.43	1.87	2.50	2.19	1.93	1.68

以上の数値および以下で示す数値は、両都市で同じような傾向を示していて、これらがある事実を反映していると考えられることを思わせる。職業別では次のようである。経営者が東京で 2.41, 大阪で 2.35 といずれもつき合いがいいのもよくわかる。これに対して、給与生活者は、東京 1.62, 大阪 1.88 といずれも低くて、サラリーマンの近所づき合いの薄さを示しているといえよう。家業従事者は東京 2.53, 大阪 2.38 で、これはつき合いがいい。主婦は東京 2.43, 大阪 2.31 である。学生は東京 1.40, 大阪 1.26 と極端に低く、近隣の大人とは関係ない生活をしていることがわかる。

世代別にはあまりはっきりしたことが出ない。出身地別では、東京で東京が 2.01, 大阪で大阪が 1.89 である。東京では、北海道・北東北出身者が 1.79 と

低く、この地方の人があまりつき合いをしないことを示しているようである。さらに、南東北から中部までの出身者は2点台であって、東京がこれらの人の活躍する舞台であることを示しているようである。これに對して、近畿以西の出身者は、近畿1.64、中国1.50、四国1.62、九州・沖縄1.41というように大変低く、これらの人が東日本的な東京で、あまり近所づき合いをせずに暮らしていることをうかがわせる。大阪では東日本出身者があまりいないのははっきりはしないが、やはり、西日本出身の方がよくつき合いをしていて東京とちょうど反対となっているようである。

(3) 三つの相関

このつき合いの程度の点を、自分のことばが気になるか、人前で話ができるか、の二つの問での答えごとに出して、表3-17として示しておく。この表によれば、この二つの問にはほとんど関係ないようである。ただ、人前で話ができるか、についての答えで「できない」と答えた者のつき合いが薄いということは出ていて、ここだけはつながりが見られた。「ことばが気になる」と「人前で話せる」の相関表をそれぞれカテゴリーを二つにして作ると表3-18、表3-19のようになる。 χ^2 検定をすると、東京は $\chi^2_0=16.54$ 、大阪は $\chi^2_0=6.89$ となり、ともに無相関の仮説を棄却でき、二つは関係があるといえる。

表3-17 つき合いの程度との相関

		東京	大阪
「自分のことばが気になる……」	なる	1.89	2.05
	少しなる	1.97	2.00
	あまりならない	1.90	2.01
	全然ならない	2.10	1.99
「人前で話ができる……」	できる	1.98	1.93
	どちらかといえはできる	1.96	2.18
	どちらかといえはできない	1.99	1.98
	できない	1.86	1.62

表3-18 「人前で話せる」と「ことばが気になる」との相関表(東京)(実数)

		「人前で……」		計
		できる	できない	
「ことばが気になる……」	気にならない	244	140	384
	気になる	114	130	244
計		358	270	628

表3-19 「人前で話せる」と「ことばが気になる」との相関表(大阪)(実数)

		「人前で……」		計
		できる	できない	
「ことばが気になる……」	気にならない	124	90	214
	気になる	57	76	133
計		181	166	347

3.1.3. 男女のことばの差

この留置調査ではまた、男女のことばの差についての意見を求めている。ここでは、これを提出した問の順に見ていくことにする。

(1) 現在の男女のことばの差

これについての問は次のとおりである。

「あなたは次の意見のどちらに賛成ですか」

1. 現在の日本では男性のことばと女性のことばはあまり違わないようになってきている
2. 男性と女性のことばは今でも大いに違っている

結果は、全体では、東京で、1. の意見が62.3%であり、2. の意見は35.4%（ほかは無答1.7%，その他の意見0.6%）であった。すなわち、多くの人は世評のように差は少なくなった、と認識しているようである。大阪でもほとんど同様で、1. が64.6%，2. が31.8%である。

性別では、1. と2. だけについて、1. の比率を出すならば、東京は男65.1%，女62.7%，大阪は男64.7%，女69.9%である。東京ではほとんど性差はないが、大阪ではわずかに女性の方に1. が多い。これは、あとで述べる他の傾向と違って女性自身が少し同じになったと認識している点で注目される。

他の属性別の結果ではあまりはっきりした傾向が見えない。ということは、上の性別もあるいは意味のない差であるかもしれないということを示すかと思われる。

次の質問は、上で1. すなわち差がなくなったと答えた人に対して、

「男女のことばがあまり違わなくなった理由は次のうちのどれだと思いますか」

1. 男性のことばが女性化してきたから
2. 女性のことばが男性化してきたから
3. 男性のことばが女性化し、女性のことばが男性化したから

と聞いた。これに対しては、有効な答えをした人では、東京で1. 6.3%，2.

41.6%, 3. 52.1%, 大阪で1.

8.1%, 2. 43.0%, 3. 48.9%

であった。大阪の方が相対的に

2. が高い。

以下2. が1. から3. までに占める比率で属性別の一部を示し

表3-20 男女のことはの差がなくなった理由——「女性のことはの男性化」(年齢別)(%)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
東京	48.7	30.2	31.5	52.0	46.4	69.0
大阪	48.4	32.8	51.1	46.8	39.3	41.7

てみる。性別では、東京が男44.9%, 女38.8%, 大阪が男46.5%, 女38.9%となっていて、比率はほとんど同じである。年齢別では表3-20のようになる。

表によると30代から上は両都市で大いに結果が違っているので積極的に何もしえないようである。ただ、10代、20代については偶然かどうか、比率が極めて類似している。学歴別では、東京で、低が46.4%, 中が41.8%, 高が37.0%と、学歴が高くなるにつれて、2. の支持率が下がり、3. の支持率が上がるという傾向が見られる。一般的にいて、高学歴は3. のような中間的意見を好むものであり、これもその一つのあらわれと見ていいかとも思われるが、大阪では、低43.6%, 中42.3%, 高43.3%と学歴では全く差が認められない。世代別では、東京で1世37.2%, 東京出身者46.9%, 大阪で1世40.7%, 大阪出身者44.9%と両都市同じように、その都市出身者は2. の支持率が高いが、これには然るべき理由づけが困難である。その他の属性別には注目すべきものは出ていない。

(2) 将来の男女のことはの差

次の質問は、

「それでは将来の標準語の男女のことはの違いはどうなと思いますか」

というのである。答えは、

表3-21 男女のことは予想(性別)(%)

	東 京			大 阪		
	全 体	性		全 体	性	
		男	女		男	女
1. 今よりも違いが大きくなるだろう						
2. 今より違いが小さくなるだろう						
3. 今と変わらないだろう						
である。「無答」やその他の答え						
大きくなる	7.4	6.7	8.0	6.0	7.0	4.8
小さくなる	31.2	38.7	24.8	35.3	38.5	31.0
変わらない	61.4	54.6	67.2	58.7	54.5	64.2

を省いて、全体および性別の結果を示すと、表3-24のようになる。「変わらない」という予想が一番多いという点では両都市同じである。「小さくなる」という予想は大阪の方がやや多い。性別に見ると女性は「小さくなる」の予想が少なくなる。これは一面には男性が小さくなって味気なくなった感じを将来の“暗い”見通しとして持ち、女性は小さくはなるまいという空想からのいらいらを示しているといえなくもないであろう。

表3-22 男女のことは予想——「小さくなる」(年齢、学歴、世代別)(%)

	年 齢						学 歴			世 代	
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	低	中	高	1世	2世以上
東京	27.4	36.5	32.4	28.2	21.7	33.3	18.6	31.9	41.2	29.7	33.0
大阪	32.5	43.5	28.9	36.2	22.9	44.4	28.0	34.9	51.1	28.5	40.9

将来、差は「小さくなる」と予想した人の比率を年齢別、学歴別、世代別に示すと表3-22のようになる。表によれば、年齢では両都市とも60代のところが傾向を破っているが、その他では、20代が最高となって、両側に低くなっている。すなわち、20代は差が小さくなる、と予想していて、やや理想主義的なところが見られるが、そのあとは現実を目覚めるといえなくはない。学歴でも両都市とも一貫して学歴が高くなるとともに「小さくなる」という予想が多くなる。これもあるいは理想主義的なところが出てくるのであろうか。この点で次の問題が出てくるのであるが、その前に世代別では両都市とも、1世の方が低く出ていることを指摘しておく。ただし、この理由はよくはわからない。

表3-23 男女のことは理想(性別)(%)

	東 京			大 阪		
	全 体	性		全 体	性	
		男	女		男	女
大きくなるべきだ	23.5	24.8	22.3	22.9	21.6	24.7
小さくなるべきだ	16.4	17.6	15.3	17.1	16.3	18.0
今のままでよい	60.1	57.6	62.4	60.0	62.1	57.3

次の質問は、

「それでは将来の標準語では男女のことはの違いはどうなるべきだと思いますか」

というのであり、答えは、

1. 今よりも違いが大きくなるべきだ
2. 今よりも違いが小さくなるべきだ

るべきだ

3. 今のままでよい

となっている。表3-21と同様に表3-23を作ってみる。表によれば、全体としては、表3-21と比べると大きくなる方へ大いに傾いている。すなわち、理想としては、男女のことはあるべきだ、という考えが相当強いことを示している。性別では、積極的な上の二つの意見について両都市では差が見られる。東京では男性が女性より「大きくなるべきだ」が多いのに対して大阪は逆であり、大阪では「小さくなるべきだ」が女性が男性より多いのに対して東京は逆である。現状が理想だとするのは全体としては両都市ほとんど同じであるが、性別では東京で女性が多く、大阪では男性が多い。これも両都市で逆である。

次に表3-22と同じようにして、表3-24を作る。ここでも表3-22と合わせて、

表3-24 男女のことは理想——「小さくなる」(年齢、学歴、世代別)(%)

	年 齢						学 歴			世 代	
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	低	中	高	1世	2世以上
東京	13.1	19.7	10.7	13.6	20.3	25.5	18.5	13.7	18.7	16.5	16.2
大阪	17.5	21.2	10.7	22.9	5.1	22.6	17.4	13.0	29.2	10.3	22.8

「小さくなるべきだ」についての比率を出す。この表ではすべて結果が一定の傾向をとることなく終わっている。

次は、この予想と理想との相関表を作ってみると、表3-25、表3-26のようになる。これらの表によれば理想としては差が大きくなることを望みながら、予想としては小さくなるとしている人が多いため、相関度はそれほど高くなっていない。左上から右下への対角線上にある人数の全体に対する比率を一貫率ということにすれば、この一

表3-25 将来の男女のことは、
予想と理想(東京)(実数)

		理 想			計
		大きく	小さく	同じ	
予 想	大きく	15	15	13	43
	小さく	57	49	76	182
	同じ	62	31	271	364
計		134	95	360	589

表3-26 将来の男女のことは、
予想と理想(大阪)(実数)

		理 想			計
		大きく	小さく	同じ	
予 想	大きく	5	8	7	20
	小さく	35	32	49	116
	同じ	31	16	143	190
計		71	56	199	326

表3-27 男女のことばの差, 理由と予想(東京)(実数)

理由		予想			計
		大きく	小さく	同じ	
理由両方	男性のことばの女性化	2	5	18	25
	女性のことばの男性化	18	47	94	159
	両方	13	66	120	199
計		33	118	232	383

表3-28 男女のことばの差, 理由と理想(東京)(実数)

理由		理想			計
		大きく	小さく	同じ	
理由両方	男性のことばの女性化	9	3	13	25
	女性のことばの男性化	49	28	83	160
	両方	46	35	111	192
計		104	66	207	377

貫率は東京で56.9%, 大阪で55.2%でほとんど差はない。「同じ」というのが非常に多いので一貫率が高くなるが, 「同じ」を除いてみると, 一貫率は, 東京で47.1%, 大阪で46.3%と低くなる。さらに, 表3-25, 表3-26から「同じ」を除いたもので χ^2 検定をすると, 東京が $\chi^2_0=0.00134$, 大阪が $\chi^2_0=0.00230$ となって, 相関はほとんどないといってよさそう。

なお, この予想および理想と, 前に述べた男女差がなくなった理由との相関表を作ってみた。両都市であまり差がない

ので, ここでは東京だけを表3-27と表3-28としてあげておく。この表でも, 理想としては男女のことばの差が大きくなることを願いながら, 現実としてはそれが女性のことばの男性化によって達成されていないさまがうかがわれる。

(3) NHKの調査

前述のNHKの調査では比較的乱暴な若い女性の会話の録音を聞かせて, これをどう感じたかを聞いている。この会話は文字に示すと少し感じが違うが, 次のものである。

A: ねえ, これどう思う? 似合うかな?

B: どれ, ウーン, それよりこっちのほうがいいと思うけどな。

A: そうねえ……。この柄, ちょっと変わってるけど……。

B: ウーン, 似合う, 似合う。こういうのあんまりないよ。

A: ウーン, でも, これ高いんじゃない?

B: いやァ, 今こんなもんよ。

A: じゃ, 思いきって買うか。

B: そうすれば。ボーナス出たんだし……。

というのである。結果を「感じがよくない」側に傾いた答えの率を, 「わからない・無答」, 「特に感じない」というのを除いて計算して表にすると, 表3-29の

表 3-29 女性のことばづかいを聞いて「感じがよくない」(性, 年齢, 学歴別)(%)

全体	性		年 齢										学 歴			
	男	女	15 } 19	20 } 24	25 } 29	30 } 34	35 } 39	40 } 49	50 } 59	60 } 69	70 }	中 学 旧小学	高 校 旧中卒	高 専 短大卒	大 学 大学院卒	
83.3	79.3	83.6	94.4	90.6	93.2	86.8	82.6	80.5	78.0	74.3	74.5	71.7	86.7	90.4	90.0	

ようになる。

この表によると、女性の方が感じが悪いとする人が多く、年齢は若い人の方が批判的、学歴でも高い方が批判的となっている。刺激として与えられた会話の話し手、つまり若い女性自身によって否定的な結論が出ていることは注目してよかろう。

このNHKの調査では、なお第13問として、

「あなたは、男性と女性のことばづかいの違いについて、どうお考えですか。

リストの中から、あなたのお考えに近いものをお答えください」

という質問がある。呈示されたリストは、次のものである。

1. はっきり違っているのがよい
2. 多少違っているのがよい
3. あまり変わらないのがよい
4. 同じになるのがよい

これは、われわれの調査とは全く同じではないが、先の「理想」というのと近いと思われる。結果は「わからない、無回答」を除くと、1. 26.3%, 2. 57.5%, 3. 13.5%, 4. 2.7%となっている。もし、3. と 4. とを合わせたものが、われわれの「小さくなるべきだ」と同じだとすれば、この点では結果は似ている、というべきであろう。3. と 4. を合わせたものは性では男 13.8%, 女 18.3%であり、これは表 3-29 の大阪の方に近い。

年齢別では、表 3-29 がそうであったように、はっきりした傾向が出なかった。はっきりした傾向が出ているのは学歴で、中学・旧小学 21.0%, 高校・旧中卒 14.4%, 高専・短大卒 11.5%, 大学・大学院卒 6.4%と、学歴が高くなるにつれて差があるのを支持している点が注目される。これはわれわれの調査の「予想」を調べた、表 3-22 で示したものと全く逆方向にあるわけである。

表 3-30 東京と大阪の男女の
ことばの差〔%〕

	東京 が 大 き い	大阪 が 大 き い	同 じ だ	わ か ら な い
東 京	22.6	22.2	8.9	46.3
大 阪	16.8	27.0	18.0	38.2

ハワイの日系人の社会では、39.6%の人が、日本語に男女のことばの違いのあるのを好ましいとしている。無答を除けば、答えた人の92.5%に当たる（林知己夫他、1973）、この数はやはりハワイの日系人で、日本語に敬語があるのに賛成している29.7%（無答を除くと78.2%）

よりずっと高い。この傾向はハワイだけでなく、日本の調査でも男女のことばの差があることへの支持が、敬語があることへの支持よりも高い。したがって、日本語の男女のことばの差は近い将来消えることはないであろう。

(4) 東京と大阪の男女のことばの違い

次のわれわれの質問は、

「東京と大阪とではどちらが男女のことばの差が大きいですか」

である。答えは、

1. 東京の方が大きい
2. 大阪の方が大きい
3. どちらも同じぐらいだ
4. よくわからない

となっている。全体についての結果を表示すると表 3-30 のようになる。

表によると、「わからない」が非常に多い。相手の都市の実状はわからないのが普通であろう。しかし、大阪では大阪の方が大きい、としているのに、東京では差がないのは興味がある。すなわち、東京では大阪の男性のことばは女性的だという感じがあるためにこのようになったものであろう。

以下は1.と2.つまりどちらかが大きいとした者だけについて、2.と答えた者の人数を1.と答えた人数で割ったときの数字を出してみる。

性別では東京で男1.22、女0.79、大阪で男1.72、女1.46である。両都市とも女の方が大阪の方が大きいとした者が少ないことになる。年齢別には著しい傾向は見られない。学歴別も同様である。世代別では東京で1世は1.17、2世以上は0.79、大阪で1世は1.35、2世以上は1.81となっていて、傾向は全く

逆である。すなわち、東京出身者は東京の方が男女差が大きく、大阪出身者は大阪の方が男女差が大きいと思っているわけで、それぞれの内部に詳しくなれば差というものに気づくものかと思われる。これは、出身地別のところでもいえるわけで、東京では東京の人が0.79と東京に傾き、大阪では大阪の人が1.81と大阪に傾いている。

(5) 身なりや態度の男女差

次に、

「ことば以外身なりや態度での男女の差についてはどうですか」

と聞いた。答えは、

1. 男女の差が大きくなってきている
2. 男女の差が小さくなってきている
3. 今までと同じだ

である。結果を全体について見ると表3-31のようになる。結果で明らかなように、いわゆるピーコック時代を反映

して差は小さくなったとの判断である。これはこの小さくなったというのが圧倒的なので属性別にあまり差があらわれない。性別で、この小さくなった、との答えが、東京で男84.6%、女85.9%、大阪で男78.9%、女84.7%となっていて、特に大阪で女性が高く、結局両都市とも女性が高いぐらいである。

これはこの3.1.3.の(1)のところで最初にあげた問題と関係があると思われる。そこでこの二つの間の相関表を表3-32、表3-33として作ってみた。しかしこれも身なりや態度の差が小さくなったとの意見が圧倒的であるために、言及すべき結論が出たとはいえないようである。

表3-31 身なり・態度の男女差(%)

	大きくなった	小さくなった	同じだ
東京	5.8	85.1	9.1
大阪	6.9	81.6	11.5

表3-32 ことばの差と身なり・態度の差(東京)(実数)

		身なり・態度の差			計
		大きくなった	小さくなった	同じだ	
ことばの差	違っている	9	183	29	221
	違わなかった	27	337	25	389
計		36	520	54	610

表3-33 ことばの差と身なり・態度の差(大阪)(実数)

		身なり・態度の差			計
		大きくなった	小さくなった	同じく	
ことばの差	違っている	7	91	14	112
	違わなかった	15	188	24	227
計		22	279	38	339

3.2. ことばのイメージ

〇〇弁は軽快で聞きやすいが味わいがなくきつく感じる

△△弁はやわらかくてきれいなことばだが非能率的であり好きになれないなどといったことがよく話題にされる。このような特定の地域のことばに対する感じ方には個人差が見られる反面、何らかの共通点も認められることが多いようである。

この調査では、ことばに対する感じ方（イメージ）の相異点を見るために、以下の4対の評定語により、いくつかのことばに対する感じを尋ねてみた。ここで用いた評定語は次の通りである。

- ① 軽快だ——重苦しい（左がプラスの評定、右がマイナスの評定。他に中間の選択肢「どちらともいえない」を用意した。以下同じ）
- ② 聞きやすい——聞きにくい
- ③ きれいだ——きたない
- ④ 好きだ——きらいだ

また、イメージを求める対象としては、東京では、

山の手ことば、下町ことば、関西弁、アナウンサーのことば
大阪の調査では、

船場ことば、河内弁、京都弁、アナウンサーのことば
の各4種を選んだ。

以下、東京・大阪の両地域での共通項目である「アナウンサーのことば」についての結果を最初に示し、次いで関西のことば、東京のことばの順に見ることとする。

3.2.1. アナウンサーのことば

ここでいう「アナウンサーのことば」はテレビやラジオのニュース番組で話されていることばであり、標準語（または全国共通語）と言い替えてもよいことばを意味している。アナウンサーのことばに対するイメージを地域別・性別に示したのが表3-34である。

表3-34 アナウンサーのことばのイメージ(地域、性別)(%)

	軽 快			聞きやすい			き れ い			好 き			人 数
	+	-	0	+	-	0	+	-	0	+	-	0	
全 体	59.0	12.1	29.0	93.1	2.0	4.9	83.1	0.6	16.3	56.8	4.5	38.7	639
	71.0	2.8	26.2	94.4	0.8	4.7	86.1	0.0	13.9	61.6	1.4	37.0	359
男	59.1	13.2	27.7	93.6	2.4	4.1	82.1	0.7	17.2	52.0	4.4	43.6	296
	68.0	3.1	28.9	94.8	1.0	4.1	83.5	0.0	16.5	54.6	1.5	43.8	194
女	58.9	11.2	30.0	92.7	1.7	5.5	84.0	0.6	15.5	60.9	4.7	34.4	343
	74.5	2.4	23.0	93.9	0.6	5.5	89.1	0.0	10.9	69.7	1.2	29.1	165

(注) 表中、左上の数字は東京、右下は大阪。

表中の＋，－，0の各記号はイメージの方向を示すものであり、左欄の「軽快」でいえば、それぞれ「軽快だ」、「重苦しい」、「どちらともいえない」の意である。なお、「無回答」は0の「どちらともいえない」に、また、「男は……だが、女は……だ」といった注釈付きの回答はその内容によりいずれかに含めることとした。以下の各表も同じ。

なお、表3-34の各枠の数値は、上段が東京、下段が大阪での結果である。

四つの評定語では、「聞きやすい」と「きれい」のプラス的イメージの回答が多く、東京・大阪ともに8割を超えている。この二つは、どちらかといえば発音の明瞭さに関係することがこの数値となったと思われる。これらに続くのが「軽快」、「好き」であるが、「軽快」では東京のほうが大阪よりもプラス的評定の割合が低くなっている。とくに、「軽快」のマイナス的評定は東京の男女ともに1割を上まわっているのが注目される。これは恐らく、アナウンサーの原稿を読み上げるような調子の話し方が関係しているのであろう。

性別では、東京・大阪ともに、女性のほうが男性よりも「好き」と回答する

表3-35 アナウンサーのこたばのイメージ(年齢, 学歴別)(%)

		軽 快			好 き			人 数
		+	-	0	+	-	0	
年 齢	15~24	39.7 64.6	22.0 3.8	38.3 31.6	34.0 34.2	8.5 3.8	57.4 62.0	141 79
	25~34	60.5 74.7	10.0 3.4	29.5 21.8	52.1 69.0	3.7 1.1	44.2 29.9	190 87
	35~44	63.4 76.7	11.2 1.2	25.4 22.1	70.1 62.8	3.7 1.2	26.1 36.0	134 86
	45~54	70.3 75.9	7.7 0.0	22.0 24.1	64.8 74.1	4.4 0.0	30.8 25.9	91 58
	55~69	68.7 59.2	6.0 6.1	25.3 34.7	75.9 75.5	1.2 0.0	22.9 24.5	83 49
学 歴	低	62.7 68.7	5.4 2.0	31.9 29.3	68.7 68.0	2.4 1.3	28.9 30.7	166 150
	中	58.5 73.8	15.9 3.1	25.6 23.1	58.8 57.3	4.5 1.3	36.7 41.3	289 160
	高	56.5 69.4	12.0 4.1	31.5 26.5	42.9 55.1	6.5 2.0	50.5 42.9	184 49

(注) 表中, 左上の数字は東京, 右下は大阪。

割合が高く, その差は大阪で著しい。また, 大阪の女性は男性よりも「きれい」と回答する傾向が見られるが, 他ではほとんど差は認められない。

表3-35は年齢別・学歴別の結果である。ただし, 全体の80%以上がプラスの評定に集中している「聞きやすい」と「きれい」の2項目は省いてある。

年齢別に見ると, 全体的傾向として, プラスの評定は高年齢層に多く, 年齢の低下に伴いその割合が減少し始め, 低年齢層付近で急激に減っている。この典型が, 35歳および25歳前後の2段階の降下を見せている東京の「好き」の評定といえよう。また, 「軽快」や大阪での「好き」も同様の傾向にあるが, これらは25歳を境にその前後での差が著しくなっている。なお, 表には示さなかったが, 「きれい」では, 東京で35歳, 大阪で25歳を境に若い層でのプラスの評定の割合がきわめて低くなっている。

学歴別では, 「聞きやすい」を除いては, 学歴が低いほどプラスの評定に傾いている。その傾向は東京の「好き」において著しい。また, 「軽快」と大阪の「好き」では中学歴層以上と低学歴層の間で差が見られ, 東京の「きれい」では高学歴層と中学歴層以下との間で差が見られている。

この結果は年齢別で見たものとはほぼ一致しているといえる。すなわち、年齢で35歳前後に著しい差が見られたものは学歴では高学歴層とそれ以外で、また、25歳前後に急変するものは低学歴層とそれ以外で差が大きくなっている。現在の日本では学歴構成は年齢構成とほぼ平行関係になっていることから考えるとこの結果は当然のことといえよう。

最後に、出身地別の結果を見てみよう。ここでは被調査者の出身地を、東京都（大阪調査では大阪府）、東日本（中部以東）および西日本（近畿以西）の3地域に分け、外国など「その他」の出身者は集計から除外した。

出身地による差は、東京調査の場合では以下の2評定で現われ、いずれの場合も東日本出身者の評定が高く、西日本出身者が最も低くなっている。

「軽快」……西日本（52.1）、東京（54.5）＜東日本（65.8）

「好き」……西日本（47.9）、東京（51.4）＜東日本（65.4）

（ ）内はプラスの評定の%値、‘<’は著しい差が認められることを示す。

西日本出身者がアナウンサーのことばを最も低く評価しているという結果は、対象や方法は異なるが、大石（1970）の東京弁イメージの調査結果に類似している。大石は、「……ことに、近畿地方出身者が東京弁を低く評価していることは、かれらが東京に住んで方言コンプレックスをもたないことと関連していると思われる」と述べているが、この解釈は本調査の結果にもそのまま適用しうらと思われる。また、東京出身者について見てみると、彼らの評定は東日本出身者よりもむしろ西日本出身者に近くなっている。一口に東日本といっても様々な地域が含まれているので、そのうちから地理的・言語的に近い南関東出身者だけを抜き出して、東京出身者と比べてみた。結果は、

「軽快」……東京（54.5）＜南関東（69.2）

「好き」……東京（51.4）＜南関東（64.2）

となり、東京出身者の評定とは非常に異なっている。

このように、東京出身者の評定が他より低いことの理由については次のことが考えられる。彼らは自分たちのことばに自信をもっていることがまず一つ。さらに、アナウンサーのことばは自分たちのことばとは異質であるとみており、従って、両者の比較において低く評定することになるのだといえようか。

大阪調査のほうでは、東日本出身者は僅か 22 名しかいないので、出身地の比較は大阪出身者と西日本出身者だけについて行なう。

大阪出身者と西日本出身者の間には、「聞きやすい」を除く以下の 3 評定で大きな差が認められている。

「軽快」……大阪 (69.1) < 西日本 (73.4)

「きれい」…大阪 (82.1) < 西日本 (91.6)

「好き」……大阪 (52.9) < 西日本 (71.3)

いずれにおいても、大阪出身者のほうの評定が低く、ここでも関西人の方言コンプレックスの低さがうかがわれる。

3.2.2. 関西弁・京都弁

(1) 東京在住者から見た関西弁

東京在住者が抱く関西弁のイメージは表 3-36 に示す通りである。

表 3-36 東京在住者の関西弁のイメージ(性別)(%)

	軽 快			聞きやすい			きれい			好 き			人 数
	+	-	0	+	-	0	+	-	0	+	-	0	
全体	44.0	20.5	35.5	20.0	62.0	18.0	23.9	19.6	56.5	26.4	34.6	39.0	639 [△]
男	46.3	23.0	30.7	20.3	63.5	16.2	19.6	24.7	55.7	26.4	36.5	37.2	296
女	42.0	18.4	39.7	19.8	60.6	19.5	27.7	15.2	57.1	26.5	32.9	40.5	343

全体の欄を見ると、半数以上の被調査者が支持したのは、「聞きやすい」のマイナ斯的評定と「きれい」の中立的回答である。一方、「軽快」と「好き」では回答が分散しているが、これはアナウンサーのことばでは見られなかった現象である。アナウンサーのことばに比べ、関西弁という概念のほうが指す範囲が漠としているためといえよう。

被調査者の回答を見ると、

- ・京都弁はきれいだが、(奈良)大阪弁はきたない(24名)
- ・女性のことばは好きだが、男性のことばはきらい(14名)
- ・京都弁は好きだが、大阪弁はきらい(13名)
- ・女性のことばはきれいだが、男性のことばはきたない(7名)

・大阪弁は軽快だが、京都弁は重苦しい（6名。逆の回答は3名）

など注釈つきのものが89例あった（アナウンサーのことばでは1例のみ）。

この注釈からもわかるように、関西弁といっても様々であり、どの側面を想定するかによりイメージは異なりうる。このことは以降で取り上げる他の方言についてもいえることであり、ことばのイメージといってもその内容はかなりのあいまいさを含むものである。それはそれとしても、各方言に対するイメージには何らかの共通性があることもまた一つの事実である。

表3-30で性別の結果を見ると、「きれい」で女性のほうが男性よりもプラス的評定を行なう傾向が高いが、他の3評定では性別による差異はほとんどないといえる。

以下、評定語ごとに属性別の結果を見ることにする。

「軽快」は四つの評定語のうちではプラス的イメージが44%と最も高い。これを年齢別に見ると、プラス的評定の割合は、

15～24 歳	50.4 %	25～34 歳	38.4 %	35～44 歳	48.5 %
45～54 歳	45.1 %	55～69 歳	37.3 %		

となっており、全体的には年齢が低いほどプラス的評定に傾いている。また、若い年齢層の中では、25～34歳が他より評定が低いのが注目される。

学歴別では、プラス的評価の割合は、

低学歴（33.7）＜高学歴（47.3）、中学歴（47.3）

となっており、低学歴層が他より著しく低い。これは、アナウンサーのことばの項で述べたように年齢別の結果の反映だといえよう。

出身地別では、西日本出身者が他よりプラス的評定に傾いているがあまり差があるとはいえないようである。

「聞きやすい」は全般的にマイナ斯的評定の高いものである。年齢別では、最高と最低の年齢層のマイナ斯的評定の割合がやや多いがその差は小さい。

学歴別では、マイナ斯的評定の割合は、

低学歴（68.1）＞中学歴（60.2）、高学歴（59.2）

となっており、低学歴層と他とで差が著しい。

また、出身地別のマイナ斯的評定の割合は、

東京 (66.7) > 東日本 (61.0) > 西日本 (47.9)

と、東京や東日本の出身者に「聞きにくい」が多く、西日本出身者ではその割合が少なくなっている。

「きれい」は中立の「どちらともいえない」などの回答が 57 % を占めている（このうちの約 5 % は先述の注釈付きの回答である）。

プラスの、マイナスの評定は全体ではそれぞれ 24 %, 20 % とほぼ同程度であるが、これを年齢別に見ると、

15～24 歳	16.3 %	25～34 歳	22.1 %	35～44 歳	23.1 %
45～54 歳	29.7 %	55～69 歳	36.1 %		

と、年齢の上昇につれてプラスの評定が増加している。

プラスの評定の割合を学歴別に見ると、

低学歴 (28.9), 中学歴 (26.0) > 高学歴 (16.3)

となっており、高学歴層と他とで差が著しい。

また、出身地別のプラスの評定の割合は、

東日本 (29.4) > 東京 (21.9) > 西日本 (13.7)

の順になっている。西日本出身者（近畿地方出身者だけでも同じ）が最も低く評定しているが、これは中立の回答が他より約 10 % 多いためである。

「好き」はプラスの、マイナスのおよび中立回答がそれぞれ全体の 26 %, 35 %, 39 % とほぼ同程度ずつに 3 分されている。これを属性別に見た場合、年齢別では、

15～24 歳	36.9 %	25～34 歳	19.5 %	35～44 歳	23.1 %
45～54 歳	26.4 %	55～69 歳	30.1 %		

と、最も若い年齢層のプラスの評定の割合が高い。これを除くと、年齢の上昇につれてプラスの評定に傾いているがその差は小さい。

学歴別では、

低学歴 (31.3), 高学歴 (24.5), 中学歴 (24.9)

と、低学歴層が他よりややプラスの評定が多い。また、出身地別では、

西日本 (35.6), 東日本 (26.1), 東京 (24.3)

と、西日本出身者が他よりプラスの評定に傾いている。この割合は近畿地方出

身者でとくに高く、42.9%と半数近くが「好きだ」と回答している。

以上の四つの評定語を通していえば、東京在住者から見た関西弁は全体では、軽快だが非常に聞きにくいことばであり、きれいとかきたないとかの評定は下しがたく、好ききらいの個人差が大きい、ということになる。また、属性別では、「きれい」を除き、西日本出身者と15～24歳の若い年齢層が他より相対的にプラス方向に傾いているといえよう。

(2) 大阪在住者から見た京都弁

以上の関西弁イメージと比較するために、大阪の調査では京都弁に対する感じ方を尋ねてみた。表3-37に示すように、「きれい」81%（東京在住者の関西弁では23%）、「好き」51%（同26%）、「聞きやすい」43%（同20%）、「軽快」22%（同44%）と「軽快」を除いては著しくプラスの評定に傾いている。また、「きれい」と「好き」ではマイナスの評定が非常に少ないのが注目される。

表3-37 大阪在住者の京都弁のイメージ(性別)(%)

	軽 快			聞きやすい			きれい			好 き			人 数
	+	-	0	+	-	0	+	-	0	+	-	0	
全体	21.7	30.6	47.6	42.9	26.2	30.9	81.1	0.6	18.4	51.0	9.2	39.8	359 ^人
男	18.6	34.0	47.4	37.6	29.9	32.5	78.9	1.0	20.1	41.8	10.8	47.4	194
女	25.5	26.7	47.9	49.1	21.8	29.1	83.6		16.4	61.8	7.3	30.9	165

性別では、4評定とも女性のほうが男性よりもプラスの評定を行なっており、とくに「好き」でその差が大きくなっている。

年齢別では四つの評定ともにほとんど差がない。

学歴別では、「軽快」と「きれい」で中学歴以下が高学歴よりもプラスの評定の割合が高い他はほとんど差が見られていない。

「軽快」……低学歴(25.3)、中学歴(22.5)＞高学歴(8.2)

「きれい」…低学歴(85.3)、中学歴(81.3)＞高学歴(67.3)

また、出身地別では、全般的に大阪と西日本の出身者のほうが東日本出身者よりもプラスの評定に傾いてはいるが、その差は小さい。

以上のように、京都弁では特定の評定(回答)に集中し、かつ、属性別の差もあまり見られないことから考えると、京都弁に対するイメージは比較的安定しているといえよう。

3.2.3. 船場・河内のことば

大阪の調査では、大阪弁の代表として「船場ことば」と「河内弁」に対するイメージを尋ねた。

(1) イメージ喚起度

上記の評定に先立ち、「船場（河内）のことばと言ったら、どんなものを思うかべますか」という質問を行なった。

この質問で、一つまたはそれ以上の回答を寄せた者は表3-38に示すように、船場ことばでは272名（76%）、河内弁では313名（87%）であった。この回答者の割合を仮に「イメージ喚起度」と呼ぶとすれば、河内弁のほうが船場ことばより約10%イメージ喚起度が高いといえる。

これを属性別に見ると、当然のことながら船場・河内弁の双方とも大阪出身者のイメージ喚起度が他より著しく高くなっている。他の属性では、船場こと

表3-38 船場・河内ことばのイメージ喚起度

	船 場 こ と ば				河 内 弁				人 数
	回答者数	回答総数	1人平均 回答数		回答者数	回答総数	1人平均 回答数		
全 体	272 ^人	75.8 [%]	312	1.14	313 ^人	87.2 [%]	358	1.14	359 ^人
男	148	76.3	173	1.17	177	91.2	202	1.14	194
女	124	75.2	139	1.12	136	82.4	156	1.15	165
15～24歳	53	67.1	56	1.06	72	91.1	75	1.04	79
25～34	65	74.7	70	1.08	76	87.4	87	1.14	87
35～44	66	76.7	80	1.21	76	88.4	88	1.16	86
45～54	53	91.4	57	1.08	53	91.4	60	1.13	58
55～69	35	71.4	49	1.40	36	73.5	48	1.33	49
低学歴	111	74.0	131	1.18	129	86.0	148	1.15	150
中学歴	120	75.0	136	1.13	142	88.8	160	1.13	160
高学歴	41	83.7	45	1.10	42	85.7	50	1.19	49
大阪出身	165	82.9	178	1.08	188	94.5	209	1.11	199
西日本出身	100	69.9	117	1.17	113	79.0	128	1.13	143
東日本出身	14	63.6	17	1.21	18	81.8	21	1.17	22

ばでは高学歴層と45～54歳の年齢層が他より高く、15～24歳の層が低いことを除くと他ではほとんど差は見られない。また、河内弁では、男性のほうが女性よりも高く、55～69歳の層が他の年齢層より低くなっている。なお、表3-38の「1人平均回答数」は「回答者数」を母数としたときの値である。

(2) 船場ことば

表3-38で示したように、船場ことばに対するイメージは272名の被調査者から合計312の回答が得られている（1人平均1.14）。その回答内容を大まかに分類すると以下ようになる。

- | | |
|---------------------------------------|----------------|
| ① 商家のことば（商家・商売・繊維などを含む） | 118名(男59, 女59) |
| ② 船場ことばの親族呼称（ゴリョンサン, オエハン, イトハンなど） | 33 (12, 21) |
| ③ 上品なことば | 33 (24, 9) |
| ④ ていねいなことば（大阪の敬語を含む） | 29 (21, 8) |
| ⑤ きれいなことば | 22 (14, 8) |
| ⑥ ②以外の船場ことばの語形（オイデヤス, アキマヘン, ソーデッカなど） | 15 (9, 6) |
| ⑦ 女性的なことば（女性っぽい, まるみがあるを含む） | 14 (10, 4) |
| ⑧ 純粋の大阪弁（大阪弁の代表を含む） | 12 (5, 7) |
| ⑨ その他の回答 | |
| { プラス的評価回答（親しみやすい, 趣きがあるなど） | 13 (6, 7) |
| { マイナス的評価回答（抵抗を感じる, 長ったらしいなど） | 12 (7, 5) |
| { 中立的評価回答（ふつうの大阪弁と同じ, 別階級のことばなど） | 11 (6, 5) |

船場ことばに対しては、「商家のことば」または「船場ことば」の語形をあげる者が最も多く、「上品」、「ていねい」などプラス的评价がこれに次いでいる。一方、マイナス的评价は回答者の4%にすぎず、全体では評価が高いといえる。

さて、船場ことばについて何らかのイメージを回答した者だけに対して、四

つの評定語によるイメージを尋ねた結果を見てみよう。

全体および性別の結果が表3-39である。これによると、プラス的評定の割合は、「きれい」が53%と最も高く、以下「聞きやすい」、「好き」が続き、「軽快」が26%と最も低い。一方、マイナス的評定では、「軽快」と「聞きやすい」とで1割を超えているだけで他は著しく少なくなっている。このことから、自由回答の場合同様、船場のことばのイメージはかなり高いといえる。

これを性別に見ると、「軽快」で男性のほうが女性よりもややマイナス的方向に傾いている他はあまり差がないといえる。

表3-39 船場ことばのイメージ(性別)(%)

	軽 快			聞きやすい			きれい			好 き			人 数
	+	-	0	+	-	0	+	-	0	+	-	0	
全体	26.1	16.2	57.7	48.2	12.5	39.3	52.9	2.2	44.9	41.2	4.8	54.0	272 ^A
男	25.0	20.3	54.7	50.0	11.5	38.5	54.1	1.4	44.6	43.9	4.7	51.4	148
女	27.4	11.3	61.3	46.0	13.7	40.3	51.6	3.2	45.2	37.9	4.8	57.3	124

表3-40 船場ことばのイメージ(年齢,学歴別)(%)

	聞きやすい			きれい			人 数
	+	-	0	+	-	0	
15~24歳	35.8	13.2	50.9	30.2	5.7	64.2	53 ^A
25~34	46.2	7.7	46.2	40.0	3.1	56.9	65
35~44	54.5	12.1	33.3	65.2	1.5	33.3	66
45~54	47.2	17.0	35.8	60.4		39.6	53
55~69	60.0	14.3	25.7	77.1		22.9	35
低学歴	53.2	18.0	37.8	64.0	0.9	35.1	111
中学歴	45.0	8.3	38.3	44.2	2.5	53.3	120
高学歴	43.9	9.8	46.3	48.8	4.8	46.3	41

年齢別では表3-40に示すように、「きれい」と「聞きやすい」とで年齢の上昇に伴いプラス的評定の割合が増加している。また、表には示さなかったが、「軽快」では15~24歳の最も若い年齢層のプラス的評定の割合が37.7%と他より

10%以上高い他は差が見られていない。

学歴別でも、表3-40に示した「きれい」と「聞きやすい」で低学歴層とそれ以外とで差が見られるだけで他ではほとんど差がない。また、出身地別の結果でも大きな差は認められていない。

(3) 河内弁

河内弁に対する自由回答によるイメージは全体の87%の被調査者から総計358(1人平均1.14)得られている。これを分類して示すと、

- ① らんぼうなことば（荒っぽいを含む） 121名(男60, 女61)
- ② きたないことば 121 (72, 49)
- ③ 下品なことば（柄が悪いなどを含む） 51 (25, 26)
- ④ 河内弁の語形（ワレ, オンドレ, 〜ケなど） 27 (16, 11)
- ⑤ 純粹の大阪弁 8 (6, 2)
- ⑥ 早口 4 (3, 1)
- ⑦ その他の回答
- | | | |
|---|----------------------------------|-------------|
| { | プラス的评价回答（親しみやすい, 風流, 庶民的など） | 17 (14, 3) |
| | マイナス的评价回答（ぶっきらぼう, 好きでない, けったいなど） | 9 (6, 3) |

となり, 全般的にマイナス的评价が多く見られている。

表3-41 河内弁のイメージ(性別)(%)

	軽 快			聞きやすい			きれい			好 き			人 数
	+	-	0	+	-	0	+	-	0	+	-	0	
全体	38.3	16.9	44.7	16.0	58.8	25.2	0.3	84.3	15.3	9.9	49.5	40.6	313 ^A
男	35.6	14.7	49.7	19.8	56.5	23.7	0.6	83.1	16.4	13.6	40.1	46.3	177
女	41.9	19.9	38.2	11.0	61.8	27.2		86.0	14.0	5.1	61.8	33.1	136

表3-42 河内弁のイメージ(年齢, 学歴別)(%)

	軽 快			聞きやすい			好 き			人 数
	+	-	0	+	-	0	+	-	0	
15～24歳	58.3	11.1	30.6	25.0	45.8	29.2	15.3	33.3	51.4	72 ^A
25～34	42.1	17.1	40.8	15.8	55.3	28.9	7.9	46.1	46.1	76
35～44	30.3	21.1	48.7	13.2	61.8	25.0	11.8	55.3	32.9	76
45～54	24.5	22.6	52.8	5.7	75.5	18.9	3.8	60.4	35.8	53
55～69	27.8	11.1	61.1	19.4	61.1	19.4	8.3	61.1	30.6	36
低学歴	31.0	17.8	51.2	19.4	59.7	20.9	9.3	49.6	41.1	129
中学歴	45.8	16.9	37.3	12.7	60.6	26.8	12.7	50.0	37.3	142
高学歴	35.8	14.3	50.0	16.7	50.0	33.3	2.4	47.6	50.0	42

河内弁に対する四つの評定語によるイメージの実態を示したのが表3-41である(調査対象は上で何らかのイメージをあげた者だけに限定)。

結果は自由回答の場合同様, 全体的にマイナスの評定に傾いており, とくに

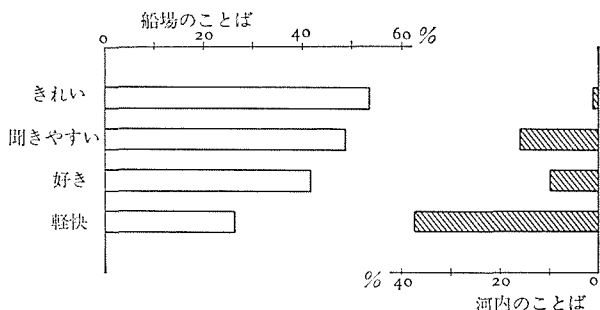


図3-③ 船場・河内ことばに対するプラス的イメージの割合

「きたない」というイメージが多くなっている。その反面、「軽快」では船場ことばよりもプラスの評定が多く見られている。

性別では、「好き」と「聞きやすい」とで男性のほうが女性よりもプラスの評定が多く、「軽快」では少なくなっている。

マイナスの評定が80%を超えている「きれい」を除く3評定について年齢別・学歴別に示したのが表3-42である。年齢別に見ると、全般的に若い層ほどプラスの評定に傾いていることがわかる。また、学歴別では中学歴層が他と若干異なる傾向を示している。

出身地別では大阪出身者の回答が他よりプラスの評定に傾いてはいるがその差は小さい。

なお、船場・河内弁に対する4評定のプラスの評定の割合を比較してみると、図3-③のようにほぼ対称的になっている。すなわち、船場ことばでプラスの評定の高いものは河内弁で低く、また河内弁で高いものは船場ことばでは低くなっている。同じ大阪弁といってもこの二つのことばのイメージは全く違うことがわかる。

3.2.4. 山の手・下町のことば

最後に、東京の調査で行なった「山の手」・「下町」のことばに対するイメージを見てみよう。

(1) イメージ喚起度

ここでも、先の船場・河内弁同様、まず最初に山の手・下町のことばに対する一般的なイメージの自由回答を得ている。

それぞれのことばに対するイメージ喚起度は、山の手のことばが70%，下町のことばが80%と、後者のほうが10%高い（表3-43参照）。

表3-43 山の手・下町ことばのイメージ喚起度

	山の手のことば				下町のことば				人 数
	回答者数		回答総数	1人平均 回答数	回答者数		回答総数	1人平均 回答数	
全 体	445 ^人	69.6 [%]	533	1.20	511 ^人	80.0 [%]	622	1.22	639 ^人
男	194	65.5	231	1.19	233	78.7	281	1.21	296
女	251	73.2	302	1.20	278	81.0	341	1.23	343
15～24歳	77	54.6	91	1.18	92	65.2	109	1.33	141
25～34	134	70.5	152	1.13	162	85.3	195	1.20	190
35～44	112	83.6	134	1.20	117	87.3	145	1.24	134
45～54	65	71.4	87	1.34	73	80.2	95	1.30	91
55～69	57	68.7	69	1.21	67	80.7	78	1.16	83
低学歴	112	67.5	129	1.15	126	75.9	149	1.18	166
中学歴	195	67.5	239	1.23	228	78.9	273	1.20	289
高学歴	138	75.0	165	1.20	157	85.3	200	1.27	184
東京出身	218	75.7	267	1.22	248	86.1	306	1.23	288
東日本出身	177	65.1	205	1.16	199	73.2	239	1.20	272
西日本出身	46	63.0	55	1.20	59	80.8	71	1.20	73

このイメージ喚起度は、山の手・下町ともに、性別では男性が、年齢別では15～24歳が低くなっている。また、学歴別では、高学歴層が他より高く、出身地別では当然ながら大阪出身者のイメージ喚起度が最も高くなっている。この山の手・下町の関係は前述の船場・河内の関係とほぼ平行的になっている点が注目される。恐らく、山の手や船場のことばは現在では使用者が少なくなりやや希薄になっているのに対し、下町のことばや河内弁は良きにつけ悪きにつけ強烈なイメージを保っているからであろう。

(2) 山の手のことば

山の手のことばに対する自由回答によるイメージは表3-43で示したように、被調査者全体の70%により総計533の回答（1人平均1.20）が得られている。

これらを大別して示すと以下のようになる。

① ザアマスことば（アソバセことばを含む）	226名(男88, 女138)
② ていねいなことば	72 (28, 44)
③ 上品なことば	58 (34, 24)
④ きどったことば（飾っている, 他人行儀, きざな どを含む）	40 (19, 21)
⑤ 標準語（東京弁を含む）	37 (20, 17)
⑥ ていねいすぎることば（とってつけた, かた苦し いなどを含む）	24 (13, 11)
⑦ きれいなことば	19 (7, 12)
⑧ 冷たいことば	15 (2, 13)
⑨ その他（お金持ち, つくられたことば, 敬語を並 べたがるなど）	42 (20, 22)

山の手のことばについては回答者の約半数が「ザアマスことば」をあげている。これを除くと, 「ていねい」, 「上品」などのプラス的評価が比較的多く見られる反面, 「きどり」, 「ていねいすぎる」, 「冷たい」などのマイナスの評価も少なくない。この両方向の評価の内容をよく見ると, 実は同じことを肯定的に見るか否定的に見るかの違いでしかない。

ここで回答を寄せた者だけについて, 四つの評定語によるイメージを求めた結果が表3-44である。

表3-44 山の手ことばのイメージ(性別)(%)

	軽 快			聞きやすい			きれい			好 き			人 数
	+	-	0	+	-	0	+	-	0	+	-	0	
全体	10.3	39.3	50.3	36.6	28.1	35.3	60.0	3.6	36.4	22.2	27.9	49.9	445 ^A
男	12.4	43.3	44.3	40.7	27.3	32.0	58.8	4.1	37.1	19.6	32.0	48.5	194
女	8.8	36.3	55.0	33.5	28.7	37.8	61.0	3.2	35.9	24.3	24.7	51.0	251

全体的な傾向としては, 「きれい」と「聞きやすい」でプラスの評定が多く, 「軽快」でマイナス的傾向が多くなっている。また, 「好き」では約半数が中立的回答で, 残りはプラス・マイナスの評定がほぼ同程度となっている。

性別では, 「軽快」と「好き」で男性のほうが女性よりもややマイナス的評定

に傾いており、「聞きやすい」ではプラスの評定に傾いているといえる。

年齢別に見ると（表3-45参照）,「聞きやすい」,「きれい」,「好き」の3評定では年齢の上昇に伴いプラスの評定の割合が増加し,「軽快」ではマイナスの評定が増える傾向にある。この傾向は「きれい」でとくに著しい。

表3-45 山の手ことばのイメージ(年齢別)(%)

	軽 快			聞きやすい			きれい			好 き			人 数
	+	-	0	+	-	0	+	-	0	+	-	0	
15～24歳	10.4	24.7	64.9	32.5	24.7	42.9	36.4	2.6	61.0	15.6	19.5	64.9	77 ^人
25～34	10.4	38.1	51.5	29.1	35.1	35.8	53.0	5.2	41.8	18.7	30.6	50.7	134
35～44	5.4	42.0	52.7	36.6	22.3	41.1	70.5	1.8	27.7	20.5	30.4	49.1	112
45～54	20.0	47.7	32.3	36.9	36.9	26.2	66.2	6.2	27.7	27.7	33.8	38.5	65
55～69	8.8	47.4	43.9	59.6	17.5	22.8	80.7	1.8	17.5	36.8	21.1	42.1	57

学歴別では,「きれい」で,

低学歴 (66.0), 中学歴 (61.0), 高学歴 (53.6)

と僅かながら高学歴層のプラスの評定の割合が低いことを除き,他の3評定ではほとんど差がない。

また,出身地別ではこれといった差は見られないが,東京出身者を世代別に見ると,「きれい」を除く3評定で2世のほうが3世以上よりもプラスの評定に傾いている。

「軽快」……………2世 (15.1) > 3世以上 (5.4)

「聞きやすい」…2世 (43.4) > 3世以上 (30.4)

「好き」……………2世 (31.1) > 3世以上 (18.8)

(3) 下町のことば

下町のことばに対する自由回答によるイメージは全体の80%の被調査者から得られ,その総数は延べ622と山の手に対するより約90多い。その内容は以下の通りである。

① ベランメエことば (テンポが早い, 威勢がいいなどを含む)

132名(男73, 女59)

② 親しみやすいことば

87 (31, 56)

③ さっぱりしたことば (あけっぴろげ, 率直などを

含む)	80 (40, 40)
④ 荒っぽいことば(らんぼう, ぞんざいなどを含む)	69 (27, 42)
⑤ はぎれのよいことば(明瞭, はきはきなどを含む)	61 (22, 39)
⑥ チャキチャキ(江戸っ子ことばを含む)	36 (16, 20)
⑦ ヒとシの混同(シとスの混同を含む)	22 (12, 10)
⑧ 暖かい感じのことば(人情的, 人間的などを含む)	14 (7, 7)
⑨ その他の回答	
{ プラス的評価回答(美しい, 上品, 色っぽいなど)	16 (4, 12)
{ マイナス的評価回答(下品, きつい, なれなれしいなど)	31 (11, 20)
{ 中立的評価回答(沢村貞子的, 男女のことばの区別がないなど)	74 (38, 36)

その内容は「荒っぽい」を除くと全般的に好意的であり、とくに江戸弁のもつはぎれのよさや下町っ子のさっぱりした気質に関連する回答が多くなっている。

四つの評定語によるイメージでもほぼ同様で、「きれい」を除く他の3評定でプラス的評定が半数以上を占め、とくに「軽快」で80%の回答を得ている(表3-46参照)。

表3-46 下町ことばのイメージ(性別)(%)

	軽 快			聞きやすい			きれい			好 き			人 数
	+	-	0	+	-	0	+	-	0	+	-	0	
全体	79.5	3.5	17.0	55.2	17.2	27.6	7.6	29.4	63.0	52.6	6.5	40.9	511 [△]
男	76.0	5.6	18.5	58.0	15.5	26.6	9.4	31.3	59.2	56.2	4.3	39.5	233
女	82.4	1.8	15.8	52.9	18.7	28.4	6.1	27.7	66.2	49.6	8.3	42.1	278

性別では、「軽快」で女性のほうが、また、「好き」で男性のほうがよりプラス的評定に傾いており、「きれい」では女性のほうが中立的回答が多くなっている。

年齢別では「聞きやすい」のプラス的評定が、

15～24 歳 43.5 % 25～34 歳 50.6 % 35～44 歳 58.1 %

45～54 歳 57.5 % 55～69 歳 74.6 %

と年齢が高くなるほど増加する傾向が見られる他はほとんど差がない。

学歴別では、以下の2評定で低学歴層とそれ以外とでプラス的評定に差が認められている。

「軽快」……………低学歴 (75.4) < 中学歴 (80.3), 高学歴 (81.5)

「聞きやすい」…低学歴 (69.0) > 中学歴 (53.5), 高学歴 (46.5)

また、出身地別では、「好き」において、

東京 (57.3) > 西日本 (49.2), 東日本 (48.2)

と、東京出身者のプラス的評定が高いことを除くとほとんど差は認められない。

なお、山の手・下町のことばについてのプラス的評定の割合を比較すると、船場・河内弁の場合と同様に、二つのことばのイメージは対称的であることがわかる (図3-④参照)。

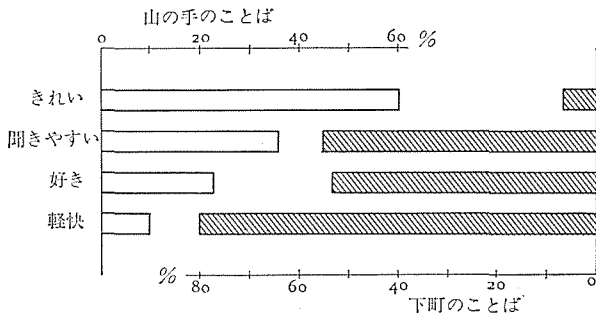


図3-④ 山の手・下町ことばに対するプラス的イメージの割合

(4) 山の手・下町の地域イメージ

東京の地形は中央部から西部にかけての台地と東部の低地とからなっている。一般に、台地の市街地を「山の手」、低地の市街地を「下町」と呼ぶが、その概念の指す範囲は時代により変化しているといわれている。

地名辞典 (1978) によると、山の手は江戸時代から明治時代にかけては「およそ本郷・小石川・牛込・四谷・赤坂・麻布の各区を指したが、……………大正12年の関東大震災以後、周辺農村部へ住宅地が拡大したため、山の手が中野・杉並・目黒・渋谷・世田谷区にまでひろがり、今日もお西の方へと山の手は概念は拡大しつつある」とされている。

表3-47 山の手・下町の地名回答率

	両方 回答	山の手 のみ 回答	下町 のみ 回答	両方 無回答	人 数
全体	74.6	1.7	13.5	10.2	639 ^A
男	79.4	2.0	9.5	9.1	296
女	70.6	1.5	16.9	11.1	343
1世	68.1	1.4	18.5	11.9	351
2世以上	82.6	2.1	7.3	8.0	288

拡大に伴い、下町の範囲はさらに東へとのび、江東・墨田・荒川・足立・葛飾・江戸川の各区も下町と考えられるようになった」とされている。

そこで、この調査ではことばのイメージを調べる前に、「山の手（下町）といったら何を思いうかべるか」を尋ねてみた。

被調査者の回答のうち地名があげられたものの割合を示すと表3-47のようになる。ここでもことばについての自由イメージの場合と同じく下町のほうが山の手よりも10%程度多く想起されている。

回答を区名ごとにまとめると山の手は、

世田谷（162）、渋谷（88）、杉並（78）、新宿（68）、目黒（64）、大田（55）、港（46）、中野（28）、豊島（28）、文京（23）、千代田（20）、品川（17）、練馬（8）、台東（7）、中央（6）、板橋（3）、北（2）

となり、関東大震災以後山の手となった地区をあげる者が圧倒的に多い。また、町の名で示すと5名以上が答えたのは以下の12となっている。

田園調布（44）、青山（17）、目白（13）、麻布（11）、成城（9）、上野（9）、麴町（8）、四谷（8）、荻窪（8）、池袋（6）、小石川（5）、代々木（5）
次に、下町について見ると、区名では、

台東（325）、江東（170）、墨田（103）、葛飾（48）、江戸川（39）、中央（31）、足立（30）、荒川（30）、千代田（29）、大田（13）、品川（10）、北（7）、港（4）、文京（2）、板橋（1）、練馬（1）

と、やはり比較的新しく下町に含まれるようになった地域をあげる者が多い。なお、5名以上が答えた町の名は以下の通りである。

浅草（244）、上野（50）、深川（41）、神田（23）、日本橋（13）、本所（13）、下谷（9）、亀戸（7）、錦糸町（7）、木場（5）、銀座（5）

また、下町は江戸時代前期では「神田・京橋・日本橋を中心とした地域であり、……江戸後期から明治期にかけ下町の範囲はひろがり、浅草・下谷が含まれるようになった。……大正期以降現代にかけて、市街地の

また、地名以外の何らかの地域に関する回答について見ると、山の手に対しては 518 名（全体の 81.1 %）の被調査者から延べ 635 の回答が得られている。これをいくつかに分類して示すと、

① 高級住宅街（お屋敷町を含む）	175名(男59, 女116)
② 環境のよい所（閑静，緑が多いなどを含む）	111 （ 49, 62）
③ 住宅街	93 （ 54, 39）
④ 上流階級（旧家，知識階級などを含む）	68 （ 38, 30）
⑤ 個人主義（近所づき合いがせまい，閉鎖的などを含む）	37 （ 18, 19）
⑥ 高台	27 （ 14, 13）
⑦ 上品	19 （ 6, 13）
⑧ その他（郊外，にぎやか，ビル街，サラリーマンが多いなど）	105 （ 52, 53）

と，住環境のよさをあげる者が圧倒的に多い。

一方，下町に対しては 554 名（86.7 %）から延べ 723 回答が得られたが，その内容を示すと以下ようになる。

① 人情味がある（連帯感がある，親しみやすいなどを含む）	176名(男68, 女108)
② ゴミゴミしている（ゴチャゴチャしている，にぎやかなどを含む）	128 （ 54, 74）
③ 庶民的	123 （ 48, 75）
④ 商店・町工場（商業地，職人などを含む）	74 （ 45, 29）
⑤ 環境が悪い（空気が悪い，騒がしいなどを含む）	34 （ 15, 19）
⑥ アパート・長屋（長屋的，家がたてこんでいるなどを含む）	24 （ 15, 9）
⑦ 川が多い（0メートル地帯を含む）	14 （ 9, 5）
⑧ 貧乏	13 （ 11, 2）
⑨ その他（観音さま，ざっくばらん，住みよい，寅さん，祭など）	137 （ 70, 67）

ここでは山の手とは逆に、住環境の悪さが指摘される反面、ことばの自由イメージ同様に、下町の人情のよさが強調される結果となっている。

最後に、地域イメージの回答が得られた者について、その内容が好意的か否かについて判定した結果を示し、稿を閉じることとする。

山の手……プラスの評価 52.6 % マイナスの評価 7.4 % 中立的評価 21.1 %

下町……プラスの評価 45.9 % マイナスの評価 16.0 % 中立的評価 24.9 %

なお、ここで取り上げた各四つのことばを総合して数量化第Ⅲ類によって分析した結果を 7.1. に示したのでそちらも参照されたい。

3.3. 1日の言語生活

大都市に住む市民は、日常どのような言語生活をしているのだろうか。東京と大阪を大都市の代表として、聞く・話す・読む・書くのそれぞれに属する「ラジオを聞く」「職場で同僚と話す」といった各種言語行動を、どのくらいの頻度で実現しているのか、アンケート調査の結果によって概観してみよう。

その調査は、被調査者となった各人に、「あなたは、きのう、どのようなことをしましたか」とたずね、聞く・話す・読む・書くに分けた各言語行動の、「した」と思う項目に丸をつけてもらうものである。

この調査は、「きのう」という1日に限定してたずねるところに意味がある。その1日は、被調査者各人によってちがうであろう。ある人の場合は、それが日曜日で、1日テレビを見ながら、ごろごろして過ごしたかも知れない。ある人は職場で、次々に変わる客に接し、業務上の話もすれば、世間話もするという忙しい1日であったかも知れない。それでいいのである。それらを総合することによって、例えば、職場で会議をするということは、ある1日を見たとき、10人のうちの何人がすることなのかという市民生活の実態が見えるであろう。それは、また、1人の平均的市民を仮定したとき、その人が10日のうち何日の割で経験するものなのかを示すことにもなる。

調査票の内容は、本書1.2.4.を参照されたい。

被調査者の数は、東京が639人（男296，女343）、大阪が359人（男194，女165）である。被調査者の条件は、また、学歴、職業、居住経歴等によっても分けることができるようになっているが、この概観ではそれらの分類は用いず、全体、男女別、年齢別だけで見ることにする。

また、以下の概観では、数値には、実人数を用いず、すべて、そのグループ

内でのパーセントを用いる。

3.3.1. 家庭内でどんな種類の話をするか

家庭内での話は、何と言っても、「雑談」というのが圧倒的に多いであろうから、これを別にして扱い、それを食事と結びつけてたずねた。

まず、雑談を除く談話行動を、「した」と答えた人の比率を表3-48に示す(以下、表中の配列は原則として東京の順位による)。

東京も大阪も、大体似た結果になっている。順位で、「注意・こごと」の位置が、東京では「相談」「さしずした」に先んじて3位になっているのに対して、大阪では、その二つのあとに回って5位になっているだけが相違で、あとは同順位になっている。数値もかなり近い。

「用事の話」が5割を超え、「客と応待」「注意・こごと」「相談」「さしずした」が3割前後、「セールスマン等と応待」が2割程度、「さしずされた」が1割強、「言い争い」は極めて少なく5%程度となっている。

家庭は、生活の基盤となる所であるから、夫婦、親子、兄弟の間、また外来者との間で何かと用事の話が交されるわけで、だれでも2日に1度はそれを経験するという勘定になるようだ。そして、家庭は、やはり、いこいの場なのだろう、言い争いは容易なことではないようで、結構なことである。

男女間の比較をすると、大体において、似た数を示しているが、僅かながら

表3-48 家で話をしましたか(性別)(%)

	全 体	性			全 体	性	
		男	女			男	女
用事の話	52.4	49.3	55.1	さしずした	24.9	25.7	24.2
	54.3	50.0	59.4		29.0	31.4	26.1
客と応待	28.2	26.4	29.7	セールスマン 等と応待	21.1	12.2	28.9
	33.4	34.5	32.1		16.7	11.9	22.4
注意・こごと	25.5	17.2	32.7	さしずされた	12.8	8.8	16.3
	23.7	20.6	27.3		16.4	13.4	20.0
相 談	25.0	25.0	25.1	言 い 争 い	4.5	5.4	3.8
	31.5	29.4	33.9		5.8	6.2	5.5

(注) 表中左上の数字は東京、右下は大阪。

女子の方が高い傾向がある。例外的に男子の方が高いのは、東京も大阪も「さしずした」で、東京では26%対24%と僅差、大阪では、それよりは差があって31%対26%となっている。いかに戦後

の日本で女子が強くなったとはいっても、まだ、さしずをするのは、どちらかといえば男子だということであろうか。しかし、これは、差とは言っても、極めて僅かな差で、到底差があるとはいえない程度のものだ。ただ、「さしずされた」が、東京で男子9%対女子16%、大阪では男子13%対女子20%と、女子の方が多いことと併せて見ると、まあ、一つの姿が浮かんで来るようだ。

大阪での「客と応待」が僅かに男子の方が高いが、これも差というほどではない。東京の「相談」と大阪の「言い争い」は男女同比率である。あたかも、男女が相談し、男女が言い争うようで、何だかおかしくもある。

男女差がややはっきり出ていて女子の方が高いのは「注意・ごと」「セールスマン等と応待」で、前者は、母親の口うるささを表わし、後者は、昼間家庭にいたのが女子であることを表わしていると言えそうな気がする。「注意・ごと」を年齢別で見ると、30代後半から40代前半が頂上をなしている。この辺がいちばん母親として気のもめる時期なのであろうか。

次に年齢別に見てみよう(表3-49参照)。全般的に、特別の片寄りは見つけない
表3-49 家で話をしましたか(年齢別)(%)

	年						齢					
	15 } 19	20 } 24	25 } 29	30 } 34	35 } 39	40 } 44	45 } 49	50 } 54	55 } 59	60 } 64	65 } 69	
用 事 の 話	46.0	42.3	53.7	40.2	63.8	56.9	66.7	55.0	53.1	61.5	48.0	
	47.5	38.5	76.1	53.7	63.2	45.8	43.3	71.4	50.0	60.9	33.3	
客 と 応 待	14.3	19.2	25.9	31.7	30.4	33.8	19.6	35.0	46.9	30.8	48.0	
	25.0	28.2	28.3	31.7	36.8	39.6	36.7	46.4	28.6	34.8	33.3	
注 意 ・ こ こ と	14.3	7.7	22.2	32.9	49.3	40.0	33.3	15.0	31.3	3.8	12.0	
	12.5	10.3	13.0	34.1	39.5	41.7	13.3	21.4	28.6	30.4	0.0	
相 談	22.2	14.1	29.6	15.9	31.9	36.9	29.4	25.0	18.8	30.8	20.0	
	22.5	30.8	34.8	24.4	23.7	37.5	36.7	42.9	42.9	34.8	16.7	
さしずした	23.8	11.5	19.4	25.6	37.7	27.7	27.5	37.5	31.3	7.7	32.0	
	22.5	23.1	23.9	34.1	34.2	35.4	23.3	39.3	28.6	30.4	16.7	
セールスマン 等 と 応 待	6.3	14.1	17.6	25.6	21.7	35.4	15.7	27.5	40.6	15.4	24.0	
	5.0	12.8	15.2	19.5	28.9	20.8	3.3	21.4	14.3	21.7	25.0	
さしずされた	25.4	11.5	13.9	14.6	15.9	9.2	11.8	7.5	3.1	7.7	4.0	
	45.0	25.6	15.2	14.6	10.5	12.5	0.0	17.9	0.0	4.3	16.7	
言 い 争 い	12.7	1.3	2.8	3.7	7.2	6.2	3.9	5.0	3.1	0.0	0.0	
	7.5	12.8	0.0	4.9	13.2	4.2	3.3	10.7	0.0	0.0	0.0	

(注) 表中左上の数字は東京、右下は大阪。

表3-50 家人との雑談(性別)(%)

	全 体	性	
		男	女
夕食時	62.6 71.0	55.1 70.1	69.1 72.1
お茶・夜食時	41.3 37.0	35.8 33.0	46.1 41.8
朝食時	31.3 27.3	26.7 23.7	35.3 31.5
昼食時	15.8 20.6	13.9 17.5	17.5 24.2
その他	12.1 12.3	13.5 10.3	10.8 14.5

(注)表中左上の数字は東京, 右下は大阪。

きのうという日に言い争いをした人が1人もいなかった。

家庭内での言語行動の王様は、雑談である。雑談は食事につきものであると思われるので、朝食時、昼食時、夕食時に、お茶・夜食の時を加えてたずねた結果は、表3-50のとおりである。

夕食を取りながらの一家だんらんの雑談が断然引き離して1位、あと「お茶・夜食時」「朝食時」「昼食時」「その他」と続く順位は東京・大阪変わらず、各数値も相当近い。

家族がそろっていて、夕食をむつつり食べる人というのは、確かにめずらしいであろう。昔の武士の家でもあれば、食べながらの雑談は禁物であったかも知れないが、今は、日本人もおしゃべりになって来たから、話をしないで食べる方が異常と見られる。

朝食時の雑談が3割程度にとどまるのは、朝は忙しくておしゃべりをしていひまがないのであろうし、男は新聞を見ながら食べるという例のくせで、話の方が減るのであろう。昼食時の雑談がさらに少ないのは、ふだんの日に昼食を家庭で取ることが少ないからで、昼食に限ってむつつり食べるということではあるまい。「お茶・夜食」というのは、はっきりしない聞き方であったが、それでも4割もの人が「した」と答えている。夕食を6時か7時ごろ取るとすると、8時か9時ぐらにテレビでも見ながらお茶を飲むという習慣がかなり行きわたっているであろう。そのときの雑談は、いちばんリラックスしたもの

くいが、ただ一つ、「さしずされた」が、東京も大阪も、20歳未満のグループにおいて最も高い数値を示し、特に大阪の45%が他を遠く引き離しているのが目立つ。さしずされるということが、いわゆる目下の行動であることを話していよう。中年を過ぎると、次第にさしずされることが減っていくようで、東京の数値には、その傾向がはっきり出ている。

また、年齢が高くなると減るらしいものにも言い争いがある。60歳以上のグループでは、

かも知れない。

男女別では、全体に女子の方が高く、反対なのは、東京の「その他」しかない。女子の方が家にいる時間が長いのが根本の原因であろうが、家の中で女子の方がよく話すという事実も確かにあるだろう。

年齢別の傾向は、格別あるように思えないので省略した。以下同様に年齢差の见えない場合は表には示さないこととする。

3.3.2. 職場的公共社会でどんなタイプの話をするか

アンケートのことは「職場や学校や会合で話をしましたか」である。学校は学生にとって、活動の主場面である。「会合」といったのは、PTAの会合とか、町内会や商店会の役員会といった類のものを念頭に置いている。答えた人もそう考えたという保証はないが、この問いで、職場に代表されるなかば閉じられた公共社会での口頭コミュニケーションの姿をとらえようと意図した。なかば閉じられたというのは、職場は交渉をもつ人の顔ぶれが大体決まっていることからいうので、閉鎖的という意味ではない。

この問いも、どういう種類の人と話すかということと、どういう種類の話をするかということとを別にしてたずねた（表3-54参照）。

友だちや同僚と、水平コミュニケーションを交すことが最も大きくて5割に及び、初めての人や心安くない人と話をすることは少なく、それぞれ1割前後となっている。職場的社會がなかば閉じられていることの当然の結果である。その中間に先生や上役と、部下や生徒、及び、客がある。客と話す率だけ大阪の方が約1割高くなっているので、その分だけ順位が変動している。あとは極めて似た数値が出ているので、大体これが実態なのだろう。大阪の職場的社會の方が少し「客」が

表3-54 職場や学校や会合で話をしましたか(性別)(%)
(その1-だれと話したか)

	全 体	性	
		男	女
友達・同僚	49.9 47.6	59.5 56.7	41.7 37.0
先生・上役	27.1 22.8	34.1 25.8	21.0 19.4
客	23.9 32.6	34.5 39.2	14.9 24.8
部下・生徒	13.5 13.1	23.6 18.6	4.7 6.7
初めての人	9.4 12.5	12.2 13.4	7.0 11.5
心安くない人	6.6 7.8	9.8 7.7	3.8 7.9

(注)表中左上の数字は東京、右下は大阪。

表3-52 職場や学校や会合で話をしましたか(年齢別)(%)
(その1—だれと話したか)

	年					齢					
	15 } 19	20 } 24	25 } 29	30 } 34	35 } 39	40 } 44	45 } 49	50 } 54	55 } 59	60 } 64	65 } 69
友達・同僚	88.9	71.8	43.5	48.8	46.4	38.5	51.0	35.0	21.9	30.8	32.0
	72.5	66.7	54.3	36.6	52.6	29.2	46.7	46.4	35.7	30.4	25.0
先生・上役	36.5	42.3	31.5	25.6	26.1	18.5	23.5	20.0	21.9	11.5	8.0
	27.5	33.3	28.3	17.1	21.1	20.8	16.7	17.9	14.3	26.1	16.7
客	3.2	17.9	29.6	20.7	31.9	30.8	37.3	25.0	18.8	23.1	20.0
	12.5	46.2	34.8	31.7	34.2	31.3	30.0	42.9	35.7	34.8	25.0
部下・生徒	3.2	10.3	13.0	12.2	13.0	16.9	27.5	22.5	12.5	7.7	12.0
	0.0	15.4	4.3	17.1	18.4	18.8	20.0	17.9	7.1	13.0	8.3
初めての人	4.8	11.5	11.1	8.5	8.7	12.3	7.8	7.5	6.3	7.7	16.0
	2.5	15.4	15.2	12.2	7.9	20.8	6.7	17.9	14.3	13.0	8.3
心安くない人	4.8	10.3	6.5	7.3	7.2	7.7	7.8	5.0	3.1	0.0	4.0
	0.0	17.9	6.5	2.4	2.6	12.5	3.3	17.9	7.1	8.7	8.3

(注) 表中左上の数字は東京、右下は大阪。

多いのか、無意味な差か、わからないが、多少意味があると見てもおもしろいではないか。

男女の差は明らかにあり、ほぼ、すべての項目で男子が高いといえる。これは、家庭の場合と丁度逆で、まずは、男子の方が職場をもっている比率が断然高いという事実支配されている。その上に、職場で男子の方がよく話すといえるかどうか、これだけではわからない。上位の人と話す度合が下位の人と話す度合より高く、大体、倍になっている。一つの組織体の中で、上位者の数が下位者の数より少ないのが普通であろうから、上の人と話した人の数の方が多くなるわけである。

年齢別では、友だちや同僚と話した人の割合が、いちばん若い年代の2グループにおいて圧倒的に高いのが目立つ(表3-52参照)。それより上の年代では、格別数値に変化がない。反対に、客と話すということは、20歳前のグループでは非常に少ない。職場で客と話すということは表向きの行為だから、はたち前の人にはそういうケースが少ないのだろう。それよりも、はたち前の人ほとんどが学生であろうから、学校に客が来て学生が会うわけではないのである。案の定、東京の職業別の数値を見ると、経営者 54.4%, 給与生活者 30.9%, 家

業従事者 28.0 %, 主婦 8.0 %, 学生 1.4 %, 無職 11.7 %, その他 46.7 %となっている。

主婦と学生は、職場的社会で客と会って話をするのが非常に少ない。主婦はほとんど職場をもたないから当然だが、学生はいつも学校にいるのに、客と会うことはないのである。

年齢にもどると、20歳前の人はそのようであったが、20歳を過ぎると、にわかに客と会うようになるらしい。東京では、そこがそうはっきりはしないが、大阪のデータでは20～24歳のグループが何と最高の数値(35%)を示しており、その急激な変化に驚かされる。

次に、職場的社会でどんな種類の話をするかを見よう(表3-53参照)。

雑談の4割以上から会議の5%程度まで、東京と大阪と、何と結果がよく似ていることだろう。順位は全く同じで、数値も非常に近い。男女別の数値まで、随分よく似ているのである。

職場的社会は仕事をするための場所で、いこいの場所ではないから、雑談の比率は、最高ではあるが、家庭でのそれに比べれば、やはり低い。

相談をする割合は、東京でも大阪でも、家庭でのそれとあまり変わらず、25%から32%の間にある。私たちの日常生活で、人と相談をするということは、大体同じような調子で、どこでも行なわれるものなのだろう。

交渉や話し合いとなると、相談・打合せより大分シビアになるので、経験する割合は減り、相談の6割程度になるようである。さしずを「した」と「された」では、した方が多いが、その開きは、家庭におけるほどではない。家庭では、さしずされる存在が若い年代に片寄っていたが、職場では、この傾向があまり見えない。職場でさしずをするかされるかは年齢の問題ではないらしい。

男女差がすべてに出ているのは、だれと話すかの数値に見たのと同じことの現われである。

表3-53 職場や学校や会合で話をしましたか(性別)(%)
(その2-どんな種類の話をしたか)

	全 体	性	
		男	女
雑 談	41.9	50.3	34.7
	42.9	45.9	39.4
相談・打合せ	30.2	43.9	18.4
	32.3	40.7	22.4
交渉・話し合い	17.4	24.3	11.4
	18.7	25.3	10.9
さしずした	13.5	19.6	8.2
	15.6	21.6	8.5
質 問	12.5	15.2	10.2
	12.3	14.4	9.7
さしずされた	10.2	13.9	7.0
	10.3	12.4	7.9
会 議	4.9	9.1	1.2
	3.3	3.6	3.0

(注) 表中左上の数値は東京、右下は大阪。

表3-54 松江市民688人についての調査結果〔%〕

	全 体	性	
		男	女
雑談	47.1	56.9	42.2
相談	37.8	50.1	28.4
交渉・話合い	25.7	37.0	17.1
さしずした	17.7	29.6	8.7
質問	16.1	19.9	13.3
さしずされた	10.0	12.1	9.7
会議	5.4	10.8	1.3

職場的社会での話で痛感するのは、会議を経験することの少なさである。会議は、私たちの感じでは、職場では、ほとんど毎日やっているような気がするのだが、こうして実態を調べてみると、決してそうではなく、大体20日に1度経験する程度のものであるようだ。1963年に、松江市でこれと同じ調査をしたときに、これは感じたことで、東京や大阪のような大都市では、もう少しちがうのではないかと思ったが、今引き比べてみると、実に結果がよく似ている。松江のデータをこの部分だけ引いてみると、表3-54のようになる（林，1966）。

全体に松江の場合の方が多少高目の数値が出ているが、順序は同じであり、全体と男女の数値も、東京・大阪の場合と非常に近い。会議の5%は東京の場合と全く同じである。大都市でも中都市でも、職場的社会でのコミュニケーションのありさまは、大体同じであることがわかる。

3.3.3. 一般社会でどんな話をするか

家庭でも職場でも学校でもなく、世の中という開かれた社会へ出たときに、私たちがどんなコミュニケーションをしているのかを、次に見よう（表3-55参照）。

アンケートのことは、「家庭」「職場」と聞いて来たあとに、「その他のところで話をしましたか」となっている。

これまでのものとちがって、順序は東京と大阪とで微妙にちがって来るが、これは、全体に数値が低いために僅かな差で順位が入れかわる結果である。いくつかの項目をグループにしてみると、大体同じようなグループ配置になる。

「買物で店の人と」「隣近所の人と」とは、ともに3割を超えるもので、トップグループをなす。これらは、ともに、圧倒的に女子が高い。デパートや近所の店で買い物をするときのことを考えてみると、確かに、男は、品物を受け

表3-5 　その他のところで話をしましたか(性別)(%)

	全 体	性			全 体	性	
		男	女			男	女
買物で店の人と	37.4 30.4	20.3 11.3	52.2 52.7	人の家を訪ねて	10.8 11.4	10.5 10.8	11.1 12.1
隣近所の人と	34.6 33.1	22.0 21.1	45.5 47.3	道などを教えた	6.1 4.2	8.4 4.6	4.1 3.6
連れと歩きながら	22.2 18.9	19.6 17.0	24.5 21.2	医者や看護婦と	5.9 8.9	4.4 5.2	7.3 13.3
立ち話	18.3 15.9	14.2 14.4	21.9 17.6	道などを聞いた	3.4 2.2	4.1 3.6	2.9 0.6
レストラン・喫茶 店で	16.9 22.3	24.3 33.5	10.5 9.1	待合室で	2.8 3.9	3.0 3.1	2.6 4.8
電車やバスの中で	11.6 10.6	11.5 11.9	11.7 9.1	弁護士や会計士と	0.9 0.3	1.7 0.5	0.3 0.0
受付や窓口で	10.8 8.6	13.2 9.3	8.7 7.9				

(注) 表中左上の数字は東京、右下は大阪。

取れば「はい、さようなら」であるが、婦人たちは、何かと、品物の由来、品質、使い方などについて、店の人と話すことが多いようである。

「連れと歩きながら」「立ち話」「レストラン・喫茶店で」の三つは、2割前後を占めるもののグループであるが、前の二つは小差で女子の方が高いのに、レストランや喫茶店で話すことが、かなりはっきりと、男子に特徴的であるという結果になっている。そのレストラン・喫茶店はまた、表は省略したが年齢別で20～24歳のところが東京(37%)でも大阪(36%)でもピークになっているのは偶然ではなさそうだ。これに対し、「連れと歩きながら」は15～19歳のところが約50%と目立って高い。これは、いかにもそうらしい結果ではないか。

「電車やバスの中で」と「人の家を訪ねて」とは、ともに1割程度で、男女差が非常に少なく、東京では全く同じになっている。しかし、この二つは明らかに異なる種類の行動で、電車やバスの方は最年少グループに著しく片寄るのに対して、人の家を訪ねる方は年齢に伴う傾向があるようには思えない。

そのほかは、反応した人の数が至って少なく、到底傾向を見出すようなことはできそうもない。

3.3.4. 大勢の人に話す機会はあるか

表3-56 大勢の人にむかって話しましたか[%]

	全 体		全 体
報告・説明	5.2 4.7	マイクで	1.6 1.7
さしず	2.8 2.2	演説	0.9 0.6
講義・訓話等	2.0 1.4	宣伝・広告	0.5 1.1
案内・お知らせ	1.9 3.1	メガホンで	0.5 0.0

(注) 表中左上の数字は東京、右下は大阪。

アンケートでは、次に、「大勢の人にむかって話しましたか」とたずねたが、この各項目に「した」と答えた人は、話にならぬほど少ない。全体の結果を掲げるにとどめるが、メガホンなどは、そんな品物がなくなっているのだろう。ひとりが大勢の人にむかって話すという行動は、やはり、日常普通のものではないのである(表3-56参照)。

3.3.5. 電話でどのくらい話すか

電話については、「電話で話しましたか」とたずね、「かけた」「受けた」の2項目のみを掲げた。

電話は、1対1のコミュニケーション手段であるから、日本中の人を調べれば、かけた人の数と受けた人の数とは等しくなるはずだが、どういうものか、東京でも大阪でも、申し合わせたように、受けたという人が、かけたという人より1割強多い。

受けた方には男女差が感じられないが、かけた方では、男子の方が約1割多くなっている。現代の電話トークには、かなり、おしゃべりを楽しむという面

表3-57 電話で話しましたか(性別)[%]

	全 体	性	
		男	女
受けた	65.4 64.6	66.2 62.9	64.7 66.7
かけた	54.1 53.2	59.8 57.2	49.3 48.5

(注) 表中左上の数字は東京、右下は大阪。

もありそうに思うが、総じていえば、やはり、電話は用事があってかけるものであるから、この1割の差は、用事の主体が幾分男子に傾くことを語っているのであろう。

年齢別には、一定の傾向を見出すことがむずかしいが、電話を受けた人の比率が東京も大阪も40～44歳の、いわゆる働き盛りの年

代のところが80%, 77%と最高になっているところに、幾分、何かの必然性を思わせるものがある。相談などを、いちばんもちかけられやすいのがその辺の年齢であるのかも知れない。しかし、この数値は、決して、はっきりしたことを語れるほどのものではない。

結局、電話は今日の都会生活には不可欠のもので、家庭での雑談に並ぶくらいよく経験されることだということが確認されたにとどまる。

3.3.6. 何をどのくらい聞き、読み、書いたか

(1) 何をどのくらい聞か

「聞きましたか」という問いに、ラジオ、テレビ以下10項目を掲げたが、とにかく、テレビに接する機会が多くて、9割の人が聞いていること、ラジオがその半分ぐらいであること、そして、テレビの方は僅差で女子の方が多く接しているが、ラジオの方は僅差とはいえない差で男子の方が多く聞いているということがわかる。そのほ

かは、非常に少数で、何かの傾向を見つけることはむずかしいのだが、無理に言うならば、外国語が東京7%であるのに対して、大阪は3%と半分以下になっている。東京という社会が大阪より多少外国にむかって開いているということがあ

るのだろうか。
(2) 何をどのくらい読

表3-8 何を読みましたか(性別)(%)

	全 体	性			全 体	性	
		男	女			男	女
新 聞	86.9 90.0	89.9 95.9	84.3 83.0	小 説	17.7 11.7	15.5 7.2	19.5 17.0
テレビの字幕	36.9 42.1	37.5 40.2	36.4 44.2	看 板	15.2 14.5	18.6 14.9	12.2 13.9
広告のちらし	33.5 31.8	27.7 23.2	38.5 41.8	辞 書	14.1 11.1	14.9 12.4	13.4 9.7
週 刊 誌	28.5 26.7	33.8 28.9	23.9 24.2	本	13.3 9.5	13.2 10.3	13.4 8.5
はがき・手紙	26.4 22.6	25.0 20.1	27.7 25.5	回 覧 板	11.4 11.1	7.4 11.9	14.9 10.3
書 類	25.2 20.9	36.5 23.7	15.5 17.6	掲 示	11.3 6.1	13.9 7.7	9.0 4.2
ポ ス タ ー	19.4 17.0	23.3 18.0	16.0 15.8	外 国 語	7.8 4.2	10.5 5.2	5.5 3.0
雑 誌	19.2 17.5	21.6 20.1	17.2 14.5	漫 画	7.5 8.9	10.8 12.4	4.7 4.8
教 科 書	17.7	20.6	15.2				
参 考 書	11.4	14.4	7.9				

(注) 表中左上の数字は東京、右下は大阪。

「読みましたか」という問いには、「新聞」「週刊誌」以下17項目を示してたずねた（表3-58参照）。

もちろん新聞が約9割と高く、テレビを「聞く」のとはほぼ等しい数値を得た。

「テレビの字幕」が第2位で4割前後の比率を示す。テレビを、画面を見ないで耳だけで聞く人はあまりいないだろうと思うので、テレビを聞くのとテレビの字幕を読むのとは大体近い数になりそうなものなのに、そうはならず、テレビの字幕を読む人は、テレビを聞く人の半分に過ぎない結果となっている。これは、テレビ画面に出る文字は、「見る」ものと意識されて、「読む」ものとは意識されないからであろうが、テレビは画面の画像を見ながら音を聞くものであり、文字はテレビでの主役ではありえないという事実を示しているだろう。

ちらし広告というものは、大部分、新聞に折り込まれて来る。34%乃至32%の人がそれを読んだということは、新聞を読んだ人の3分の1が折り込まれて来たちらし広告の文字を読んだということになり、これは、かなりなものというべきであろう。そのちらし広告は、年少者よりも中年の人の方が注意すると言えそうな数値がほの見えるようだが、はっきりはしない。

週刊誌を読んだ人は東京・大阪とも3割弱で、幾分男子の方が多そうだ。そして、どちらかといえば若い年代の方が熱心に読むような感じもあるが（40%前後）、それよりも、東京の30代以後を見ると、どの年齢層でも均等に週刊誌が読まれていることに驚く。

はがきや手紙を読むのは、本人の意志によることではない。むこうから届いてくれないことには読みようがないので、この数値は、はがきや手紙を受け取る度合を表わしている。それが25%前後ということは、4日に1度ぐらい、はがきか手紙を受け取るということになる。電話を受ける比率からすれば、ずっと少ないけれども、絶対的には、決して少ないとはいえない。若い世代よりも中年以後の人の方がいくらか多いように見受けられるが、どうであろうか。

書類というものを読んだ人の比率は、最若年層において5%以下と明らかに低くなっている。はたち前の人は事務的な書類にはあまり縁がないものらしい。

ここまでは、東京と大阪と順位がそろっている。このあとに並ぶ項目で、最も若い層に片寄るものに、まず圧倒的な「教科書・参考書」があり、あと、そ

れほどではないが、小説、辞書、漫画が同じ傾向を示す。外国語にも似た傾向があるが、絶対数が少ないので、傾向まで言うのはむずかしからう。

(3) 何をどのくらい書いたか

「書きましたか」という問いには、「日記」「はがき」以下13項目を掲げた。

「メモ」「職場での書き物」「伝票」「帳簿」「家計簿」の5種類は、東京でも大阪でも同じような比率を示した。メモは4割前後の人が書き、男女差はない。

職場での書き物と伝票では男子が女子の倍以上になっている。

表3-99 何を書きましたか(性別)(%)







	全 体	性			全 体	性	
		男	女			男	女
メ モ	41.2 37.3	44.9 38.1	37.9 36.4	書 類	8.6 9.5	9.5 11.9	7.9 6.7
職場での書き物	28.6 28.4	40.2 38.1	18.7 17.0	日 記	8.0 7.2	8.8 8.8	7.3 5.5
伝 票	22.1 25.9	31.1 32.5	14.3 18.2	文 章	7.7 5.0	10.8 7.2	5.0 2.4
ノ ー ト	16.7 11.4	24.0 11.9	10.5 10.9	は が き	7.0 5.6	5.7 4.1	8.2 7.3
帳 簿	15.3 15.3	18.9 16.5	12.2 13.9	手 紙	6.6 5.3	4.4 4.6	8.5 6.1
家 計 簿	14.6 13.6	1.4 2.6	25.9 26.7	ポスター・掲示	0.5 1.4	0.7 2.1	0.3 0.6
署 名	8.8 5.6	11.8 5.2	6.1 6.1				

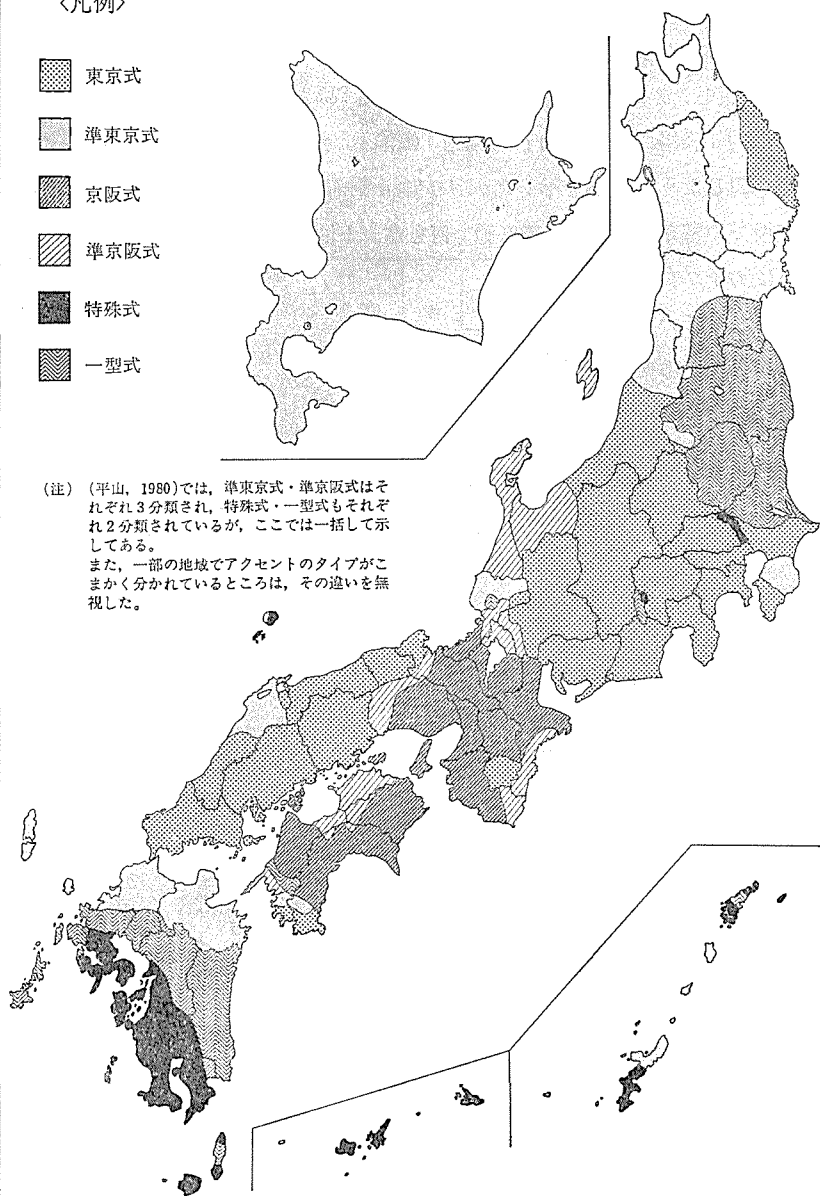
(注) 表中左上の数字は東京、右下は大阪。

参 考 文 献

- 大石初太郎 1970 東京の中の方言コンプレックス、『専修国文』 第7号(大石初太郎 1971『話しことば論』 秀英出版に再録)
- NHKことば調査グループ編 1980『日本人と話しことば』日本放送出版協会
- 竹内理三他編 1978『角川日本地名大辞典 13 東京都』 角川書店
- 林四郎 1966 言語行動のタイプ(日本文体論協会編『文体論入門』三省堂)
- 林知己夫・西平重喜・鈴木達三・野元菊雄 1973『比較日本人論』 中公新書

〈凡例〉

-  東京式
-  準東京式
-  京阪式
-  準京阪式
-  特殊式
-  一型式



(注) (平山, 1980)では, 準東京式・準京阪式はそれぞれ3分類され, 特殊式・一型式もそれぞれ2分類されているが, ここでは一括して示してある。
また, 一部の地域でアクセントのタイプがこまかく分かれているところは, その違いを無視した。

図4-① 日本アクセント分布図 (平山, 1980に基づいて作成した)

4. アクセントの実態

はじめに

本章では、東京都民、大阪市民のアクセントの実態、およびそれと性、年齢、学歴、職業、出身地、居住経歴などの社会言語学的属性との関係について見ることにする。また東京と大阪とにおける結果の対比的考察についてもふれる。

アクセントは、いわゆる言語形成期に習得された言語習慣のうち、もっとも変わりにくいものの一つと一般にいわれている。さまざまな出身地、居住経歴、年齢層、学歴、職業など混質的な性格の住民から構成された大都市という環境の中で、それがどのような状態を示すかを明らかにしたいというのが、この調査の中でアクセントを取り上げる主な目的である。研究の分担は次の通り。

東京。調査項目の選定——佐藤（亮）。録音の聞き取り、アクセントの判定・分析——南。分析方法の検討——南、江川。

大阪。調査項目の選定、録音の聞き取り、アクセントの判定・分析——杉藤。
東京と大阪の結果の対比——南。

以下の記述では東京と大阪との間で、分析の基準、記述方法などが必ずしも一致していないところがいくつかある。これは主として両都市におけるアクセントの事情の相違、およびそれぞれの担当者の研究上の関心のありかのちがいに基づくものである。

なお、本章におけるアクセントの表記は、

高く発音される拍…………… $\overline{\bigcirc}$	上昇調の拍…………… $\overset{\frown}{\bigcirc}$
低く発音される拍…………… \bigcirc	下降調の拍…………… $\underset{\smile}{\bigcirc}$

で表わすこととし、アクセントの滝はとくに示さなかった。

また、参考のためにアクセントの全国分布図を掲げておく（図4-①参照）。

4.1. 東京のアクセント

4.1.1. 調査の概要

(1) 調査地点・被調査者

調査地点は、東京における面接調査の他の項目の場合と同じである（1.2. 参照）。

被調査者も、原則的にいえば、東京での面接調査の他の諸項目の場合と同じである。

ただしあとで述べるようなアクセントの調査方法の事情によって、面接調査に応じたすべての被調査者（667名）からアクセントの資料が得られたわけではない。分析に使用できるアクセントの資料が得られなかった場合の主なものは次の通りである。

- a 被調査者が目が悪いなどの理由で調査項目を読むことを拒否したり、読んでも誤りが多かったりした場合。
- b 調査員の不注意で、アクセント調査の全部または一部を実施しなかったり、録音に失敗したりした場合。

なお、使用不可能の部分が一部にとどまる資料については、4.1.2. で述べるような調査結果の処理・補正を行なって、調査できた部分をできるだけ分析の対象に加えることを試みた。

最終的に分析の対象とし、ここでその結果を報告するのは621名分についてである。

(2) 調査方法・調査項目

調査は、面接調査の途中で次にあげることとなり36項目からなる短い文を、こ

れまた次にあげる指示によって被調査者に読んでもらい、それを録音した。

指示文：「今から文をお見せしますから、できるだけふだんお読みになると
同じように読んで下さい」

調査項目：

- | | | | |
|---------------|-----|--------------|-------|
| 1. ニワガヒロイ | (庭) | 19. コノカサガホシイ | (傘) |
| 2. オトガスル | (音) | 20. コノハリガホソイ | (針) |
| 3. ヤマガミエル | (山) | 21. ホガシロイ | (帆) |
| 4. マドガオオキイ | (窓) | 22. スガチイサイ | (巣) |
| 5. ハルガスギタ | (春) | 23. イチゴガアマイ | (苺) |
| 6. イロガウスイ | (色) | 24. アサヒガノボル | (朝日) |
| 7. ハコガチイサイ | (箱) | 25. ハヤシガミエル | (林) |
| 8. ハリガホソイ | (針) | 26. ハシラガフトイ | (柱) |
| 9. カサガホシイ | (傘) | 27. タマゴガオオキイ | (卵) |
| 10. ウタガキコエル | (歌) | 28. アタマガオオキイ | (頭) |
| 11. コノオトガスル | (音) | 29. ハサミガキレル | (鋏) |
| 12. コノマドガオオキイ | (窓) | 30. サカガミエル | (坂) |
| 13. コノニワガヒロイ | (庭) | 31. クマガデル | (熊) |
| 14. コノヤマガミエル | (山) | 32. カミナリガナル | (雷) |
| 15. コノハルガスギタ | (春) | 33. タベモノガホシイ | (食物) |
| 16. コノハコガチイサイ | (箱) | 34. ドングリガアル | (団栗) |
| 17. コノウタガキコエル | (歌) | 35. デンシャガキタ | (電車) |
| 18. コノイロガウスイ | (色) | 36. アカトンボガトブ | (赤蜻蛉) |

これらの調査項目のうち、1. のニワガヒロイから 20. のコノハリガホソイまでは、アクセント以外の他の種類の調査項目（6項目）を隔てて、もう一度同じやりかたで発音したのもも録音した。

指示文：「おそれいりますが、先ほどと同じ文をもう一度読んで下さい」

この方法をとった最初の意図は、アクセントの現われの安定度を見ようとしたものだが、ここでの報告のかぎりでは1回目と2回目を区別せずにまとめて集計した結果だけを示すことにした。

21. のホガシロイから最後の 36. のアカトンボガトブまでは、1 項目 1 回の発音である。

上記の諸項目を選んだ目的は次の通りである。

a 1. のニワガヒロイから 20. のコノハリガホソイまで。これは、2 拍の名詞のアクセントの五つの類（第 1 類から第 5 類まで、金田一，1943，1974）のそれぞれから 2 語ずつ選んである。主として被調査者各人のアクセントのタイプ——たとえば京阪式アクセントか東京式アクセントか、あるいは一型アクセントかといったこと——を見るためである。以後、この種の項目の語を総称するときは「類別語彙」と呼ぶ。

b 類別語彙の中の 11. のコノオトガスルから 20. のコノハリガホソイまでは、それぞれ問題の名詞にコノを付けた形である。これは、東京の場合はとくに一型アクセントの話者について、問題の語が文頭に来た場合（1. ～10.）とそうでない場合（11. ～20.）とのアクセントの現われのちがいを見ようとするのが、最初の意図であった。ただし、ここでの報告の限りでは、1. から 10. までと、11. から 20. までを区別することなく、まとめて集計した結果だけを示すことにした。

c 21. のホガシロイから 36. のアカトンボガトブまでは、東京の地元出身者の間でも、アクセントにゆれが見られるものをいくつか選んだ。もっぱら東京の地元出身者の被調査者（その定義については 4. 1. 4. で述べた）について、全体的な傾向と、年齢その他の社会言語学的属性によるちがいを調べようとするものである。以後、この種の項目の語を総称するときは「個別語彙」と呼ぶ。

(3) 資料の作成・資料の性格

被調査者の発音を収録した録音テープは、担当者（本節の執筆者、南）がひとりで全部聞き取りを行ない、記入用紙に各項目の各回の発音ごとのアクセントを記入した。その際の聞き取りの方針は、きわめて簡略な音声学的記述である。たとえば、次の程度である。

ニワガヒロイ	ニワガヒロイ
オトガスル	オトガスル

ヤ ^マ ガミエル	マ ^マ ガミエル
カ ^サ ガホシイ	カ ^サ ガ ^ガ ホシイ
マ ^ド ガオオキイ	マ ^ド ガオオキイ

聞き取り、記入に当たっては、それぞれの項目の問題の名詞（＋助詞が）の部分のアクセントだけに注目し、後続の動詞、形容詞の部分のアクセントは無視することにした。

聞き取りを行なうのを一人の担当者に限ったのは、アクセントの判定の基準をできるだけ一定に保とうとしたためである。もちろん、担当者を一人に限定したとしても、相当長時間の聞き取り作業の間終始一定した判定ができるというわけではない。判断に苦しんだ個所も少なくないし、また聞き取りの誤りもあったと思われる。そうした危険性を見込んだ上で、複数の者が聞き取った場合の結果のばらつきを防ぐために、あえてこの方式をとった。ただし、判断に迷ったものについては、他の一、二の所員にも聞かせて、その上で判定をした場合もいくらかある。

聞き取りにおける音声学的記述をごく簡略なものにとどめたのは、担当者の音声学的観察の能力の程度、比較的多数の資料を限られた時間内で聞くこと、録音の質（使用録音機、および録音の環境）などを考慮した結果、精密な観察を行なうことは無理と考えたためである。

今まで述べてきたような調査の方法および資料作成の方法が、一般的にいて被調査者個人個人のアクセント、そしてある地域社会のアクセントの実態を知るための方法としてもっともよいものであるかどうかについては議論の余地があると思われる。しかし、無作為抽出された多数の被調査者を複数の調査員が調査する場合にさしあたってとりうる実行可能なものとして、上述のような方法をとった。

つまり、ここで使用する資料で知ることが出来るアクセントは、調査項目のところであげた簡単な文を被調査者が読む限りにおいて現われたアクセント、そしてそれを原則として一人の人間が聞き取った限りのアクセントというべきものである。

(4) 東京のアクセント調査の問題点

第一の問題は、ここでのアクセント調査は、調査対象となった東京の住民のアクセントの実態を明らかにしようとするものであって、いわゆる「東京アクセント」(京都アクセント、高松アクセント、鹿児島アクセントなどというような意味での)の調査ではないということにかかわるものである。つまり、被調査者は東京の地元出身者の人たちだけとは限らない。出身地や居住経歴その他の社会言語学的属性がさまざまにちがっている人たちが含まれる。したがって、それらの人たちの持っているアクセントにもいろいろなタイプのものがあることは容易に想像できる。やや具体的にいうならば、東京には北関東地方や南東北地方などに見られる一型アクセントまたはそれに類似のアクセントの話し手が少なくない。一方、京阪式アクセントを持つ近畿地方の出身者もいるし、九州や沖縄の出身者もいる。このように、多種多様なタイプのアクセントを含む資料をどのように処理して分析するかということが、まず考えなければならない一つの問題だ。なお、以後さまざまなタイプを含む東京の住民のアクセントをさす場合には「東京のアクセント」と表現し、いわゆる東京アクセントは「東京式アクセント」ということにする。

第二の問題は、ここでの資料によって知られる被調査者個人個人のアクセントは、その出身地や居住経歴によってはじめから決まってしまうような固定的な性格のものとは限らないということである。京阪式アクセントの地域出身のすべての被調査者が、全部の調査項目を固有の京阪式アクセントで答えるとは限らない。個人によって、調査項目によってなんらかのちがいが見られることがありうる。東京の資料でしばしば見られる現象は、もともと東京式アクセントの話し手ではないと思われる被調査者のアクセントが部分的に東京式アクセントになっていることである。たとえば、京阪式アクセントの地域出身者が「春が」を4回発音する際に、3回は京阪式のハ^レガ、1回は東京式のハ^ルガとなるようなのがそれである。こうした状態をどのように記述するかを考えなければならない。

第三の問題は、東京の地元出身者だけをとってみても、アクセントが一定していない、つまりゆれのある語があることである。たとえば、「坂が」をサカガ

と発音する人がある一方、 $\overline{\text{サカガ}}$ と発音する人もいる。「熊が」も同様に、 $\overline{\text{クマ}}$ が、 $\overline{\text{クマガ}}$ の二通りの形がある。どんな語にこうしたゆれの現象が見られるか、また、それはどんな要因——たとえば、年齢差、地域差、性差など——と関係があるのかを追究することは、東京のアクセントの実態を明らかにする上での課題の一つである。

(5) 分析・記述の方法

ここでの記述の内容は大きく分けて次の二つの部分に分かれる。

- a 東京のアクセント、つまり東京の住民のアクセントの概観
- b 東京式アクセントの中でゆれているものについて

まず、東京のアクセントの概観の方法だが、前の(4)で第一の問題としてふれたように、東京の住民の中にはさまざまなタイプのアクセントの話者がいる。その実態を概括的に把握するために、被調査者各人のアクセントが東京式アクセントと一致するかどうかについての程度を見ることにした。つまり、各人のアクセントの東京式アクセントからの距離をはかるわけである。そのために以下の手順をとる。

一般的に言えば、前にあげた類別語彙を使用し、各人の発音の東京式アクセントとの一致度を調べる。

具体的にいうと、類別語彙は1類当たりことなり2語、全部でことなり10語(庭, 箱; 歌, 音; 色, 山; 傘, 針; 春, 窓), それぞれの語を計4回発音している(コノなし2回, コノつき2回)。つまり、のべ40例あるわけである。各例のアクセントが東京式と一致している場合にはそれぞれにつき1点を与える。すなわち、全部が東京式と一致していれば40点、全部が一致していなければ0点となる。そして、その中間にいろいろな段階がある。

東京式と一致しているかどうかの判定については、原則として、第1類は平板型(○○ガ など。ただし、京阪式のような高平調 ○○ガ は除く)、第2類・第3類は尾高型(○○ガ)、第4類・第5類は頭高型($\overline{\text{○○ガ}}$)になっているときに東京式アクセントと一致していると認める。その場合、コノがついているものについていないものとの音調の差異、また、第1類の平板型を低高高(低中中)のように発音するか、低低高(低低中)のように発音するかといったちが

いは無視する（というより、担当者に区別できなかった）。そのほか、たとえば尾高型や頭高型の低の部分と高の部分との音調の上り方や下り方のこまかい点も問題としない。

なお、今上で述べたように、各語の各例の発音が音声学的に東京式アクセントと一致しているかどうかというのが、点を与えるか否かについての原則的な基準だが、それだけで点数を決めると具合が悪い場合があって、東京式アクセントとの距離をはかる上での一つの大きな問題となる。それについては、ある方法を考えて点数の修正を行なった。その詳細については 4.1.2. で具体的に説明する。

東京のアクセントの実態を記述するための方法として、上に述べてきたものが唯一のものでないことはいうまでもない。別の方法もいくつか考えられるはずである。たとえば、調査に応じた被調査者中の、東京式アクセント、京阪式アクセント、一型アクセントなどさまざまなタイプのアクセントの話者の数と比率を示すといったやり方も考えられる。しかし、(4)で第二の問題としてあげたように、被調査者各人のアクセントには、そのタイプをはっきりと決めることができるものもあれば、その区別がむずかしいものも少なくない。まず大まかに分けたとしても、なんらかのタイプ間の中間的なものの程度をなんらかの方法ではかななければならなくなる。それでここでは、資料中もっとも多いと思われる東京式アクセントを基準とし、それからの距離を上述の方法ではかることにした。たしかに、ここでとったやりかたでは、資料中のさまざまなアクセントのタイプやその中間的なものをいちいち具体的に示して、それらの占める割合などを示すことはできない。そうした情報を提供するためには、東京式アクセント以外のタイプについても、それぞれ典型的なものを基準としてたておいて、それにここでとった方式の分析を適用することも考えられる。しかし、今の段階ではその種の作業をしていないので、ここで報告することはできない。

bとしてあげた、東京式アクセントの中のゆれの問題に関しては、個別語彙について東京の地元出身者の資料だけを使用する。

4.1.2. 資料の補正

分析を行なう前に、以下に述べるような事情によって資料の中の類別語彙の部分に限ってその内容に2種類の補正を施した。

その一つは、一部に録音もれの個所または録音状態が不良でアクセントの判定ができなかった個所を含む資料についてである（以後、これらの個所をまとめて不良個所と呼ぶ）。こうしたものもできるだけ資料として利用するために後述の方法によって不良個所についての補正を行なった。これを「第1次補正」と呼ぶ。

もう一つは、前の4.1.1.の(5)でちょっとふれたが、各項目の各例の発音が東京式アクセントと音声学的に一致しているかどうかということだけを点数を与えるための基準とすると具合の悪い場合がある。これは主に一型アクセントまたはそれに類似のアクセントの話者の資料に見られるものである。この種の場合については、これまた後述する方法によって点数の補正を試みた。これを「第2次補正」と呼ぶ。

以下、それぞれについて説明する。

(1) 第1次補正

不良個所を含む資料についての補正を行なうために、以下にあげるいくつかの原則をたてた。それらの原則によって補正することができない不良個所を含む資料は、その被調査者の資料全体を分析の対象から除外することにした。

- a 不良個所の例を含む語と同じアクセントの類のもう一方の語の例が4例とも不良個所がなくそろっていること。
- b 東京式アクセントとの音声学的な一致による点数を与えた場合、問題の不良個所を含む語のその不良個所以外の例の点と、もう一方の語の点との差が2点またはそれ以下であること。
- c aとbとの条件、両方がみたされた場合、不良個所を含む語も資料として採用する。
- d-1 cにより資料として採用したとして、同じ類の不良個所のない語の点が、

不良個所を含む語の不良個所以外の例の点より1点または2点大きいときには、後者の得点に1点を加える。

d-2 それ以外の場合は点数はそのままとする。

仮の例を使って説明を補足する。

aの原則。たとえば、ある被調査者の資料中、第1類の庭の4例の中の1例が不良であったとすれば、同じ類の箱の4例に全部不良個所がなく全部そろっていることが要求される。

bの原則。上の例の場合、箱が4例とも東京式(平板型)と一致して得点が4点であるとすれば、庭は不良個所以外の3例の得点が3点ないし2点であることが要求される。なぜこういう原則をたてるかという、不良個所がない語と不良個所を含む語とのアクセント上の性格がかけ離れていないものを資料として利用しようという意図があるからである。これは一見東京アクセントとの一致度が大きいものだけが資料として利用されるようになる印象を与えるかもしれないが、そうではない。不良個所を含まない語が4例とも0点で、不良個所を含む語も0点であっても、bの条件をみたしていることになる。

cの原則。たとえば、箱にも不良個所が1例、庭にも不良個所が1例という場合はaの条件を満足しないから、資料として採用しない。箱は4例とも完全で、庭に不良個所が1例という、aの条件を満足している場合でも、それぞれの点数が箱が4点で庭が0点または1点、あるいは箱が3点で庭が0点であったとするならば、bの条件を満足しないから資料として採用しない。

d-1の原則。箱が4例ともそろっているとして、それが4点そして庭が3点であるとすれば、庭の得点を4点とする。また庭が2点であるときも、1点を加えて3点とする。これは、不良個所を含む語の点数を、例が全部そろっているもう一方の語の点数に無理のない程度に近づけようとする措置である。

d-2の原則。たとえば、箱が4点、庭が1点のときは差が3点であるから、そのままとする。また、箱が0点で庭も0点とか、箱が0点で庭は1点のときも同様。

具体的な例をいくつかあげる。まず表4-1を見ていただきたい。

Aの場合は、aの条件とbの条件両方を満足する。したがって資料として採

用。庭と箱の修正前の得点の差は1点だからd-1に該当，したがって箱も4点とする。Bも同様の例である。Cの場合は，a，b両条件を満足するので資料として採用するが，二つの語の修正前の点数の差がないのでd-2によりそのままとする。Dは，aの条件を満足しないので，こ

表4-① 第1次補正による得点の変化

被 査 者 番 号	項 目	不 良 個 所 の 有 無	第1次補正 前 の 得 点	第1次補正 後 の 得 点
A 1001	庭 箱	完 全	4	4
		不良個所 1	3	4
B 1101	音 歌	不良個所 1	1	2
		完 全	2	2
C 2517	庭 箱	完 全	2	2
		不良個所 1	2	2
D 3720	窓 春	不良個所 2	2	—
		不良個所 2	2	—

の被調査者の資料を分析の対象から除外する。

こうした不良個所についての修正処理を行なった資料は、アクセントについての録音が得られた 636 名分のうち 80 名分、その中で分析の対象として採用したもの 65 名分、除外したもの 15 名分である。したがって、今後の分析は 621 名分の資料について行なうことになる。

(2) 第2次補正

前に述べた、各例の発音が東京式アクセントと音声学的に一致しているかどうかということだけを点数を与えるための基準とすると具合が悪いことがあるというのは、次のような場合が起こりうるからである。

表4-② アクセント資料の架空例

[illegible]

表4-②にあげたのは架空の例だが、それによって説明する。まずAは、すべての語のすべての例を尾高型で発音している。東京式アクセントと音声学的に一致するかどうかだけで点数を決めると、第1類（庭，箱），第4類（傘，針），第5類（窓，春）には点を与えることができないが、東京式で尾高型である第2類（音，歌）と第3類（山，色）については点を与えることになる。つまり，Aは40点満点中16点を獲得することになる。

次にBは，第1類，第2類，第3類は東京式と一致せず，第4類と第5類は頭高型なので東京式と一致している。一致しているものだけに点を与えると，これまた16点獲得することになる。

Cにおいては，第1類だけ東京式に一致し，他の四つの類は東京式と一致していない。そこで得点は8点となる。

前に述べたように，こうした点数は個々の被調査者のアクセントの東京式アクセントからの距離を示すことを目的にしたものである。いま機械的にAをBおよびCと比べてみると，Aは東京式アクセントからの距離がBと等しく，Cよりも東京式アクセントに近いということになる。この結果は，常識的に見るとおかしい。なぜかというと，Aの場合は，第1類から第5類まで全部区別なく尾高型なのであって，そのうち第2類と第3類の16例がたまたま東京式と一致しているのである。それに対して，Bの場合は第4類と第5類が，Cの場合は第1類が，他の類とは区別されて東京式アクセントと一致しているのである。点数がAと同じであっても，あるいはAより少なくとも，BやCの方を東京式アクセントに近いとすべきではないか。こうした事情を考慮して，一応アクセントの音声学的な一致に基づいて機械的に与えた点数に，次にあげる原則による補正を施して，東京式アクセントからの距離を見ることにした。

a 五つの類のうち，問題とする類の各語の例の半数またはそれ以上の例の音調が東京式アクセントのそれと一致すること。第1類を問題にするならば，庭なら庭の4例中2例またはそれ以上が東京式と一致すること（つまり平板型であること）が要求される。

b 問題とする類とは東京式アクセントにおけるアクセントの型が異なるすべての類において，その問題とする類の東京式アクセントの型と一致している例

が、その全例中の半数以下であること。たとえば第1類を問題にするとして、東京式ではそれとはアクセントの型が異なる他の類の全例——ということは、第2類から第5類までの32例だが——の中で、第1類の東京式のアクセント、つまり平板型であるものがその半数（16例）以下であることが要求される。

c aの条件とbの条件の両方がみたされた場合に限り、次の方法により点数を与える。

c-1 問題とする類の各語の4例全部が東京式と一致している場合は4点。

c-2 問題とする類の各語の4例中3例が東京式と一致している場合も4点与える。

c-3 問題とする類の各語の4例中2例が東京式と一致している場合は2点とする。

d aの条件とbの条件の両方またはそのどちらかが満足されない場合には、その語の点は0点とする。

このような点の与え方によれば、結局各語の点数は4点、2点、または0点となり、奇数の点はないことになる。

次に具体的な例をあげる（表4-③参照）。

No. 418は、先の架空の例のAの場合と非常によく似た実例である。第2類、第3類を問題とすると、その4語16例がすべて尾高型であって、東京式ア

表4-③ アクセント資料の具体例(1)

	No. 418						No. 3611					
	1回目	2回目	3回目	4回目	第2次 補正前 の得点	第2次 補正後 の得点	1回目	2回目	3回目	4回目	第2次 補正前 の得点	第2次 補正後 の得点
庭	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	0	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	3	4
箱	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	0	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	1	0
音	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	4	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	4	4
歌	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	4	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	4	4
山	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	4	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	3	4
色	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	4	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	3	4
針	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	0	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	3	4
傘	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	0	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	1	0
窓	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	0	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	2	2
春	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	0	0	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	4	4

クセントのそれと一致する。これは a の条件をみたす。それで一応各語 4 点ずつを与えておくことができる。ところで、東京式で尾高型でない第 1 類, 第 4 類, 第 5 類も, 第 1 類庭の 1 例を除き全部尾高型となっている。すなわち, b の条件を満足しない。そこで d の原則により, 第 2 類, 第 3 類の各語とも 0 点となる。第 1 類, 第 4 類, 第 5 類は, a の条件を満足しないのでみな 0 点。

No. 3611 は事情が複雑である。第 1 類庭については, a および b の条件が満足される。したがって点が与えられ, 3 例東京式と一致しているので, c-2 により 4 点となる。箱は, a の条件をみたさないで, d により 0 点。第 2 類, 第 3 類は, a の条件を満足し, かつ b の条件も満足する (それらの類以外の諸類の 24 例中尾高型の例は 10 例, 半数以下)。したがって点を与える。c-2 により, 3 例東京式と一致しているものは 4 点とする (山, 色)。第 4 類, 第 5 類は, それらの類以外の諸類 24 例中に頭高型のものがないので, b の条件はみたしている。しかし, 第 4 類傘は a の条件を満足しないので 0 点。3 例が東京式と一致している針は, c-2 により 4 点。2 例が東京式と一致している 第 5 類窓は, c-3 によりそのまま 2 点とする。

この第 2 次補正の性格は, 一般的にいえばアクセントの音声学的な現われだけに基づく分析に, さらに音韻論的な観点を導入したものだといえることができる。つまり, 簡単にいってしまえば, いちいちの例の音声学的な一致に加えて, 類ごとの区別があるかどうかということを問題にしているわけである。東京の被調査者の中に少なくないことが予想される一型アクセントまたはそれに近いタイプのアクセントについては, 研究者が聞き取りを行ないながら, それぞれの被調査者の資料の音声学的な性格とアクセントの類の区別を考慮に入れた上で判定を下すという方法も考えられる。ただその場合も, 東京式アクセントからの距離の程度を客観的に示そうとするならば, そのためのなんらかの手段を考えなければならない。ここでいう第 2 次補正は, 一型アクセントあるいはそれに類似のアクセントばかりでなく, 他のタイプのアクセントも含めて, 東京式アクセントからの距離をはかろうとする一つの試案である。もちろん, ここで用いたいくつかの作業原則は仮定的なものである。これが適当なものであるか, あるいは修正すべきか, さらに別の方法を考えるべきかを調べるためには,

表4-④ 補正前と補正後の得点・人数

[illegible]

表4-5 アクセント資料の具体例(2)

	No. 1011					
	1回目	2回目	3回目	4回目	第1次補正後の得点	第2次補正後の得点
庭	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	4	0
箱	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	不良	4	0
音	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	1	0
歌	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	2	2
山	不良	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	0	0
色	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	0	0
針	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	2	2
傘	〇〇ガ	〇〇ガ	不良	〇〇ガ	2	2
窓	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	0	0
春	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	〇〇ガ	2	2

さまざまな案を試行してその結果を検討する必要がある。ここの報告の限りではそのような試行をする余裕がなかったので、以上に述べた方法による処理だけを行なうにとどまった。

表4-4に第2次補正の結果をまとめて示しておく。表中の数字はそれぞれの点数における被調査者の人数を示す。たとえば、修正後の点数40点を得た者は計395名。その内訳

は、修正前の点数40点の者が327名、39点の者54名、38点の者10名、37点の者2名、36点の者2名である。

(3) 第1次補正と第2次補正との関係

二つの種類の補正の適用は、はじめに第1次補正、次いで第2次補正の順序で行なわれる。つまり、第1次補正を通過して分析対象となった資料（不良個所が全然なかったものも、なんらかの第1次の補正を受けたものも）に第2次補正が適用される。したがって、第1次補正で一応与えられた点がさらに第2次補正で変わることがありうるのである（表4-5参照）。

4.1.3. 類別語彙のアクセント

これは前にも述べた通り、東京都民のアクセントの実態を概括的に把握しようとするものである。

(1) 概観

前の4.1.2.で説明した第1次、第2次の補正を施した点数について見た被調査者の人数の分布は表4-6の通りである。

全体的には、東京式アクセントの話者の割合が相当大きいということができる。得点が40点、すなわち満点の話者は395名、全体の63.8%を占める。一

方、東京式アクセントからの距離が大きい話者も非常に少ないというわけではない。東京式からもっとも隔たった0点の話者は44名、7.1%である。

今、仮に全体を三つのタイプに分け、40点から36点までのものを東京型、8点から0点までのものを非東京型、34点から10点までのものを中間型とするならば、それぞれの人数と全体に対する割合は次の通りである。

東京型	(40～36点)	433名	69.7%
中間型	(34～10点)	96名	15.5%
非東京型	(8～0点)	92名	14.8%

東京型はほぼ70%を占めるわけである。あとの30%を中間型と非東京型で半分ずつ分けることになる。

なお、非東京型の中には、いわゆる一型アクセントまたはそれに類似のものや京阪式アクセントの話者が含まれるので、必ずしも等質的な性格のものとはいえない。

(2) 社会言語学的属性と類別語彙のアクセント

(i) 性

表4-7は、被調査者を(1)で述べた東京型(36～40点)、中間型(10～34点)、非東京型(0～8点)にまとめて、それぞれの人数を次の方式で算出した期待値と対比してあげたものである。それぞれのますの中の右下にあげた、小数点を持った数字が期待値である。期待値は、属性ごとのそれぞれのカテゴリーの被調査者数(この場合は男性と女性)と資料全体の人数(621名)との比によって、東京型、中間型、非東京型のそれぞれの人数を比例配分して出した。こ

表4-6 得点別の人数分布

点	人数	比率	点	人数	比率
0点	44人	7.1%	22点	3人	0.5%
2	23	3.7	24	8	1.3
4	13	2.1	26	8	1.3
6	7	1.1	28	12	1.9
8	5	0.8	30	10	1.6
10	3	0.5	32	29	4.7
12	6	1.0	34	10	1.6
14	0	0.0	36	16	2.6
16	2	0.3	38	22	3.5
18	3	0.5	40	395	63.8
20	2	0.3			

表4-7 類別語彙のアクセント
(その1——性別)(実数)

	男	女	人数
東京型	201 207.1	232 225.9	433
中間型	44 45.9	52 50.1	96
非東京型	52 44.0	40 48.0	92

(注) 表中、右下の数字は期待値。

れは性別以外の属性についても同様である (1.4.4. 参照)。

性別とアクセントとの関係について見ると、男女の間にきわだちがいはないが、女性の方には東京型が多く、非東京型が少ない傾向、男性の方にはその逆の傾向が見られることを指摘できる。ただし、性のちがいがアクセントの状態と直接関係があるかどうかは問題である。他の属性との関係を慎重に検討する必要がある。

(ii) 年齢

とくに著しい特徴を見せる年齢層はないといってよいが、わずかなちがいを問題にするならば、次の点を指摘することはできるだろう。

東京型が多く非東京型が少ないもの——15～19歳の層がそれで、45～49歳にも似た傾向が見られる。

非東京型が多く、東京型が少ないもの——20～24歳の層と35～39歳の層。また、65～69歳にもその傾向がある。

中間型が多いもの——25～29歳、60～64歳。他の年齢層の性格ははっきりしない。

こうしたことの原因はよくわからない。部分的にはある程度想像がつくものはある。たとえば、一番若い15～19歳の層に東京型が多いのは、東京で生まれ育って、まだ独立していない被調査者が相当大的割合を占めるのではないかと、20～24歳に非東京型が多いのは、入学や就職のために東京に来た地方出身者が多く含まれる（正確に言えば、アクセントが東京式と異なる地方の出身者が多く含まれる）ためではないかといったことなどである。もちろん、それが当たっているかどうかは、別に具体的に調べてみなければならない。

表4-8 類別語彙のアクセント(その2——年齢別)(実数)

	15 } 19	20 } 24	25 } 29	30 } 34	35 } 39	40 } 44	45 } 49	50 } 54	55 } 59	60 } 64	65 } 69	人 数
東京型	50 39.7	55 57.9	68 72.5	57 53.7	43 46.0	50 48.1	39 34.2	24 25.8	23 21.6	13 16.7	11 16.7	433
中間型	4 8.8	12 12.8	20 16.1	9 11.9	8 10.2	11 10.7	5 7.6	9 5.7	6 4.8	7 3.7	5 4.2	96
非東京型	3 8.4	16 12.3	16 15.4	11 11.4	15 9.8	8 10.2	5 7.3	4 5.5	2 4.6	4 3.6	8 3.6	92

(注) 表中、右下の数字は期待値。

(iii) 学歴

相当きわだった傾向を見せるのは低学歴の層であって、非東京型が多く、東京型が少ない。それと逆の傾向を持つのは高学歴の層である。中学歴にははっきりした特徴は見られないが、中間型がやや多いようである。

表4-9 類別語彙のアクセント
(その3——学歴別)[実数]

	低学歴	中学歴	高学歴	人 数
東 京 型	99 109.5	196 191.8	138 131.8	433
中 間 型	23 24.3	44 42.5	29 29.2	96
非東京型	35 23.3	35 40.7	22 28.0	92

(注) 表中、右下の数字は期待値。

学歴がアクセシ

トと直接的な関係を持つとは常識的には考えにくい。たとえば、一般の大学で東京式のアクセントを教育す

表4-10 類別語彙のアクセント(その4——職業別)[実数]

	経営者	給与 生活者	家業 従事者	主婦	学 生	無 職	その他	人 数
東 京 型	54 55.1	160 173.6	16 15.3	86 89.3	65 50.9	42 39.7	10 9.1	433
中 間 型	12 12.2	46 38.5	4 3.4	21 19.8	3 11.3	8 8.8	2 2.0	96
非東京型	13 11.7	43 36.9	2 3.3	21 19.0	5 10.8	7 8.4	1 1.9	92

(注) 表中、右下の数字は期待値。

るなどということはないであろう。あっても、限られた特殊な場合であろう。なぜ上にあげたような結果が出るのか、他の社会言語学的属性との関係をも検討する必要がある。

(iv) 職業

わりにはっきりした特徴があるのは学生、ある程度の傾向を見せるのは給与生活者である。すなわち、学生には東京型が多く、中間型、非東京型が少ない。なお、無職も学生と似た性格を持つ。学生の場合は、たぶん年齢のところで同じような性格を示した15～19歳の層と関係がある。給与生活者はその逆で、どちらかといえば非東京型、中間型が多く、東京型が少ない。経営者、主婦にもいくらかその傾向がある。

(v) 出身地

出身地(それぞれの被調査者が5歳～15歳の間にもっとも長く居住した地域)が、ここで問題にした社会言語学的諸属性の中ではもっともはっきりした性格を示す。

東京型が優勢なのは、東京、南関東、中部、中国である。非東京型が優勢な

表4-11 類別語集のアクセント(その5——出身地別)(実数)

	東 京	北海道	北東北	南東北・ 北関東	南関東	北 陸	中 部	近 畿	中 国	四 国	九州・ 沖 縄	その他	人 数
東 京 型	265 193.8	3 12.6	10 18.8	4 58.6	57 43.2	21 23.0	41 30.0	7 8.4	15 11.2	5 9.1	4 20.2	1 4.2	433
中 間 型	7 43.0	15 2.8	16 4.2	22 13.0	3 9.6	10 5.1	1 6.7	0 1.9	1 2.5	4 2.0	14 4.5	3 0.9	96
非東京型	6 41.2	0 2.7	1 4.0	58 12.4	2 9.2	2 4.9	1 6.4	5 1.8	0 2.4	4 1.9	11 4.3	2 0.9	92

(注) 表中、右下の数字は期待値。

のは、南東北・北関東である。北海道、北東北には中間型が多い。そのほかでは、全体の数が少ないが近畿が非東京型と東京型に分かれるのが目につく。また、北陸は中間型と東京型が多いのに対して、九州・沖縄は中間型と非東京型が多く、四国は三つの型の間にあまり差はない。

これらの結果は、現在までに調査されたそれぞれの地域の諸方言のアクセントの状態と大体対応しているものといつてよいであろう。たとえば、東京型が多い東京、南関東、中部、中国の諸地方は、東京式アクセント(乙種アクセント)の主な分布地域とされているところである。非東京型が優勢な南東北・北関東の大部分は、いわゆる一型アクセントの地域である。北海道と北東北では中間型が多いが、それらの地域の方言のアクセントは東京式かその変種である。つまり、はじめにふれたように、アクセントは言語形成期中に身につけた言語習慣の中でもっとも変わりにくいものと一般にいわれているが、ほぼその通りの結果が示されているといつてよさそうである。

とはいっても、東京出身者の中にも、非東京型や中間型の話者がいたり、近畿地方出身者の中では、全体としての数は少ないが東京型のアクセントの話者の数が非東京型より多かったりするというのも、無視できない事実である。こうした現象が起こることについては、個人によっていろいろ事情が異なると思われる。

まず、東京出身者の中で非東京型および中間型だった13名について見ると、東京の中でも言語形成期を過ごした地域に関係があると思われるもの5名(江戸川区桑川町4名、足立区江北1名)、言語形成期中の居住地に変動がありかつ両親の出身地が東京式アクセントの地域でないもの7名、言語形成期中の居住

地は東京（しかも東京式アクセントの地域）で変動はないが、両親の出身地が東京式アクセントの地域でないもの1名であった。この最後の例は、日本橋で生まれ育った大正6年生まれの男性で、両親が京都市出身であった。

一方、非東京型のアクセントの地域がその大部分を占めるとと思われる、南東北・北関東、近畿、四国の諸地方の出身者の中で東京型だった話者16名について見ると次のようである。

南東北・北関東：4名のうち3名は、言語形成期を過ごした場所と両親の出身地が東京式アクセントまたはそれに準ずるアクセントの地域（栃木県足利市1名、山形県鶴岡市2名）。

近畿：言語形成期を過ごした場所および両親の出身地が東京式アクセントまたはそれに準ずるアクセントの地域と考えられるもの3名（兵庫県佐用郡、同美方郡、三重県熊野市）。言語形成期を過ごした地域に変動があったもの1名（両親の出身地は京都市）。言語形成期の一部を過ごした場所および母親の出身地が東京式アクセントの地域のもの1名。あと2名のうち、1名は33歳以後ずっと名古屋、広島、東京と東京式アクセントの地域に住んでいた明治40年生まれの女性。

四国：言語形成期を過ごしたところおよび両親の出身地が東京式アクセントまたはそれに準ずるアクセントの地域と考えられるもの2名（愛媛県、南・北宇和郡）。両親の出身地および言語形成期の一部を過ごした地域が東京式アクセントまたはそれに準ずるアクセントの地域と考えられるもの1名（愛媛県、南・北宇和郡、宇和島市）。あと2名のうち、1名は母親が大分県出身。

上記3地方に1名ずつ、居住経歴と両親の出身地について原因となりそうな点が見出せない話者がいる。ただ、それらの人たちに共通しているところは、3名とも若い年齢層に属していることである。南東北・北関東は昭和28年生まれの女性（18歳以降東京）、近畿は昭和29年生まれの男性（17歳以降東京）、四国は昭和26年生まれの男性（18歳以降東京）。

(vi) 世代・在京年数・上京時の年齢

世代においては、2世以上に東京型が多いのに対して、1世では非東京型、中間型が多く、東京型が少ない。1世は東京以外の地域からの転入者で、そこ

表4-13 類別語彙のアクセント(その6——世代別)

	1 世	2 世	3 世	4 世	人 数
東 京 型	168 239.2	126 93.4	56 39.7	83 60.7	433
中 間 型	89 53.0	6 20.7	1 8.8	0 13.5	96
非東京型	86 50.8	2 19.9	0 8.4	4 12.9	92

(注) 表中、右下の数字は期待値。

と、それが逆転する。これは常識的に見れば、東京に長くいればいるほどアクセントが東京式になるということを反映していると考えられないでもない。しかし、ここでの在京年数0年～15年の層には、そもそも東京出身者よりも他地方の出身者の割合が多い可能性が大きいことに注意する必要がある。また、16年以上の層についても、年数がふえるにしたがって東京型の話者が多くなるというはっきりした傾向も認められない。

上京時の年齢。ここでは最初に東京にきた年齢について見ることにする。生まれてからずっと東京にいた人たちに東京型が多く、非東京型と中間型が少ない

表4-13 類別語彙のアクセント(その7——在京年数別)(実数)

	0 5	6 10	11 15	16 20	21 25	26 30	31 40	41 50	不 明	人 数
東 京 型	35 53.7	33 47.4	25 41.8	77 68.3	60 51.6	51 42.5	65 53.7	86 73.2	1 0.7	433
中 間 型	24 11.9	17 10.5	16 9.3	6 15.1	9 11.4	6 9.4	8 11.9	10 16.2	0 0.2	96
非東京型	18 11.4	18 10.1	19 8.9	15 14.5	5 11.0	4 9.0	4 11.4	9 15.6	0 0.2	92

表4-14 類別語彙のアクセント(その8——上京時年齢別)(実数)

	0 4	5 9	10 15	16 20	21 25	26 35	36 45	46 55	ずっと 東 京	人 数
東 京 型	90 66.2	19 18.8	25 31.4	81 113.0	39 53.7	14 24.4	2 5.6	2 3.5	161 116.4	433
中 間 型	3 14.7	6 4.2	6 7.0	47 25.0	14 11.9	10 5.4	6 1.2	2 0.8	2 25.8	96
非東京型	2 14.1	2 4.0	14 6.7	34 24.0	24 11.4	11 5.2	0 1.2	1 0.7	4 24.7	92

(注) 表中、右下の数字は期待値。

に東京式でないアクセントの地方の出身者も含まれるわけだから、こうした結果になるのは自然である。

在京年数では0年から15年までは非東京型と中間型が多く、東京型が少ない。16年以上になる

表4-15 類別語彙の社会言語学的属性別得点

属性点	全体	性		年 齢												学 歴		
		男	女	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	低	中	高	
				19	24	29	34	39	44	49	54	59	64	69				
0	44	27	17	1	10	10	6	7	5	1	1		1	2	11	19	14	
2	23	14	9	1	2	3	3	3		3		2	1	5	11	8	4	
4	13	5	8		3	1	2	2	2	1	1		1		6	6	1	
6	7	4	3	1		1		1	1		1		1	1	3	2	2	
8	5	2	3		1	1		2		1					4		1	
10	3	2	1			2			1						1	1	1	
12	6	3	3		2		3						1		1	3	2	
14	0																	
16	2		2			1						1			1		1	
18	3	1	2		1				1	1							3	
20	2		2					1						1	1	1		
22	3	2	1		1				2							2	1	
24	8	6	2				1		1	1	3	1	1		5	2	1	
26	8	4	4		2	2		1		1	1	1			1	3	4	
28	12	4	8		1	3	1	1	2		1	1		2	1	7	3	
30	10	6	4		1	3	1			2	1		1	1	3	6	1	
32	29	14	15	3	3	6	3	2	3		3	1	3	2	5	16	8	
34	10	2	8	1	1	3		3	1			1			3	3	4	
36	16	8	8	3		2	3		2	3		1	2		9	4	3	
38	22	7	15	5	2	6	3		2	2		1	1		6	10	6	
40	395	186	209	42	53	60	51	43	46	34	24	21	10	11	84	182	129	
計	621	297	324	57	83	104	77	66	69	49	37	31	24	24	157	275	189	

属 性 点	職 業	出 身 地														
		経 営 者	給 与 生 活 者	家 業 従 事 者	主 婦	学 生	無 職	そ の 他	東 京	北 海 道	北 北 東 北	南 北 東 東	南 関 東	北 陸	中 部	近 畿
		者	者	者	婦	生	職	他	京	道	北	北	東	東	陸	部
0	5	19	1	12	4	2	1		2			23	1	2	1	3
2	4	13		4		2			2			18	1		2	
4	3	5	1	2		2						10				
6	1	4		1	1						1	5				
8		2		2		1			2			2				
10		2				1						2				
12		4		2							1	5				
14																
16	1			1								2				
18		2		1								1				1
20		1	1									1				1
22	1	1		1							2					1
24	3	4		1						1		2	1	2		1
26	1	6		1						1	2	1	1	1		1
28	1	3	1	4		3			1	4	3	2				1
30	1	5	1	1		2			1	2	1	2		1		1
32	3	15		7	1	1	2		3	7	6	3		3	1	6
34	1	3	1	2	2	1			2		1	1	1	3		1
36	4	6	1		2	2	1		3	1		1	3	3		2
38	4	3	1	8	5	1			9	1	2	2	3	1	1	1
40	46	151	14	78	58	39	9		253	1	8	1	51	17	37	7
計	79	249	22	128	73	57	13		278	18	27	84	62	33	43	12

のは当然かもしれないが、上京した年齢が0歳から4歳までの層にも同じ傾向がある。5歳から9歳の層になるとやや変化が見られ、10歳から15歳の層およびそれ以降になると逆転して東京型が少なくなる。これは大ざっぱに言えば、アクセントの習慣が身につく年齢を反映しているということが出来るかもしれない。

表4-19に、今まで述べてきた社会言語学的属性ごとの得点分布を一括して掲げておく。

今まで見てきたいくつかの社会言語学的属性の中で、はっきりと類別語彙のアクセントの現われと関係があるということが出来るのは、先にも述べたように出身地である。そして、他の諸属性とアクセントの間になんらかの関係がありそうに見える場合にも、その背後に出身地のちがいが実際の要因として働いていると考えられる場合も少なくない。すぐ前で見た世代がそうであるし、在京年数についてもその可能性がある。また、年齢について部分的に出身地との関係がありそうな特徴を示す層があることは前にもふれた。性、学歴、職業において見られる特徴についても、出身地との関係が考えられないわけではない。ただ、類別語彙のアクセントの現われと直接的に関係があるのは出身地だけであって、他の諸属性はみな間接的な関係しか持たないと断言するだけの材料は、今のところない。こうしたことを明らかにするために、諸属性間の関係をくわしく検討することが今後の課題である。

(3) 語ごとに見た類別語彙のアクセント

類別語彙の調査項目とした5類10語のアクセントを個々の単語ごとに見る

表4-19 類別語彙の得点別人数

	0 点	2 点	4 点
庭	90 ^人	37 ^人	494 ^人
箱	107	29	485
音	144	20	457
歌	129	27	465
山	112	22	487
色	112	26	483
針	100	25	496
傘	135	25	461
窓	133	22	466
春	100	17	504

と、同じ類の二つの語がいつも同じようなアクセントの現われを示しているわけではない。

各語の点数、0点、2点、4点（満点）における人数の分布を概観すると、表4-19の通りである。第1類（庭、箱）、第2類（音、歌）、第3類（山、色）、第4類（針、傘）、第5類（窓、春）それぞれの組は、山と色の0点の場合、針と傘の2点の場合を除いて、各点数における人数が一致しないが、とくに針と傘、窓と春の組の0点と4点

で差が大きいことが目をひく。針と春の2語は0点が少なく、4点が多い。ということは、これら2語を東京式の頭高型で発音した被調査者が、傘、窓に比べて多かったということである。

表4-17 針,傘,窓,春の得点別人数

	0 点	2 点	4 点
針	99 ^A	20 ^A	16 ^A
傘	113	13	9
窓	113	16	6
春	99	13	23

これは全体の得点が低い方の被調査者だけについて見ても同じ傾向が看取される。全体の得点0～26点のものについて見た結果は表4-17の通りである。この得点の範囲には、先に述べた非東京型および中間型で得点が低い方が含まれるわけだが、それらの人たちの間でも針と春のアクセントはいわば東京化が他と比べてある程度進んでいるということができよう。

このような語ごとのアクセントのちがいをもたらしめている要因にはいろいろなものがあると思われる。類または語によっては、話者の出身地のアクセントに基づく場合もあるであろうが、今上で問題にした針や春については、個々の語の日常の言語生活における使われ方に関係があるのではないかと想像される。しかし、それを断定するだけの根拠は今のところない。

4.1.4. 個別語彙のアクセント

これは、東京式アクセントの中でもゆれがあると思われる語のいくつかを選んで調べたものであることは、前に述べた通りである。ここでは、東京出身者（5歳から15歳までの間、もっとも長い期間を東京で過ごした者）283名だけについて見た結果を示す。なお、個別語彙の資料については、類別語彙のときに行なったような補正処理をしていないので、東京出身者の人数は類別語彙の場合と一致しない。

(1) 概観

各項目に現われたアクセントの型とそれぞれを発音した人数は表4-18の通りである。

これらの語の中には、大多数の被調査者が同じアクセントの型で発音したものがいくつかある。そうした語は、アクセントにゆれがあるだろうという予測

表4-18 個別語彙のアクセント(東京出身283人)

	語	○ガ	○ガ				不明
1 拍語	帆	45	236				2
	巢	97	183				3
2 拍語		○○ガ	○○ガ	○○ガ			不明
	坂	2	172	101			8
	熊	13	134	133			3
3 拍語		○○○ガ	○○○ガ	○○○ガ	○○○ガ		不明
	苺	141	26	21	91		4
	朝日	1	20	3	258		1
	林	246	1	34	0		2
	柱	116	9	147	7		4
	卵	80	195	5	0		3
	頭	3	88	190	0		2
	鉄	3	130	148	0		2
	電車	211	2	3	65		2
4 拍語		○○○○ガ	○○○○ガ	○○○○ガ	○○○○ガ	○○○○ガ	不明
	雷	70	1	149	58	0	5
	食べもの	7	37	193	41	0	5
	どんぐり	27	3	10	2	239	2
5 拍語		○○○○○ガ	○○○○○ガ	○○○○○ガ	○○○○○ガ	○○○○○ガ	不明
	赤とんぼ	1	7	257	3	12	3

があまり当たっていなかったということにもなる。中でも、90%以上の人が同じ型で発音したものは、朝日と赤とんぼであって、前者は $\overline{\text{アサヒ}}$ (ガ)が多く、後者は $\overline{\text{アカトンボ}}$ (ガ)が多い。かつて、 $\overline{\text{アカトンボ}}$ と1拍目を高く発音するのが東京式のようにいわれたこともあったが、いまやその型はこの資料では12人、4.2%に過ぎない。

次いで、80%以上が同じ型のものには帆、林、どんぐりがある。それぞれ $\overline{\text{ホ}}$ (ガ)、 $\overline{\text{ハヤシ}}$ (ガ)、 $\overline{\text{ドングリ}}$ (ガ)が優勢である。また、電車も平板型が211人、74.8%を占め、このグループに準ずるものと考えられるだろう。

ある型が70%には達しないが半数以上を占めるものは、あとの大部分、巢、坂、苺、柱、卵、頭、鉄、雷、食物であった。

残ったのは熊一語だが、これはわずかな平板型を除くと、あとは尾高型か頭

高型であって、両者はほぼ同数を示す。このうちのどちらを使うかには、話者の年齢のちがいが関係しているようである。

上にあげた巢以下熊にいたるまでの諸語は、アクセントのゆれの程度が比較的大きいものということができるであろう。どんなアクセントが現われるかについては、話者の年齢その他さまざまな社会言語学的属性がいろいろなかたちで関係していると想像される。ただし、この調査で調べた諸属性すべてについて明らかな関係がわかっているわけではない。このあと、そうした問題を簡単に取り上げる。

(2) 社会言語学的属性との
関係

表4-19 「クマ(ガ)」のアクセント(東京出身283人、年齢別)

	〇〇ガ		〇〇ガ		〇〇ガ		不 明	
	人	%	人	%	人	%	人	%
15～19 歳	1	2.2	11	24.4	32	71.1	1	2.2
20～24	3	8.3	11	30.6	22	61.1	0	0
25～29	1	2.1	20	42.6	26	55.3	0	0
30～34	1	3.8	9	34.6	16	61.5	0	0
35～39	0	0	5	27.8	13	72.2	0	0
40～44	1	2.8	22	61.1	12	33.3	1	2.8
45～49	0	0	23	82.1	5	17.9	0	0
50～54	3	15.0	14	70.0	3	15.0	0	0
55～59	2	14.3	8	57.1	3	21.4	1	7.1
60～64	1	12.5	6	75.0	1	12.5	0	0
65～69	0	0	5	100.0	0	0	0	0

上はクマ(ガ)が多いのに対して、30歳代以下ではクマ(ガ)が多い。若い人たちの間に頭高型で発音する人が多くなっていることがわかる(表4-19参照)。

こうした年齢に関する類似の現象は、3拍語の林、柱、鋏にも見られる。林は、前に見た通り全体としては平板型が多いのだが、それでも40歳代以上になるとハヤシ(ガ)型がやや多くなっている。柱は逆で、45歳以上に平板型が多い傾向があり、それより若い方ではハシラ(ガ)型が多い。鋏の場合は大ざっぱに言って30歳代より若い方はハサミ(ガ)、40歳代より上はハサミ(ガ)が多い傾向が見られる。

また、前にあまりゆれがないとした電車、どんぐりについても、年齢と関係がありそうな現象を指摘することができる。電車は大多数が平板型だが、デン

表 4-20 「ホ(ガ)」「アサヒ(ガ)」のアクセント(東京出身283人、学歴別)

	帆			朝 日				
	〇ガ	〇ガ	不明	〇〇〇ガ	〇〇〇ガ	〇〇〇ガ	〇〇〇ガ	不明
低学歴	14	42	1	0	10	2	45	0
中学歴	12	122	1	1	4	1	128	1
高学歴	19	72	0	0	6	0	85	0

シャ(ガ) という型の話者もいくらかいる。これは 30 歳代から上に比較的多い。どんぐりは、第 1 拍が高い型が大多数だが、平板型もある。この平板型がある程度まとまって現われるのは、40 歳代より上である。

巨視的に見ると、こうしたアクセントと年齢との関係で比較的是っきりした境目が認められるのが 40 歳代であるということは、ちょっと興味ある事実である。何が原因でそうなっているのかについては、いろいろ想像をめぐらすことはできる。たとえば、その年代の人たちは第二次大戦の戦中から戦後にかけて言語形成期を過ごした人たちであるなど。しかし、今のところ確定的なことがいえる材料はない。

年齢のほかにアクセントとなにか関係がありそうな現象が見られるのは学歴である。類別語彙のところでも述べたように、学歴がアクセントと直接関係のある要因となりうるかどうかについては疑問がある。しかし、ある程度まで関係(間接的なものにしろ)がありそうな現われを示す語がいくらかあることも事実である。たとえば、帆と朝日がそれだ(表 4-20 参照)。

帆の場合は、中学歴が低学歴、高学歴と比べて異なった性格を示す(ホガが少なく、ホガが多いという程度が大きい)。朝日の場合は、低学歴が中学歴および高学歴と異なった性格を示す(アサヒガが少なく、アサヒガが多いという程度が小さい)。帆と同じタイプの現われを示すものとしては、林、卵がある。中学歴でそれぞれタマゴ(ガ)、ハヤシ(ガ)の割合が大きくなる。朝日と同じタイプのものとしては電車がある。低学歴でデンシャ(ガ)の割合が大きくなる。さらに雷と食物もそうで、低学歴において〇〇〇〇(ガ)が少なく、〇〇〇〇(ガ)が多い。たぶん、この二つのタイプの意味するところはちがうのであろうが、それぞれがどういう事情によってもたらされたものなのかは今の

ところ不明である。他の諸属性との関係もくわしく検討してみる必要があるであろう。

一般的にいつてアクセントにゆれのある語と社会言語学的属性との間の関係は、さらにいろいろな方向から調べなければならない。たとえば、坂をサカ(ガ)というか、 $\overline{\text{サカ}}$ (ガ)というかということは、東京のアクセントのゆれを問題にするときによく話題になる例だが、この調査で現在までに調べた社会言語学的属性との関係からははっきりした特徴が認められなかった。これはおそらく他の種類の属性——たとえば東京の中での地域など——もあわせて調べていくことによって、そのちがいをもたらしている要因を明らかにできるであろう。それは、他の語についても同様であると思われる。

4.2. 大阪のアクセント

4.2.1. 調査の概要と問題点

現代は、電波による放送の影響をことばの上で受け易く、いわゆる標準語としての東京方言の影響が、日本の方言を大きく変える趨勢にあると考えられている。その中で、西日本で東京都に次ぐ人口を持ち、東京式アクセントとは異なり、京阪式のアクセント地域にある大都市「大阪」の住民がどのようなアクセントを用いているか、またアクセントの発話の実態と、社会言語学的属性との関係はどのようなものであるか、これは興味ある問題の一つと言えよう。

東京方言は現在標準語とされているが、古来、日本の標準語は近畿方言であった。従って、日本語アクセントの型の歴史的な研究、あるいは地域的な分布に関する研究の上で、近畿方言のアクセントは欠くことのできない重要な位置を占めている。大都市大阪におけるアクセント調査について述べるに当たり、まず、このことを明らかにする必要がある。

そこで、大阪・京都を初め近畿地方に広く用いられている京阪式アクセントについて、始めに短い解説を加えることにする。

(1) 京阪式アクセントについて

平安時代末期以降の標準語のアクセントについては辞書等に声点（ショウテン）、節博士（フシハカセ）等、つまり、アクセント記号の付されたものがあり、それらの研究と方言アクセントの研究との成果によって史的变化と地域的变化との対応関係が明らかにされている（金田一, 1943, 1974；服部, 1931～1933；平山, 1957）。今回、東京式アクセントの調査に用いられた類別語彙も、この研

究の成果として分類されたものである。

表4-21には2拍語の第1類～第5類に属する単語の一部と、古代京都を初め畿内のアクセント、現代の京阪式アクセントと、東京式アクセントとの対応関係

表4-21 2拍語類別語彙のアクセント型(金田一, 1974に基づく)

	古代京都	現代京阪	東京	所属単語
第1類	ニワ(ニワガ)	ニワ(ニワガ)	ニワ(ニワガ)	庭, 飴, 牛, 梅, 風 箱, 竹, 柿, 鳥, 鼻
第2類	オト(オトガ)	オト(オトガ)	オト(オトガ)	音, 川, 垣, 旅, 冬 歌, 橋, 村, 町, 雪
第3類	ヤマ(ヤマガ)	ヤマ(ヤマガ)	ヤマ(ヤマガ)	山, 草, 池, 犬, 家 色, 岸, 米, 島, 花
第4類	ハリ(ハリガ)	ハリ(ハリガ)	ハリ(ハリガ)	針, 箸, 稲, 糸, 海 傘, 空, 海, 松, 姿
第5類	ハル(ハルガ)	ハル(ハルガ)	ハル(ハルガ)	春, 雨, 秋, 汗, 鮎 窓, 朝, 声, 琴, 猿

を示した。古代の畿内アクセントでは第3類に /低低/ 型(無記号)が見られるが, これは, 今では /高低/ 型に発音される。これを除けば, 平安末期に標準語として辞書類に記載された主なアクセント型とほぼ同様の型が, 現代の京都・大阪, その他, 近畿地方の多くの地域で用いられている。

これらの型にはそれぞれ次のような特徴がある。まず, 第1類の平板アクセントが, 東京式アクセントのニワ, ニワガと異なり, /高高/ 型, つまり, ニワ, ニワガのように始めから高く発音される。次に, 第2, 3類は /高低/ 型であり, 型としては東京式の第4, 5類の単語と同一である。従って, 単語を中心に見れば, 大阪と東京とでは型が反対という印象を受ける。しかし, 京阪式アクセントの第4類と第5類は, 東京式アクセントとは異なり次のような特徴を持っている。

第4類は, 単語だけの発話の場合, 東京式アクセントの第1類ニワ, 第2, 3類, オト, ヤマ等と類似の型のものであるが, 文脈中ではさきの表に示したハリガのように, アクセントの位置が後へずれ, さらに文脈中では一息に言うとき, ハリガホソイのように後続の語頭のアクセントまで低く平らに続くことが多い。なお, 大阪と類似のアクセントを持つ高知市では, このような第4類の単語を, 古代京都の型(ハリガ)で発音する傾向がある。第5類は, 特異な音調を持つ。これらはハルのように, 低く始まって第2拍の始めが高く, 続いて下降する。この型は, 文脈中では「ハルガ(スギタ)」のように, 下降音調が

表4-22 東京式アクセントと京阪式アクセントの型の種類

		1 拍 語	2 拍 語	3 拍 語
東京式		カ → カガ (蚊・毛)	ニワ → ニワガ (庭・箱)	コドモ → コドモガ (子供・煙)
		キ → キガ (木・手)	ハル (春・針)	スガタ (姿・兜)
			ヤマ → ヤマガ (山・音)	アナタ (貴方・一時)
				ムスメ → ムスメガ (娘・鏡)
京阪式	高起式	カ → カガ (蚊・血)	ニワ (庭・箱)	コドモ (子供・煙)
		ゲ → { ケガ ケガ (毛・胃)	ヤマ (山・音)	スガタ (姿・貴方)
	低起式	キ → キガ (木・手)	ハリ → ハリガ (針・傘)	トウゲ → トウゲガ (峠・都会)
			ハル → ハルガ (春・窓)	ミドリ (緑・兜)

る。高から低への移行は、東京式アクセントの場合と同様 1ヶ所に限られるから、高起式の型には n 種の型がある。低起式には、そのうち全部の拍の低いものが現在では用いられず、第 2 拍以下のどの拍かが高となるから、 $(n-1)$ 種の型がある。これらをあわせれば $(2n-1)$ 種の型があるが、そのうえに、1 拍語と 2 拍語には次のものがある。つまり、表中に、斜めの線分を付した単語がそれで、1 拍語の $\overline{\text{ケ}}$ (毛)、 $\overline{\text{キ}}$ (木)、2 拍語の $\overline{\text{ハル}}$ (春) 等がある。

なお、東京式、京阪式アクセントの地域的な分布については図4-①のアクセントの地図をご覧ください。この図で、東京式アクセント地域が近畿地方を挟んで東西に広がり、兵庫県北部等にも見られること、また、四国に京阪式アクセントがあること等に注目されたい。

(2) 調査に用いた単語

大阪の調査では、東京で用いたものと同様の単語を用いて発話の実態を比較するとともに、さらに、特異な音調を持つ単語、あるいは史的变化と関連のあ

失われるのが普通である。

参考までに、次には 1 拍語～3 拍語までの型について、東京式と京阪式のアクセントを比較して示した。

表 4-22 は、東京式アクセントを上部に、京阪式アクセントを下部に示して両者のアクセント型を比較したものである。東京式の場合 n 拍語の型は、 $(n+1)$ 種類ある。しかし、京阪式アクセントの場合は、まず、第 1 拍が高く始まるか、低く始まるかにより、高起式と低起式の 2 群に大別され

る単語についての調査をも行なった。

上記のように京阪式アクセントは長い歴史を持ち、しかも、型の種類が多く、特異な型を持っているからである。

以下、調査に用いた単語（詳細は1.2. 参照）について簡単に説明する。

(i) 東京都の場合に用いたと同一の2拍語類別語彙10語である。文脈も同様である。この収録は、東京都の場合と比較するに役立つ。京阪式アクセントでは、しかし、すでに述べたように歴史との関連において観察する必要がある。ことに、第5類では、単語の場合に第2拍の下降音調が現われ、この音調が京阪アクセントの特徴の一つとして重要である。そこで、大阪の場合には、すべての単語について単語単独の発話をも収録し、文脈中の場合とあわせて型発話の実態を調べる材料とした。

(ii) 上記の単語が日常、比較的多く用いられるものであるのに比べて次には2拍語の中でやや問題のある単語を扱った。今回の調査に先立って筆者が大阪府下における大阪出身者を対象として行なった予備調査の結果(杉藤, 1973)では、前記の1～5類に属する単語は型発話において安定度の高い単語であった。

一方、嘘、謎、岸、父、牡等は、個人により型の発話にゆれの多い単語である。そのうち「嘘、謎」は第5類単語との比較の材料とし、また、[kiʃi], [osu], [tʃitʃi]等は母音が狭母音[u] [i]等であり、それらが無声子音に挟まれ、あるいは無声子音に後続して終わるため、母音の無声化を生じ易い単語である。これらについては、予備調査の結果、型の比較的安定していた kusa (草)をも今回の収録単語に加えて大阪における無声化の度合い及び無声化された母音にアクセントをおいた発話の安定度を調べる材料とした。

(iii) 次は、1拍語の6単語である。1拍語には第1類～第3類の3種の型があり、それらは高く平らな型、下降調、上昇調を持つ単語である。これらは京阪式アクセントの場合に比べて長く発音される傾向がある。高く平らな型、カ(蚊)なども一般に長い。また、ヶ(毛)、キ(木)等は、助詞の付加により、下降、上昇等、拍内での音調変化を失い、ヶガ(毛)、キガ(木)のように短く発音されると一般に言われている。しかし、カァガ、ヶェガ、キィガのように単語の音調が保持され長く発音される例もある。この音調の年齢や地域による

変化も比較の対象とすべきものと思われ、この場合にも、単語と文脈中の場合との両者のリストを用意した。

(iv) 3拍語については、1種類の型だけを加えた。 $\overline{\text{ム}}\text{スメ}$ (娘)の型は、平安末期の辞書『類聚名義抄』に見られるが、現在の京都では $\overline{\text{ム}}\text{スメ}$ 、大阪では $\overline{\text{ム}}\text{ス}\text{メ}$ とされている。これは、近畿地方でも地域により、また、年齢により変化の見られる型であるからそれらの変化を調べる材料として、「娘、東、鏡」の3単語を調査単語に加えた。

(3) 対象とした人々と収録の方法

今回の調査において、収録の対象とした人々は、すでに述べられたとおり、住民票から無作為に抽出された500名中の358名である。これらの話者の属性については後に述べられるであろうが、ここでは、直接アクセントと関係のあると予想される年齢その他の属性について表4-23に示した。

収録に当たっては、東京では単語を文脈に入れた場合を扱ったが、すでに述べたように大阪では、単語のみの発話をも収録することとして、リストには、“庭、庭が広い”のように、単語とこれを文脈に入れたものを併記し、1枚のリストに数単語とそれぞれの文脈とを併記して示した。また、大阪では文脈中において助詞「が」を入れない発話が少なくないため、1拍語その他の数単語については、このような文脈をも用意し録音した。1回目の読みが一通り終了した後、いくつかの設問に関する問答が行なわれ、それが終わってから2回目の読みを求めた。

表4-23 調査対象とした話者の属性別分布

												性			
												男	女	計	
												人数	194	164	358

表4-23 調査対象とした話者の属性別分布															
年 齢	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	計			
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓				
人数	40	39	46	42	37	46	30	28	13	23	14	358			
	(37)	(25)	(20)	(18)	(17)	(26)	(17)	(11)	(3)	(12)	(3)	(189)			

(注) 表中、下欄()内の数字は、大阪出身者の人数。

出身地	大 阪	他 近 畿	九 州	四 国	中 国	中 部	北 陸	南 関 東	北 海 道	北 東 北	南 北 東 北	不 明	計
	人数	189	60	34	28	22	8	8	3	2	1	3	358

(4) 結果の処理

収録した単語及び文のアクセントは、すべて筆者(杉藤)が聴取して、その結果を分類した。次に、分類した結果は、すべてコンピュータに入力され、東

京都の場合と同様の処理が行なわれた。2 拍語 1 類～5 類の単語の文脈中の発話におけるアクセントについては、東京都における調査結果と比較するために、大阪市の被調査者一人一人の発話について、東京式アクセント及び京阪式アクセントとしてのそれぞれの点数を与え、集計してそれぞれにつき、種々の属性との関連を検討した。

東京式アクセントを基準とした得点の与え方は、前章に述べられたものと同様の方法により、京阪式アクセントを基準とした得点の与え方もこれに準じたが、くわしくは後に述べることにする。

次には、まず、2 拍語類別語彙のアクセントについて、大阪市の人々の発話の実態を述べよう。

4.2.2 2 拍語類別語彙のアクセント

(1) 2 拍語類別語彙のアクセント

京阪式 2 拍語には、すでに述べたとおり 4 種の型がある。これらは、高起式の第 1 類 $\overline{\text{〇〇}}$ ($\overline{\text{〇〇}}\triangleright$)、第 2 類、3 類 $\overline{\text{〇〇}}$ ($\overline{\text{〇〇}}\triangleright$)、及び低起式の第 4 類 $\overline{\text{〇}}(\overline{\text{〇〇}}\triangleright)$ 、第 5 類 $\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}$ ($\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}\triangleright$) の 4 種である。ここで扱う単語及び文に、記号を付して示せば次のとおりである。なお、以下、①～⑤の記号は各類別を示すこととする。

	単 語	文 脈 1.	文 脈 2.
高起式 ①	$\overline{\text{ニワ}}$ (庭)	$\overline{\text{ニワガヒロイ}}$	$\overline{\text{コノニワガヒロイ}}$
	$\overline{\text{ハコ}}$ (箱)	$\overline{\text{ハコガチイサイ}}$	$\overline{\text{コノハコガチイサイ}}$
	② $\overline{\text{オト}}$ (音)	$\overline{\text{オトガスル}}$	$\overline{\text{コノオトガスル}}$
	$\overline{\text{ウタ}}$ (歌)	$\overline{\text{ウタガキコエル}}$	$\overline{\text{コノウタガキコエル}}$
	③ $\overline{\text{ヤマ}}$ (山)	$\overline{\text{ヤマガミエル}}$	$\overline{\text{コノヤマガミエル}}$
低起式 ④	$\overline{\text{イロ}}$ (色)	$\overline{\text{イロガウスイ}}$	$\overline{\text{コノイロガウスイ}}$
	④ $\overline{\text{ハリ}}$ (針)	$\overline{\text{ハリガホソイ}}$ ($\overline{\text{ハリガホソイ}}$)	$\overline{\text{コノハリガホソイ}}$ ($\overline{\text{コノハリガホソイ}}$)
	$\overline{\text{カサ}}$ (傘)	$\overline{\text{カサガホシイ}}$ ($\overline{\text{カサガホシイ}}$)	$\overline{\text{コノカサガホシイ}}$ ($\overline{\text{コノカサガホシイ}}$)

- ⑤ ハル(春) ハルガスギタ コノハルガスギタ
 マド(窓) マドガオオキイ コノマドガオオキイ

これらのアクセントは、東京式アクセントと異なり、特異な型を含むので、次には、その音調変化を、高低曲線によって説明する。

アクセントについては、一般に、例えば第1拍が高く、第2拍が低くというように、各拍の高さが全く異なると考えられているが、それはいわば発話の意図であり、実際にはこの場合高から低へのなだらかな連続体である。この連続体の何を決め手としてアクセントを聞きとるかと言えば、声の下げの始点、あるいは声の上げの始点と、語音の区切りとの時間関係によって判断している(杉藤, 1969a; 藤崎・杉藤, 1977)。図4-②には、大阪出身者の一人の発話による上記4種の型の単語及びそれが文脈に入った場合の音声資料について、そのスペクトログラムから抽出した高低曲線を示した。4種の型における各拍の高さを比較し易いように、ここではそれぞれ始めの母音の始点をそろえて示した。横軸は時間(秒)、縦軸は高さ(Hz)である。第1類の例はニワ、第2・3類の例としては、第3類のヤマ、第4類ハリ、第5類ハルの例を示した。

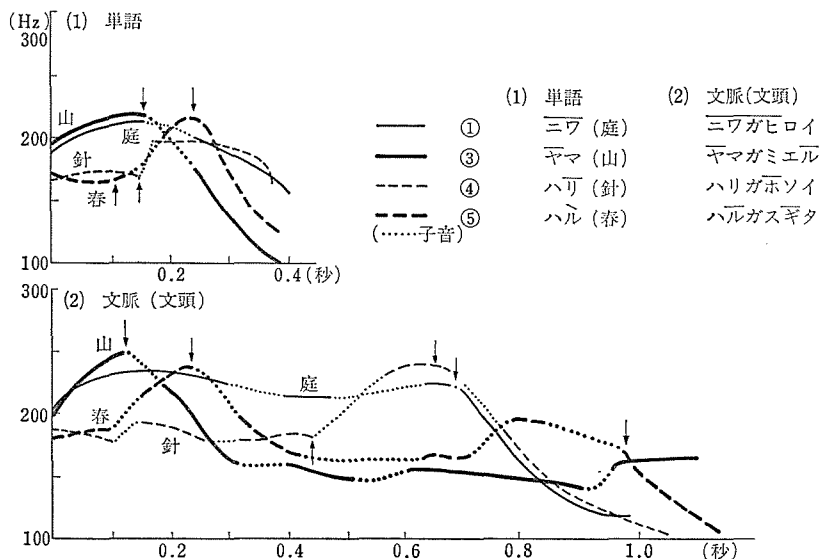


図4-② 2拍語類別語彙の高低曲線 (狭帯域スペクトログラムより抽出)

①ニワ（細い実線）は高く始まり比較的平らな音調である。終わりにむけてやや下降しているのは自然な声の減衰による。③ヤマ（太い実線）は高く始まり、矢印（↓）の時間的位置から下降している。④ハリ（細い破線）は、低く始まり矢印（↑）の位置から上昇しており顕著な下降は見られない。⑤ハル（太い破線）も低く始まり矢印（↑）の位置から上昇し、第2拍の始めは高く、続いて矢印（↓）から下降している。

これらが文中に入ると、①ニワガヒロイの「ニワガ」は平らな音調、③ヤマガミエルは、ヤが高く、続いて下降し、その後は低く続き終わりの拍が高い。④ハリガホソイでは、ハリガは低くホで高くなる。④類はハリガであるが、後続の単語の始めが高いとき、このように /低低低/ と実現することもあるという例である。⑤ハルガスギタではルが高く急な上昇を示し後続の拍は下降し、ギが再び高くなり、タで下降している。つまり、ある拍にアクセントを置くということは、その拍の母音の終わりに声下げの始点がくるため後続の母音が下降するということである。

以下では、このようなアクセントのちがいを各話者の発話について聴取により区別し分類した結果について説明することにする。まず、東京都の場合と同様①～⑤類の単語の文脈中の場合について述べる。

表4-24 大阪市住民358人による2拍語類別語彙のアクセント[%]

		①/○○▷/	②③/○○▷/	④ /○○▷/	⑤/○○ガ/	そ の 他		録音もれ
		○○▷	○○▷ (○○▷)	○○▷ (○○▷)	○○ガ	○○▷	○○▷	
①	庭が	67.6	0.8	0.3	4.5	23.5	1.4	2.0
	箱が	64.8	1.4	0.8	7.0	22.9	1.7	1.4
②	音が	1.1	70.1	0.3	23.5	2.8	0.3	2.0
	歌が	0.3	68.8	0.8	25.1	3.9	0.0	1.1
③	山が	0.8	69.8	1.1	22.3	4.5	0.0	1.7
	色が	0.8	69.8	1.4	22.3	3.9	0.3	1.4
④	針が	0.3	20.9	65.6	5.6	6.4	0.0	1.1
	傘が	0.3	18.2	67.6	6.4	6.1	0.0	1.4
⑤	窓が	0.3	21.5	1.7	71.8	3.1	0.0	1.7
	春が	0.0	26.3	1.1	69.8	1.4	0.0	1.4

表4-24は、大阪市の住民358名が、前記単語の文脈中にあるものを読上げた場合の、各アクセント型が全体に占める割合を示したものである。また、それぞれの単語が属する各級のアクセント型の発話の割合は太字で示した。

この表を見ると、各類別語彙の京阪式アクセントの型が多数を占めていることがわかる。これに次いで発話者数の多いアクセント型は、その単語の、東京式アクセントの型である。その他の型の発話例はごく少ない。全体に第1回目より第2回目の方が、京阪式アクセントの発話がやや多くなる。ここではいずれも第2回目の発話結果を採用した。また、文頭よりも文中の発話の方がどの語においても京阪式の型の発話がわずかではあるが多くなる傾向が見られる。

いずれの場合についても、大阪市の住民のアクセントは、京阪式アクセントが60%を越えて優勢であり、これに比べて東京式アクセントはその半数にもならないことを示している。類別による発話者数を比べると、2類、3類が幾分多いが、大きい差はない。

これらは大阪市の住民全体の結果を示すものであるが、この中の大阪出身者のアクセント型発話の結果をいえば、大阪出身者は、それぞれの単語を各類別の型に発音する率が圧倒的に高く（ほぼ80～90%）、単語によっては90%以上に及ぶものもあって、大阪出身者が東京式アクセントを用いる例は稀である。第5類の「春」のみは、東京式アクセントと同様に「ハルガ」と読む者が10%をわずかに越えるだけで、他は、東京式アクセントで読むものが1割以下、ことに第3類の場合は少ない。

表4-25には、各級の単語を文頭に入れた例について大阪出身者が、各単語をそれぞれの属する類別の型として発話した人数の、全体に対する割合を年齢別に示した。年齢層により、また単語によって幾分の差はあるが、各年齢層にわたって値が高く、とくに高年齢層では100%を示すものが多く見られる。これに比べれば、若年層の示す値はやや低い。しかし、高年齢層は言うまでもなく、若年層に至るまでこのように古いアクセント型が保たれていることは注目すべきものと思われる。

なお、ここでは割愛したが、大阪市の住民全体に關しての同様の資料を作成して比較したところ、全体の場合は年齢の高さが型の発話の正確さと必ずしも

表4-23 大阪出身者による2拍語類別語彙の各アクセント型発話の比率(年齢別)(%)

		15 19	20 24	25 29	30 34	35 39	40 44	45 49	50 59	60 69	平 均	類 平 別 均
①	庭が	86.1	96.0	95.0	88.9	82.4	100.0	88.2	100.0	100.0	93.0	91.6
	箱が	78.4	92.0	90.0	88.9	82.4	100.0	94.1	85.7	100.0	90.2	
②	音が	94.4	88.0	90.0	100.0	94.1	96.0	94.1	92.9	100.0	94.4	93.4
	歌が	89.2	92.0	85.0	88.9	94.1	100.0	88.2	92.9	100.0	92.3	
③	山が	94.4	92.0	95.0	100.0	94.1	100.0	94.1	100.0	100.0	96.6	95.7
	色が	91.7	96.0	100.0	94.5	88.2	96.0	94.1	92.9	100.0	94.8	
④	針が	86.5	88.0	90.0	83.4	88.3	96.0	88.2	92.9	100.0	90.4	90.2
	傘が	83.8	96.0	90.0	94.5	88.3	92.3	88.3	100.0	76.9	90.0	
⑤	春が	86.1	88.0	85.0	77.8	88.2	96.0	94.1	92.9	92.3	88.9	89.8
	窓が	80.6	92.0	95.0	88.9	88.2	92.0	94.1	92.9	92.3	90.7	
平 均		87.1	92.0	91.5	90.6	88.8	96.8	91.8	94.3	96.2	92.1	92.1
人 数		37	25	20	18	18	26	16	14	15	(合計189)	

(注) 録音もれなど資料を欠く人数は除外してある。

一致せず、京阪式アクセントの割合は15～19歳が一番高く81.1%，30～34歳が最低で58.1%，25～39歳(平均61.7%)が比較的低かった。つまり、後者の年齢層に、他地域からの流入人口の多いことを示唆するものと思われる。これらの結果は、大阪市の住民のアクセントの発話においては、京阪式アクセントが多く、東京式アクセントがこれに次ぐが、その発話者の多くは他地域の出身者であることを示唆している。アクセント型の変化を調べるという観点からは、大阪出身者のアクセント型の発話について、さらにくわしく調べる必要がある。そこで、次には、京阪式アクセントの特徴の一つである下降音調に着目して、単語単独の発話について述べる。

なお、ここでのべた単語の文脈中の発話に関しては、その得点と、年齢その他の種々の社会言語学的属性との関係について後に再び述べることにする。

(2) 2拍語〇〇型の変化

すでに述べたように、京阪式アクセントにおいては、文脈中の単語アクセントの発話は、単語単独の発話のアクセントと一致しない場合がある。例えば、第5類ハル(春)等においては、文中で助詞が付加された発話では、ハルガとなって、下降音調が失われる。ここでは、このような型を主体として単語アク

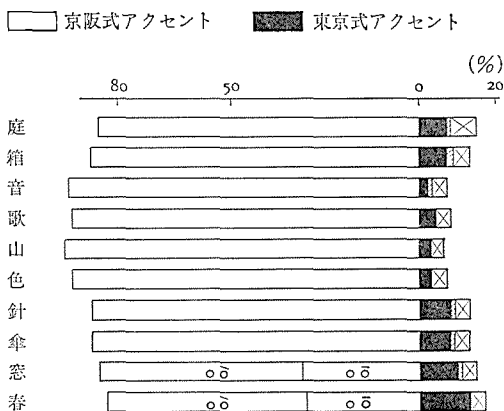


図4-③ 大阪出身者による2拍語類別語彙(単語)の発話における京阪式アクセントと東京式アクセントの比率

脈中に入れた場合よりやや率は低い、京阪式アクセントの発話の率が相当に高く、類別語彙のアクセント型は安定した値を示している。しかし、5類についてはやや異なる結果を示している。この型はさきに述べたように、低く始まり、第2拍の始めが高く続いて下降する型であるが、これを、単なる低高型に発話する人がふえている(杉藤他, 1979)。これとは別に高低型に発話する話者があるので、この型のみは、棒グラフが2種の型に分かれている。次に、年齢との関連を見よう。

図4-④は、第5類の「窓」を大阪出身者が第2回目に発話した場合について、年齢により生ずる上記3種の型の変化を示したものである。同じ第5類の「春」については、「窓」と類似の結果を得たので、図は割愛した。文脈中の「窓が」の場合は、いずれも $\text{〇}\overline{\text{〇}}\triangleright$ 型が多く、 $\text{〇}\overline{\text{〇}}\triangleright$ 型は少ない。文脈中での第5類の型は安定していると見るべきであろう。しかし、これらを単語単独で発話した場合に、第2拍の下降音調を失い、 $\text{〇}\overline{\text{〇}}$ 型のように発話する例が増加しており、19歳以下では $\text{〇}\overline{\text{〇}}$ 型の方がより多くなっている。ただし、この場合の $\text{〇}\overline{\text{〇}}$ 型は、第4類の $\text{ハ}\overline{\text{リ}}\rightarrow\text{ハ}\overline{\text{リ}}\text{ガ}$ とは全く異なり、図が示すように文脈中では、マ $\overline{\text{下}}$ ガのように言うから明らかに第5類であるが、これは4類の $\text{〇}\overline{\text{〇}}$ 型とまぎらわしい。そこで、以下では、単語の場合にマ $\overline{\text{下}}$ と実現し文脈中ではマ $\overline{\text{下}}$ ガと

セントの変化について述べ、次にアクセント型にゆれの多い単語について、型変化の実態を述べよう。

図4-③は、単語単独の発話において人数の一番多い型と、これに次ぐ型及びその他の型についてを取り上げそれらの型の発話者数の割合を大阪出身者について示したものである。1類から4類までについては、文

言う場合にはこの型を第5類の変種と見て、「5類〇〇型」のように表記して第4類のハ^リ（ハリガ）の場合と区別することにしよう。

5類〇〇型は、従って本質的な型の変化ではないが、下降音調を失うことは、近畿アクセントらしさを失うことになる。また、〇〇型が他の型と同様古代から伝承された型であるとすれば、若年層におけるこの型の変化には注目しなければならない。そこで、この問題を、やや地域的に広げて、大阪府下の他の地域における〇〇型発話の実態と比較してみる。

図4-⑤には、大阪市の東南に隣接する八尾市を中心とする中河内、及び大阪府の東南の外れにある旧農村地域（南河内）における調査結果（杉藤他、1980）のうち「窓」の場合を比較のために示した。この場合の対象は小学校1年生から82歳に及ぶそれぞれの地域につき108名の話者である。八尾市等の中河内の20歳以上では〇〇型がほぼ安定しており、13～19歳で5類〇〇型が急に増加し、小学生では両型が逆転している。一方、都市化を比較的にめがれている南河内では、変化がよりおそく小学生でも〇〇型の保持者が多い。

これをさきの大阪市の場合と比較すると次のようなことがわかる。つまり、5類〇〇型の5類〇〇型への変化過程において、大阪市が30～34歳で交わり一番速く、八尾市では小学生から中学生の間で交わり、従って、これに次ぎ、南河内は、両型が交わることなく、もとの型を保ち変化の速度がおそい。大阪市とこれらの地域とにおける5類の〇〇型と〇〇型の型変化のずれは、この場合、アクセント型の変化がマスコミ等による影響とはいいがたく、言語環境の変化との関連において考察する必要があることを示唆するものと思われる。

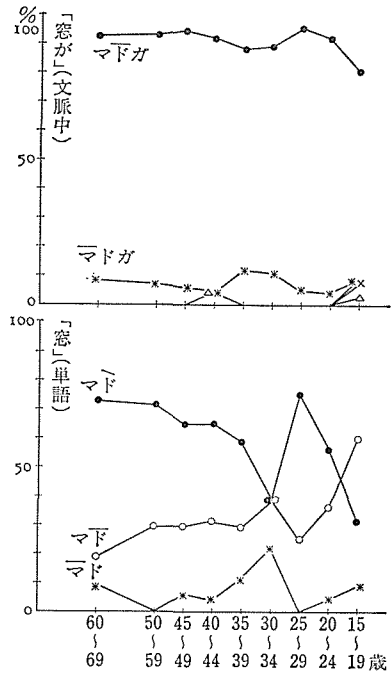


図4-④ 大阪出身者による「窓」のアクセント型(年齢別)

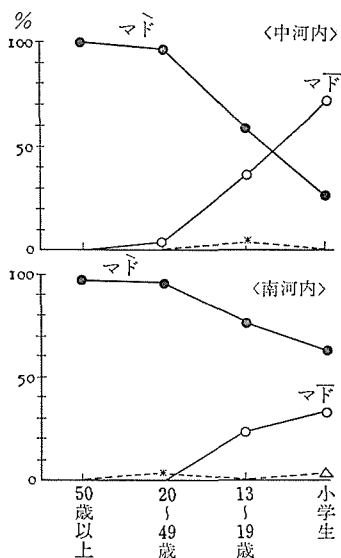


図 4-⑤ 中河内・南河内における「窓」のアクセント型(年齢別)

この型に関する次の問題は、 $\overline{\text{〇〇}}$ 型への変化の問題である。5類の単語の頭高型は、東京式アクセントの型である。これは東京化の一現象かもしれない。しかし、実は、 $\overline{\text{〇〇}}$ 型と $\overline{\text{〇〇}}$ 型とはもともと隣接関係にあり変化のパターンの一つである(杉藤, 1973)。この問題についてはアクセント型のゆれが多い単語の例で説明する必要があると思われるので、次には、その他の2拍単語のうち、大阪方言話者の発話においてゆれの多い単語、「嘘」と「謎」について述べよう。

図 4-⑥は、大阪出身者の発話による「嘘が」及び「嘘」と「謎が」及び「謎」

について、発話された各型の、年齢による変化を示したものである。まず、「嘘」について今回の調査結果を観察すると、文脈中のアクセント型は $\overline{\text{〇〇}}\triangleright$ が高年齢層以外の者に多く、老年層は $\overline{\text{〇〇}}\triangleright$ であり、その境界が60歳代にあることが推測される。単語単独発話の場合も高年齢層では $\overline{\text{〇〇}}$ 型、50歳代以下では $\overline{\text{〇〇}}$ 型となり、さらに、それが5類 $\overline{\text{〇〇}}$ 型となる傾向にあることを示している。

従って、「ウソ」というアクセントは最近の東京式アクセント化とは性質が異なり、これが古い型であることがわかる。このような傾向は図 4-⑦に示した大阪府八尾市を中心とする中河内と、大阪府南河内の場合にも現われている。ことに、南河内の場合には「ウソ」の発話が相当多く残っており、中年層から「ウソ」が増加し、小学生の発話に5類 $\overline{\text{〇〇}}$ 型が少し見られる。中河内の八尾市では南河内よりも変化の様相がやや早く、20~40歳代では殆ど「ウソ」、そして若年層では「ウソ」が増加の兆しを見せている。上記の大阪市内の場合が、一番変化の速度が早く、また「ウソ」が「ウソ」に全く交代してしまうことなくわずかながら各年齢層に用いられている。これは、都市の言語の持つ多様性と見るべきか、東京式アクセント化と関連があるかは今のところ明らかでないが、

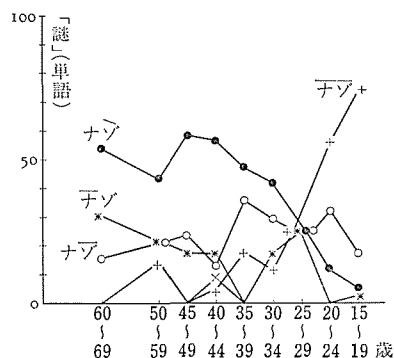
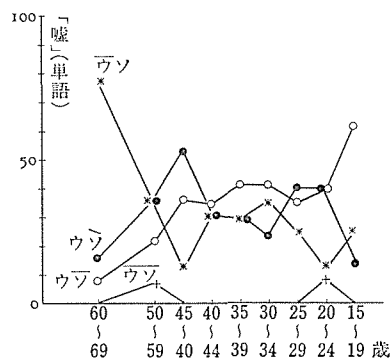
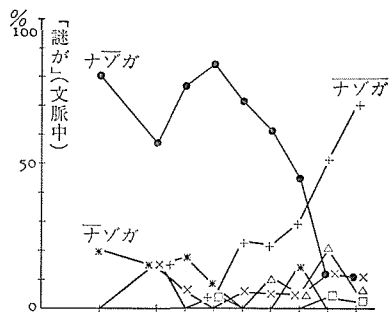
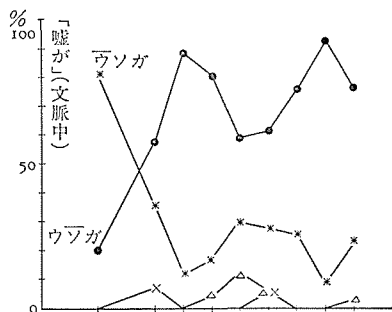


図4-6 大阪出身者による「嘘」「謎」のアクセント型(年齢別)

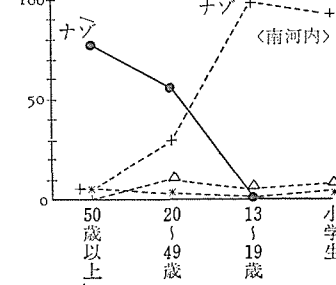
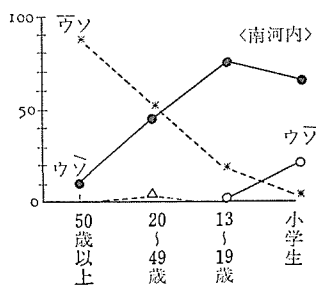
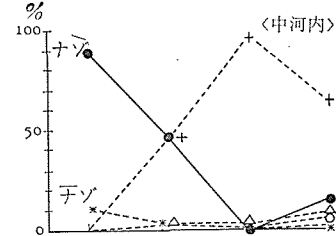
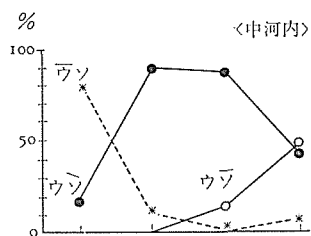


図4-7 中河内・南河内における「嘘」「謎」のアクセント型(年齢別)

大阪という大都市の場合が周辺地域と異なる変化を示す例と思われる。

次に大阪市の場合について「謎」の単語を見ると、65～69歳の人の発話はこちらも「ナヅ」と「ナヅ」の両者が見られる。前者の変形としての「ナヅ」が増加し、別に「ナヅ」が次第にふえて15～19歳では70%に及ぶ。この単語は筆者の予備調査の結果とくに型のゆれが多かった単語であり、〇〇型が〇〇型への変化を持つ唯一のものである。また、この語が文中において「ナヅガーナヅガーナヅガ」と変化している点から推せば、この変化も東京式アクセントの「ナヅガ」への変化とは関係のないものであろう。「謎」の場合にも、八尾市を中心とする中河内、南河内の〇〇型から〇〇型への変化に比べて、大阪市の変化の実態は複雑であり、大阪市の〇〇型はの場合には、郡部より〇〇型化への傾向が早くから行なわれていることを示すものと思われる。ここに示した〇〇型の5類〇〇型への変化は、顕著な一つの傾向を示すものと思われるが、年齢による変化が、地域によってずれるという現象からすれば型の変化が、放送の影響等による画一的なものではないことを示していると考えられる。

4.2.3. その他の語彙について

(1) 1拍語のアクセント——音調及び持続時間

京阪式アクセントの1拍語は、東京式アクセントと異なる二つの特徴を持っている。その一つは高低変化の特徴であり、他は、持続時間の特徴である。

高低変化については、東京式アクセントの場合単語単独の発話では、型の相違が高低の差として表現されないが、京阪式アクセントの場合は、従来説明されていたように（服部，1931），文中は勿論のこと，単語の発話にもその始めに明らかな高低差がある。1拍語第1類の〇型と，第2類〇型とは高く始まり，第3類〇型は低く始まる。3種の型は，一般に，それぞれ高く平板，下降音調，上昇調の高低変化を保っている（杉藤他，1975）。持続時間については，東京方言の場合，1拍語は2拍語に比べて格段に短い，近畿方言の場合，1拍語は長母音または2連母音の2拍語と類似の長さで発音される傾向がある。文脈に入った場合には，カガ（蚊），ケガ（毛），キガ（木）となると考えられている

が、実際にはそれらは $\overline{\text{カ}}\overline{\text{ア}}\overline{\text{ガ}}$ 、 $\overline{\text{ケ}}\overline{\text{エ}}\overline{\text{ガ}}$ 、 $\overline{\text{キ}}\overline{\text{イ}}\overline{\text{ガ}}$ または $\overline{\text{キ}}\overline{\text{イ}}\overline{\text{ガ}}$ あるいは後続の語が高いときには $\overline{\text{キ}}\overline{\text{イ}}\overline{\text{ガ}}$ のように低の連続となる場合もあり、音調は、文脈によりあるいは区切りの有無により異なる場合がある。

上記のような説明には、実際の高低曲線を用いての方が幾分わかり易いと思うので、次に大阪出身者の例を用いて述べることにする。

図4-⑧は、女性話者による $\overline{\text{カ}}$ (蚊)、 $\overline{\text{ケ}}$ (毛)、 $\overline{\text{キ}}$ (木)、 $\overline{\text{テ}}$ (手) の4単語の狭帯域スペクトログラムから抽出した高低曲線により、高低変化の特徴と持続時間の特徴を示したものである。単語及び文は、母音の始点をそろえてそれぞれ重ねて示した。点線は子音の部分である。

① $\overline{\text{カ}}$ (蚊) は高く比較的平らな音調、② $\overline{\text{ケ}}$ (毛) は下降音調を示し、③ $\overline{\text{キ}}$ (木)、 $\overline{\text{テ}}$ (手) は上昇音調である。文脈に入った場合は、それぞれ単語によって文脈が異なるので比較しにくい、次のとおりである。① $\overline{\text{カ}}\overline{\text{ガ}}\overline{\text{ト}}\overline{\text{ン}}\overline{\text{デ}}\overline{\text{ル}}$ は高く平らな音調、ただし、次第に低くなっているのは声の自然の減衰による。② $\overline{\text{ケ}}\overline{\text{ガ}}\overline{\text{カ}}\overline{\text{タイ}}$ の「毛」の部分は↓印から下降し、 $\overline{\text{カ}}\overline{\text{タイ}}$ の $\overline{\text{カ}}$ で再び高くなる(↑印)。③ $\overline{\text{キ}}\overline{\text{ガ}}\overline{\text{ハ}}\overline{\text{エ}}\overline{\text{テ}}\overline{\text{ル}}$ は、後続する動詞が低く始まるため、これに先行する「ガ」

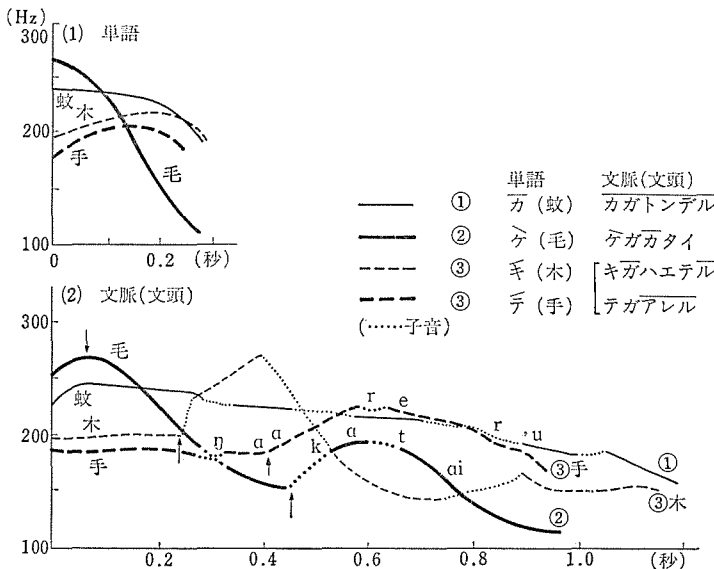


図4-⑧ 1拍語の高低曲線 (狭帯域スペクトログラムより抽出)

表4-図 大阪出身者による1拍語のアクセント(%)

		① / $\overline{\text{O}}\triangleright$ /	② / $\overline{\text{O}}\triangleright$ /		③ / $\text{O}\overline{\triangleright}$ /			録音もれ
		$\overline{\text{O}}\triangleright$	$\overline{\text{O}}\triangleright$	$\overline{\text{O}}\triangleright$ ($\overline{\text{O}}\triangleright$)	$\text{O}\overline{\triangleright}$	$\text{O}\triangleright$	$\overline{\text{O}}\overline{\triangleright}$	
①	蚊が	93.7	1.1	0.0	3.2	0.5	0.0	1.6
	血が	88.4	1.1	0.5	8.5	0.0	0.0	1.6
②	毛が	1.6	86.2	7.9	2.1	0.5	0.0	1.6
	胃が	24.9	50.8	10.6	11.6	0.5	0.0	1.6
③	木が	0.0	11.1	0.0	82.5	0.0	4.2	2.1
	手が	0.5	9.5	0.0	50.3	34.4	3.7	1.6

が、とくに高い。「テガアレル」では「ガ」の後上昇している。これらの1拍語の母音の持続時間を後続の部分の各母音の持続時間に比べると、1母音のそれよりも2連母音のそれに近いことがわかる。

以下で説明される単語の $\overline{\text{O}}$ 、 $\overline{\text{O}}$ 、 $\overline{\text{O}}$ 及び、文脈中の $\overline{\text{O}}\triangleright$ 、 $\overline{\text{O}}\triangleright$ 、 $\text{O}\overline{\triangleright}$ 、 $\text{O}\triangleright$ (無記号)等の記号は上記の「蚊が」「毛が」「木が」「手が」のような音調のものを指すと了解していただきたい。

表4-図は、大阪出身者がそれぞれ「カガトンデル」等1拍語の文頭にあるリストを読上げた場合各アクセント型発話の人数を第2回目の読みについて示したものである。アクセント記号は聴覚的印象に基づいてつけたものであるが、それらをこの表では/ /内に示した各アクセント型の記号の下にそれぞれまとめて示した。また、各単語についてその属する型の発話の割合は太字で示した。

「蚊が」「血が」、いずれの場合も $\overline{\text{O}}\triangleright$ 型が圧倒的に多く、大阪出身者の90%以上が「カガ(トンデル)」と言っていることになり、この安定度は高い。同じく第1類に属する「チ」の場合は、東京式アクセントが少しあるがそれも1割にみない。第2類の「ケガカタイ」も「ケガ」「ケガ」を含めれば90%以上で、「ケガ」は各年齢層にわたっているが割合からすれば高年齢層に多い。「ケガ」は高年齢層に見られる。1拍語の中でゆれの比較的多い「イガオモイ」は「イガ」「イガ」を含めても他より低い値を示している。「木が」と「手が」は同じ類に属し、 $\text{O}\triangleright$ 型が多いが2単語では数が異なり、「手が」の場合にテガ(低低)が多い。この理由は、文脈の相違によるものと見られる。前者は、「キガハエテル」であり、後者は、「テガアレル」である。後続動詞が低く始まるものと高く始まるも

のとでは助詞「ガ」の高さに差ができる。つまり、前者は「キガ」となり易く、後者は、主語の後にいささかの区切りもおかずに言うと、「テガ」(/ 低低 /) となる傾向がある。従って、この「テガ」をも「テガ」に加えて考える必要がある。東京式アクセントの○▷型の発話者は、「手が」よりも「木が」の方がやや多い。いずれにしてもこれら1拍語類別語彙の発話においては、大阪出身者の京阪式アクセントの使用度は高く安定していると言えよう。

次には型のやや不安定な「胃」のアクセントについて変化のあり方を見るために、年齢別による型の発話を「毛」の場合と比較して示した。

図4-⑨には「毛がかたい」「胃がおもい」を大阪出身者がそれぞれ第2回目に発話した場合について、年齢によって生ずる型の変化を示したものである。

まず、「毛」について見ると、「ケガ」がどの年齢層でも多数を占める。「ケガ(ケガ)」がわずかであるが、各年齢層に見られる。しかし、高年齢層の方が割合からすれば高い。東京式の「ケガ」は、若い層にわずかに見られる。「胃」についてみると「イガ」がどの年齢層にも多く、「イガ・イガ」は高年齢層にあり、これをも加えれば「胃」にアクセントを置く発音は高年齢層では100%に近い。若年層になるに従って「イガ」が増加し、「イガ」をしのぐ結果となる。「イガ」も次第に増加している。あるいは「イガ(イガ)→イガ→イガ」の経過を辿るかもしれない。

大阪では普通の談話では、主語の後ろにつく「ガ」は使わず、「カァトンデル」「チィデタ」「ケェカタイ」「イィオモイ」「キィハエテイル」「テェアレル」等の

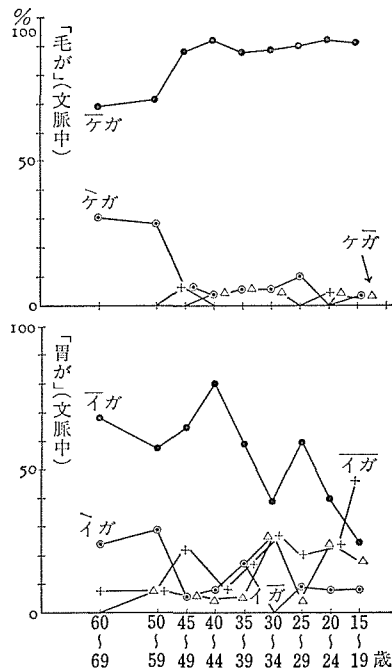


図4-⑨ 大阪出身者による「毛が」「胃が」のアクセント型(年齢別)

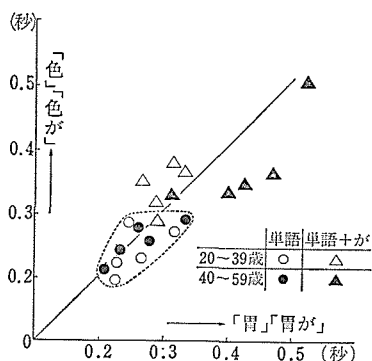


図4-10 「胃」「色」の持続時間

ように表現し、後に「なあ」「でえ」等をつけて言うことが多い。1拍語についてはこのような助詞を省く場合についても収録を行なったが、この場合には、単語の持つ音調 $\bar{\text{イ}}$ 、 $\bar{\text{キ}}$ 、 $\bar{\text{テ}}$ は比較的保たれる傾向があった。

次に、持続時間について、 $\bar{\text{イ}}$ のアクセントの発話者のうち、好条件で収録された音声資料10名分についてスペ

クトログラムに取り、その持続時間を同一の話者の発話による $\bar{\text{イ}}$ のそれと比較した。話者の年齢は、20～39歳と40～59歳の各5名ずつである。

図4-10は、横軸に「胃」、縦軸にこれと同じくイで始まる頭高型の2拍語「色」の、それぞれ持続時間を取り、10名の話者の発話による「胃、胃が」と「色、色が」の持続時間の分布を示したものである。これを見ると、大阪出身者の「胃」と「色」の単語の持続時間には大差がなく、年齢による差も見出しにくい。ただし、文中の「～が」では、40～59歳の発話速度が若年層よりおそい傾向がある。全体的に見れば、型の変化が必ずしも東京式アクセントへの移行ではなく、また、単語の持続時間も若年層が本来の大阪方言の特徴を失っているとは限らない、と言うことができる。次には、型の個人差が多い2拍語につい

表4-27 大阪出身者による「岸」「草」「父」「牡」のアクセント(実数)

		① $\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}$	②③ $\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}$	④ $\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}$	⑤ $\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}$
		① $\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}\bar{\text{▷}}$	②③ $\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}\bar{\text{▷}}$ ($\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}\bar{\text{▷}}$)	④ $\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}\bar{\text{▷}}$ ($\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}\bar{\text{▷}}$)	⑤ $\bar{\text{〇}}\bar{\text{〇}}\bar{\text{▷}}$
③	岸	58	117	7	0
	岸が	61	104	2	7
	草	0	163	19	0
	草が	3	149	0	35
④	父	4	75	101	1
	父が	1	68	107	0
類不明	牡	61	115	5	0
	牡が	66	104	4	4

て、これと母音の無声化との関連において述べよう。

(2) 2拍語のアクセントと無声拍

ここで扱う「岸、草、父、牡」のうち、「岸」と「草」とは第3類、「父」は第4類に属するものである。なお、「牡」は所属類が不明である。

表4-27には、これらの文脈中と単語の主なアクセント型を示した。「岸」はもとの頭高型がやはり多く、次は平板型「キシガ」がこれに次ぎ、東京式アクセントの「キシガ」は少ない。「草」の場合には、「クサガ」が大多数を占める。「クサガ」の発話者が35名あるが、これに対応する単語アクセントの「クサ」がゼロである点に注目したい。「父」は、やはり第4類の「チチガ」が多く、「チチガ」がこれに次ぐ。「牡」の場合は頭高型「オスガ」が多く、平板型「オスガ」がこれに次ぎ、「オスガ」は4名のみである。

図4-11は、上記単語のうち、「岸、草」について、年齢別による型の変化を示したものである。まず、「岸」については、文脈中の場合、「キシガ」と「キシガ」の両者が用いられ、むしろ若年層の方に古い型「キシガ」が多い。

単語の場合も同様であるが、その他に「キシ」が少々見られる。上図と比べると明らかなように、この「キシ」の発話の中には、文脈中では「キシガ」あるいは「キシガ」も見られ、東京式アクセントの「キシガ」はわずかである。

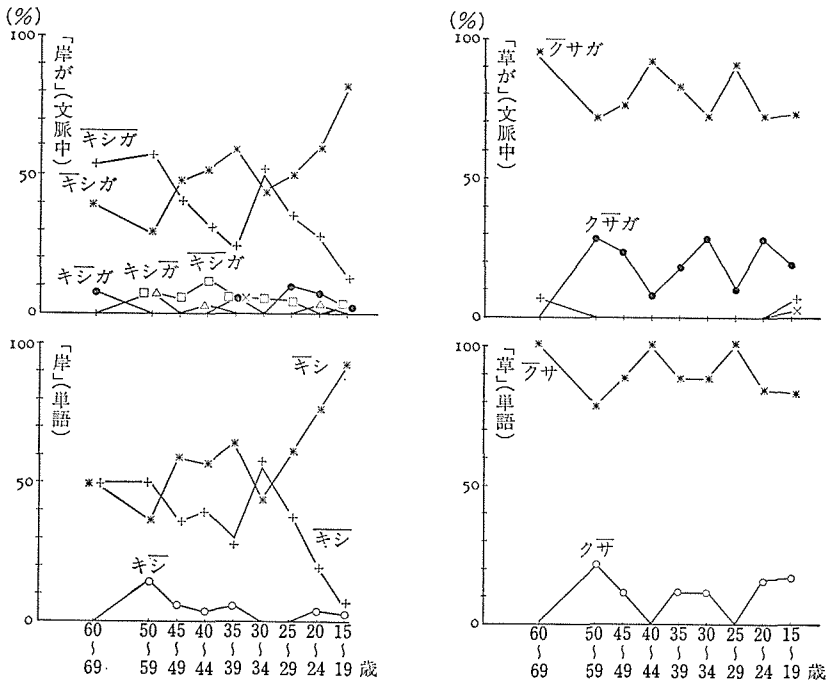


図4-11 大阪出身者による「岸」「草」のアクセント型(年齢別)

「草が」の場合は、「 $\overline{\text{クサガ}}$ 」が多く、少数ながら「 $\text{クサ}\overline{\text{ガ}}$ 」が見られる。単語の場合にも「 $\overline{\text{クサ}}$ 」が多く、年齢によっては全員が「 $\overline{\text{クサ}}$ 」であり、「 クサ 」は少ない。図を比較すると「 $\text{クサ}\overline{\text{ガ}}$ 」と「 $\overline{\text{クサ}}$ 」とが対応していると考えられる。しかし、上記のように「 クサ 」は1名もない。第3類「草」の「 クサ 」「 $\text{クサ}\overline{\text{ガ}}$ 」は、従って、すでに述べた第5類の「 $\overline{\text{ハル}}$ 」が変化して生じた「 $\overline{\text{ハル}}$ 」「 $\overline{\text{ハルガ}}$ 」とは性質の異なる変化と言えよう。結果としては東京アクセントと同様のものとなっているが、この変化の原因は母音の無声化と関係があるかもしれない。

そこで、次には無声拍とアクセントの問題について述べることにする。

「岸、草、父、牡」について無声化の可能性のある母音に、小さい丸印を付した音声記号を用いて表記すれば次のようになる。

[k₀iɸi], [k₀usa], [tɸitɸi], [osu₀]

従来論によれば、一般に無声化された母音にはアクセントを置かないと言われる。これらの単語の後に「ガ」をつければ、東京式アクセントでは「 $\text{キ}\overline{\text{シ}}$ ガ、 $\text{チ}\overline{\text{チ}}$ ガ、 $\text{ク}\overline{\text{サ}}$ ガ、 $\text{オ}\overline{\text{ス}}$ ガ」と言う。いずれの例も無声化の可能性のある母音にアクセントはないから、上で述べた規則はそのままあてはまることになる。

一方、近畿方言では、母音が無声化されないと一般に言われるが、実際には無声化される例も少なくない。また、 $\overline{\text{クサ}}$ ガのように無声拍にアクセントを置く例もあり、無声拍の存在と、アクセント型の発話との関係についても調べる必要があろう。

そこで、大阪出身者の音声資料のうち、録音条件が良好で雑音の少ないもの55名の発話による上記4単語を、すべてスペクトログラムにとって、まず母音の無声化の有無を実験資料によって調べた。その結果は次のとおりである。

まず、これらの話者に関しては、無声化発音とアクセント型とはほぼ一致しており、それらは、「 $\text{キ}\overline{\text{シ}}$ 、 $\overline{\text{クサ}}$ 、 $\text{チ}\overline{\text{チ}}$ 、 $\overline{\text{オス}}$ 」であった。各単語につき、これらのアクセント型に発話された人数に対する無声化発音の人数を、その数の多い順に示せば次のとおりである。

$\overline{\text{クサ}}$ ——20/50, $\overline{\text{オス}}$ ——12/43, $\overline{\text{チチ}}$ ——4/36, $\text{キ}\overline{\text{シ}}$ ——3/37

つまり、「草」の場合は、頭高型の発話者が55名中50名あり、その中で第1母音を無声化した者は20名に及ぶ。無声化発話者の人数は「牡」の場合がこれに次いで多く、2母音とも無声化の可能性のある「父、岸」は少ない。

ここで対象とした55名は、10代～50代各10名ずつ及び60代5名を選んだものである。この人々について無声化発音と年齢との関係を調べたが、年齢による変化は見出せなかった。

「 $\overline{\text{ク}}\text{サ}$ 」の発音における高低曲線は、図4-⑫に示すように、「 $\overline{\text{ク}}\text{サ}$ 」の第2拍母音の始めが高く、続いて高から低への急な下降を示す。これが、無声拍にアクセントありと知覚する原因となる（杉藤，1969b, 1971）。また、高から低へ急に下げる発話は、生理的には喉頭制御の仕方の特徴があり発話速度が早められ発音が粗末になるにつれて、「 $\overline{\text{ク}}\text{サ}$ 」の発話はより容易な「 $\overline{\text{ク}}\text{サ}$ 」へと移行する可能性がある（杉藤，1981）。これが先に述べた表4-⑭中にある「 $\overline{\text{ク}}\text{サガ}$ 」の35名の発音と関係があるろう。つまりその多くは「 $\overline{\text{ク}}\text{サガ}$ 」なのである。

「草」は、現在第1拍を無声化する話者が相当多いにもかかわらず、他の単語に比べてアクセントが安定していることは注目すべきであろう。一方、今回の資料に見られる少数の「 $\overline{\text{ク}}\text{サ}$ 」「 $\overline{\text{ク}}\text{サガ}$ 」は東京化と言うよりもむしろ無声化との関連において捉える必要がある。このような変化が今後進むとすれば、これも近畿方言の発音の特徴に関わる新たな変化の兆しとも考えられる。

(3) 3拍語のアクセント—— $\overline{\text{ム}}\text{スメ}$ と $\overline{\text{ム}}\text{スメ}$

$\overline{\text{ム}}\text{スメ}$ のようなアクセント型はすでに述べたように歴史的に古い型であることが明らかにされており、京都では $\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}$ 型、大阪では $\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}$ 型とされている（金田一，1974）。ここで扱う単語のうち、「娘」は、古来、この型に属していたことが明らかとなっているが、「東」はまだ例証のないものである（金田一，1974）。「鏡」は、異なる類に属するが、現在 $\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}$ 型が比較的多い単語の一つである。収録は他と同様、単語とそれぞれ文脈「娘が多い、東が明るい、鏡が

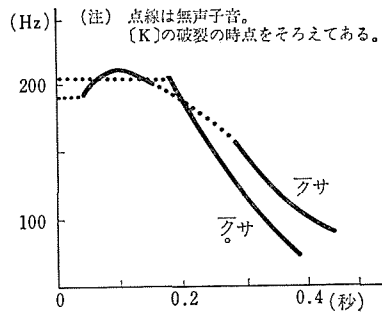


図4-⑫ $\overline{\text{ク}}\text{サ}$ と $\overline{\text{ク}}\text{サ}$ の高低曲線

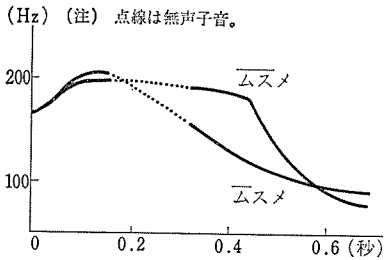


図 4-13 ムスメとムスメの高低曲線

1 母音の終わりと第 2 母音の始めとを点線で結んで示した。ムスメは第 1, 2 母音が高く第 3 拍で下降する。これに比べてムスメは第 2 拍の母音が下降音調となる。二つの型はこのような高低曲線のちがいを持つものである。

大阪市出身者の、3 単語のアクセント型発話の実態を、単語の場合と文脈の場合とについて示せば次のとおりである。

表 4-28 は、大阪出身者が 1・2 拍にアクセントのある〇〇〇型、次に、第 1 拍にアクセントを置く〇〇〇型、あるいはその他の型に発話した結果をアクセントの聞こえの差に従って分類してそれを示した。〇〇〇型の割合は太字で示した。なお、説明の便宜上、ここでは、〇〇〇型を 1・2 高型と呼び、〇〇〇型を頭高型と呼ぶことにしよう。この表を見ると、「娘、東」の場合は、頭高

表 4-28 大阪市住民 358 人による「娘」「鏡」「東」のアクセント〔%〕

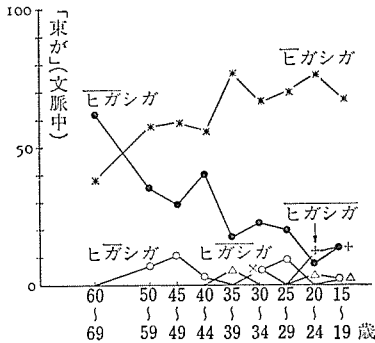
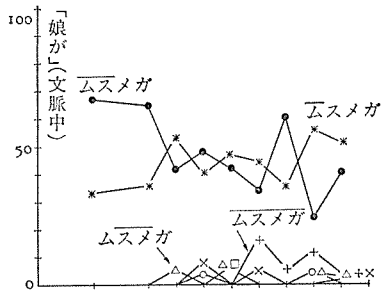
	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	録音もれ
	〇〇〇>	〇〇〇>	〇〇〇>	{ 〇〇〇> 〇〇〇>	{ 〇〇〇> 〇〇〇>	
娘	31.0	31.0	5.0	20.4	6.4	9.0
娘が	34.2	31.6	3.9	{ 16.5 4.5	{ 1.7 3.6	3.1
鏡	28.5	26.8	20.7	16.2	0.0	5.3
鏡が	27.4	28.0	18.7	{ 17.0 2.5	{ 0.6 2.0	3.1
東	18.7	49.5	11.5	13.1	0.8	6.4
東が	20.9	45.8	7.8	{ 13.1 4.5	{ 1.7 3.6	3.1

(注) 5 人以下のアクセント記号は省略した。

くもる」について行なった。

ムスメの型は、東京式アクセントには見られないものであるから、この型についても次には高低曲線を用いて説明する。

図 4-13 は、一人の話者が、「娘」をムスメ、ムスメと二様に発話した例である。無声子音の部分については、第



型と1・2高型が、比較的多く、ことに「娘」の文脈中では、両型が類似の値を示している。「東」の場合は、1・2高型は約2分の1に満たない。「鏡」の場合は、両型が類似の、しかし、他の単語の場合よりもやや低い値を示し、その他に「カガミ、カガミガ」が比較

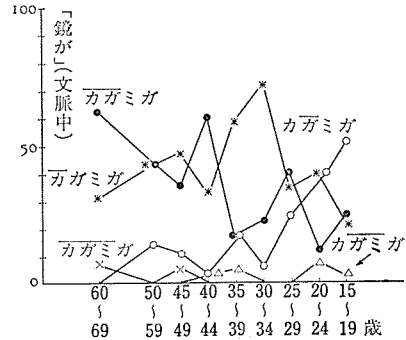


図4-⑭ 大阪出身者による「娘」「東」「鏡」のアクセント(年齢別)

的多くあり、東京式の「カガミガ」の例も見られる。

図4-⑭は、「娘、東、鏡」について大阪出身者のアクセント型発話の年齢による変化を示したものである。単語、文脈中いずれも類似の値であるからここでは文脈中の場合について示した。また、ここで示す全体に対する割合とは、さきの場合と同様音声資料を欠く人数を除いた人数に対する型発話者の割合である。

「娘が」の場合は、高年齢層では1・2高型が7割近く、頭高型が3割強であり、若年齢層では、頭高型の方が多くなる。他の型は少ない。「東が」の場合、高年齢層では、1・2高型が6割以上、頭高型が4割近い。50～59歳で両型の発話者数が逆となり、若年齢層では頭高型の方が圧倒的に多く、1・2高型は1割強に過ぎない。「ヒガシガ」「ヒガシガ」に代わって「ヒガシガ」が増加するかもしれないが、今のところはまだ少数である。「鏡が」の場合も高年齢層では、1・2高型が6割以上、頭高型が3割強であるが中年年齢層では変化する。

表4-29 「娘」「東」「鏡」の〇〇〇型発話者(各府県別)

		「娘」	「東」	「鏡」	平均	順位			「娘」	「東」	「鏡」	平均	順位
兵庫 (9)	単語 文脈中	9 8	7 8	8 8	% 89	1位	大阪 (189)	単語 文脈中	76 82	42 46	68 62	% 33	5位
和歌山 (8)	単語 文脈中	6 6	5 5	8 7	77	2位	奈良 (10)	単語 文脈中	1 4	0 0	1 3	% 15	6位
三重 (4)	単語 文脈中	3 3	2 3	2 3	67	3位	滋賀 (5)	単語 文脈中	0 1	0 0	2 1	% 13	7位
京都 (10)	単語 文脈中	4 4	3 3	4 4	37	4位							

(注) 府県名の下の数字はサンプル総数。

この場合、若年齢層では頭高型に代わって「カガミガ」が増加している。東京アクセントの例、「ムスメガ、カガミガ」は少数、「ヒガシガ」は今のところ皆無である。

これらの単語の

1・2高型アクセントは、大阪出身者だけでなく他の地域の出身者の発話にも見られる。そこで、次には、3単語のアクセント型に1・2高型を持つ発話者のある府県についてその人数を調べてみた。各府県別にした場合は収録人数に片やりが大きく資料として適当ではないが、発話者が3名以上ある府県について結果をまとめたのが上の表である。

表4-29は、各府県別に人数を示し、その人々が頭高型と1・2高型の2種の型に発話した場合の人数と平均割合とを示し、その割合の多い府県の順に配列したものである。これらの単語の発話資料を一部分でも欠く者についてはこれを人数に入れていない。また、兵庫県の場合は実際は16名であったが、その中で北部の東京式アクセント地域の出身者7名を除いた9名について示している。

結果は、ここに見られるように兵庫、和歌山、三重、京都、大阪、奈良、滋賀の順に、1・2高型の割合が多く見られた。現在では、ムスメの型は、古来の政治の中心地に少なく、近畿地方の周辺地域の方が多い。

さきに述べたように大阪以外的人数が少ないので、この資料によって確定的なことを述べるわけにはいかないが、従来考えられていたように、京都では「ムスメ」、大阪では「ムスメ」とも一概に言えないようである。

ここでは、1拍語～3拍語のそれぞれいくつかの単語について、アクセント型の変化について、主に年齢という社会言語学的属性との関連において説明し

てきた。

大阪出身者が示すアクセント型の変化の傾向は、それぞれの単語によって異なり、変化の兆しは見られるが、今のところ、必ずしも直接東京式アクセントの影響によるものとは思われない。

次には、再び大阪市の住民全体を対象として、アクセント型の発話と、年齢その他種々の社会言語学的属性との関連を、2拍語類別語彙のアクセント得点を材料として述べ、大阪市におけるアクセントの調査結果のまとめとする。

4.2.4. 2拍語類別語彙のアクセントと社会言語学的属性との関連

(1) アクセント得点について

得点の算出は、原則として東京の場合と同様の方法をとった。すなわち、2拍語類別語彙の10単語について文脈2種——たとえば「庭が広い」と「この庭が広い」——をそれぞれ2回発話したものが京阪式アクセントと一致しているかどうかを見た。一致していればそれぞれの発話につき1点を与える。したがって全部一致していれば40点である。ただし、京都あるいは大阪のアクセントと異なる音調でも、京阪式と認めて点を与えた場合もある。それはたとえば高知市などでの第4類〇〇▷型、あるいは高松などでの第1類〇〇▷型の発話である。これらには点を与えてある。そして、全体としては28点以上を一応京阪式アクセントの許容範囲とした。

また、大阪市の場合は別に同様の方法で東京式アクセントを基準とした得点も計算した。これについても28点以上を東京式アクセントの許容範囲とした。

なお、点数の計算にあたっての操作については、前節4.1.で述べられたと同様の補正の方法をとり、各地の出身者の点数ができるだけ正当に評価されるようにした。

次には、アクセント得点と、種々の社会言語学的属性との関連について述べる。

(2) アクセント得点と、年齢、性別、職業、学歴との関連

表4-30には、年齢別の得点について、京阪式アクセントの合格点(28~40点)

表4-⑧ 合格点を得た比率(年齢別)

年 齢	比 率	年 齢	比 率
15～19歳	82.1 %	45～49歳	80.0 %
20～24	76.9	50～54	66.7
25～29	57.8	55～59	69.2
30～34	53.7	60～64	60.0
35～39	59.5	65～69	85.7
40～44	66.7		

表4-⑨ 合格点を得た比率(性、学歴、職業別)

性	男	69.8 %	職	経 営 者	73.1 %
	女	65.2		給与生活者	67.4
学歴	高	73.5	業	家業従事者	72.7
	中	71.3		主 婦	58.1
	低	61.8		学 生	89.4
				無 職	63.6
				そ の 他	14.3

を得た者の全体に対する割合を示した。これを見ると25～39歳までがとくに得点が低く、高年齢、若年齢の差は見出せない。これは、25～39歳の人々に、他の地域から大阪へ流入する人々が多いこと、また、若年層も京阪式アクセントを保持していることを示すものと思われる。

表4-⑨には、性別、職業、学歴について上記と同様の手法で、それらと得点との関係を示した。性別については、大阪の場合男性の方が、その合格点を保つものが、女性よりわずかではあるが多い。これは東京都の場合とやや異なる結果を示すものである。職業との関連では、学

生の得点が意外に高い値を示しているのが注目される。主婦の値が低いのは他の地域からの嫁入りのゆえであろうか。東京式アクセントの得点についてはここでは省いたが、大阪の人々がこれらの単語に関して東京式アクセントの得点で合格する者が稀である。学歴との関係を見ると、学歴の高い者の方に、京阪式アクセント合格点を得た者が多い。これは他地域からの流入者の中に学歴の低い者が相当数いることが原因と思われる。東京都の場合においても類似の結果を示しており、これは大都市の性格の一つであると思われる。また、近畿方言が長い間標準語であったから日本語の中で、京阪式アクセントの持つ特殊性を示すものとも考えられる。

(3) アクセント得点と在阪年数、上阪時年齢、出身地との関連

表4-⑩には在阪年数、上阪時年齢、出身地と得点との関係を示した。

在阪年数は得点の高さと関係がありそうであるが表で示すように在阪年数の長い人は必ずしも得点が高いとは限らない。この意味で、在阪年数がアクセント得点の関連量として重要とは言えない。大阪へ出て来た時の年齢、つまり上阪時年齢との関連を調べる必要がある。

次に上阪時の年齢と京阪式アクセントの合格点を持つ人との関係は、興味ある結果を示している。生まれてからずっと大阪にいる人々と0～9歳までに上阪した人々は明らかに京阪式アクセント得点が高い者が多く、90%前後の高い値を示している。一方10～

表4-32 合格点を得た比率(在阪年数, 上阪時年齢, 出身地別)

在阪年数	比 率	上阪時年齢	比 率	出 身 地	比 率
0～5 年	33.3 %	生まれて以来	93.0 %	大 阪	94.0 %
6～10	15.8	0～4 歳	89.3	近 畿	82.8
11～15	38.5	5～9	100.0	四 国	48.1
16～20	69.4	10～15	43.2	北 陸	25.0
21～25	72.9	16～20	31.4	九 州	2.9
26～30	67.7	21～25	44.4	中 国	0.0
31～40	84.6	26～35	34.8	中 部	0.0
41～	93.0	31～40	42.9	関東以北	0.0
		41～	25.0		

15歳に上阪した人々は、京阪式アクセントで話す人が50%以下である。これは、それ以上の年齢時に上阪した人々と大差のない割合であることを示している。各年齢別の人数にバラつきがあり、決定的な判断を下すことはできないけれどこれはアクセントの習得年齢を示唆する一つの問題を提示している。つまり、言語形成期が従来5～15歳とされているにもかかわらず、この資料からは、アクセントの習得が9歳までにほとんど定着することを示唆している。一方、これらの人々の東京式アクセントを基準とした得点によれば、生まれた時以来大阪にいる人、あるいは9歳までに上阪した人のほとんどが、京阪式アクセントを保持し、東京式アクセント合格点を得た人は稀であることを示していた。上阪時の年齢が10歳以上の者のうち相当数は、その年齢までにすでに習得したアクセントを用い、それまでに生育した地域が京阪式アクセント地域であったか東京式アクセントの地域であったかによって結果が異なるものと思われる。これ以上の年齢で上阪した者のうち、京阪式アクセントの合格点の者が相当数あるのは、出身地が、大阪以外の京阪式アクセント地域であった者であると推測される。

次には、出身地との関連について調べる必要がある。ここで言う出身地とは、すでに述べたように本人が5～15歳をすごした土地のことである。

表4-32の右に京阪式アクセント合格点を得た者の全体に対する割合を出身地別に表示した。出身地は、京阪式アクセントの割合の高い府県から順に配列した。

この表を見ると、大阪出身者は90%以上が合格点、大阪以外の近畿地方出身者がこれに次ぎ80%以上を占める。四国、北陸、九州の順でその値は低くなり、中国、中部、関東等東京式アクセント地域の人々の中には京阪式アクセントを習得した人が1名もいないことを示している。

一方、表には示さなかったが、東京式アクセントを基準にした得点で言えば、大阪出身者は2%である。兵庫県等東京式アクセント地域を含む近畿全体では10%に近く、四国も同様である。中国及び中部地方では、70%前後を占めており、関東出身者がこれに次ぐ。

これらの結果からは次のことが推測される。すなわち、大都市大阪に住む大阪出身者の方言は、アクセントに関する限り、東京式アクセントの影響をほとんど受けていない。また、5～15歳を東京式アクセント地域で育った人々は、大阪に移り住んでも京阪式アクセントを習得していない。つまり、人は、9歳までの言語形成期にほとんどアクセントを習得し終え、その時獲得したアクセント型は、何らかの努力を加えない限りほぼ生涯持ちつづける。これが一般的な傾向と思われる。

古い歴史を持つ京阪式アクセントは、大都市「大阪」において今なお健在である。しかし、今後の変化については注意深く見守らなければならない。

4.3. 東京・大阪を比較して

アクセントの実態の報告のまとめとして、東京と大阪での調査結果を対比して目についた点をあげておきたい。

a. どちらの都市においても、もともとそれぞれの地域の方言のアクセントと考えられるものが優勢である。すなわち、東京では東京式アクセント、大阪では京阪式アクセント。東京では、ここでいう類別語彙について東京式アクセントを基準とした点数で36～40点の話者（東京型の話者）が70％近くいる。大阪では、類別語彙のどの語をとっても、それを京阪式アクセントで発音する話者が60％を越える。

b. アクセントとの関係について調べた社会言語学的属性の中で、最もはっきりした性格を示すのは、東京、大阪とも出身地の別である。たとえば、東京では東京式アクセントを基準として見た場合、高い得点を獲得するのは、東京、南関東、中部、中国といったもともと東京式アクセントが話されている地域の出身者である。大阪の場合、京阪式アクセントについての得点が高いのは、近畿地方（の中で京阪式アクセントが話されている地域）の出身者である。その他の地域の出身者についても、大ざっぱに言ってそれぞれの地域の方言のアクセントの事情が反映されているといつてよい。

c. 年齢についても、すべての年齢層ではないが、ある場合には関係があるように思われる現象が見られることがある。東京では、20～24歳の層および35～39歳の層で、東京型が少なく、非東京型が多くなる。大阪では、25歳から39歳までの層で京阪式アクセントの得点が低い。これは、大阪の場合について杉藤が推測したように、他地方から流入した人たちが多いことを示すものと思われるが、おそらく東京についても同様のことがいえるであろう。結局は出身地

表4-33 合格点を得た人数と比率(上京・上阪時年齢別)

	28 ～ 40点		36 ～ 40点	
	東 京	大 阪	東 京	大 阪
0～4 歳	人 93(96.9)	人 50(89.3)	人 90(93.8)	人 45(80.4)
5～9	24(85.7)	6(100.0)	19(67.9)	5(83.3)
10～15	29(64.4)	16(43.2)	25(55.6)	14(37.8)
16～20	111(70.3)	16(31.4)	79(50.0)	14(27.5)
21～25	46(61.3)	16(44.4)	38(50.7)	14(38.9)
26～35	19(52.8)	8(34.8)	15(41.7)	8(34.8)
36～45	5(62.5)	3(42.9)	2(25.0)	2(28.6)
46～	1(25.0)	1(25.0)	1(25.0)	1(25.0)
生まれて以来	166(97.1)	120(93.0)	164(95.9)	114(88.4)
不 明	0	1(100.0)	0	1(100.0)

がある。東京においても、東京式アクセントの得点について見た場合も同じような傾向を指摘することができる。ただ、両都市の間でいくらかの違いはある。28点から40点までの範囲と、36点から40点までの範囲の両方について東京、大阪を対比すると表4-33のとおりである。

いずれの範囲をとってみても、大阪では9歳までと10歳以降との間にはっきりした違いがあるが、東京ではその違いが少しぼやけている。これは東京式アクセントまたはそれに準じるアクセントの地域が東京以外にも相当広く分布し、そこからの上京者が少なくないことによるものと想像される。

たしかにこうした結果を見ると、アクセントの習慣はいわゆる言語形成期の中でも前半の時期に身につくものといえるかもしれない。ただ、その時期同じ地域に住んでいても個人個人の事情によっては必ずしも同じ状態を示すとは限らないことは、東京の場合について述べた通りである(4.1.3.参照)。

e. 学歴。東京、大阪とも学歴とアクセントとの間になんらかの関係があることを思わせるような現象がある。すなわち、東京では低学歴において非東京型の割合が大きく、高学歴に東京型が多い。大阪では、京阪式アクセントの得点が高い人が高学歴の方に多く、低学歴では少なくなる。両都市のこうした平行的な現象は、おそらく住民の他地域からの流入の状況と関係があるのであろうが、今のところそれを具体的に把握するだけの材料はない。

の問題ということになる。

d. 上京、上阪時の年齢。
大阪の場合については、杉藤が強調したように、0歳から9歳までの間に大阪に
来た人(および生まれてか
らずずっと大阪にいる人)に
京阪式アクセントの得点が
高い人の割合が大きい。そ
して10歳以降に大阪に
来た人との間には大きな違い

f. 類別語彙の中の2拍名詞第5類（窓, 春）の発音が、大阪では19歳以下の年齢層で〇〇型から〇〇型になる傾向が著しい。こうした類別語彙中のある類全体にかかわるアクセントの変化は東京では今のところ認められない。これは東京と大阪との間の相違点の一つである。

ただし、第5類の中の春を東京式に頭高型で発音する人が大阪にもある程度いる。そして、東京でも春（および第4類傘）を頭高型で発音する人の割合が、窓（および第4類針）に比べて大きいという結果が出ている。つまり、春という単語に関しては両都市において類似の現象が見られることになる。

g. 個別語彙については、東京と大阪それぞれで問題となるものが違うので、直接的な対比をすることはむずかしい。大づかみにいえば、東京、大阪とも混質的な様相を示しているところにその特徴があるのかもしれない。ただ、社会言語学的属性の中ではっきりした性格を示すのは年齢であるという点は両都市の間で共通している。しかし、これもすべての語彙についていえるわけではない。

以上調査結果の中で目につく点、主に東京と大阪の間の平行的な現象をかいつまんであげてきたが、さらにこまかい点について調べる余地がいくらか残されている。たとえば、東京の類別語彙のアクセントについてここではもっぱら音調の高低による類の区別だけを問題にしたので、大阪の第5類の〇〇型か〇〇型かというようなある類全体の発音そのものにかかわる問題はないことになった。ところが、2拍名詞の第1類を〇〇ガと発音するか〇〇ガ（低平調）と発音するかなどということまで問題にすると、年齢や出身地などに関連して今まではわからなかった点が見つかるかもしれないのである（東京の住民の間で時々低平調の発音が聞かれるということを佐藤亮一から聞いた）。同じく東京で第2類、第3類の語彙についてウタノ（歌の）かウタノか、ヤマノ（山の）かヤマノかなどを問題にすると、東京式アクセントの地域の出身者でも、地方によって違いが出て来るだろう。また、この調査では取り上げなかった他の社会言語学的属性との関係を見ることによって、個別語彙のいろいろなアクセントの現われの説明ができる場合があるかもしれない。こうしたことは、すべて研究の次の段階の課題だが、それらを明らかにすることによって、両都市の間のア

クセントの実態の共通点と相違点をもっとはっきりとつかむことができるようになるはずである。なお、アクセントと社会言語学的属性、とくに諸属性相互の関係については、7.3.を参照されたい。

参 考 文 献

- 金田一春彦 1943 国語アクセントの史的研究 (日本方言学会編『国語アクセントの話』)
 金田一春彦 1974 『国語アクセントの史的研究——原理と方法』塙書房
 金田一春彦 1977 関東地方に於けるアクセントの分布 (『日本語方言の研究』東京堂出版)
 杉藤美代子 1969 a 動態測定による日本語アクセントの解明 (『言語研究』第55号)
 杉藤美代子 1969 b 「クゝサ」考——アクセントのある無声化母音—— (『音声学会会報』第132号)
 杉藤美代子 1971 無声拍とアクセントの問題 (『大阪樟蔭女子大学論集』第9号)
 杉藤美代子 1973 アクセント型の聞こえのゆれと発音のゆれ——合成言語によるアクセント研究—— (『大阪樟蔭女子大学論集』第11号, 『国語学論説資料・10』昭和48年第1分冊)
 杉藤美代子・井本久美子 1975 大阪方言1拍語アクセントのピッチ曲線と持続時間について (『樟蔭国文学』第13号, 『国語学論説資料・12』昭和50年第2分冊)
 杉藤美代子・阪田純代 1979 近畿方言における〇〇型発話の実態——八尾市の場合—— (『大阪樟蔭女子大学論集』第16号)
 杉藤美代子・奥田恵子 1980 中河内及び南河内における近畿アクセント〇〇型の発話の実態 (『大阪樟蔭女子大学論集』第17号)
 杉藤美代子 1981 広母音・狭母音の調音とアクセントによる声の上げ下げとの関連について——音響的・生理的研究—— (『言語研究』(予定))
 服部四郎 1931-1933 国語諸方言のアクセント概観(1)~(6) (『方言』1-1, 3, 4; 2-1, 4; 3-6)
 服部四郎 1960 『言語学の方法』岩波書店
 平山輝男 1957 『日本語音調の研究』明治書院
 平山輝男 1980 全日本アクセント分布図 (『国語学大辞典』東京堂出版)
 藤崎博也・杉藤美代子 1977 音声の物理的性質 (『岩波講座日本語・5音韻』岩波書店)

5. 語彙・文法の実態

5.1. 「あさっての翌日」と 「あさっての翌々日」

東京と大阪の調査結果を見ると、「あさっての翌日」の項目には、シアサッテ、ササッテ、ヤノアサッテ、ヤナアサッテ、ヤナサッテなどの語形が現われる。また、「あさっての翌々日」の項目には、シアサッテ、ササッテ、ヤノアサッテ、ヤナアサッテ、ヤナサッテ、ゴアサッテ、ゴヤサッテなどの語形が現われる。このことからわかるように、両項目は、その語形の現われかたにおいて、互いに密接な関係を有する。なお、以下の記述では、ヤノアサッテ、ヤナアサッテ、ヤナサッテの3語形をまとめて、ヤノアサッテとして示すことにする。

5.1.1. 東京の場合

(1) あさっての翌日

回答のそれぞれが被調査者全体に占める割合は次のとおりである。

シアサッテ（のみを答えた者）	77.2 %
ヤノアサッテ（のみを答えた者）	16.1 %
シアサッテ・ヤノアサッテ（複数回答者）	0.5 %
ササッテ（のみを答えた者）	0.5 %
無回答（の者）	1.1 %
その他 ⁽¹⁾	4.7 %

計

100.0 %

表5-① 「あさっての翌日」の言い方(性, 年齢, 学歴, 職業別)(%)

	性		年 齢			学 歴			職 業					
	男	女	一〇代・二〇代	三〇代・四〇代	五〇代・六〇代	低	中	高	経 営 者	給 与 生 活 者	家 業 従 事 者	主 婦	学 生	無 職
シアサッテ	76.0	78.1	79.1	76.0	75.6	71.7	77.9	81.0	74.7	73.5	76.0	75.2	89.2	83.3
ヤノアサッテ	15.2	16.9	16.1	15.0	18.7	21.0	15.6	12.5	19.0	14.8	24.0	19.8	9.6	15.0

このうち、シアサッテ（のみを答えた者）とヤノアサッテ（のみを答えた者）の割合を、性、年齢、学歴、職業、出身地の別に見てみよう（表5-①参照）。

(i) 男女差

男女差はほとんど認められない。

(ii) 年齢差

10代・20代（若年層）、30代・40代（中年層）、50代・60代（高年層）の3層に分けて示した。

年齢差も顕著ではない。しかし、シアサッテは10代・20代の割合が、また、ヤノアサッテは50代・60代の割合が、他の2層よりわずかに大きい。

(iii) 学歴差

学歴の高い者ほどシアサッテを多く使用し、学歴の低い者ほどヤノアサッテを多く使用する傾向が認められる。なお、現在の東京ではシアサッテが優勢であり、後に述べるように、この形式が共通語としての性格を強めつつあると考

表5-② 各学歴が各職業に
占める割合(%)

	低 学 歴	中 学 歴	高 学 歴
経 営 者	32.9	43.0	24.1
給与生活者	22.1	41.4	36.5
家業従事者	36.0	48.0	16.0
主 婦	28.5	55.5	16.1
学 生	9.5	47.3	43.2
無 職	41.7	40.0	18.3

えられる。したがって、上記の事実は、学歴の高い者ほど東京語もしくは共通語を多く使用するとみることができる。

(iv) 職業差

シアサッテは「学生」や「無職」の者が比較的多く使用し、ヤノアサッテは「家業従事者」「主婦」「経営者」の使用率が比較的高い。このうち、「学生」は、すべて10～20代であり、比較的高学歴である

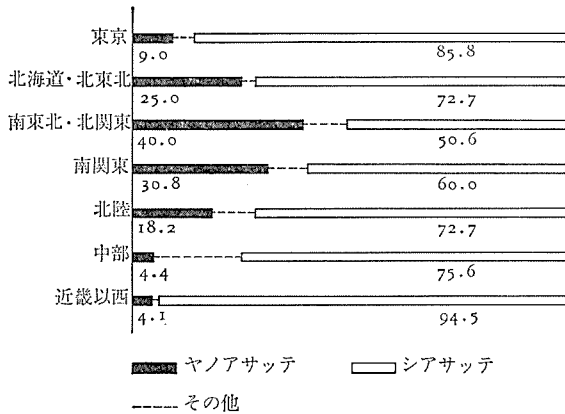


図5-① 「あさっての翌日」の言い方(東京)(出身地別)〔%〕

から、年齢や学歴との相関も考慮すべきである。また、「家業従事者」「主婦」「経営者」は、次に示すように、低学歴者の比率が比較的高いから、ヤノアサッテがこれらの職業の者に多く使われる要因について考えるためには、学歴との相関も見なければならない。参考として、職業別に、各学歴の占める割合を示しておこう(表5-②参照)。

(iv) 出身地による差

シアサッテは近畿以西の出身者が最も多く使用し、以下、東京、中部、北陸と北海道・北東北、南関東、南東北・北関東の順で使用率が低下する⁽²⁾。一方、ヤノアサッテはシアサッテとほぼ補い合う関係にあり、関東以北の東日本出身者が比較的多く使用している(図5-①参照)。

この事実は、「あさっての翌日」をあらわす各地のことば(方言)の分布と密接な関係がある(図5-②参照)⁽³⁾。すなわち、シアサッテは西日本全域に分布するほか、東京都区内にまとまった領域がある⁽⁴⁾。ヤノアサッテは東日本全域に見られる。なお、南東北・北関東や南関東の出身者も、その5～6割がシアサッテを用いているが、これは、現在の東京ではシアサッテが優勢であり、これが旧来のヤノアサッテを駆逐して、共通語としての性格を強めつつあることを反映するものと考えられる。また、北海道・北東北出身者のシアサッテの使用率が比較的高いが、これは、図5-②の分布からもうかがえるように、おそらく、

- | シアサッテ
- ∨ シラサッテ
- Λ シリャアサッテ
- ▯ シガサッテ
- ∩ シノアサッテ
- ∠ シャサッテ
- Δ ササッテ・サアサッテ
- ▲ サンアサッテ
- ◁ サガアサッテ
- ∪ サラサッテ
- △ サシアサッテ
- ヤノアサッテ・ヤナアサッテ
・ヤナサッテなど
- ヤネアサッテ
・ヤニアサッテ
- ★ サキアサッテ
- ☆ アサッテ
- ユウカ・ユファアなど
- ナユウカなど
- ヨオ
- ⊕ アサティヌナアチャ
- 〃 無回答

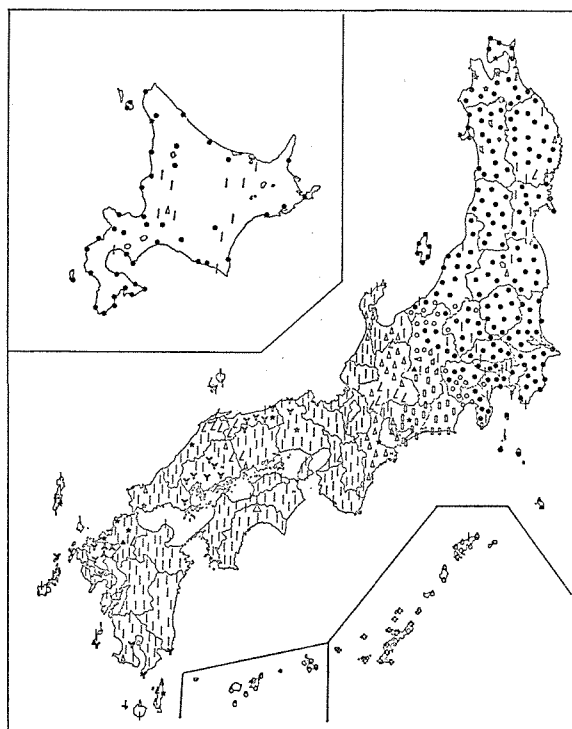


図5-② 「あさっての翌日」の言い方

北海道出身者の使用率の高さによるものではないと思われる⁽⁵⁾。北陸出身者のヤノアサッテの使用率もやや高いが、これは図5-②の分布から見て、主として新潟県出身者によるものであろう。

(2) あさっての翌々日

回答のそれぞれが被調査者全体に占める割合は次のとおりである。

シアサッテ (を答えた者)	6.7 %
ヤノアサッテ (を答えた者)	25.2 %
ゴアサッテ (を答えた者)	1.1 %
ササッテ (を答えた者)	0.5 %
無回答・その他 ⁽⁶⁾	66.5 %
計	100.0 %

- ▲ シサッテ
 ▼ サナサッテ
 ▲ シアサッテ
 ▼ サキサッテ
 ● ヤノヤノアサッテ
 ○ ヤヤノアサッテ
 ▽ サラヤノアサッテ
 □ キササッテ
 ■ キテアサッテ
 ▽ コノサッテ
 ∟ ゴアサッテ
 Y ゴラサッテ
 ⊕ ゴガサッテ
 ▼ ンナイチャ
 ● ヨンナアチャ
 ● ゴアサッテ
 ● イチカ
 ◆ アサティヌナアチャヌ
 ナアチャ

そのほかの語形は図5-②の凡例に同じ

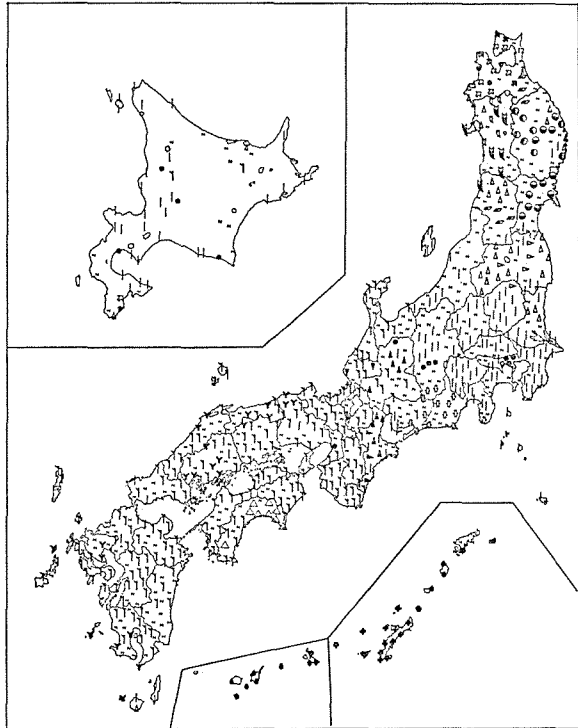


図5-③ 「あさっての翌々日」の言い方

表5-③ 「あさっての翌々日」の言い方(学歴, 職業, 出身地別)(%)

	学 歴			職			業			出 身 地						
	低	中	高	経 営 者	給 与 生 活 者	家 業 従 事 者	主 婦	学 生	無 職	東 京	北 海 道	北 東 北	南 北 関 東	南 関 東	北 陸	中 部
シアサッテ	10.8	4.5	6.5	6.3	6.4	12.0	6.6	5.4	8.3	3.5	6.8	21.2	12.3	6.1	4.4	0.0
ヤノアサッテ	16.8	25.9	31.5	31.7	25.3	32.0	24.1	23.1	20.0	43.4	13.6	4.8	13.9	9.1	15.5	6.8
無回答など	70.5	67.2	62.0	59.5	67.9	56.0	66.4	70.2	70.0	52.8	79.6	70.6	73.8	78.8	77.8	89.0

「無回答・その他」の割合が大きいことが目立つ。この項目で無回答（「名称なし」などを含む）が多いことは、全国的な傾向である（図5-③参照）。

シアサッテ, ヤノアサッテ, 無回答・その他（以下, 「無回答など」として示す）の割合を, 性, 年齢, 学歴, 職業, 出身地の別に見てみよう（表5-③参照）。

(i) 男女差・年齢差

男女差および年齢差は、ほとんど認められない（数値表示は省略）。

(ii) 学歴差

学歴の高い者ほどヤノアサッテを多く使用する傾向が認められる。一方、シアサッテは低学歴の使用率が比較的高い。また、「無回答など」も学歴の低い層ほど、その割合が増える。後に述べるように、「あさっての翌々日」をヤノアサッテと表現するのは東京都区内に特徴的な現象であり、この形式が共通語としての性格を強めていくことが予想される。したがって、上記の事実は、学歴の高い者ほど東京語もしくは共通語を多く使用するとみることができる。

(iii) 職業差

ここでは、結果を表 5-3 に示すにとどめておく。

(iv) 出身地による差

シアサッテは南東北・北関東の出身者が最も多く使用し、南関東の者がそれに次ぐ。近畿以西の出身者には全く見られない。

一方、ヤノアサッテは東京出身者の使用率がとくに高い。この事実は、「あさっての翌々日」をあらわす方言の分布と密接な関係がある（図 5-3 参照）。すなわち、都区内を除く関東全域とその周辺ではシアサッテが「あさっての翌々日」の意味で使われている。図 5-2 と図 5-3 とを対照するとわかるように、都区内では「あさっての翌日」をシアサッテ、「あさっての翌々日」をヤノアサッテと言うが、その周辺の広い地域では、逆に、ヤノアサッテ（翌日）—シアサッテ（翌々日）というパターンである⁷⁾。

なお、東京出身者はシアサッテをほとんど答えておらず、また、近畿以西の出身者もシアサッテを全く答えていないことからしても、「あさっての翌々日」の意味のシアサッテには共通語としての力が全くなく、この調査で得られたシアサッテは、そのほとんどすべてが被調査者の出身地の方言であると言ってよいだろう。図 5-3 の分布から見て、北陸のものは新潟県出身者、中部のものは、長野・山梨・静岡の出身者が答えたものではないかと思われる。北海道・北東北出身者のものとして分類されているシアサッテは、分布から見て、北海道出身者の答えたものが多いであろう。東京の 3.5% は、おそらく都下（多摩地方

など) 出身者によるものではないと思われる。

ヤノアサッテは都区内にまとまった領域があるほか、北海道、長野の一部などにも見られるが、全国的に見れば、その勢力はきわめて小さい。しかしながら、都区内ではこの語が優勢であるために、南東北・北関東、北陸、近畿以西のような、ヤノアサッテが全く、あるいは、ほとんど分布しない地域の出身者もある程度この語形を答えている。

なお、南関東や中部のようなヤノアサッテ地域(都区内)に隣接する地方の出身者のヤノアサッテの回答率がいくぶん高いが、これは、この語が、その領域を都区内からその隣接地域に広げつつあることの現われかもしれない。北海道・北東北の出身者の13.6%という数値も、図5-③に見られるような、ヤノアサッテの北海道への伝播状況と関係があるのではないと思われる。

(3) 「あさっての翌日」と「翌々日」

それぞれの人が「あさっての翌日」を何と答え、「翌々日」を何と答えたか、その組み合わせにはさまざまなパターンがある。そのうち、主なものについて、被調査者全体に占める割合を示すと次のとおりである。

「あさっての翌日」—「あさっての翌々日」

シアサッテ—無回答など51.8%

シアサッテ—ヤノアサッテ24.4%

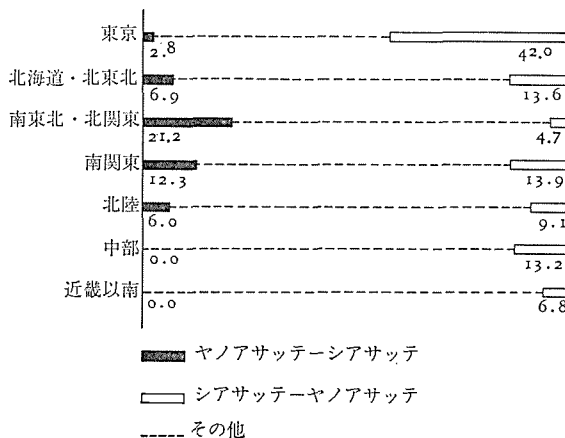


図5-④ あさっての翌日—あさっての翌々日(東京)(出身地別)(%)

ヤノアサッテ—無回答など	9.5%
ヤノアサッテ—シアサッテ	6.1%
上記のうち、「シアサッテ—ヤノアサッテ」と「ヤノアサッテ—シアサッテ」 とについて、その割合を出身地別に示したのが、図5-④である。	

図5-④と、「あさっての翌々日」における出身地別の数値(表5-③参照)とを対照すると、どの地域についても、両者の数値が似かよっている。これは、「あさっての翌々日」の項目でヤノアサッテと答えた者の大部分が「翌日」の項目ではシアサッテを答え、「翌々日」でシアサッテと答えた者の大部分が「翌日」でヤノアサッテを答えていることを示している。

5.1.2. 大阪の場合

(1) あさっての翌日

この項目における回答のそれぞれについて、被調査者全体に占める割合を示すと次のとおりである。

シアサッテ（のみを答えた者）	97.5%
ヤノアサッテ（のみを答えた者）	0.6%
シアサッテ・ヤノアサッテ（複数回答者）	0.6%
ササッテ（のみを答えた者）	0.3%
無回答（の者）	0.3%
その他	0.8%
計	100.0%

すなわち、大部分の者がシアサッテを答えており、男女差、年齢差、学歴差、職業差、出身地による差などは、ほとんど認められない。これは、大阪における被調査者の大部分（99%）が北陸・中部以西の出身者であり、東日本のヤノアサッテ地域の出身者がほとんど存在しないためでもあるが、同時に、東京でも一部に使われているヤノアサッテが、共通語としての力を備えていないことの現われとみることもできよう。

(2) あさっての翌々日

この項目における回答のそれぞれについて、被調査者全体に占める割合を示す。

ヤノアサッテ（を答えた者）	1.7%
ササッテ（を答えた者）	0.3%
ゴアサッテ（を答えた者）	17.8%
無回答・その他	80.2%
計	100.0%

これを東京の場合と比べると、まず、ヤノアサッテの比率が著しく小さく、シアサッテは全く見られない。一方、ゴアサッテの比率はかなり大きく、「無回答・その他」の比率も東京より大きい。この結果も、この項目の方言分布を反映している（図5-③参照）。すなわち、奄美・沖縄地方を除く西日本の全域にゴアサッテが分布するが、ほとんどの地域で「無回答」（「名称なし」などを含む）と混在している。

次に、ゴアサッテを答えた者の割合を、性、年齢、学歴、職業、出身地の別に見てみよう。

(i) 男女差

男が14.5%，女が21.8%で、女性の方がゴアサッテを多く答えている。

(ii) 年齢差

10・20代が7.2%，30・40代が21.7%，50・60代が27.2%であり、高齢者ほどゴアサッテを多く答えている。とくに、若年層の落ちこみが注目される。

(iii) 学歴差

低学歴が19.4%，中学歴が16.9%，高学歴が16.3%で、低学歴者のゴアサッテの割合がわずかに大きい。

(iv) 職業差

ゴアサッテを答えた割合の大きい順に記すと、無職が28.6%，家業従事者が27.3%，主婦が23.4%，経営者が20.0%，給与生活者が15.2%，学生が0%となる。この順序は、職業の性格を何がしか暗示しているようにも思われる（たとえば、社会性の大小など）。なお、学生でゴアサッテを答えた者が皆無であることも注目されるが、これは、先に記した年齢差の結果と対応するものである。

(v) 出身地による差

大阪出身者が17.2%, 北陸・中部以東の者⁽⁸⁾が27.3%, 近畿が15.5%, 中国が18.2%, 四国が31.0%, 九州が8.8%である。近畿や大阪の数値が比較的小さく、四国の数値が大きいことが注目される。これは、それぞれの地方のゴアサッテの勢力度を示すものであろうか。なお、北陸・中部以東の27.3%という数値は少し高すぎるようでもあるが、その内訳は北陸・中部以東の出身者22人のうち、北海道・北東北が2人(9.1%), 北陸が3人(13.6%), 中部が1人(4.5%)であって、図5-③からうかがえるように、いずれもゴアサッテの分布地域の出身者が答えた可能性が強い。北海道・北東北として分類された2人も、おそらく、北海道の出身者であろう⁽⁹⁾。

5.2. 可能表現をめぐって

5.2.1. 「見レル」と「起キレル」

東京地方において「見ることができる」という意味の「見られる」を「見レル」と言い、「起きることができる」という意味の「起きられる」を「起キレル」と言う形式の発生については、先学による多くの論考がある。この「見レル」「起キレル」のような言い方は、話しことばの世界では昭和初期から使われはじめており、第二次大戦後は、新聞の見出しなど、書きことばにも使われた例のあることが指摘されている(中村通夫, 1953; 文化庁, 1975 など)。中村通夫は、このような言い方は、最初に1音節語の否定形「来レナイ」「見レナイ」などから始まり、やがて2音節語の「起キレナイ」「食ベレナイ」などに及んだのではないかと推定している。そして、さらに、東京におけるこの言い方は、まず教養層の間に広まったのではないかと仮説を述べている。

東京と大阪における今回の調査結果は、「見る」と「起きる」の2語についてだけではあるが、この種の形式の使用度についての最近の傾向を示すものである。

この項目については、東京・大阪とも、同一の質問文および選択肢によって調査を行なっている。その結果得られた回答は、次のように分類され、コード化されている。

0. 無回答
1. 見ラレル (起キラレル)
2. 見レル (起キレル)

表5-4 「見レル」「起キレル」の使用率(性, 学歴, 職業別)(%)

		全 体	性		学 歴			職 業					
			男	女	低	中	高	経 営 者	給 与 生 活 者	家 業 従 事 者	主 婦	学 生	無 職
東京	見レル	45.9	48.6	43.5	35.5	52.2	45.1	35.5	50.6	40.0	30.6	73.0	43.4
	起キレル	30.3	35.8	25.4	20.4	35.9	30.9	24.0	35.0	28.0	20.4	44.6	28.4
大阪	見レル	55.6	56.3	55.1	49.3	61.9	55.1	54.5	47.8	68.1	55.9	79.5	52.5
	起キレル	40.9	44.8	36.3	33.3	43.2	57.1	32.8	39.1	50.0	35.1	61.5	38.1

3. 見ラレル・見レル(起キラレル・起キレル) 両用
4. 両用・ただし, 見ラレル(起キラレル)が多い
5. 両用・ただし, 見レル(起キレル)が多い
6. 見ラレル(起キラレル) + その他
7. 見レル + その他(この回答は, 大阪の「見ることができる」の項目のみ)
9. その他(8. は欠番)

小稿では, 上記の回答のうち, 2. と 3. と 5. (大阪の「見ることができる」の項目においては, さらに 7.) を合計したものを「見レル・起キレルの使用率」(「主として, 見レルまたは起キレルを使用する」と回答した人の割合)として, 考察の対象にすることにしたい(表5-4参照)。

(1) 全体

東京よりも大阪の方が被調査者全体に占める「～レル」の使用率が高く, また, 東京・大阪のいずれにおいても, 「見レル」の方が「起キレル」よりも使用率が高い。

(2) 男女差

いずれの場合についても男性の方が女性よりも「～レル」の使用率が高い。この男女差の度合は, 東京・大阪ともに「起キレル」の方が著しい。

(3) 年齢差

次に年齢差について見よう(図5-5, 図5-6参照)。東京・大阪ともに若年層ほど「～レル」を多く使用する傾向が著しい。

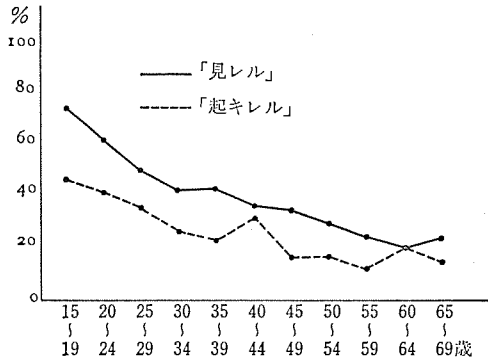


図5-⑤ 「見レル」「起キレル」の使用率(東京)(年齢別)

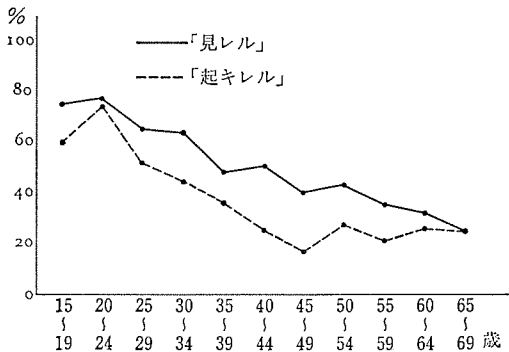


図5-⑥ 「見レル」「起キレル」の使用率(大阪)(年齢別)

(4) 学歴差

東京・大阪とも、中学歴層の「～レル」の使用率が比較的高く、一方、低学歴層の落ちこみが目立つ。大まかには、「比較的高学歴の者が～レルを多用する傾向がある」と言えよう。これは、先に述べた中村通夫の「～レルの使用が（東京においては）教養層からはじまっている」という仮説をある程度裏付けるものである。ただし、学歴差が真の要因であるかどうかについては、他の要因（たとえば年齢差など）との相関を見た上で結論を出さなければならない。

(5) 職業差

東京と大阪とでは傾向が異なる。東京の場合、「見レル」「起キレル」ともに、「学生」「給与生活者」「無職」「家業従事者」「経営者」「主婦」の順で利用率が高い。大阪の場合、利用率第1位が「学生」であることは東京と共通であるが、第2位は「家業従事者」であり、第3位以下は「見レル」と「起キレル」とで順位が異なる。とくに、「見レル」の場合、東京で1位の「給与生活者」が大阪では最下位であることも注目される。また、大阪の「見レル」は、他に比べて、

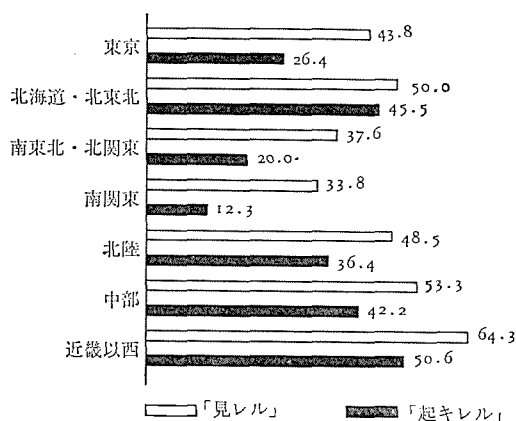


図5-⑦ 「見レル」「起キレル」の使用率(東京)(出身地別)(%)

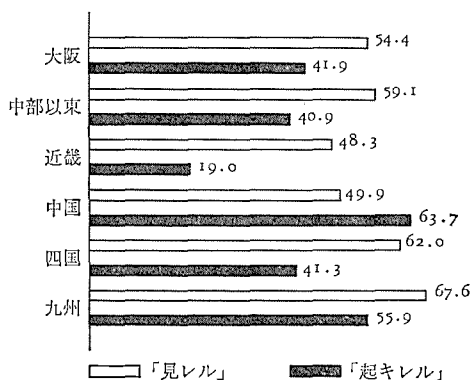


図5-⑧ 「見レル」「起キレル」の使用率(大阪)(出身地別)(%)

職業による使用率の差が小さいことにも注意しなければならない。

なお、東京・大阪とも「学生」が1位であることの要因として「年齢」が機能しているものと考えられる。

(6) 出身地による差

まず、東京について（図5-⑦参照）。東京の場合、「見レル」「起キレル」の使用率が最も高いのは近畿以西の出身者であり、次いで中部、または、北海道・北東北、北陸の順となる。逆に、使用率が最も低いのは、南関東であり、南東北・北関東がこれに次ぐ⁽¹⁾。

次に、大阪について（図5-⑧参照）。大阪の場合、九州出身者の使用率が最も高く、中国、または、四国がこれに次ぐ。中国地方出身者の場合、他の地域と違って、「見レル」と「起キレル」の使用率が逆転していることが注目される。一方、使用率の最も低いのは近畿地方（大阪府を除く）の出身者であり、大阪出身者がこれに次ぐ。

このような出身地による差は、方言としての「見レル」「起キレル」の全国分布と密接に関係する（図5-⑨参照）⁽²⁾。

すなわち、「見レル」または、「起キレル」の専用地域は北陸から中部にかけての地域

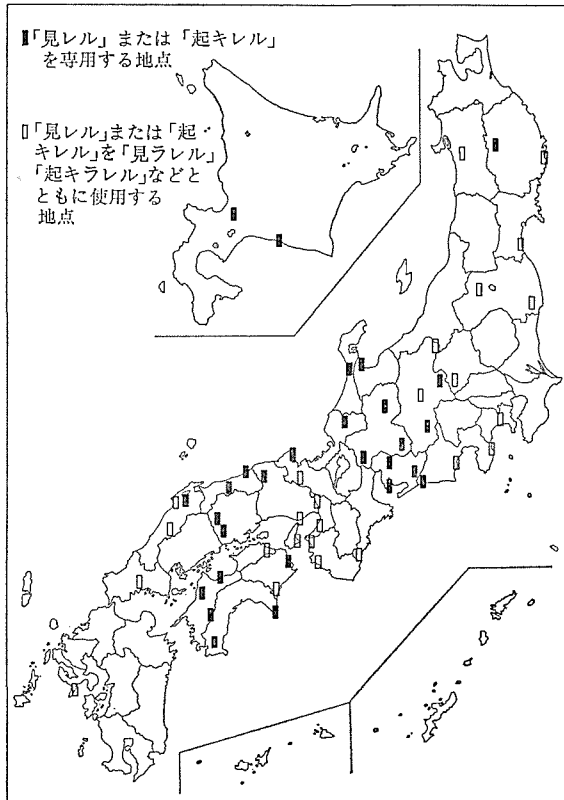


図5-⑨ 「見レル」「起キレル」の全国分布図

と、中国地方東部・四国、および北海道であり、大阪を含む近畿西部では、「見ラレル」「起キラレル」も優勢である。

東京において、近畿以西、中部、北海道・北東北、北陸の出身者の使用率が高いことについては、このような方言分布の背景がある。なお、北海道・北東北の使用率の高さは、もっぱら北海道の出身者によってもたらされたものであろう。北海道では、全道的に「～レル」の形が優勢であると言われている。

大阪の場合、中国と四国の使用率が比較的高く、近畿と大阪の使用率が比較的低い点は方言の分布と一致するが、九州については、この地に「見レル」「起キレル」がほとんど分布しないのに、九州出身者のこの形式の使用率が最も高いという、一見矛盾する現象が見られる。この理由は、今のところ明かではないが、図5-⑨は老年層を対象に調査した結果であり、若年層を対象に調査すれば、これとかなり異なる分布を示すことも予想される^③。

なお、図5-⑧で、中部以東出身者の使用率が比較的低いが、これは、方言としては「～レル」をほとんど使用しない地域を含め、「中部以東」として集計したためである^④。

5.2.2. 能力可能と状況可能——大阪調査から——

日本語の諸方言の中には、「～することができる」という可能を表わす表現について、能力可能と状況可能とが区別される方言がある。能力可能表現とはあることができる能力がある（ない）ということについての表現（形式）であり、状況可能表現とは、あることができる状況がととのっているということについての表現（形式）である。たとえば、「泳ぐ」という動詞について言えば、「私は泳げる（泳げない）」というのは、能力可能であり、「今日は波がないので泳げる（波が高いので泳げない）」というのは状況可能である。また、「読む」という動詞について言えば、「むずかしい漢字が読める（読めない）」というのは能力可能であり、「明るいから字が読める（暗いから字が読めない）」というのは、状況可能である。

共通語（東京語）では、能力可能と状況可能とを区別して表現することがほと

んどない。しかし方言によっては両者は次のように区別して表現される⁽⁶⁾。

東 北	能 力	状 況
	ヨマレル (肯定)	ヨムニイー(肯定)
	ヨマレネ (否定)	ヨマレネ (否定)
近 畿・中 国	ヨーヨム (肯定)	ヨマレル (肯定)
四 国	ヨーヨマン(否定)	ヨマレン (否定)
九 州 北 東 部	ヨミキル (肯定)	ヨマルル (肯定)
	ヨミキラン(否定)	ヨマレン (否定)
九 州 北 西 部	ヨミユル (肯定)	ヨマルル (肯定)
(佐賀・長崎付近)	ヨミエン (否定)	ヨマレン (否定)

東北地方では、上のように、肯定の場合にのみ両者の区別がある。なお、東北北部では、最近、ヨメル(能力)、ヨメネ(能力・状況)のような可能動詞を用いた表現も多く用いられる⁽⁶⁾。

近畿・中国・四国、および、九州北部では、上のように、肯定と否定の両方について、能力可能と状況可能との区別がある。なお、近畿を中心とする地方では、このほか、ヨメル・ヨメヘンのような可能動詞が能力と状況の区別なく用いられ、さらに、ヨマレル、ヨマレヘンなどが状況可能ばかりでなく、能力可能について用いられることも少なくない。すなわち、近畿などでは、能力可能と状況可能との区別が曖昧になりつつあるとも言える。

方言分布におけるこのような事実を踏まえて、大阪における調査結果を見てみよう。これは、「読むことができる」の否定表現(「読むことができない」)について、能力可能と状況可能の形式を調べたものである(質問文については、42ページ参照)。

なお、回答された形式のうち、ヨメナイ、ヨメン、ヨメヘン、ヨメシマヘンの各形式については、ここでは、これらをまとめて「ヨメナイ類」として扱うことにする⁽⁷⁾。

(1) 全体

まず、各種の回答のうち、主なものについて、それぞれが被調査者全体に占める割合を見ると、ヨーヨマンは能力可能にのみ現われる。すなわち、被調査

表5-5 「読むことができない」の表現(年齢, 出身地別)(%)

		全 体	年 齢			出 身 地					
			一 〇・二 〇代	三 〇・四 〇代	五 〇・六 〇代	大 阪	中 以 部 東	近 畿	中 国	四 国	九 州
能力 可能	ヨメナイ類	37.2	35.2	38.2	37.7	27.3	45.3	46.5	45.4	55.1	44.1
	ヨマレヘン	31.2	40.0	30.6	18.2	38.2	22.7	22.4	31.8	13.8	29.4
	ヨーヨマン	10.6	10.4	10.8	10.4	11.0	9.1	8.6	9.1	17.2	8.8
状況 可能	ヨメナイ類	50.2	46.4	50.9	54.6	40.9	68.1	56.9	54.5	72.3	52.9
	ヨマレヘン	34.5	41.6	32.5	27.3	45.0	18.2	24.1	22.7	17.2	29.4
	ヨーヨマン	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

者全体のうち、少なくとも、約1割の者が、ヨーヨマンとヨメナイ類、または、ヨーヨマンとヨマレヘンとによって、能力可能と状況可能とを区別しているものと思われる。このほか、ヨメナイ類とヨマレヘンとによって両者を区別する者も存在するのではないかと推定されるが、これ以上の分析は、今のところ困難である⁽⁸⁾。

次に、男女別、年齢別、学歴別、出身地別に見てみよう。

(2) 男女差

男女差については、能力・状況いずれについてもほとんど認められない。

(3) 年齢差

年齢差については、若年層ほどヨマレヘンを多用する傾向が、能力・状況のいずれについても認められる。なお、ヨメナイ類としてまとめた各種の形式のうち、ヨメヘンの割合も若年層ほど高い。すなわち、「～ヘン」という形式が若年層に好んで使われる傾向があると言える。参考までに、ヨメナイ類に含めた形式のうち、主なもののそれぞれの年齢層全体に占める割合を年齢別に示しておこう(表5-6参照)。

なお、ヨメナイ類のうち、西日本方言の形式ではない「～ナイ(ヨメナイ)」の割合がかなり高いことが注目される。これについては、調査環境に影響されて共通語形式が現われたものか(質問文が「<字が読めない>という時、ふつう何と言いますか」ということばで始まっている)——それとも、方言の共通語

化によるものか明らかでない。しかし、老年層の方にヨメナイがより多く現われていることからみて、単なる共通語化ではない可能性が強い。

(4) 学歴差

次に学歴との関係については、能力・状況ともに、高学歴ほどヨマレヘンを多用する傾向が認められる（数値表示は省略）。ただし、若年層には高学歴者が多いので、これはむしろ年齢の方が要因として働いているとも考えられる。

表5-6 「ヨメナイ類」の内容(年齢別)(%)

		一〇・二〇代	三〇・四〇代	五〇・六〇代
能力可能	ヨメナイ	20.8	19.1	26.0
	ヨメヘン	11.2	9.6	1.3
	ヨメン	0.8	5.7	7.8
状況可能	ヨメナイ	18.4	22.3	28.6
	ヨメヘン	23.2	19.7	7.8
	ヨメン	1.6	6.4	14.3

(5) 出身地による差

次に出身地別に見てみよう。ヨメナイ類の割合は、能力・状況とも、四国出身者が最も大きく、大阪出身者が最も小さい。ヨマレヘンの割合は、逆に、能力・状況とも大阪出身者が最も大きく、四国出身者が最も小さい。ヨーヨマンについては、四国出身者の回答率の高さが目立つ。このような出身地による違いは、おそらく、各形式の方言分布と関係するところが大きいであろう。しかし、この種の形式の全国的な分布状況については、上のような数値との相関について検討できるほどの詳細な資料がまだない⁹⁾。また、中国・四国の中でも、近畿に近い県と遠い県とでは、これらの形式についての分布がかなり違っているが、大都市調査の結果について、県別の集計はなされていない。結果の分析について残された問題は多いが、今後、能力可能項目と状況可能項目とのクロス集計表を得、また参考にすべき方言資料を待って、再検討する機会をもちたいと思っている。

5.3. 副詞，及び方言的な言い方

5.3.1. 副詞について

「全然」「ちっとも」「てんで」は呼応の副詞とも言われ、後に必ず「ない」を伴うことが特徴とされている。しかし最近，というより戦後，若い人の間で「全然」が肯定表現に多用されることが識者の間で話題を呼んだり，ときには非難されたりしている。ここでは、「ない」を伴う呼応の副詞が実際の運用において，どの程度肯定表現に使われているのかが問題になる。

(1) 「全然スバラシイ」——「全然」・その1

「全然」については「全然スバラシイ」と「全然ダメダ」が調査項目にはいつている。まず，肯定表現である「全然スバラシイ」について見てみよう。

(i) 東京

性：差は全く見られない。

学歴：学歴が高くなるほど「おかしい」が多い。特に低学歴と中学歴の間に14%もの差がある。これは学校教育や印刷物等で「全然」を肯定に用いるのは正しくないとの知識が普及したことと関係があるろう。

年齢：「おかしい」は15～19歳の層でそのすぐ上の20～24歳の層より10%も少ない。それからあとは35～39歳の層での落ち込みを除いて54歳までは70%以上で安定している。大きな断層は55歳未満とそれ以上の年齢層の間にある。ここを境に「おかしい」が60%台に落ち込んでしまう。

この現象はどのように解釈すればいいだろうか。まず若い層で「おかしい」はもっと少なくてもいいはずである。「全然」を肯定表現に用いる傾向が生じた

のはここ数年のことではない。だから、10代だけでなく、そのすぐ上の20～24歳の年齢層で、もうすこし「おかしい」が減っていてもいいのではないか。

これに対する解釈は、少なくとも二つある。

一つは、さきの学歴において見られた現象を考えあわせ、「全然」を仲間うちの会話で肯定に使っていたが、年をとるにつれ、学校やその他の場で、正しくない言い方として注意されるようになり、自分でもおかしいと思うようになった、とするものである。

もう一つは、「全然」ではなく、「スバラシイ」という言い方についての回答がまじっている、とするものである。そうすると、10代において「全然スバラシイ」を「おかしい」とする回答が少ないのは、それから上の年齢では、「スバラシイ」に対しては抵抗があるが、10代ではそうでもない、ということだろうか。

高年齢層において、「全然スバラシイ」に対して「おかしい」という反応が60%以下になるという事実（のみならず、「使う」は30%以上である）に対する説明はまた別のところに求めた方がよさそうである。

というのは、漠然と考えられているのとは異なり、「全然」を肯定表現で用いるのがおかしいとする語感是比较的新しいものであると考えられるからであ

表5-7 「全然」の使用率（性、学歴別）（%）

	全 然 ス バ ラ シ イ					全 然 グ メ ダ				
	使 う	おかしく ない	おかしい	使わない	その他	使 う	おかしく ない	おかしい	使わない	その他
全 体	15.5 10.6	7.8 8.6	73.1 79.1	0.6 0.0	3.0 1.7	94.8 86.9	2.0 8.9	2.5 3.1	0.2 0.3	0.5 0.8
男	15.5 10.8	7.8 10.8	73.0 76.3	0.7 0.0	3.0 2.1	94.9 84.0	1.4 10.3	3.0 4.6	0.3 0.5	0.3 0.5
女	15.5 10.3	7.9 6.1	73.2 82.4	0.6 0.0	2.9 1.2	94.8 90.3	2.6 7.3	2.0 1.2	0.0 0.0	0.6 1.2
低学歴	25.9 10.7	10.2 11.3	60.8 76.7	1.2 0.0	1.8 1.3	93.4 82.0	1.8 13.3	3.6 2.7	0.6 0.7	0.6 1.3
中学歴	13.1 9.4	6.6 5.0	76.1 83.8	0.7 0.0	3.5 1.9	95.8 90.6	2.4 5.0	1.7 3.8	0.0 0.0	0.0 0.6
高学歴	9.8 14.3	7.6 12.2	79.3 71.4	0.0 0.0	3.3 2.0	94.6 89.8	1.6 8.2	2.7 2.0	0.0 0.0	1.1 0.0

（注） 表中左上の数字は東京、右下は大阪。

る。これについては、松井（1977）がくわしい。松井はこの中で「『全然』が肯定表現を伴う場合は従来いくらでもあった」とし、ただし、この昔からある肯定表現の「全然」は「何から何まで残る所なくすっかり、まるっきりそういう状態であるさまの意である」とする。「全然」のこの意味での用例としては、たとえば「彼は戦争をすることなどは全然秘密にしていた」（黒島伝治『機』1927）などがあり、少なくとも昭和のはじめごろまではごく普通の言い方であったようである。そのような時期に言語形成期を送った人たちに「全然スバラシイ」に対して拒否反応が比較的少ないのは当然とも言える。

ただし、だからといって「おかしい」がゼロになることはない。松井の説くように戦前の「全然」と戦後の程度副詞の「全然」とでは、同じ肯定表現でも差がある。だから昭和のはじめごろに言語形成期を送った人も、程度副詞としての「全然」に対して他の年齢層ほどではないにせよ違和感を持つということになるうか。

(ii) 大阪

「使う」は全体で10.6%と東京に比べて5%も少ない。

年齢：若年層と老年層で「おかしい」が80%以下であり、30～49歳の中年層で「おかしい」が最大になる。15～19歳で「おかしい」が80%を占め、45～49歳の「おかしい」と等しくなっているが、「使う」は15～19歳で12.5%、45～49歳で3.3%である。東京と同じような説明が可能であろう。

学歴：東京と異なり、「おかしい」は中学歴が83.8%と他よりも多い。

(2) 「全然ダメダ」——「全然」・その2

これに対する反応は、東京・大阪とも「全然スバラシイ」と非常に異なっている。「ダメダ」は「ナイ」を含んでいないが、それ自体否定的な意味を持っている。

(i) 東京

全体で見たときに「使う」は94.8%であり、年齢、性、学歴、出身地で見ても目立った差はない。

(ii) 大阪

「使う」は全体で86.9%である。

性：女性の方が「使う」の比率が若干高い。これは職業では主婦が「使う」92.2%と高い数字を出しているのとは一致している。

世代：1世，2世，3世と世代が重なるにつれて「使う」が減る。

大阪の方言的な言い方である「全然アカン」などと，共通語的な「全然ダメダ」のどちらを用いるかによって，このような性・世代による回答の差が生じたと考えることもできる。しかし男女の差はそれほど大きいとは言えないし，世代別のデータも3世が全部で12人しかないので信頼性にとぼしい。

(3) 「トテモデキナイ」——「トテモ」・その1

「トテモ」についても，松井（1977）でふれられている。

(i) 東京

「使う」は全体で95.5%で，性，学歴，職業などで特筆すべき差はない。

年齢：55歳以上の層で「使う」が100%となっているのが注目される。

(ii) 大阪

「使う」は全体で85.5%と東京より少ない。学歴を除いて各属性で目立った差はでていない。

学歴：高学歴層の「使う」は79.6%とやや少ない。

(4) 「トテモ大キイ」——「トテモ」・その2

程度副詞として「トテモ」を用いた例である。

(i) 東京

「使う」が全体で88.7%と「トテモデキナイ」の95.5%を下回っている。各属性でも目立った差はない。

世代：3世が「使う」100%となっているが，3世以上ということで3世，4世を一つにまとめると91.9%になり世代による差もあまりないことになる。

(ii) 大阪

「使う」が全体で80.5%と東京よりも少ない。「おかしい」は東京とそれほど違わない数字だから，その分「おかしくない」が増えていることになる。大阪では，共通語的な言い方に対し，「おかしくはないが，自分では使わない」人が東京よりも多くいる，ということだろう。

性，世代では目立った差はない。年齢では30歳より上では，それより下の年

年齢層に比べて「使う」が幾分少ない。

(5) 「チットモ平気ダ」——「チットモ」・その1

「チットモ」も肯定表現を伴った用例としては『日本国語大辞典』に坪内逍遙の『当生書生氣質』からのものがあり、決して新しい言い方ではないとも言える。

(i) 東京

「使う」が全体で13.1%である。「おかしい」は77.3%なので、使う人と使わない人がはっきりわかれている、と言える。

年齢：「使う」は10代が他の年齢層に比べて多い。また40～54歳の年齢層は「使う」が5%前後と少ない。

学歴：「使う」は学歴に反比例している。

職業：主婦と学生で「使う」が20%台であるのが目につく。

出身地：九州・四国・近畿に対し、その他の地方が「使う」の割合が多い。「チットモ平気ダ」は東日本でよく使われている言い方なのかも知れない。

(ii) 大阪

「使う」は全体で6.1%と東京より少ない。

年齢：若年層と老年層で「使う」が中年層よりも多い。

学歴：東京と同じ傾向が読みとれる。

(6) 「チットモヨクナイ」——「チットモ」・その2

全体で「使う」は東京が90.3%、大阪が85.0%である。どの属性でも、特筆すべき差はでない。

(7) 「テンデウマイ」——「テンデ」・その1

(i) 東京

「使う」が全体で29.9%、「おかしい」は54.6%である。

年齢：「使う」は各年齢層ごとに数字に大きなバラつきがあり、はっきりした傾向を読みとれない。しかし、「おかしい」は40歳未満と以上とで差がある。40歳以上の方が「おかしい」が多いのである。

学歴：「使う」は学歴に反比例しており、「全然」「チットモ」と並んで「テンデ」も肯定表現のときに高学歴の人はあまり用いない。学歴の高い人ほど、世の中に流布している規範を強く意識するということになるのか。

職業：主婦と家業従事者が「使う」が少ない。

世代：「使う」を見ると3世と4世に大きな差があるが、その中間の数値を1世・2世がとっている。解釈に苦しむ。

出身地：北海道・北東北と四国、それに九州・沖縄が「使う」が20%以下だが、ほかの地域は20%以上である。「テンデ」を肯定表現に用いる方言の分布は広いのではないかと考えられる。

(ii) 大阪

「使う」は全体で7.8%である。「テンデ」もどちらかといえば東京的なことばと言える。

年齢：35歳未満は35歳以上に対し「使う」が多少多い。これは若い層が東京のことばの影響を受けやすいと解釈すべきか。ただし差はそれほど大きくない。

出身地：大阪出身者と近畿地方出身者の「使う」はそれぞれ7.9%と6.9%であるが、東京調査での近畿地方出身者の場合28.6%と3倍以上であった。他の地方の出身者の場合も九州を除き、東京調査に比べて軒なみ「使う」が激減している。「テンデ」を肯定表現に使う地方の出身者も、大阪のことばにあわせて、「テンデ」を使わなくなることだろうか。

(8) 「テンデ話ニナラナイ」——「テンデ」・その2

(i) 東京

「使う」が全体で89.8%である。

年齢：25歳未満では「使う」が90%以上、25～39歳で80%に落ち、それからまた90%以上になるという分布を見せているが、「おかしい」に注目すると45～49歳を除いてつねに5%以下であり、年齢による変化はない。

世代：3世と4世をまとめると大した変化はなくなってしまう。

出身地：南関東は「使う」が80%と全体から見ると低い数値だが、「おかしい」に注目すると各地方とも10%を越えない。

(ii) 大阪

「使う」が全体で76.6%である。

年齢：年齢層によるバラつきが激しいが、傾向としては40歳未満よりは40歳以上に「使う」が多いと言える。

学歴・世代：どちらもあまりきいていない。世代は3世と4世を一つにまとめてしまうと差があまりなくなる。

5.3.2. 方言的な言い方

方言的な言い方について、ここでは「あかんや（わ）」「あんじょう直しといてや」「物の値段のたずね方」「『すてる』の言い方」「手紙がきない」「『失敗してしまった』の言い方」に関し、分析を行なってみた。

(1) あかんや（わ）

これは、大阪調査だけに取り入れられた項目で、近畿を中心に分布している言い方である。「あかんや」は大阪では使用率が高いことが予想される。実際、「使う」は全体で92.2%であった。また「おかしい」は1.7%しかない。

年齢：60歳以上で「使う」が70%を割るのが注目される。しかし、60歳以上は全部で35名しかいないので参考にとどまる。10代が100%なのは、10代は1世が7.5%と土着性が強いせいかも知れない。

学歴：高学歴で「使う」が中・低学歴より少ない。「おかしい」が高学歴で増えているのも注目される。高学歴の人は方言的な言い方に対して抵抗を感じているのだろう。同様の傾向は「あんじょう」「物の値段のたずね方」にも見られる。おもしろいことに、世代と他項目とのクロス集計の表を見てもわかるように高学歴の人の1世の割合は、低学歴のその約半分であり、高学歴の方がよそものが少ないと言えるのである。

職業：学生が「使う」97.4%と高率なのが目につく。これは10代で「使う」が100%であるのと関係があろう。

世代：3世・4世がともに「使う」100%と土着性の強さと使用率の高さが一致している。

出身地：どの地方も大体平均に近い使用率であると言える。中国地方と中部地方の使用率の低さは、サンプルの数が少ないのでここでは問題にならない。

(2) あんじょう直しといてや

これも大阪調査だけの項目である。「使う」は全体で68.8%である。

性：「あかん」と違って男女差があり、男性の方が「使う」16%と多い。しかし、「使う」「おかしくない」を一つにまとめれば、差はなくなってしまう。

年齢：注目すべきは10代が「使う」47.5%と他に比べてずっと少ないことである。10代では1世は7.5%であり2世以上が大部分を占めるのにこのような結果になっている。

学歴：前述したように学歴に反比例して「使う」が減る。

職業：学生が「使う」43.6%と少ない。これは年齢別のデータで10代で見られた現象と呼応している。

世代：3世と4世をひとまとめに考えれば、土着性と比例して「使う」が増える、と言えそうである。

出身地：「あかん」と異なり、大阪及び近畿地方以外では「使う」がそれほど多くない。

(3) 物の値段のたずね方

これも大阪調査だけの項目である。「イクラ」は全体で55.4%、「ナンボ」は18.7%である。残りが「イクラ」と「ナンボ」の両方を用いる(表5-8参照)。

性：男女差が大きい。「イクラ」の使用率(単独で使う場合。以下同じ)は男性38.1%に対し、女性は75.8%と倍近い。

年齢：「イクラ」の使用率は若い人ほど多いとも言えない。

学歴：関連ははっきりしている。「イクラ」の使用率は学歴に比例しているし、「ナンボ」は反比例している。

職業：物の値段を聞く機会が日ごろ多いと思われる主婦の「イクラ」の使用率が83.1%と高いのが目につく。

世代：土着性が強いほど「イクラ」が減り、「ナンボ」が増える。

出身地：『日本言語地図』(図5-10参照)によれば「ナンボ」は北海道・東北地方でも用いられるが、大阪調査では同地方出身者が少ないので西日本が問題になる。大阪を除く西日本の出身者は全体的に見て大阪出身の人よりも「ナンボ」の使用率が特に高いとは言えない。

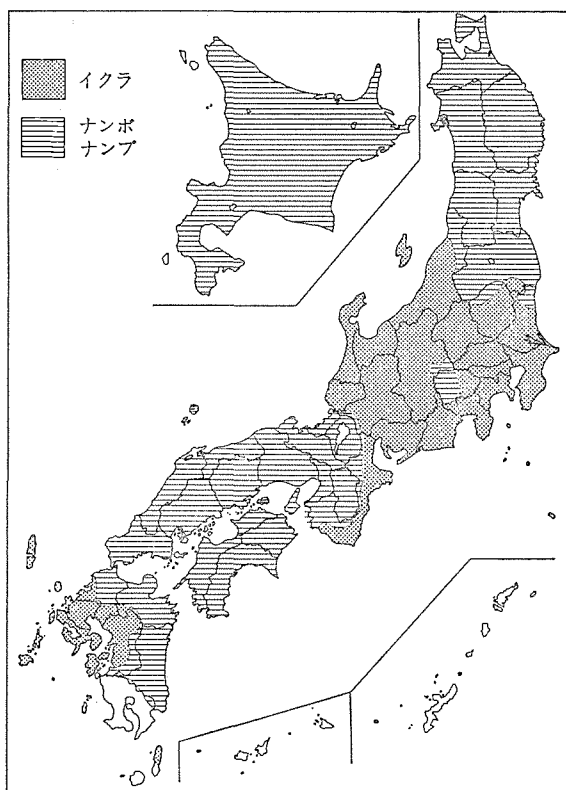


図5-10 「イクラ」と「ナンボ」概略分布図
(「日本言語地図」に基づく)

(4) 「すてる」の言い方

大阪調査だけの項目である。「ステル」だけを使うのが全体で36.2%、「ホカス」が27.6%、「ホル」が9.7%である(表5-9参照)。

性：男女差は、はっきりしていて、「ステル」の使用率は男性の方が女性よりも13%以上低い。逆に「ホカス」「ホル」の両方言形は男性の方が使用率が高い。大阪調査用の以上4項目では「アカン」を除いた残りの3項目において、女性の方が男性よりも共通語化がすすんでいる。

表5-8 物の値段のたずね方
(性、学歴別)(%)

	イクラ	ナンボ	イクラ +ナンボ
全 体	55.4	18.7	25.9
男	38.1	27.8	34.0
女	75.8	7.9	16.4
低学歴	50.7	22.0	27.3
中学歴	56.9	18.1	25.0
高学歴	65.3	10.2	24.5

表5-9 「すてる」の言い方
(性、学歴別)(%)

	ステル	ホカス	ホ ル
全 体	36.2	27.6	9.7
男	29.9	30.9	12.9
女	43.6	23.6	6.1
低学歴	30.0	31.3	8.0
中学歴	40.6	27.5	11.3
高学歴	40.8	16.3	10.2

(注) 2語形以上の併用、および「その他」の言い方は除外してある。

年齢：「ステル」「ホカス」は年齢層ごとの変動がはげしく傾向がつかみにくい。「ホル」の使用率は35歳未満の層が多く、若い層のことばかも知れない。

学歴：低学歴より中・高学歴の方が「ステル」の使用率は高く、「ホカス」の使用率は学歴に比例している。「ホル」は「ステル」に似た傾向を示すが、年齢の分布を考えると、高・中学歴層の年齢構成とも関係があるのかも知れない。

世代：「ステル」「ホカス」の使用率は、ともに土着性と反比例する傾向があり、「ホル」はその反対に3世・4世で使用率が多い。特に4世では「ホカス」の使用率をうわまわっている。

出身地：大阪出身は「ホル」の使用率が「ホカス」のその2分の1強である。全体で見たときには3分の1程度だから「ホル」が多くなっている。これは世代で見た傾向と一致している。なお、参考のため、『日本言語地図』所収の地図を引用しておく(図5-⑪参照。ちなみに、「ホカス・ホル」類は関東・東北・北海道地方には分布がない)。

(5) 手紙がきない

これは東京調査だけに取り上げられた項目である。動詞「来る」は変格活用だが、方言のなかには「こない」ではなく「きない」という形をとるものがある。「使う」は全体で8.1%である。

性：男性は「使う」11.8%，女性は5.0%とはっきりした差がある。

年齢：35歳未満と以上とで「使う」に差がある。35歳以上に「使う」が多いのである。

学歴：「使う」は学歴に反比例している。

職業：経営者に「使う」が多い。

出身地：国語研究所の「方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究」の準備調査によれば、「こない」「きない」という地域は神奈川を除く関

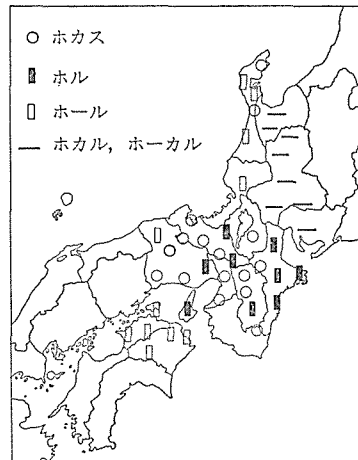


図5-⑪ 「ホカス・ホル」類の概略分布図(『日本言語地図』に基づく)

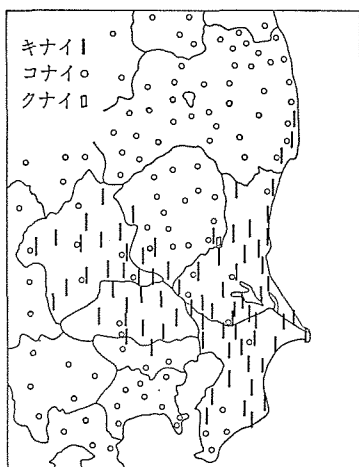


図 5-⑫ 「来ない」の言い方
 (「ことばの研究 5」より)

東地方の各都県である(図 5-⑫参照)。

ここで出身地を見ると、「使う」が多いのは南関東、南東北・北関東と中部である。東京出身者の「使う」は 7.0%である。前述の調査で中部からは「きない」という語形は報告されていないので、この大都市調査の結果とは矛盾するが、予備的調査では地点数が足りないこと、大都市調査では中部出身者の数は全部で 33 名しかいないことを考えるとはっきり結論は出せない。なお、南東北から関東にかけての「きない」の分布に関して

は飯豊(1974)がくわしい。また国語調査委員会(1906)によれば、山梨県の一部に「きん」があるという。

(6) 失敗してしまった

これも東京調査だけに取り上げられた項目である。「シチャッタ」の使用率(「シチャッタ」だけを用いる、という回答の率)は全体で 54.5%、「シテシマッタ」のそれは 19.7%である。「シチマッタ」はとるにたらない存在でしかない。

学歴:「シチャッタ」の使用率は学歴に反比例する。

年齢:「シチャッタ」の使用率は 40 歳を境目として、それ以上の年齢ではかなり減る。

職業:給与生活者は「シチャッタ」の使用率が少ない。

世代:それほどはっきりした傾向は見られない。

出身地:近畿以西では「シチャッタ」の使用率が少ない。北陸地方と中部地方は、東西の「シチャッタ」の使用率の中間値をとる。こうした結果から「シチャッタ」は東日本のことばであると言える。

5.4. サ変動詞をめぐるって

サ行変格活用の動詞「する」は、いろいろな漢語・和語・外来語と複合して、次のような多くのサ行変格活用動詞を形づくる。

察する，愛する，訳する，勉強する，位（くらい）する，リードする……
なお，語によっては、「する」が「ずる」になるものがある。

感ずる，変ずる，先んずる……

ところで，これらの語のうちのあるものは，これらサ行変格活用の形とともに他の形も現代語として使われている。例えば，「察する」「感ずる」などには，上一段活用形，「察しる」「感じる」が存在する。また，例えば，「愛する」「訳する」などには，五段活用形，「愛す」「訳す」が存在する。

ここでは語法上の“ゆれ”として，しばしば取り上げられる，これらサ変動詞をめぐるっての実態について検討する。今回の調査で取り上げられた項目は，次の五つのセットである。

「察スル」と「察シル」

「感ズル」と「感ジル」

「勉強スル」と「勉強シル」

「愛スル」と「愛ス」

「愛シナイ」と「愛サナイ」

以下，各項目の，東京・大阪両都市での使用の状況を見ることにしよう。

なお，ここでは，各項目について，調査時における「～だけを使う」および「～を使うことが多い」の回答を“頻用”，「～も使う」および「～を使うことは少ない」の回答を“稀用”，「～は使わない」の回答を“不使用”，「NR（＝no response）」を“その他”として処理した。また，以下には，各項目をいずれ

も年層差を軸として見ていくことにする。種々の属性の中で年層差が最も顕著な差異を示したからである。

(1) 「察スル」と「察シル」

さて、表5-10は、「察スル」および「察シル」の、5歳きざみに、年齢層別に見た使用状況である。両形のそれぞれについて、“頻用”する人の両都市での割合を年齢層別に示すと、図5-13（次ページ参照）のようになる。

東京、大阪ともに、65～69歳の層においては「察スル」と「察シル」の両形がほぼ等しい比率で使われている（ただし、厳密には、大阪の場合に「察シル」

表5-10 「察スル」「察シル」の頻用率(年齢別)(%)

察スル		東 京 調 査				大 阪 調 査			
		頻用	稀用	不使用	その他	頻用	稀用	不使用	その他
全 体		71.2	11.9	14.2	2.7	77.1	7.8	14.2	0.8
年	15～19	82.5	3.2	12.7	1.6	87.5	2.5	10.0	0.0
	20～24	88.5	3.9	7.7	0.0	87.2	7.7	5.1	0.0
	25～29	83.3	7.4	8.3	0.9	93.5	0.0	6.5	0.0
	30～34	73.2	12.2	11.0	3.7	87.8	2.4	9.8	0.0
	35～39	66.6	14.4	13.0	5.8	80.0	15.8	2.6	2.6
	40～44	60.0	13.9	16.9	9.2	70.8	12.5	16.7	0.0
	45～49	68.6	13.7	15.7	2.0	76.7	13.3	10.0	0.0
	50～54	57.5	22.5	20.0	0.0	50.0	7.2	39.3	3.6
齢	55～59	50.3	28.1	21.9	0.0	57.1	0.0	35.7	7.1
	60～64	57.7	11.5	26.9	3.8	65.2	8.7	26.1	0.0
	65～69	40.0	24.0	36.0	0.0	41.7	25.0	33.3	0.0

察シル		東 京 調 査				大 阪 調 査			
		頻用	稀用	不使用	その他	頻用	稀用	不使用	その他
全 体		21.4	15.5	60.7	2.3	18.9	12.3	68.0	0.8
年	15～19	14.3	12.7	71.4	1.6	10.0	12.5	77.5	0.0
	20～24	9.0	11.5	79.5	0.0	12.8	7.7	79.5	0.0
	25～29	13.0	13.9	72.2	0.9	6.5	2.2	91.3	0.0
	30～34	18.3	14.7	63.4	3.7	12.2	14.6	73.2	0.0
	35～39	21.7	20.2	55.1	2.9	10.5	13.2	73.7	2.6
	40～44	23.1	13.9	53.8	9.2	22.9	18.8	58.3	0.0
	45～49	27.4	17.7	52.9	2.0	20.0	20.0	56.7	3.3
	50～54	42.5	12.5	42.5	2.5	46.5	10.7	42.9	0.0
齢	55～59	37.6	21.9	40.6	0.0	35.7	7.1	50.0	7.1
	60～64	34.6	15.3	50.0	0.0	26.1	17.3	56.5	0.0
	65～69	40.0	28.0	32.0	0.0	50.0	8.3	41.7	0.0

の方がやや多くでている)。一方、年層が下がるにつれて「察シル」が減少し、それに対応して「察スル」が増大している。大阪では60～64歳の層においてすでに「察スル」の使用率が「察シル」を追い抜いている。そして、15～19歳の層においては「察スル」の使用率が両都市ともに80%以上をも占めるようになっていくことがわかる。

なお、東京と大阪とを比較すると、「察スル」の使用率は大阪の方でより高く、一方、「察シル」の使用率は東京の方でより高い傾向にあることが指摘される。

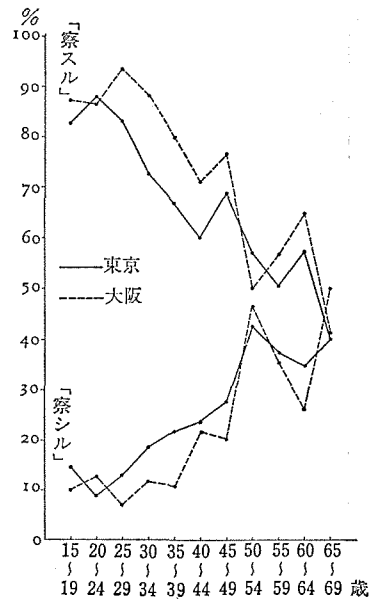


図5-13 「察スル」「察シル」の頻用率

ところで、「察シル」はサ変の一段化と言われる現象に属するものであり、歴史的には新しい形のはずである。しかし、「察シル」の減少、そして「察スル」の増大という今回の調査結果は、この項目に関して一種の回帰現象が起きていることを示すものと言えよう。

(2) 「感ズル」と「感ジル」

図5-14は、「感ズル」および「感ジル」のそれぞれを“頻用”する人の両都市での割合を年齢層別に示したものである。

65～69歳の層において、「感ズル」の使用は両都市ともに10%台であり、「感ジル」の使用は大阪で70%台、東京で60%台である。「感ジル」は一部の年層(55～64歳)を除き、一般に大阪の方での使用率が高いようである。なお、年層が下がるにしたがい「感ジル」がより増加し、「感ズル」がさらに減少していく傾向があるが、その増減の比率については両都市間でほぼ同様であることを指摘することができよう。

(3) 「勉強スル」と「勉強シル」

図5-15は、「勉強スル」および「勉強シル」のそれぞれを“頻用”する人の両

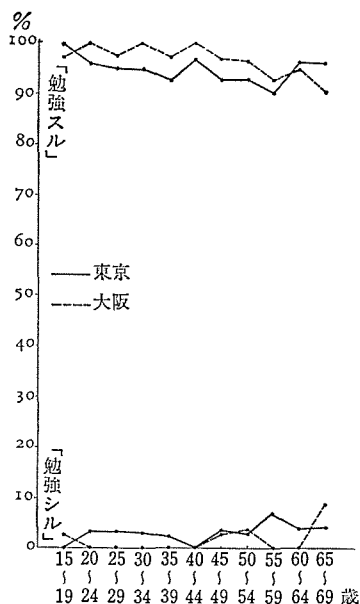
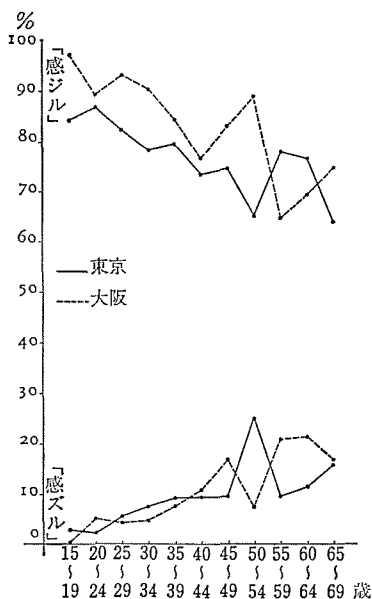


図5-14 「感ズル」「感シル」の頻用率 図5-15 「勉強スル」「勉強シル」の頻用率

都市での割合を年齢層別に示したものである。

どの年層においても「勉強スル」の勢力が圧倒的に強く、「勉強シル」の勢力は非常に弱い状況である。年層による差異についてはほとんどないと言えよう。なお、両都市間の差異も顕著とは言えないが、「勉強スル」は大阪の方にいくぶん多く現われ、一方、「勉強シル」は東京の方にいくぶん多く現われていることが指摘される。

(4) 「愛スル」と「愛ス」

図5-16(次ページ参照)は、「愛スル」および「愛ス」のそれぞれを“頻用”する人の両都市での割合を年齢層別に示したものである。

まず、サ変活用の形「愛スル」について見ると、どの年層においても、東京より大阪の方での使用率が高いことを指摘することができる。特に65～69歳の層では大阪が100%を占めているのに対し、東京は60%にすぎないといった状況である。しかし、この「愛スル」は年層が下がるにつれ、特に大阪において漸次減少の傾向を見せている。東京での年層差ははっきりは見えない。

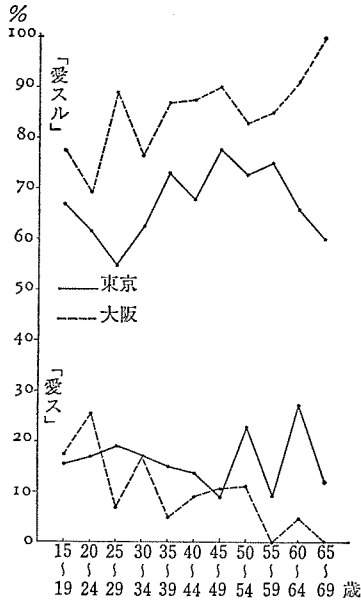


図5-16 「愛スル」「愛ス」の頻用率

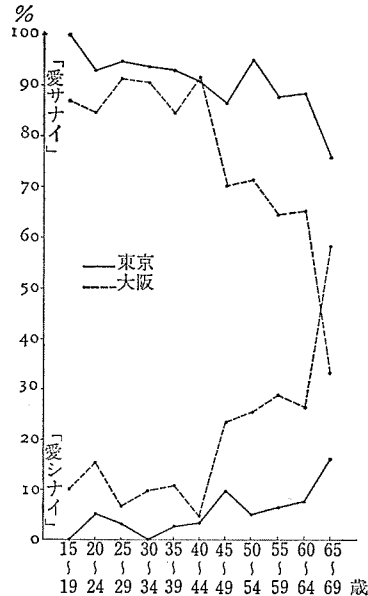


図5-17 「愛シナイ」「愛サナイ」の頻用率

一方、五段活用形「愛ス」は、大阪では「愛スル」の減少に応じて次第に増加の傾向を見せている。ただし、東京においては年層による差異がほとんど認められない。

(5) 「愛シナイ」と「愛サナイ」

「愛シナイ」はサ変活用動詞「愛スル」の打ち消し・否定形であり、「愛サナイ」は五段活用動詞「愛ス」の打ち消し・否定形である。図5-17は、この「愛シナイ」および「愛サナイ」のそれぞれを“頻用”する人の両都市での割合を年齢層別に見たものである（なお、表5-14で両形のそれぞれの詳しい使用状況を示した）。

両都市ともに年層が下がるにしたがい「愛サナイ」が増大し、それに対応して「愛シナイ」が減少している様相が顕著に現われている。特に大阪での65～69歳の層と60～64歳の層との間での両形の使用率の逆転は注目されるところである。

東京と大阪とを比較すると、各年層を通じて、「愛サナイ」の使用率は東京の方でより高く、「愛シナイ」の使用率は大阪の方でより高いことが指摘される。

表5-Ⅱ 「愛シナイ」「愛サナイ」の頻用率(年齢別)(%)

愛シナイ		東 京 調 査				大 阪 調 査			
		頻用	稀用	不使用	その他	頻用	稀用	不使用	その他
全 体		4.2	5.9	88.3	1.6	15.0	9.7	74.1	1.1
年 齢	15～19	0.0	0.0	100.0	0.0	10.0	10.0	77.5	2.5
	20～24	5.1	1.3	93.6	0.0	15.4	2.6	82.1	0.0
	25～29	3.7	1.8	93.5	0.9	6.5	6.5	87.0	0.0
	30～34	0.0	7.3	90.2	2.4	9.8	12.2	78.0	0.0
	35～39	2.9	8.7	84.1	4.3	10.5	10.6	76.3	2.6
	40～44	3.0	4.6	87.7	4.6	4.2	10.4	83.3	2.1
	45～49	9.8	11.8	76.5	2.0	23.4	16.7	60.0	0.0
	50～54	5.0	5.0	90.0	0.0	25.0	7.2	67.9	0.0
年 齢	55～59	6.3	15.7	78.1	0.0	28.6	7.1	57.1	7.1
	60～64	7.6	11.5	80.8	0.0	26.1	13.0	60.9	0.0
	65～69	16.0	16.0	68.0	0.0	58.3	16.7	25.0	0.0

愛サナイ		東 京 調 査				大 阪 調 査			
		頻用	稀用	不使用	その他	頻用	稀用	不使用	その他
全 体		92.3	3.1	3.0	1.6	81.4	5.8	11.7	1.1
年 齢	15～19	100.0	0.0	0.0	0.0	87.5	7.5	5.0	0.0
	20～24	93.6	3.9	2.6	0.0	84.7	2.6	12.8	0.0
	25～29	94.5	0.9	2.8	1.9	91.3	4.4	4.3	0.0
	30～34	93.9	3.7	0.0	2.4	90.2	2.4	7.3	0.0
	35～39	92.7	1.4	2.9	2.9	84.2	5.3	7.9	2.6
	40～44	90.7	4.6	0.0	4.6	91.7	4.2	2.1	2.1
	45～49	86.2	3.9	7.8	2.0	70.0	10.0	16.7	3.3
	50～54	95.0	2.5	2.5	0.0	71.5	10.7	17.9	0.0
年 齢	55～59	87.5	6.3	6.3	0.0	64.3	14.3	14.3	7.1
	60～64	88.5	7.6	3.8	0.0	65.2	4.3	30.4	0.0
	65～69	76.0	8.0	16.0	0.0	33.3	8.3	58.3	0.0

5.1. 注(1) 筆者に提供された資料で「その他」に分類された者は30名(被調査者全体は639名)であり、その内訳は、ヒアサッテ(と答えた者)9名、ヤネアサッテ(と答えた者)4名のほか、シワアサッテ、ヤニアサッテ、ヨクアサッテ、アスアサッテ、ミョーゴニチ等々である。このうち、たとえば、ヒアサッテやシワアサッテなどはシアサッテに、ヤネアサッテやヤニアサッテなどはヤノアサッテに分類しなおして再集計したいところであるが、それは困難なので、今はこの分類のままで分析をすすめることにする。しかし、この程度の数値であれば、分析の結果をゆがめることはないものと考えられる。

注(2) 北東北には青森・秋田・岩手、南東北には宮城・山形・福島、北関東には栃木・茨城、南関東には神奈川・千葉・埼玉・群馬の各県を含めてある。なお、近畿、中国、四国、

- 九州・沖縄については、それぞれのブロックに分類して数値が与えられているが、ブロックごとの被調査者の数がきわめて少数であるため、ここでは、それらをまとめて、「近畿以西」として集計することにした。
- 注(3) 図5-②、図5-③は、国立国語研究所編『日本言語地図』285図・286図の略図である。同書は、国立国語研究所が、1957～1964年に1903（明治36）年以前に生まれた男性について調査した結果を地図化したものである。
- 注(4) 都区内でも、一昔前には周辺と同じヤノアサツテが使われていたが、その後、関西からシアサツテを採り入れたものと推定される。そのときに、旧来のヤノアサツテは「あさっての翌々日」の意味へと変化したのであろう（佐藤亮一 1975 「言語地図からみた“しあさって”と“やのあさって”」『言語生活』284）。ただし、この変化はまだ完了しておらず、ヤノアサツテが依然として「あさっての翌日」の意味でも使われていることが、この調査結果に現われているわけである。
- 注(5) 北海道は、共通語・標準語の普及度が他の地方に比べて高い（佐藤亮一 1976 「北海道方言の地理的背景——『日本言語地図』第4集について——」『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』）
- 注(6) 内訳は、無回答が45.2%，その他が21.3%である。しかし、その他の内容は「具体的に日にちを言う」など、無回答（「名称なし」などを含む）に近いものが大部分であるので、ここでは、まとめて扱う。
- 注(7) このような分布が生じたプロセスについては、注(4)の文献で私見を述べた。
- 注(8) 北陸・中部以東の各ブロック（北陸，中部，南関東，南東北・北関東，北海道・北東北）については、ブロックごとの被調査者の数がきわめて少数であるため、ここでは、それらをまとめて集計した。
- 注(9) 図5-③で北海道に見られるゴアサツテは、北陸など、西日本方言圏からの移住者が持ちこんだものであろう。北海道には東北北部および北陸三県（富山・石川・福井）からの移住者がとくに多く、そのために、西日本方言もかなり見られる（注(5)の文献など参照）。

5.2. 注(1) 各地区の内訳については、前節の注(2)を参照されたい。

- 注(2) 図5-⑨は、国立国語研究所が実施中の「方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究」のうち、1977年度に行なった準備調査の結果に基づいて作図したものである。項目は「電灯が明るいので小さい字でも見ることができる」と「目覚し時計があるので朝早く起きることができる」であり、いずれも「状況可能」の表現についての調査項目である。
- 注(3) 九州地方には、若年層の間に近畿方言が急速に広がりつつあるようである。たとえば、九州方言学会『九州方言の基礎的研究』（1969）所収の「今日は雨だった」の「だった」の図では、老年層の場合熊本の一部の「ダッタ」を除いて九州全域が「ジャッタ」であるが、少年層では、福岡・佐賀・長崎および鹿児島各県を中心に、近畿方言の「ヤッタ」がかなりの勢力を持っている。したがって、大阪の若年層の間で優勢な「〜レル」が九州地方でも若年層にはかなり使われていることも予想される。
- 注(4) 北陸・中部以東では、各ブロックの被調査者の数が極端に少なく、ブロックごとの集

計は誤差を大きくする危険があるため、これらを「中部以東」としてまとめて集計した。各地区ごとの内訳を見ると、次のように、北陸と中部の割合が大きく、やはり、方言の分布と一致している。なお、かっこの数字は「中部以東」の被調査者全体(22人)に対するパーセントである。

	ミレル	オキレル
北海道・北東北	1人(4.5)	0人
南東北・北関東	0	0
南 関 東	2 (9.1)	1 (4.5)
北 陸	6 (27.3)	5 (22.7)
中 部	4 (18.2)	3 (13.6)

注(5) 以下に記した形式のうち、東北地方のヨマレル・ヨマレネにはヨマエレ・ヨマエネなどを含む。また、近畿・中国・四国のヨーヨマンにはヨーヨマヘンなど、ヨマレンにはヨマレヘンなどを含む。

注(6) 本節注(2)に記した準備調査の結果などによる。

注(7) 表5-⑤の数値はそれぞれの形式のみを答えた者の割合を示す。ヨメナイ類とヨマレヘンとの両方を答えたような併用回答者については集計していない。ただし、ヨメンとヨメヘンとの両方を答えたような者については、これをヨメナイ類の単用者として集計した。なお、集計から除外した、主な併用は次のとおりである。能力可能については、「ヨマレヘン・ヨーヨマン」(4.5%),「ヨメナイ類・ヨマレヘン」(3.1%)。状況可能については、「ヨメナイ類・ヨマレヘン」(8.3%)。

注(8) 能力可能と状況可能との区別について分析するためには、両項目のクロス集計表が必要であるが、その資料は準備されていなかった。

注(9) 国立国語研究所が実施中の「方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究」が終了すれば、これらの項目を含む全国約800地点についての分布図を作成する予定である。

参 考 文 献

- 飯豊毅一 1974 カ変動詞の一段化——東部方言を中心として——(国立国語研究所論集『ことばの研究』第5集)
- 国語調査委員会編 1906 『口語法分布図』 国定教科書共同販売所
- 中村通夫 1953 「来れる」「見れる」「食べれる」などという言い方についての覚え書 (金田一博士古稀記念『言語・民俗論叢』三省堂)
- 文化庁 1975 「ことば」シリーズ3 『言葉に関する問答集1』 25~26pp.
- 松井栄一 1977 近代口語文における程度副詞の消長——程度のはなはだしさを表わす場合——『国語学と国語史』(松村明教授還暦記念) 明治書院

6. 敬語使用の実態

6.1. 人称代名詞の使い分け

敬語は日本語の特色の一つとされ、また、その使い分けの混乱が指摘されて久しい。本章では、敬語のうちでも人称代名詞（一人称、二人称）がどのような意識に支えられて使用されているか、実態調査の結果を報告する。

6.1.1. 一人称代名詞

(1) 一人称代名詞の調査法

一人称の代名詞は、調査票の質問「あなたは御自分のことをいうとき（＝一人称）、ふつう何といたしますか」および、「それはどんな相手や場合に使いますか」の質問について東京と大阪の住人がどんな反応を示したか、その報告である。調査者は被調査者の答える代名詞を記入し、それぞれの代名詞について使用相手や場面を聞き、記録した。

(2) 一人称代名詞の使用語数

一人称代名詞の全体的傾向を見るために、まず被調査者一人一人が普通何語使用しているかを見ると、東京も大阪も1語から6語まで使用しており、使用語数の割合は下の通りである（数値は％）。

	1語	2語	3語	4語	5語	6語	無答
東京	29.6	46.9	18.0	3.4	1.7	0.2	0.2
大阪	30.4	43.7	19.5	5.6	0.3	0.3	0.3

すなわち、2語を使っている人が1位を占め、2位は1語、3位は3語、4位が4語使用となっている。ここで注目されるのは、一人称代名詞の使用語数は、1語・2語・3語の3種類で、全体の90%以上を占めていること、および、1語の使用者数が2位（東京29.6%、大阪30.4%）を占めていることである。特に後者の1語の使用者数は、被調査者の約3分の1が敬語の使い分けをしていないということを示している。そこで、1語・2語・3語の使用者を中心に敬語の使い分けをする人としらない人という点に焦点をすえて考察していく。

男と女で使用語数の率を比較すると、東京・大阪とも男性は、使用語数順位が2語（東京48.6%、大阪44.3%）、3語（東京31.1%、大阪29.4%）、1語（東京10.1%、大阪15.5%）の順となるのに対して、女性は1語（東京46.4%、大阪47.9%）、2語（東京45.5%、大阪43.0%）、3語（東京6.7%、大阪7.9%）の順となり、著しい相違がある。男性は2語か3語を使い分けるのに、女性は1語で使い分けられない人が50%弱もいることは注目される。

年齢別では、15～19歳、20～24歳と5歳きざみで見えていくと、東京はいずれの年齢層も2語の使用者が1位を占めている。そして45～49歳を除いて1語（2位）、3語（3位）と使用率が下がる。大阪は35～39歳の年齢層を除いて2語が1位、45～49歳の年齢層を除いて1語が2位である。ここで注目されるのは、例外とした35～39歳は、太平洋戦争中に生まれた人であること、45～49歳は、太平洋戦争中に小学校教育を受けた人たちであるということである。戦争中は、両親の言葉のしつけを受けなかったため1語の使用者が多く、戦争中小学校にかよった人は、きびしく学校でしつけられたからであろうか。

学歴との関係を見ると、低・中学歴の人は東京・大阪とも2語、1語、3語の順位であるのに対して、高学歴の人は、東京で、2語、3語、1語の順位となり、大阪は2語が1位で、3語と1語が同率の2位となっている。2位と3位との間に、学歴の高低がかかわっている。そして3語を使い分ける使用者は、東京も大阪も学歴が低→中→高と上がるにつれて使い分ける人が多くなり、使い分けられない1語の使用者は、逆に学歴の高くなるほど少なくなる。

職業の観点から、経営者、給与生活者、家業従事者、主婦、学生について比較してみると、東京・大阪とも家業従事者と主婦は、1位が1語で2位が2語

である。これは、家という固定した環境の中で生活しているため、その使用代名詞が一定していることを示している。一方、経営者・給与生活者・学生は、2語の使用が1位になっている。経営者と給与生活者は2位が3語使用で、学生は2位が1語使用である。経営者・給与生活者は対人関係の多様な社会に生きていることを示し、学生は経営者・給与生活者の外向的生活と、家業従事者・主婦との内向的生活の中間に位置していることを示している。一人称の使い分けは、生活環境と大きくかかわっていることが感じられる。

世代差と使用語数との関係を見ると、どの世代でも2語が1位であることは両都市で共通である。そして、東京はどの世代も2語(1位)、1語(2位)、3語(3位)の順である。大阪は、1・2・3世は東京と同じであるが、4世だけが逆に2位と3位の順が3語、1語の順となる。そこで使い分けの多い3語の使用人数を見ると大阪では、1世13.7%、2世24.1%、3世25.0%、4世28.6%とふえ、東京も1世15.3%、2世20.3%、3世21.8%、4世22.3%と同様の傾向を示している。したがって、その土地に定着した世代ほど、一人称代名詞の使い分けがあるといえそうである。

東京あるいは大阪に住む人の出身地と使用語数との関係を見ると、東京ではどの地方の出身でも2語の使用率が最も多い。しかし、その2語使用のパーセンテージは、

70%台 近畿

50%台 中国

40%台 東京、北海道・北東北、南東北・北関東、南関東、中部、四国、
九州・沖縄

30%台 北陸、その他

と相違がある。3語を使い分ける人は、20%以上が東京、中部、九州・沖縄、その他で、他は10%台かそれ以下である。4語の使い分けは10%以上が近畿と中国とその他で、他は10%以下である。したがって、敬語の使い分けは、①近畿、中国と、②東京、中部、九州・沖縄と、③他の地方となる。

逆に1語のみの地方は、

30%台 北海道・北東北、南東北・北関東、北陸、四国

20%台 東京, 南関東, 中部, 九州・沖縄

10%台 中国, その他

10%以下 近畿

となり, 敬語体系の発達している近畿, 中国地方と, 発達していない北海道・東北地方との大きな相違を示している。

大阪では, 被調査者の少ない北海道から中部を除くと, 大阪, 近畿, 四国, 九州・沖縄で2語が1位で, 1語が2位, 3語が3位であるが, 中国が3語(1位), 2語(2位), 1語(3位)となっている。また, 大阪, 九州・沖縄も3語の使用率が20%を超えており, 敬語を使い分けようという意識が強いものと思われる。

以上から, 使い分けない1語の使用者は〔性別〕女性, 〔学歴〕低学歴, 〔職業〕家業従事者・主婦, 〔出身地〕北海道・北東北, 南東北・北関東, 北陸, 四国の人, 使い分ける3語の使用者は〔性別〕男性, 〔学歴〕高学歴, 〔職業〕経営者・給与生活者, 〔世代〕4世, 〔出身地〕近畿, 中国の人となる。

(3) 一人称代名詞の種類と用法

次に, 被調査者が回答した代名詞(単数形)の語形について見てみよう。

一人称代名詞の異なり語数は, 東京が12語(男8語, 女10語), 大阪が13語

表6-1 一人称代名詞の種類とその回答順位

	東 京			大 阪		
	全 体	男	女	全 体	男	女
80%以上						ワタシ
70～79%		オレ				
60～69	ワタシ	ボク	ワタシ	ワタシ	ボク	
50～59		ワタシ			ワタシ	
40～49			ワタクシ		オレ	
35～39	ワタクシ			ボク		
30～34	オレ, ボク		アタシ			
25～29		ワタクシ		オレ	ワシ	ウチ
20～24					ジブン	ワタクシ
15～19	アタシ	ジブン		ワタクシ, ワシ, ジブン		アタシ
10～14	ジブン			ウチ	ワタクシ	

(男12語, 女9語) とほぼ同数であった。このうち, 東京または大阪の被調査者の10%以上が使用すると答えた代名詞は表6-1に示す8語であった。

全体の使用率で見ると, 東京・大阪ともワタシが60%を超し, きわだって使用率が高い。ワタシ以外で10%以上の使用率を持つ代名詞を順に見ると,

東京 ワタクシ, オレ, ボク, アタシ, ジブン の5語

大阪 ボク, オレ, ワタクシ, ワシ, ジブン, ウチ の6語

となっており, 東京ではアタシ, 大阪ではワシ, ウチに特色がある。

また, 性別で比較すると, 使用率10%以上の語は,

	東京	大阪
男	5語	6語
女	3語	4語

となり, (2)で見た代名詞の使い分けの実態の結果同様に, 男性の方が女性よりも使用語数が多くなっている。

なお, 9%以下の使用率の語(全体)は,

東京 ウチ (2.0%, 単位は以下同じ), アタクシ (1.7), ワシ (0.9),
アイ (英語 I. 0.2), ワテ (0.2), アタイ (0.2)

大阪 アタシ (7.0), ワテ (1.9), ワイ (1.1), ワタイ (0.6), アタクシ
(0.6), ワタクシメ (0.3)

である。東京のアタイ, アイ(英語), 大阪のワイ, ワタイなど, 地域色を反映するものであろう。

本稿では, 以下大都市の言語生活を代表する使用率10%以上の8語を中心に見ていくことにする。

これらの8語は, どのような意識で使われているか, 調査票の質問「それはどんな相手や場合に使いますか」の反応を分析してみる。

記入された使用理由の反応は多種多様なので, それらを,

上下関係……目上に, 対等に, 目下に, 共通に

親疎関係……親しい, 親しくない

公私関係……公的, 私的

態度・心理状態……改まって, くつろいで, 日常

表6-② 一人称代名詞の使用理由〔実数〕

		上 下 関 係				公私 関係	親 疎 関 係		態度・心理	
		目 上	対 等	目 下	共 通	公 的	親しい	親しくない	改まっ て	日 常
東 京	ワ タ シ	52			16	23	16	14	23	106
	ワタクシ	71				21		10	58	22
	オ レ		16				106			19
	ボ ク	26	18				44			40
	ア タ シ						16			44
大 阪	ワ タ シ	35			8	22			19	43
	ボ ク	27	10				13		6	21
	オ レ		6				27			18
	ワタクシ	7				6			34	
	ワ シ			5			18			9
	ウ チ						19			
	ジ ブ ン	12								

の4種類の上位基準とその下位分類に類別し、使用理由によって代名詞の用法を考察してみよう。東京は639人の被調査者のうち、10名以上が記入した理由を見ると、表6-②のようになる。

ただし、大阪は被調査者が359人で東京の約半分なので、5名以上の使用理由についてのせた。

すなわち、ワタクシは東京では「目上・公的・親しくない・改まって・日常」の関係で用いられるのに対して、大阪では「目上・公的・改まって」の場合だけである。ワタシは、東京で「目上・共通・公的・親しい・親しくない・改まって・日常」の関係で用いられ、大阪では「目上・共通・公的・改まって・日常」の関係で用いられ、「親しい・親しくない」の親疎関係の判断がない。ボクは、東京で「目上・対等・親しい・日常」の関係、大阪で「目上・対等・親しい・改まって・日常」の関係で用いられ、「改まって」の判断が大阪にある。オレは、東京で「対等・親しい・日常」の関係で用いられ大阪も同じである。東京と大阪で共通のワタクシ・ワタシ・ボクにおいて東京と大阪の使用意識に差のあることが注目される。

次に地域色の強いアタシは東京で「親しい・日常」の関係で、ワシは大阪で

「目下・親しい・日常」, ウチが大阪で「親しい」の関係で, ジブンが大阪で「目上」の関係で用いられている。

また, 目上に使える代名詞は, 東京ではワタクシ・ワタシ・ボク, 大阪ではワタシ・ボク・ジブンと意識され, ワタクシとジブンに地域差が現われている。公的場面で使えるのは, 東京ではワタクシ・ワタシ, 大阪ではワタシの1語で, ここでもワタクシに地域差が見られる。

このほか東京と大阪で差がある代名詞は, 「目下」への関係を大阪ではワシで示すのに, 東京ではこれにあたる基準が意識されていないこと, 親疎の関係で, 大阪には「親しくない」という基準が見えないこと, ワタシを東京では「親しい」関係で使うのに, 大阪では使わないこと, 「日常」の場面でワタクシを東京では用いるが大阪では用いない, など著しい意識のずれがある。

さらに注目すべきことは, 上下関係における「共通」に用いる類別が存在していることで, 東京・大阪とも, ワタシは, 目上にも対等にも目下にも用いられている。

代名詞と使用理由との関係を見るために, 使用理由を上位概念(使用基準)にまとめた結果で東京と大阪を比較すると,

〈東京〉	ワタクシ	ワタシ	ボク	オレ	アタシ		
公私関係	○	○					
上下関係	○	○	○	○			
態度・心理	○	○	○	○	○		
親疎関係	○	○	○	○	○		
〈大阪〉	ワタクシ	ワタシ	ボク	ワシ	オレ	ジブン	ウチ
公私関係	○	○					
上下関係	○	○	○	○	○	○	
態度・心理	○	○	○	○	○		
親疎関係			○	○	○		○

のようになり, 代名詞の種類とともに, 公私関係, 上下関係から態度・心理状態, 親疎関係へと判断の移りかわることを示している。

6.1.2. 二人称代名詞

(1) 二人称代名詞の調査法

調査票の質問、「では、相手を指しているとき（＝二人称・単数）、何と言いますか」、および「どんな相手や場合に使いますか」の質問についての反応の実態を報告する。調査法は一人称と同様である。

(2) 二人称代名詞の使用語数

二人称代名詞の使用語数は、東京で1語から6語、大阪で1語から5語で、使用順位は両都市ともに1位が1語、2位が2語、3位が3語、4位が4語、5位が5語、6位が6語である。したがって1語使用と答えた使い分けない人が最も多い。また、1語の使用者は東京（44.3%）が大阪（35.7%）より多く、2語を使い分ける人は、大阪（34.8%）の方が東京（30.0%）より多い。3語の場合も同様である。したがって、大阪は東京より二人称代名詞を使い分ける傾向が認められる。そこで、使い分けをする人としらない人との相違について見ていくことにする。

男女差から見ていくと、東京・大阪とも男性は1位が2語、2位が1語、3位が3語となり、女性は1位が1語、2位が2語、3位が3語となっていて、相違が著しい。男性の場合、使い分ける2語・3語の使用率は、東京が52.7%、大阪が54.6%であり半数以上である。これに対して、女性の場合は、使い分けしない1語の使用率が、東京で57.4%、大阪で46.7%であって、半数以上か、半数に近く、使い分ける2語と3語の使用者の合計よりも多い。

年齢別では、15～19歳、20～24歳のように5年単位で区切ると、東京では、40～44歳の層を除いて、1語の使用率が1位、2語の使用率が2位である。そして3位は、どの年齢層も3語である。例外の40～44歳は、2語（1位）、1語（2位）、3語（3位）の順で、太平洋戦争中、就学前の子供であった。

大阪の場合は、1語が1位の年齢層と、2語が1位の年齢層がまじっており、3語は3位である。

1語が1位である年齢層は、15～19歳、25～34歳、45～49歳、55～64歳で、

2語が1位なのは、20～24歳、35～44歳、50～54歳、65～69歳である。このうち35～44歳は太平洋戦争中に生まれたか、就学前の子供であった人たちである。

学歴から見ると、東京では低・中学歴の人が1語（1位）、2語（2位）、3語（3位）、高学歴の人が2語（1位）、1語（2位）、3語（3位）となる。しかも、使い分けのない1語の使用率は、低学歴（51.2%）、中学歴（44.6%）、高学歴（37.5%）と、次第に減少し、使い分ける2語の使用率は、逆に低学歴（22.3%）、中学歴（29.1%）、高学歴（38.6%）と増加する傾向を示している。3語の場合も同様である。使い分けるか、分けないかは、学歴の高低に深くかわっている。

大阪の場合も同様に、低・中学歴の人は1語（1位）、2語（2位）、3語（3位）となり高学歴の人は、2語（1位）、1語（2位）、3語（3位）となる。ただし、1語、あるいは2語の使用率が東京のように一定の傾向を示していない。そして、3語の使い分けは、東京とは逆に、低学歴（16.0%）、中学歴（15.0%）、高学歴（12.2%）と、高学歴になるほど使い分ける人が少ない。地域性を示すものであろうか。

職業から見ると東京では、経営者は、2語（1位）、1語（2位）、3語（3位）の順となり、給与生活者・家業従事者・主婦・学生は、1語（1位）、2語（2位）、3語（3位）の順で、経営者の上→下への立場を反映している。大阪では、経営者・給与生活者・家業従事者が、2語（1位）、1語（2位）、3語（3位）の順となる。そして、主婦・学生が1語（1位）、2語（2位）、3語（3位）の順となり、生活習慣の相違を示している。また、使い分けをしない1語の使用者について見ると、東京では50%以上が家業従事者と主婦、40%台が学生、30%台が経営者と給与生活者である。一方、2語を使い分ける人は、40%台が経営者、30%台が給与生活者と家業従事者、20%台が主婦と学生である。家を中心とする生活環境が、敬語の使い分けを不要なものにしているようである。大阪では、50%台が主婦、40%台が学生、30%台が家業従事者、20%台が経営者と給与生活者となり、家業従事者のもつ社会的地位を反映しているように思われる。

世代について見ると、東京ではどの世代も1語が1位を占め、2語(2位)、3語(3位)とつづく。しかし、大阪では、1語と2語の順位が世代によって異なり、1世は1語も2語も1位、2世は1語(1位)、2語(2位)の順、3世・4世は、2語(1位)、1語(2位)の順となっている。東京では、3位(3語)の段階で3世(16.4%)・4世(13.8%)が1・2世(9.7%, 9.4%)より使い分ける率が高く、大阪では1位(1語)の段階で、3・4世(25.0%, 19.0%)が1・2世(35.1%, 39.2%)より低く、3・4世は1・2世より敬語の使い分けをしていることが知られる。

出身地から見ると東京でも大阪でも、その土地の出身者(東京・大阪)は、1語(1位)、2語(2位)、3語(3位)と順に使用語数が減少している。ただ、大阪の方が、1語と2語の差が少ない。移住者は、東京では被調査者の少ない近畿、中国、四国を除くと、北海道、東北、関東、北陸、中部、九州のいずれの地方でも1語の使用率が1位で、2語(2位)、3語(3位)の順となっている。

大阪では、被調査者数の少ない北海道・北東北、南東北・北関東、南関東、北陸、中部を除くと、近畿、中国、四国で2語が1位となっており、1語(2位)、3語(3位)の順である。九州・沖縄出身者は、1語(1位)、2語(2位)、3語(3位)で、東京出身者と同じ順位である。大阪の方が東京より敬語の使い分けを必要とする社会のようである。

以上から、二人称代名詞を使い分けない人は、〔性別〕女性、〔学歴〕低・中学歴、〔職業〕家業従事者・主婦、〔世代〕1・2世の人、使い分ける人は、〔性別〕男性、〔学歴〕高学歴、〔職業〕経営者・給与生活者・家業従事者、〔世代〕3・4世の人となる。

(3) 二人称代名詞の種類と用法

被調査者が回答した二人称代名詞の異なり語数は、東京22語(男18語、女17語)、大阪20語(男17語、女9語)となっており、大阪の女性を除いて一人称代名詞より種類が多くなっている。

このうち、使用率が10%以上の語について見ると、表6-3に示すように、東京ではアナタ、キミ、オマエ、オタク、アンタの5語であり、大阪ではこれ

表6-3 二人称代名詞の種類とその回答順位

	東 京			大 阪		
	全 体	男	女	全 体	男	女
70%以上			アナタ			
60～69%	アナタ					
50～59		キミ				アナタ
40～49		アナタ			オマエ	アンタ
30～39		オマエ		アンタ, アナタ	キミ	オタク
25～29				オタク	アンタ, オタク	
20～24	キミ			オマエ, キミ	アナタ	
15～19	オマエ, オタク	オタク	オタク			
10～14	アンタ	アンタ	アンタ	ジブン	ジブン	

にジブンが加わって6語となっている。東京でアナタの使用率がきわめて高いこと、大阪で二人称としてのジブンが1割強も見られるなど地域別の特色が見られる。

次に、性別に比較すると、

	東京	大阪
男	5語	6語
女	3語	3語

となっており、東京・大阪とも男性は全体と同じ語が10%を超えている。これに対して、女性では使用率10%以上の代名詞はアナタ、オタク、アンタの3語だけであり、ここでも女性の方が男性よりも代名詞を使い分けない傾向が現われている。とくに、東京の女性では8割弱がアナタに集中しており、他は2割以下しか使われていない。

なお、使用率9%以下の語（全体）は、

東京 アナタサマ (3.0%, 単位以下同じ), オタクサマ (2.3), ジブン (1.6), ソチラ (0.6), キサマ (0.6), オタクサン (0.6), ソチラサマ (0.5), オマエ (0.3), ボク (0.3), ユー (英語 you. 0.3), オマイ (0.2), オヌシ (0.2), アータ (0.2), テメエ (0.2), ゴジブン (0.2), コチラサン (0.2), ソチラサン (0.2)

大阪 オタクサン (2.5), オタクサマ (1.4), タイショウ (1.1), オウチ

(0.6), ワレ (0.6), オマイ (0.3), オヌシ (0.3), テメエ (0.2),
キサマ (0.3), ボク (0.3), アナタサマ (0.3), アンサン (0.3),
オマハン (0.3), オマエサン (0.3)

である。東京のアータ、オメエ、ソチラ、ゴジブン、ユー (you)、コチラサン、ソチラサマ、ソチラサン、大阪のアンサン、オウチ、ワレ、タイショウ、オマハン、オマエサンなど、地域色を反映するものであろう。

以上から、大都市の言語生活を代表する使用率 10 %以上の 6 語を中心にみていくことにする。

そこで、これらの 6 語はどのような意識で使われているか、調査票の質問「どんな相手や場合に使いますか」の反応を分析してみよう。

記入された使用理由は多種多様なので、それらを一人称の場合と同様の上下関係、公私関係、親疎関係、態度・心理状態の基準のほか、親族関係（配偶者）、性別関係（女へ）を加えて分類すると、東京では 639 人のうち 10 名以上の、大阪では 359 人のうち 5 名以上の使用理由は、表 6-4 のようになる。

すなわち、アナタは東京では「目上・対等・親しい・親しくない・改まって・日常・配偶者・女へ」の関係で用いられるのに対して、大阪では「目上・親しくない・改まって・日常」の場合だけである。アンタは東京で「親しい」関係

表6-4 二人称代名詞の使用理由〔実数〕

		上 下 関 係				公 関 係	親 疎 関 係		態 度 ・ 心 理		親 族	性
		目 上	対 等	目 下	共 通	公 的	親しい	親しくない	改まって	日 常	配偶者	女 へ
東 京	アナタ	27	12				41	37	16	94	16	15
	キ ミ		15	39			39					
	オマエ			18			44					
	オタク						10	20				
	アンタ						26					
大 阪	アンタ		6	6	5		41			15	7	8
	アナタ	19						7	24	6		
	オタク	14				8		19	17			
	オマエ			13			36					
	キ ミ		7	7			22					
	ジブン						22					

だけであるのに対して、大阪では「対等・目下・共通・親しい・日常・配偶者・女へ」の関係で用いられる。つまり東京のアナタの用法は、大阪ではアナタとアンタの2語で分担している恰好である。オマエは東京でも大阪でも「目下・親しい」である。キミは東京で「対等・目下・親しい」関係、大阪では「対等・目下・親しい」の関係で同じである。オタクは、東京では「親しい・親しくない」の関係で用い、大阪では「目上・公的・親しくない・改まって」の関係で用いられ「親しい」の関係がない。しかも使用理由が大阪のアナタとほぼ同じである。しかし、アナタは「改まって」の使用理由が多く、オタクは「親しくない」が多いことから、アナタはオタクより改まった語感を有するものと思われる。また、ジブンは「親しい」関係で用いられ、オタクの「親しくない」関係と相補う関係にある。

以上から、東京と大阪の二人称を比較すると、東京のアナタの用法は、大阪のアナタとアンタの組と、オタクとジブンの組との二対の用法とほぼ対応しており、使用語と使用意識の地域差が見られる。このほか差の見られるのは、東京にはない「共通・公的」の基準が大阪にあることである。

そこで一人称の場合同様、代名詞とその使用基準を東京と大阪で比較すると、

〈東京〉	アナタ	キミ	オマエ	オタク	アンタ	
親疎関係	○	○	○	○	○	
上下関係	○	○	○			
態度・心理	○					
親族関係	○					
性別関係	○					
〈大阪〉	アンタ	オタク	アナタ	オマエ	キミ	ジブン
親疎関係関係	○	○	○	○	○	○
上下関係関係	○	○	○	○	○	
態度・心理	○	○	○			
親族関係	○					
性別関係	○					
公私関係		○				

のようになり、二人称代名詞の使用基準は、親疎関係を軸に、上下、態度・心理、親族、性別、公私関係の順に弱まっている。

一人称と二人称を比較すると、一人称には公私関係の基準があり、二人称には親族関係と性別関係の基準が現われる。上下関係、親疎関係、態度・心理状態の3基準は共通の基準で、ここに日本人の敬語使用における基本的言語観を見ることができる。

6.1.3. 人称代名詞の使い分けに関する意識

最後に、現代の日本人は人称代名詞の使い分けに賛成なのか不賛成なのか、その意識を検討しよう。調査票の質問、「今のお話のように日本語では、場合によって、自分のことを、『わたくし』とか『ぼく』などと言います。また相手の人のことは『あなた』『君』などと使いわけます。しかし、英語ではどんな場合でも自分はI、相手のことは you と言えばいいそうです。あなたは日本語も場合や相手によって使いわけないですむほうがいいと思いますか。それとも、場合や相手によって使いわけたほうがいいと思いますか。」の反応によって付言する。

結果は、東京74.6%、大阪も74.7%の人が使い分けに賛成であった。使い分けない方がいいという意見は東京17.7%、大阪13.1%に過ぎず、被調査者の性別、年齢、学歴、職業、世代、出身地によって、若干の差は見られるものの一定の傾向はなく、使い分けの現実を現代の日本人は肯定しているものと考えられる。

6.2. 敬語の使い方

6.2.1. 東京における敬語使用

(1) 依頼の表現

依頼の表現はごく普通に用いられているもので一般的には特別の困難を伴うものではないが、ある種の表現には特別の形式が用いられることがあるので、適切な使い方について問題を感じさせることがある。たとえば「見てくれ」「聞いてくれ」「食べてくれ」「行ってくれ」「来てくれ」などという依頼を目上の人に言う場合にはいくつかの表現形式があり、これを適切に使い分けることは、地方出身者にはかなり迷いを覚えさせるものである。このうちの一つとして「来てくれ」の表現を取り上げた。これには、

おこし下さい（おこし下さいませんか、おこし下さいませ、おこしいだけませんか等を含む）

おいで下さい（おいで下さいませんか、おいで下さいませ、おいでいただけませんか等を含む）

いらっしゃって下さい（いらっしゃって下さいませんか、いらっしゃって下さいませ、いらっしゃっていただけませんか等を含む）

などの言い方があるほか「こちらにおでむき下さい」「（足を）おはこび下さい」などと言われることもある。現在の東京ではどのような表現形式がどのように用いられているのだろうか。

そこで調査票では、祝賀会等で控室にいる目上の人々に対して幹事が「これから会を開きますから、どうぞ会場の方に来てほしい」と言うときの「来てほ

しい」の部分は何と言うかという質問を設けた。その結果の詳細は『資料編』の集計表のとおりであるが、それは概ね次のようにまとめることができる。

全体として、「オコシクダサイ」（「オコシイタダキタイ」を含む）、「オイデクダサイ」（「オイデイタダキタイ」を含む）、「イラッシャツテクダサイ」（「イラッシャツテイタダケマセンカ」を含む）、「来テクダサイ」（「来テイタダキタイ」を含む）が多いが、その内訳は次のようになる。

オコシクダサイ類	10.3 %	オイデクダサイ類	18.2 %
イラッシャツテクダサイ類	29.5 %	来テクダサイ類	22.5 %

すなわち、「オコシクダサイ」の言い方はあまり多くはない。「イラッシャツテクダサイ」が比較的多いが、これも多数を占めるというほどではない。「来テクダサイ」という形は、さほど敬意の表示されている形式とは認め難いが、ある程度の支持を受けている。

そしてこの傾向は性・年齢・学歴・職業・世代・出身地等の社会的条件によって、きわだった違いを示すこともない。したがって「オコシクダサイ」は今後も盛んになることはなさそうである。「オコシクダサイ」が、15～19歳の若年層や50～54歳や60歳以上の高年層にきわめて少ない（それぞれ、1.6%、2.5%、4%弱）ことや、低学歴の人（5.4%）、家業従事者（0%）、学生（5.5%）に少ないのは、この形式が社会的な生活において、いわば社会に出てから習得された形式であることを物語るようである。

「オイデクダサイ」の形式は、社会的条件による各層別の使用状況を見ても、ほぼ12～20%の人に用いられているが、家業従事者にやや多く見られること（36%）、中部、九州出身者に少ないこと（約9%）がやや注目される。

「イラッシャツテクダサイ」は比較的多数の人の支持があるが、特に若年層に多いこと（46%）や家業従事者、主婦、学生、無職等の幅広い層から30%以上の支持があり（特に学生層は46%）、北海道・北東北地方出身の人でも43.2%が使用している点から見ると、今後も増す可能性がありそうである。

「来テクダサイ」は普通には敬意の度がさして高くない表現とされる。問題設定のこのような場面に使用することは不適切であるというべきであろう。その使用状況を見ると男性に多く（30%）、女性に少ない（16.1%）。若年層と高年

層に多く（15～24歳，65～69歳はともに25％以上，他は概ね20％以下），低学歴層に多い（34.9％，他は20％以下）。家業従事者や主婦には少なく（それぞれ16％，12.4％，他は22.8％～27.3％），1世に多く（25％，他は21.8％以下）。東京，北海道・北東北，南関東の出身者に少なく（それぞれ，19.5％，13.7％，18.4％），南東北・北関東，中部出身者に多い（31.4％，33.3％）。これらはいずれもうなずける結果である。すなわち，敬語体系が異なっている地域出身の人や敬語の教育を受けていない人，あるいは敬語使用の機会をあまり持たない人に多いのである。したがって，このような言い方が今後急激に増していくことはないであろう。何故なら，この言い方をする人々の持っている社会的条件は将来長く増加するわけのものではなく，これらの人々のうち，かなりの者は今後敬語使用の機会が与えられ，社会的に教育を受けることによって，その使用を改める可能性が多いと思われるからである。しかし，東京出身者の約2割がこの言い方をしていることは注目しなければならない。近ごろの若い人は言葉の使い方を知らない，という世評どおりに若年層・学生のこのような言葉が，社会に出てからすっかり改められるものか，それとも次第に増して行くものなのか，その動向を把握することが必要になるう。

男性と女性との間に大きな違いのあることも注目される。すなわち「オコシクダサイ～イラっしゃテクダサイ」の使用率は男性（48.0％）よりも女性（67％）の方が多く「来テクダサイ」の使用率は，逆に女性（16.1％）よりも男性の方が大きい（30％）。女性は敬意度の高い形式を多く用い，男性はあまり高い敬語形式を用いないということは，この結果においても言えそうである。

(2) 尊敬表現 聞く——お耳になる

共通語における尊敬表現の形式は一般的には「お……になる」と「～れる・～られる」との2形式が多く用いられる。たとえば「お書きになる」と「書かれる」のように。敬意度の上では前者が高い。東京語話し言葉では「お書きになる」形式が多く用いられ「書かれる」形式は少ない（文章語ではかなり用いられているが）。「お書き遊ばす」は特殊であり，皇室関係等を除いては一般的とは言い難い。また「お書きなさる」形式は各地方言にはまだ勢力を持つ言い方であるが，東京語としては次第にすたれてきている。

したがって、一般的には「お書きになる」「書かれる」の2形式を代表とし得るので、共通語の敬語形式はそれほど困難を伴うものではない。ところが、「聞く」「見る」「食べる」「行く」「来る」「いる」「言う」「する」「死ぬ」「知っている」等の場合には、そのような形式を用いずに特別な言い方をするので、複雑になり習得に困難を伴うものである。そこで、尊敬する目上の人に向かって「○○の噂をきいたか」と尋ねる質問を設定した。

こういう場合には、東京では、本来は「オ耳ニナサイマシタカ」の類を使用したのであるが、最近「オ聞キニナリマシタカ」類を使用する人が多くなっているようである。調査の結果は次のようにまとめることができよう。

オ耳ニナサル類	5.5%	オ聞キニナル（オ聞キニナラレル）類	44.7%
聞カレル類	4.2%	オ聞キスル（オ聞キイタス）類	6.4%
聞ク類	27.4%	その他	11.8%

これによれば、「オ耳ニナサル」類はもはや東京ではごく一部の人に使用されるだけである。全体では5.5%に使用される。ただし、55～64歳では12%に使用され、高学歴層では9.8%、主婦には8%の使用者がいることは、やはりこの形式が伝統のある教養者層の使用語であることを思わせる。

「オ聞キニナル」類は比較的多数を占める。男性（約3割）より女性に多く（約5割）、若年層・高年層（3割台）より中年層（4割台・5割台）に多い。学歴が高くなるにつれて、使用者の率は高くなり、学生を除いて多くの職業層に通じて用いられている。今や東京語の代表的形式になりつつあると言えるであろう。

「聞カレル」類は全体で4.2%に過ぎないが、15～19歳では12.7%（60歳以上は皆無）、学生では14.9%が使用することは注目されねばならない。今後次第に多くなる可能性もないわけではない。

「聞ク」類すなわち「聞キマシタカ」という言い方は尊敬している目上の人を使用すべき言葉ではないであろう。ところがそれが意外に多いのである。回答の「その他」の中にも類似のものがあリ、それらを合わせると28%を超す。女性より男性に多く（36.8%）、若年層に多く（15～24歳では30%以上）、低学歴層に多く（44%）、学生にやや多く（37%）、東京、南関東出身者には少なく、

東北地方や北関東、あるいは北陸の出身者に比較的多く用いられている。これに関連して「オ聞キスル」類、すなわち「オ聞キマシタカ」「オ聞キイタシマシタカ」などという言い方は、もちろん目上の人に対して使用すべき敬語ではない。回答の「その他」の中には「ウカガイマシタカ」などという言い方もある。それらを含めれば、本来目下の話し手が自分の動作等について使用すべき謙讓表現を、目上の人への動作に対する尊敬表現として使用している割合は7.4%に達する。これも15～19歳の人や家業従事者に多い（1割を超える）。

したがって、15～19歳ではその半数が目上の人に向かって、あるいは「コンナ噂ヲ聞キマシタカ」と質問し、あるいは「オ聞キマシタカ」と質問しているし、20～24歳では10人に4人はそうなのである。

いわば、「最近の若い人は口のきき方も知らない」「若い人は礼儀をわきまえていない」という世評を裏書きするようである。これが今後どのような動きを示すか注目される。

(3) 尊敬表現と謙讓表現との区別意識

前述のように尊敬表現が期待される場合にそれが用いられなかったり、逆に謙讓表現が用いられたりすることがかなり目立つ。特に若い人に多い。そこで、この二つの表現の区別がどの程度意識されているかどうかを見るために次のような設問を用意した。学生が先生に対して「先生は何時の急行にお乗りいたしますか」と尋ねたら、あなたはその言葉づかいをおかしいと感じるか、おかしくないと思うか、というものである。

もちろん、「お……いたします」は目下の人が自分の動作等について言う謙讓表現の形式であって、目上の人への動作について用いるべきものではない。その結果は次のようである。

おかしい 61.7% おかしくない 37.1% その他 1.3%

「おかしくない」という回答が全体の4割近くの人から寄せられたのである。興味深いことには、男女によって明瞭な差が見られる（男43.2%、女31.8%）。

すなわち、男性より女性の方が敬語について、はっきりした区別意識を持っていると言える。また年齢による差はあまり見られない。「おかしくない」が若

年層に多いわけでもなく、むしろ中・高年層に多いとさえ言える。低学歴層や経営者に多い（57%～58%）のは敬語に無頓着のせいであろうか。東京出身者にはやや少ないが、それでも約3割の人は「おかしくない」と言っている。

次につづいて、「あなたなら何と言うか」を尋ねた。その結果は次のとおりである。

オ乗リニナル（オ乗リニナラレルを含む）類 56.4% 乗ラレル類 6.6%
乗ル類 11.3% オ乗リイタス類 7.7% その他 18.2%

前述の「聞く」と比較すると、大まかな傾向としては似ているが、「聞く」の場合のように、「オ耳ニナサル」式の特別な言い方がないせいか「オ乗リニナル」の言い方が増して半数を超したことと、「乗ル」類の敬意を欠く表現が減じていることが注目される。

「オ乗リニナル」類を見ると、男性（約5割）より女性に多く（約6割）、若年層・高年層（約4割台）より中年層に多い（5割台、6割台）点など、「オ聞キニナル」類の場合と似ているし、学歴が高くなるにつれて使用者の率が高くなること、学生を除いて多くの職業層に通じて用いられることも同様である。

「乗ラレル」類は全体で6.6%に過ぎず、やや若年層に多い（20～34歳は8%～11%）かと思われるが、15～19歳では4.8%に過ぎないし、家業従事者に12%の使用者が認められたほかは、目立った点は認められない。

「乗ル」類、すなわち「乗リマスカ」などという言い方は、「聞く」の場合よりは少なくても11.3%である。男性に多く（14%）、若年層に多く（15～19歳は33%、20～24歳は17%弱）、低学歴層に多く（19%弱）、学生に多い（24%強）点をはじめ、東北地方や北関東地方出身者や北陸出身者にやや多いこと等も前述の「聞く」の場合と似ている。

「オ乗リイタシマスカ」類は7.7%が使用している。低学歴層や経営者にやや多い。「オ乗リイタシマスカ」と尋ねても「おかしくない」と答えたのが全体で37%であり、低学歴層では56.6%であったのに比較すれば現実にはそう多い数ではない。しかし、東京出身者でも33%が「おかしくない」と感じ、6.6%がそのように言うと言っていることは注目すべきであろう。

現代の東京人において尊敬表現と謙譲表現を明確に識別する意識が行き渡っ

ていないとも言えよう。少なくとも「お……いたす」「お……する」の形式を明確に謙譲表現として把握することのできない人がかなりいる。東京における敬語使用が急激に変化することは考えられないが、このような結果を見ると、次第に変化しつつあることは認めねばなるまい。したがって、前述の「聞く」の場合ほど多くはないが、先生に対して「何時ノ電車ニ乗リマスカ」とか「オ乗リイタシマスカ」と言うのは、15～19歳では10人に4人の割合であり、20～24歳では4人に1人の割合になる。

(4) 謙譲表現

(i) 聞く——うかがう

東京における一般的な謙譲表現の形式としては、かつては「お……申す」(お頼み申します)であって、特に目上の人のために何かをしてあげるときに「お……いたす」(先生の荷物は私がお持ちいたします)を使用したと言われている。しかし、最近では「お……申す」の形式はすっかりすたれて、「お……いたす」「お……する」が一般的な謙譲表現として多く用いられていると言っていいであろう。しかも、なお完全に定着したと言い難い面もあり、また、特別な謙譲の動詞もあって(うかがう〈聞く〉, 拝見する〈見る〉, 拝読する〈読む〉, 参る〈行く・来る〉, 申す・申し上げる〈言う〉, いただく〈食べる・貰う〉, あげる〈やる〉, いたす〈する〉, 存じる〈知る〉等)使用上問題となるものもある。

謙譲表現は話し手が、自分の方の事物・動作をいやしめて言うことによって、結局は相手側を高める意を表示するとき等に多く用いられるものである。目下の事物・動作を謙遜して言うということ自体は、全国的にどの地域でも行なわれているが、その形式はそれぞれに違いがある。特別な謙譲の動詞とか一般的な形式とかを持たない地域も多い。現在、謙譲表現は特に話者による使用の差が目立つようである。それには出身地域の差, 年齢の差, 教育の差, 所属階層(家庭)の差等も関与しているであろうし、さらには戦後の民主化の進行, 家庭内教育を含めて敬語教育の不振, 各地方言の違い等を考慮する必要があるが、謙譲表現そのものの性質にもよるところがあろう。すなわち、目上の相手側を直接に尊敬する形式をとらずに、話し手側が自分側をおとしめることによって、結局は相手側への尊敬を示すという、もってまわった表現の性質にもよるもの

と思う。

今回の調査では謙譲表現の若干を取り上げて設問することにした。その一つとして、目上の人から話を聞く場合の言い方を項目に選んだ。目上の人から話を「聞く」ことを、謙譲表現では特別な動詞を用いて「うかがう」と言うのが一般的である。しかし、現在の東京で、果して「うかがう」は、どの程度用いられているであろうか。そこで、「尊敬している目上の人に対して『(あなたの)奥さまからお話を聞いた』という場合、あなたなら何と言いますか」という質問を設けてみた。

その結果は次のとおりである。

オウカガイイタシマシタ（オウカガイシマシタ）類	11.1 %
ウカガイマシタ類	28.2 %
オ聞キイタシマシタ（オ聞キシマシタ）類	32.4 %
聞キマシタ類	20.8 %
その他	7.5 %

すなわち、「ウカガイマシタ」類はかなりの人に使用されているが、男性より（2割強）女性に多く（3割強）、年齢が高くなるほど、また高学歴ほど、使用者が多くなる傾向が認められた。

「オウカガイイタシマシタ」類はさらに謙譲の度を強めたものであり、同様に女性や高年層や家業従事者・主婦等にやや多く使用されている。南東北・北関東出身者や学生に少ないのが注目される。以上の両者をまとめれば、「ウカガウ」という語形を含む形式は約4割弱に使用されていることになる。

一方、「オ聞キイタシマシタ」類は全体で3割強であるが、これは年齢の若い者ほど、また高学歴よりも中・低の学歴層に比較的多い。すなわち、「お……いたす」「お……する」形式は多くの動詞に共通する形式であり、その便利さの故に若年層や低学歴・中学歴層の人々を中心に、しだいに拡がりつつあるものと考えられる。

次に「聞キマシタ」類を見ると全体では20%弱であるが、男性（3割弱、女性1割強）、若年層（4割～3割）、低学歴（2割5分）、学生（4割弱）に多いことが注目される。南関東や中部出身者には少なく（1割以下）、南東北・

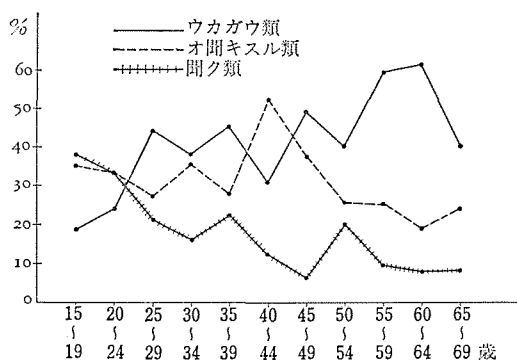


図6-① 「聞ク」の謙讓表現(年齢別)

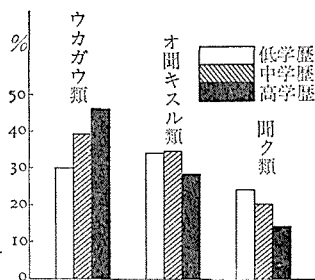


図6-② 「聞ク」の謙讓表現(学歴別)

北関東出身者にやや多い（3割強）と言えるが、東京出身者の2割弱がこの言い方を使用しているということは、まさに東京の内部で起きている現象であることを物語る。これが正常な現象であるのかどうかは今後10年、20年後の調査によって明らかになることであろう。

(ii) 知る——存じる

目上の人から「知っているか」と尋ねられて、「知らない」と答えるときには「存じません」などと言うのが、共通語の謙讓表現の一般的な形式であろう。しかし、各地方言にはこのような謙讓動詞を持たない地域があり、また東京でも、このように特別な語を使用する場面は必ずしも頻発するわけではないから習得には教育と経験とを要するものである。現実にはどの程度使用されているのだろうか。それを明らかにするために、目上の人からある人の住所を尋ねられて、「知らない」と答えるときの言い方を尋ねる質問を設けた。その結果はほぼ次のように述べることができよう。

存ジマセン類	39.3%	知りマセン類	29.7%
ワカリマセン類	26.4%	知ラナイ・ワカラナイ類	1.3%
その他	3.3%		

「存ジマセン」類が比較的多数であるが、過半数にも達しない。「知りマセン」類・「ワカリマセン」類の合計が過半数を超える。すなわち、単に謙讓の動詞が使用されていないばかりでなく、謙讓表現形式そのものが使用されていないと言える。

「知りマセン」類と「ワカリマセン」類とを比較すると、ともに男性に多く（35%、30%）女性に少ないこと（26%、23%）と、南東北・北関東出身者に多いこと（39%、37%）が共通しているが、前者は若年層（15～24歳 40%以上）、学生（46%）、北陸出身者（39%）に多いのに対して、後者は低学歴層に多く（41%）、経営者に多い（41%）ことが違っている。すなわち前者は若い人に多い点が特徴的である。

「存ジマセン」類とこの「知りマセン」「ワカリマセン」類を比較すると、

<u>存ジマセン類</u>	<u>知りマセン・ワカリマセン類</u>
女性に多い	男性に多い
高年層に多い	若年層に多い（特に「知りマセン」）
高学歴層に多い	低学歴層に多い
東京、南関東、中部出身者に多い	南関東、中部出身者に少ない
南東北・北関東出身者に少ない	南東北・北関東出身者に多い

前述の「聞く」の謙譲表現に比較すると、「聞く」の場合には謙譲表現形式そのものは7割以上の人に使用されているのに、この「知らない」の場合には謙譲表現そのものが全体の4割に過ぎないことが注目される。さらに高年層では、たとえば55～59歳では約6割の人が「存ジマセン」を使用しているのに、若年層での使用はたとえば15～24歳では3割に満たない。逆に、「知りマセン」「ワカリマセン」類は、15～24歳では7割弱の者が使用しているのに、55～59歳では3割強が使用しているに過ぎない。

これは「存ジマセン」という謙譲動詞の使用が若年層で低いことを意味するだけではない。「聞く」の場合にも、謙譲の動詞「ウカガウ」の使用は若年層では低い。しかし、「聞く」の場合には、それに代わって「オ聞キスル」類があって、その補いの役目がある程度果たしていた。しかし「存ジマセン」の場合には、そのような補いの役目をする他の形式はない。

「存ジマセン」の高年層より若年層への使用の低下の曲線が、「ウカガウ」よりやや鈍化しているのもこのせいであろう。

若年層ほど、また低学歴層ほど「存ジマセン」の使用が低下するということが何を意味するか、将来これがどのように変化するか、謙譲表現の衰退・崩壊に

つながるものかどうか、注目すべきことであろう。

(iii) 承知する——かしこまる

尊敬している目上の人から、仕事を頼まれ「承知した」という場合に、あなたなら何と言いますか。これが質問である。その結果は次のようにまとめることができる（各類の代表形のみを示す。以下同じ）。

カシコマリマシタ	14.7 %	承知イタシマシタ	14.2 %
承知シマシタ	12.1 %	ワカリマシタ	35.2 %
オ引受ケシマス	5.0 %	その他	18.8 %

これによれば「カシコマリマシタ」は全体の約1割5分の人に使用されているだけである。女性にやや多く（19 %）、家業従事者に比較的多く（32 %）、東京出身者（18 %）や中部出身者（22 %）にやや多いのが注目されるだけである。反対に若年層の15～19歳では5 %、学生は7 %に過ぎず、北陸出身者（6 %）や北海道・北東北、九州・沖縄出身者ではやや低い（ともに9 %）。この言い方が社会に出てから習得される形式であるからであろう。

「承知イタシマシタ」「承知シマシタ」を比較すれば、前者は女性に多く（男9.8 %、女18.1 %）、後者は男性に多い（男16.2 %、女8.5 %）。すなわち、比較的に女性が謙譲度の高い形式を用いると言えよう。また「承知イタシマシタ」は比較的に高年層に多く（55～59歳では28 %）、若年層に少ない（15～19歳では11 %）ことや、学生に少なく（10 %）、家業従事者（16 %）、主婦（21 %）に多いことも注目される。

「承知シマシタ」「ワカリマシタ」は特別に謙譲の形式を持っているわけではない。ともに男性に多く用いられる傾向がある。また「承知シマシタ」は家業従事者・主婦（ともに8 %）や若年層（15～19歳は6 %）や学生（10 %）に低いのに対して、「ワカリマシタ」は若年層ほど多い傾向があり（15～19歳は56 %、55～59歳は13 %）、学生（51 %）や給与生活者（44 %）に多いという点が目立つ。

ともあれ、両者を合した数は47.3 %あり、「その他」には「ハイ」18例、「イデス」9例、「ヤリマショー・ケッコードス・ヤッテヤルヨ・ワカッタ・ヨロシイデスヨ・ヒキウケマシタ・OK」等18例があり、これらを合すると謙譲の

形式を含まないものは347例、54.3%に達する。とりわけ、若年層（15～24歳）や学生はその6割以上が謙譲の表現を使用していないというのが現状であると言える。

(iv) 見せる——ご覧にilerin・お目にかける

目上の人に対して何かを「見せる」ということを何と表現するかは、現代人にとってかなり困難さを伴うようである。かつては「ご覧にilerin」「お目にかける」等が一般的に用いられていたが、現在これらの表現を耳にすることは少ない。一体、東京ではどのような言い方が行なわれているのであろうか。これが質問の趣旨である。珍しい絵等を手に入れたので、尊敬している目上の人に「珍しい絵を見せましょう」という場合に何と言うかを尋ねた。その結果は次のとおり。

ご覧ニイレマシヨ—	5.2%	オ目ニカケマシヨ—	4.2%
オ見セイタシマシヨ—（オ見セシマシヨ—）			28.6%
見セマシヨ—	4.7%	ご覧クダサイ	18.9%
見テクダサイ	25.2%	その他	13.2%

以上のように、「ご覧ニイレマシヨ—・オ目ニカケマシヨ—」は1割にも達しない。もちろん、年齢による差は見られる。「オ目ニカケマシヨ—」は若年層で低いが（15～19歳2%, 20～24歳皆無）、年齢が高くなるにつれて増加し高年層では高い（60～69歳12%）という傾向は見られるが、それでも「ご覧ニイレマシヨ—」「オ目ニカケマシヨ—」を合しても2割程度である。「ご覧ニイレマシヨ—」は年齢の差よりは学歴の差がある程度見られるが、これも全体から見ればそれほどきわ立っているとは言い難い。

「オ見セイタシマシヨ—・オ見セシマシヨ—」は全体としては29%弱であるが、年齢の若いほど多くなる傾向のあることが注目される（60～69歳16%以下、20～24歳32%, 15～19歳38%）。

また、「ご覧クダサイ」「見テクダサイ」のように依頼の表現に言い換えることも多く、これは性・年齢・学歴・職業・出身地によって多少の差はあるが概ね40%台である。ただし15～19歳は30%で低い。

要するに「ご覧ニイレマシヨ—」「オ目ニカケマシヨ—」は今やきわめて少数

の教養層の言葉になってしまっている。

代わって「オ見セシマショー（オ見セイタシマショー）」がしだいに用いられるようになってきている。謙譲表現の一般的形式「お……する」「お……いたす」であることが強味なのであろう。一方、「ゴ覧クダサイ」「見テクダサイ」のように依頼の表現に言い換えることもかなり多くの人に行なわれている。

(v) いたす——させていただく

前述したように共通語の「する」の謙譲表現形式は「いたす」であり、一般的な動詞の場合には、現在では「お……いたす」「お……する」であると言ってもいいであろう。ところが戦後関西方言から入ってきた謙譲表現形式「させていただく」「……せていただく」は昭和30年ごろから目立ちはじめ、昭和35年ごろには一般的になったようである。戦前まで店頭にさがっていた「勝手ながら明日は休業仕候」は戦後「勝手ながら明日はお休みいたします」になり、昭和35年ごろには「明日は休ませていただきます」になってしまった。一体、現在の東京では謙譲表現としてどのような形式がどのように用いられているのだろうか。これが質問の趣旨である。

具体的には、町内会や同窓会の世話役を引き受けた人が「僭越ですが、私がこの会の世話をする」と挨拶するときの言い方を尋ねた。

その結果は次のとおりである。

(お世話を)	サセテイタダキマス	48.0%
(〃)	サシテイタダキマス	5.0%
(〃)	イタシマス	11.4%
(〃)	シマス	18.9%
(〃)	サセテモライマス	1.6%
(〃)	サシテモライマス	0.3%
(〃)	ヤラセテイタダキマス	2.2%
その他		12.5%

以上のように「サセテイタダキマス」「サシテイタダキマス」を合すると過半数を超える。今や東京での謙譲表現の一般形式は「サセテイタダキマス」「……セテイタダキマス」になりつつあると言っても言い過ぎではない。さすがに関

西の場合のように「サシテイタダキマス」の言い方がそれほど多くはなく、5%に過ぎないが、いずれにしても、「サセテイタダキマス」も関西風の言い方であることに変わりはない。性・年齢・学歴・職業・出身地等の違いに応じて、使用率に何ほどかの差を認められなくはないが、大まかには、おしなべて「サセテイタダキマス」の形式が盛んになってきていると言える。

それに反して「イタシマス」は全体で11%であり、もはや謙譲表現の代表形式とは言い難い。また「(世話を)シマス」は謙譲表現の形式とするわけにはいかない。謙譲の意は表示されていないと見るべきものである。それが9%に達していることは注目されねばならない。何故ならこれはある謙譲表現形式が他の謙譲表現形式と交代したというのではなくて、謙譲表現形式の衰退・消失を意味するものであるからである。

ところで「サセテイタダキマス」「サシテイタダキマス」を合して考察を進めれば、年齢において、若年層(15~24歳)が3割前後の使用で少なく、また高年層(60~64歳46%)でもやや少ない。職業では学生が少なく(28%)、出身地では北海道、東北、北関東が4割台で少ない。他は概ね5割・6割の使用である。

さればといって、「サセテイタダキマス」「サシテイタダキマス」の少ない人が「イタシマス」を多く使用しているわけでもない。若年層や学生や南東北・北関東出身者は代わりに「シマス」が多いのである。いずれもその3割・4割が「シマス」を用いていて、全体平均の2割弱より多くなっている。

高年層で「その他」が多いのが目立つ。「その他」には次のような言い方がある。

世話役ヲ仰セツカリマシタ、オ世話ヲオ引受ケイタスコトニナリマシタ、
オ世話申シアゲマス、世話役ニナリマシタ

すなわち、こういう場合の表現には、かつては、さまざまな工夫があったと思われる。いずれにしても「イタシマス」は1割前後の使用で、性・年齢・学歴・職業・出身地によりきわだった違いは見られない。65~69歳で「イタシマス」の使用が皆無であるが、これは「その他」が多いせいであろう。55~59歳では3%でやや少ないが、その分「サセテイタダキマス」類が75%と多くなっ

ている。

要するに「イタシマス」はもはや東京では謙譲表現の代表としての地位を退きつつあり、代わって「サセテイタダキマス」が登場してきていると言えそうである。

(5) 動詞連接と敬語

二つ以上の動詞が重なっているときの敬語表現がどのような形をとるべきであるかは一つの問題である。たとえば、

立って見る、座って聞いている、うつむいて泣く、掃いて捨てる、読んでいる

等のときには、共通語では、最後の動詞を敬語表現にすればよいと言われている。

立って見る → 立ってご覧になる

座って聞いている → 座って聞いていらっしゃる

ところが、近年は「読んでいる」「言っている」等の「……ている」の場合に「お読みになっている」「おっしゃっている」のように前の動詞を敬語表現にすることが目立つようになってきた。

一体、東京語では現在、このような場合、どのような表現形式が多いのだろうか。これが質問の趣旨である。そこで、その例として次の項目を調べることにした。すなわち、尊敬する目上の人に「何を読んでいるか」と尋ねる場合に何と言うかを質問した。

まず、前の動詞について見ると次のようになっている。

オ読ミニナル	32.6 %	オ読ミナサル	0.3 %	読マレル	1.3 %
ゴ覧ニナル	5.8 %	読ム	36.5 %	オ読ミ	17.8 %
本の名前を聞く	2.0 %	その他	3.8 %		

すなわち、前の動詞を敬語表現としたものは40%に達する。注目すべきは年齢による差はあまり現われず、低学歴に少ない(26%)。

敬語形式にしなかったものは約37%であるが、若年層に多く(15~19歳57%, 20~24歳49%), 学生に多い(54%)。

これを見ると、若年層や学生が伝統的な敬語表現の形式を守っているかのよ

うである。これは一体どういうことなのであろうか。次に後の動詞について見ると次のようになる。

イラッシャイマスカ 35.5% オラレマスカ 3.8% イマスカ 37.7%
 デスカ 15.8% 本の名前を聞く 2.0% その他 5.1%

すなわち、後の動詞を敬語形式にしたものは39%であり、しなかったのは38%である。前者は男性より(25%)女性に多く(51%),主婦に多く(53%),無職に多く(57%),低学歴(31%)と南東北・北関東出身者に少ない(25%)のが目立つ。

また後者すなわち敬語形式を用いないものは若年層(15~24歳54%)や低学歴(45%),学生(49%),南東北・北関東出身者(52%)に多く,主婦(26%)に少ない。後の動詞は本来敬語形式にすべきものとされているものである。したがってこのような現われ方はよく理解されるであろう。

次に前の動詞と後の動詞の接続の様子を見ることにする。

オ読ミニナッテ	イラッシャイマスカ	16.0%
	オラレマスカ	0.8%
	イマスカ	15.8%
読マレテ	イラッシャイマスカ	0.3%
	イマスカ	0.9%
ゴ覧ニナッテ	イラッシャイマスカ	2.2%
	オラレマスカ	0.2%
	イマスカ	3.4%
オ読ミナサッテ	イラッシャイマスカ	0.3%
オ読ミ	デイラッシャイマスカ	1.7%
	デスカ	15.3%
読ンデ	イラッシャイマスカ	14.6%
	オラレマスカ	2.8%
	イマスカ	17.2%
本の名前を聞く		2.0%
その他		6.5%

すなわち、前後の動詞が敬体であるかどうかによって整理すると次のようになる。

a	敬体＋敬体	19.8 %
b	敬体＋無敬体	20.1 %
c	無敬体＋敬体	17.4 %
d	無敬体＋無敬体	17.2 %
オ読ミ	{ デイラッシャイマスカ	1.7 %
	{ デスカ	15.3 %
	本の名前を聞く	2.0 %
	その他	6.5 %

すなわち、本来一般的な言い方とされていた「読ンデイラッシャル」等の無敬体＋敬体の形式は 17.4 % に過ぎない。

前の動詞も後の動詞もともに敬語形式にする「オ読ミニナッテイラッシャル」類が 20 %、前の動詞を敬語形式にして後の動詞を無敬語にする「オ読ミニナッテイル」類が同じく 20 %、全然敬語形式にしないで「読ンデイル」類を使用するものも 17 % いるということになる。

a の類を使用する人は女性、主婦、東京、南関東出身者に多い。これらの人は概ね 3 割近くが使用している。

b の類を使用する人は女性 (18 %) より男性にやや多い (22 %) が、ある種の人々に特に多く使用されるわけではない。ただし、南東北・北関東、九州・沖縄出身者にやや多いと言えるかも知れない (それぞれ約 2 割 5 分)。

c の類は本来的な形式とされる。これも男性 (14 %) より女性にやや多く用いられる (20 %) とは言えそうであるが、他はあまりきわだった特色もなく、全体に用いられている。

d の類はむしろ敬語の使い方のできない人と言われるものである。全体として 17 % であるが、男性に多く (24 %)、年齢の若い人ほど増す傾向があり (50 歳以上は 1 割以下、15～24 歳では約 3 割)、低学歴や学生や南東北・北関東出身者に多い (2 割 5 分～3 割)。女性 (12 %) のうち主婦には特に少ない (8 %)。

また「何ヲオ読ミデスカ」と上手に問題を回避するのは55～59歳の人（34%）や経営者（25%）に多いのが注目された。

以上を要するに、かつて本来の形式とされた「読ンデイラッシャル」類はある程度用いられてはいるが、女性等は、より一層強めて「オ読ミニナッテイラッシャル」類を好み、また「オ読ミニナッテイル」類も男性等から使用されるようになっている。若い人や学生等は、しばしば敬語を用いないことも多いということになる。

(6) 身内敬語

共通語では、話し手は身内の者には敬語を用いないのが一般的であるとされる。すなわち、話し手にとって、より近い関係にある者には敬語を使用しないのである。だから、先生が訪ねて来た場合には学生は、上級生のことを話題にしても、その上級生に敬語をつけないのが一般的とされる。

果してどうであろうか。そこで、尊敬している先生があなたの上級生（先輩）を訪ねて来た場合に「ただいま外出中ですが、まもなく帰るからどうぞ待ってほしい」というとき、どう表現するかを尋ねた。注目点は「帰るから」と「待ってほしい」である。前者は敬語形式がなく、後者には敬語形式が用いられて「帰りますからお待ち（になって）下さい」類の表現を期待したのである。結果は次のとおり。すなわち前半の動詞については、

オ帰りニナル	22.5%	帰ラレマス	9.1%
帰ッテコラレル	0.6%	オ帰りデス	2.0%
帰ッテミエル	0.2%	帰リマス	50.1%
帰ル	8.1%	その他	7.4%

以上のように「帰リマス」「帰ル」等の言い方が58%を占めるが、敬語形式を用いる言い方も34%に達する。先輩にも敬語をつけるのはむしろ女性にやや多く（約4割）、年齢では50～64歳にやや多いと言えよう。

後半の動詞については次のとおり。

オ待ちニナッテクダサイ	12.8%	オ待ちクダサイ	43.8%
オ待ちイタダケマセンカ	13.9%	オ待ちネガイマス	3.0%
オ待ちニナッテイタダキタイ	4.9%	待ッテクダサイ	15.3%

その他 6.3%

大部分は敬語形式を用いている。敬意度の低い「待ッテクダサイ」という形式を比較的多く使用しているのは年齢では若年層（15～19 歳 32%，20～24 歳 22%）であり，職業では学生（28%）である。少ないのは高年層や主婦である。この両者の接続の状況を見ると，

オ帰りニナリマスカラ	オ待チニナッテクダサイ	4.4%
	オ待チクダサイ	11.4%
	オ待チイタダケマセンカ	2.5%
	オ待チネガイマス等	1.9%
	待ッテクダサイ	1.9%
帰ラレマスカラ	オ待チニナッテクダサイ	1.3%
	オ待チクダサイ	3.3%
	オ待チイタダケマセンカ	2.7%
	オ待チネガイマス等	0.5%
	待ッテクダサイ	0.8%
帰ッテコラレルノデ	オ待チクダサイ	0.2%
	オ待チイタダケマセンカ	0.2%
	待ッテクダサイ	0.2%
オ帰りデスカラ	オ待チニナッテクダサイ	0.2%
	オ待チクダサイ	1.4%
	オ待チネガイマス等	0.4%
帰ッテミエルカラ	オ待チクダサイ	0.2%
帰リマスカラ	オ待チニナッテクダサイ	6.1%
	オ待チクダサイ	22.1%
	オ待チイタダケマセンカ	7.5%
	オ待チクダサイ	1.3%
	オ待チニナッテイタダキタイ等	4.3%
	待ッテクダサイ	8.1%

帰ルカラ	オ待チニナツテクダサイ	0.5%
	オ待チクダサイ	2.8%
	オ待チイタダケマセンカ	0.2%
	オ待チネガイマス等	0.5%
	待ッテクダサイ	3.0%

これらのうち「オ帰りニナリマスカラオ待チクダサイ」は若年層（15～19歳 18%）、主婦（18%）、学生（14%）に多く、また南関東や北陸出身者に多い（それぞれ20%、18%）。

「帰りマスカラオ待チクダサイ」は最も多いが特に目立つ層もなく全般的に認められる表現である。しかし、それほど多数が使用しているわけではない。詳しくは、大阪との比較において述べることにする。

6.2.2. 大阪における敬語使用

(1) 依頼の表現

「来てほしい」の敬語表現を何と言うか、東京の場合と同様にまとめて結果を示すと次のようになる。

オコシクダサイ類	22.0%	オイデクダサイ類	12.0%
イラッシャツテクダサイ類	8.4%	来テクダサイ類	38.7%

東京に比較すると「オコシクダサイ」と「来テクダサイ」が多く、「イラッシャツテクダサイ」の少ないことが目立つ。

「オコシクダサイ」は女性（28%）や高学歴層に多く（33%）、若年層（15～19歳5%）や学生には少ない（8%）。

「イラッシャツテクダサイ」は全般に低いですが、女性にやや多く（13%）、男性に少ない（4%）。高学歴層（14%）、主婦（16%）、学生（15%）もやや多い。

「来テクダサイ」は多い。特に若年層（15～19歳）では7割がそうである。低学歴層（45%）や学生（55%）も多い。女性より男性に多い（43%）。東京に通じる面があるが、東京の2割強に対して4割近くの人が「来テクダサイ」を使用していることが注目される。

(2) 尊敬表現 聞く——お耳になさる

「聞く」の尊敬表現を何と言うかについて大阪の調査結果を示すと次のようになる。

オ耳ニナサル類 2.2% オ聞キニナル（オ聞キニナラレル）類 36.0%
 聞カレル類 21.7% 聞ク類 27.3%
 オ聞キスル類 1.9% その他 10.8%

これを東京の場合と比較すると全般的には類似した結果であると言える。

「オ聞キニナル」類がやや減って、「聞カレル」類がかなり用いられているところに違いがある。

「オ聞キニナル」類が女性（46%）や高学歴層に多く（53%）、若年層（15～19歳23%）や学生（28%）に少ないことも似ている。

「聞カレル」類が各層におしなべて2割前後用いられていることは東京の4%と比べて違いがある。ただし、高学歴層では少ない（12%）。

「聞ク」類がかなり用いられていることも東京の場合と同様で、若年層（15～19歳45%）や学生（41%）に多いことも同様である。東京における問題は大阪でも同様に考慮しなければならないであろう。

「オ聞キスル」類を用いることはさすがに東京より少ない。

(3) 尊敬表現と謙譲表現の区別意識

目上の人に対して「何時の急行にお乗りいたしますか」と尋ねたら、おかしく感じるかどうかについての調査の結果は次のとおり。

おかしい 66.0% おかしくない 32.3% その他 1.7%

この結果も東京の場合と非常によく似ている。「おかしくない」がほんの少し減り、「おかしい」がその分だけ増すが大きな差ではない。「おかしくない」が全体として3割を超える。男性と女性との間に差があることも同様である。しかし、東京ほどには男性と女性との差は目立たない。

次に「あなたなら何と言うか」を尋ねた。結果は次のとおり。

オ乗りニナル（オ乗りニナラレル）類 45.7% 乗ラレル類 25.3%
 乗ル類 9.2% オ乗りイタス類 3.6% その他 16.2%

この結果も東京の結果に準ずる。東京に比較して「オ乗りニナル」類が減り

「乗ラレル」類が増している。「乗ル」類も東京と同様であるが、わずかながら少ない。「オ乗リイタス」も少しばかり少ない。「乗ラレル」類が多いことは、東部地域では一般に「れる・られる」敬語を話し言葉で使用することが少ないのに対して、西部地域では日常普通に使用しているせいであろう。

「乗ル」類が男性に多く（16%）女性にきわめて少ない（1%）というのは、東京より差がはなはだしい。若年層（15～19歳 15%）や学生（13%）に多いのは東京と同様である。また近畿出身者に少なく（3%）、周辺の中国出身者（14%）、四国出身者（17%）に多いことも、同様であると言えなくもない。

(4) 謙譲表現

(i) 聞く——うかがう

目上の人から話を聞いた、と言うときに「聞いた」の部分をどう表現するかという質問である。結果は次のとおり。

オウカガイイタシマシタ（オウカガイシマシタ）類 9.5%

オ聞キイタシマシタ（オ聞キシマシタ）類 39.2%

ウカガイマシタ類 13.6% 聞キマシタ類 30.6% その他 6.9%

東京に比較すると「ウカガイマシタ」という謙譲の動詞を使用するのは少なく、東京の半数に達しない。また「オ聞キイタシマシタ」類の動詞の一般形式による使用はやや多い。そして敬語形式のない「聞キマシタ」類の用法がかなり盛んである（東京は20%弱）。

「ウカガイマシタ」類が高学歴層に多い（25%）ことは、この語は今や教養ある人によって使用されるようになってきていることを示すものかも知れない。

「聞キマシタ」が多いが、若年層（15～19歳 55%、20～24歳 39%）や、学生（46%）、また低学歴層には多くて（35%）、高学歴層には少ない（14%）。大阪で「聞キマシタ」がこんなに多いということは、謙譲表現形式の違いが影響しているのかも知れない。すなわち、これは共通語による質問項目である故に、容易には大阪方言が出にくかったのかも知れない。いわゆる「聞カセテイタダキマシタ」はほとんど現われていないのである。

(ii) 知る——存じる

目上の人から尋ねられて「知らない」と答えるときの言い方を尋ねた質問の

結果は次のとおり。

存ジマセン類	26.5 %	知リマセン類	48.2 %
ワカリマセン類	20.3 %	知ラナイ・ワカラナイ類	3.6 %
その他	1.4 %		

東京と比較すると「存ジマセン」類の少ないこと、「知リマセン」類の多いこと、「ワカリマセン」類のやや少ないことが注目される。

「存ジマセン」という謙譲動詞を用いることは少ない。いかなる層でも「知リマセン」類の多いことが特徴である。「知リマセン」「ワカリマセン」類を合して男性に多く、また若年層や学生に多いことは東京と同様である。

(iii) 承知する——かしこまる

目上の人から仕事を頼まれて「承知した」と答える場合の言い方は次のようになる（各類の代表形のみを示す。以下同じ）。

カシコマリマシタ	8.9 %	承知イタシマシタ	13.6 %
承知シマシタ	12.0 %	ワカリマシタ	40.7 %
オ引受けシマス	2.2 %	その他	22.6 %

これによれば「カシコマリマシタ」が東京よりやや少ない点と、「ワカリマシタ」がやや多い点を除いては全体の状態はきわめて似ていると言える。

「カシコマリマシタ」が女性に多く（13 %）、主婦に多く（13 %）、高学歴層に多い（14 %）が、若年層に少なく（15～19 歳 3 %）、学生に少ないこと（3 %）等、東京に似ている点も違いのある点もあるが、いずれにしても社会に出てから習得された形式であろうと思われる。

「承知イタシマシタ」「承知シマシタ」のいずれも男性が多く用いている点は東京と異なる。

「ワカリマシタ」は全体としても多いが年齢の若いほど多く現われ、給与生活者や学生に多いのは東京に似ている。しかし、大阪では高学歴層ほどこの言い方が多いのは何を意味するのであろうか。

(iv) 見せる——ご覧にいれる・お目にかける

目上の人に対して、何かを「見せる」というときの表現形式を尋ねたものである。その結果は次のとおり。

ゴ覧ニイレマショー	1.7%	オ目ニカケマショー	4.7%
オ見セイタシマショー (オ見セシマショー)			20.3%
見セマショー	8.1%	ゴ覧クダサイ	10.6%
見テクダサイ	41.5%	その他	13.1%

大阪では東京より、さらに「ゴ覧ニイレル」形式は少ない。「オ見セイタス」類も少ない。「見テクダサイ」類が多い。すなわち、依頼表現に言い換えるわけである。「ゴ覧ニイレル」「オ目ニカケル」は高学歴の人や壮年の人たちにわずかに使用されていると言っていいであろう。

(v) いたす——させていただく

「お世話をする」という場合の謙譲表現形式を尋ねたものである。その結果は次のとおり。

(お世話を) サセテイタダキマス	36.2%
(") サシテイタダキマス	22.8%
(") イタシマス	8.9%
(") シマス	13.6%
(") サセテモライマス	2.2%
(") サシテモライマス	6.4%
(") ヤラセテイタダキマス	0.8%
(") ヤラセテモライマス	1.4%
(") その他	7.5%

東京の場合と比較すると「サシテイタダキマス」の多いことが特徴であろう。また「サセテ……」「サシテ……」を合すると59%に達するのも大阪方言の特徴であろう。

「イタシマス」が東京よりわずかながら減じるのもうなずけるところである。「イタシマス」が若年層や学生に多く(2割～2割5分)、高学歴層に多いのは共通語として習得されるものであるからであろう。

(5) 動詞連接と敬語

目上の人に「何を読んでいるか」と尋ねる場合の表現形式を取り上げた。尊敬表現における「読んでいる」の連接の形である。前半の動詞は次のとおり。

オ読ミニナル	17.8%	読マレル	3.3%	ゴ覧ニナル	3.6%
読ム	55.7%	オ読ミ	14.2%	本の名前を聞く	0.3%
その他	5.0%				

東京に比較すると「オ読ミニナル」が減り「読ム」の増えるのが特徴である。次に後の動詞について見ると次のようになる。

イラッシャイマスカ	14.5%	オラレマスカ	21.4%
イマスカ	32.6%	デスカ	16.2%
ハリマスカ	10.0%	本の名前を聞く	0.3%
		その他	5.0%

東京と比較すると「イラッシャイマスカ」がかなり減って「オラレマスカ」が増し、また新たに「……ハリマスカ」の形が現われたことが特徴である。前後の動詞連接の様子は次のようになる。

オ読ミニナッテ	{	イラッシャイマスカ	5.0%
		オラレマスカ	4.5%
		イマスカ	8.1%
読マレテ	{	イラッシャイマスカ	0.3%
		オラレマスカ	0.3%
		イマスカ	2.5%
		デスカ	0.3%
ゴ覧ニナッテ	{	イラッシャイマスカ	0.6%
		オラレマスカ	1.1%
		イマスカ	1.4%
		デスカ	0.6%
オ読ミ	{	デイラッシャイマスカ	0.6%
		デスカ	13.4%
読ンデ	{	イラッシャイマスカ	7.8%
		オラレマスカ	15.6%
		ハリマスカ	9.7%
		イマスカ	20.3%
		デスカ	0.8%

本の名前を聞く	0.3%
その他	5.0%

これは次のようにまとめることができます。

a 敬体+敬体	11.8%
b 敬体+無敬体	12.9%
c 無敬体+敬体	33.1%
d 無敬体+無敬体	21.1%

すなわち、本来の形とされているcの類が比較的多数を占めており、東京よりかなり多いのが特徴であるが（女性に多い）、aやbの類もある程度見られ、aの類は女性や高学歴層の人に多く使用される傾向がある。bの類は学生や主婦に比較的多い。また敬語を使用しないdの類もやや多い。dの類は男性に多く、若年層や学生に多い。

(6) 身内敬語

共通語では、話し手が他人に話す場合、親・兄弟・祖父母・親類等について敬語を用いないのが一般である。また同様に、社長に話す場合には、自分の上司の課長や部長には敬語をつけないのがよいとされている。しかし、このようなきまりは必ずしも全国一般に行なわれているわけではない。大阪の実態はどのようなであろうか。

自分たちの尊敬している先生が、上級生（先輩）を訪ねて来た場合の下級生（話し手）の言い方、すなわち「まもなく帰るから、どうぞ待ってほしい」について調査した。前部の動詞の反応形は次のとおり。

オ帰りニナル	17.5%	帰ラレマス	15.0%
帰ッテコラレル	6.4%	オ帰りデス	2.5%
帰ッテミエル	0.3%	帰リマス	43.2%
帰ル	7.5%	その他	7.5%

敬体を用いている者は42%に達する。敬体を用いていない者は50.4%である。すなわち、先輩に敬語形式を用いることが東京よりやや多い。

次に後部の動詞について見ると次のとおり。

オ待チニナッテクダサイ	10.9%	オ待チクダサイ	37.9%
オ待チイタダケマセンカ	10.3%	オ待チネガイマス	2.5%
オ待チニナッテイタダキタイ	0.3%	待ッテクダサイ	26.2%
待ッテクレハリマスカ	5.8%	その他	6.1%

より敬意度の高いと思われる「オ待チニナッテクダサイ」以下5項を合すると61.9%である。敬意度の低いと思われる「待ッテクダサイ」「待ッテクレハリマスカ」を合すると32%と東京の約2倍であり、若年層や学生に多い。

次に前部の動詞と後部の動詞との組合せを見ることにする。大阪では、この組合せの数が多いので、その数が全体の1%を超えるものを以下に示す。

		(%) (順位)
オ帰リニナリマス (カラ)	オ待チニナッテクダサイ	2.3 ⑪
	オ待チクダサイ	10.3 ③
	オ待チイタダケマセンカ	1.9 ⑭
	待ッテクダサイ	1.1 ⑰
帰ラレマス(カラ)	オ待チニナッテクダサイ	2.2 ⑫
	オ待チクダサイ	5.6 ④
	オ待チイタダケマセンカ	2.2 ⑫
	待ッテクダサイ	3.9 ⑥
帰ッテコラレル(ノデ)	オ待チクダサイ	2.5 ⑩
	待ッテクダサイ	1.7 ⑮
	待ッテクレハリマスカ	1.1 ⑰
帰リマス(カラ)	オ待チニナッテクダサイ	4.2 ⑤
	オ待チクダサイ	15.3 ①
	オ待チイタダケマセンカ	3.9 ⑥
	オ待チネガイマス	1.1 ⑰
	待ッテクダサイ	14.2 ②
	待ッテクレハリマスカ	3.1 ⑨
帰ル(ノデ)	オ待チクダサイ	1.4 ⑮
	待ッテクダサイ	3.9 ⑥

最も数の多い順位①の「帰リマス——オ待チクダサイ」は高学歴層に多く(25%), また給与生活者(21%)や近畿出身者(21%)に多い。順位②の「帰リマス——待ッテクダサイ」は若年層(30%)や学生(26%)に多い。順位③の「オ帰リニナリマス——オ待チクダサイ」は女性に比較的多く(13%), 主婦(14%)や無職(19%), また近畿出身者に多い(17%)。順位④の「帰ラレマス——オ待チクダサイ」は特に目立った事項はない。順位⑤の「帰リマス——オ待チニナッテクダサイ」は高学歴層に多い(8%)。

6.2.3 まとめ

(1) 身内敬語

以上、東京・大阪における敬語使用の実態について概略を述べた。が、十分に記述できなかったことも多い。特に、身内敬語と称される敬語事項は、現代社会において、かなり重要な問題になっているので、ここに改めて、やや詳しく記述することにする。

敬意度の高い形式と低い形式と、敬意の認められない形式とに三分してその組合せを見ることにする。敬意度が高いと見なしたものは次の諸形式である。

オ帰リニナリマス、オ待チニナッテクダサイ、オ待チクダサイ、オ待チイ
タダケマセンカ、オ待チネガイマス等

敬意度の低い形式と見なしたのは次の諸形式である。

帰ラレマス、帰ッテコラレル、オ帰リデス、帰ッテミエル、待ッテクダサ
イ、待ッテクレハリマスカ

敬意の認められない形式としたのは次の諸形式である。

帰リマス、帰ル

東京におけるこれらの種類の形式の使われ方は次のようになる。

(先輩について)

		高い敬語		低い敬語		無敬語	
(先生について)	高い敬語	a	20.2%	c	10.4%	e	45.3%
	低い敬語	b	1.9%	d	1.0%	f	11.0%

すなわち、先輩については敬語を用いず、先生には高い敬語をつける伝統的な言い方e類は約半数近くの人に行なわれている。またそれは、社会的条件によって甚だしく偏りを示すこともない。先輩にも先生にも同様に高い敬語を用いるa類は女性に多い(27%, 男性は13%)。特に主婦は35%に達する。

先輩には低い敬語を用い、先生には高い敬語を用いるc類は、全体で約1割程度である。先輩にも敬語を用いないが、先生にも低い敬語を用いるぞんざいな物言いf類は、若い人や学生や低学歴層の人に多い。

次に大阪の場合は下ようになる。

(先輩について)

	高い敬語	低い敬語	無敬語
(先生について) 高い敬語	a 14.5%	c 12.5%	e 25.9%
低い敬語	b 1.1%	d 6.7%	f 21.2%

本来的なe類は最も多いが、その使用率は東京の場合よりかなり低く、高学歴層や給与生活者に多い。いわば教養ある人達の言い方である。a類は東京よりやや少ないが、女性特に主婦に多い(25%)。c類は東京よりやや多い程度で特に目立つほどではない。f類が東京より多く、2割を超えていることはd類がある程度見られたこととともに東京とは差のあるところである。それらは若年層や学生に多い。

このような敬語使用の実態は何を意味しているのであろうか。共通語の本来の言い方とされてきたe類は東京でも半数に達しないし、大阪では4分の1に過ぎない。一方どちらにも高い敬語を用いる言い方も女性(主婦)を中心に行なわれているし、他方ではどちらにもあまり敬語を用いない言い方も若年層、学生層等かなり用いられている。これが普通の状態なのであろうか。それとも敬語の衰退・崩壊へと連なるものであろうか。今後の調査によらねばならないであろう。

(2) 総合的に

(i) 一般的に言えば、敬語使用においては男性と女性との間に差が見られる。すなわち、男性より女性の敬語使用が多く、かつ敬意度の高い形式を用いる傾向が見られる。

(ii) 若年層や学生層は敬語使用が少なく、ぞんざいな言い方をするものが多い。

(iii) 敬語動詞を用いるような特別な敬語形式は使用されなくなってきており、

オ耳ニナサル→オ聞キニナル ウカガウ→オ聞キイタス

ゴ覧ニイレル・オ目ニカケル→オ見セイタス・見テクダサイ

のように一般形式を用いる傾向が見られるばかりでなく、

存ジマセン→知リマセン・ワカリマセン

カシコマリマシタ→ワカリマシタ

のように、もはや敬語形式を用いない言い方も多くなっている。

「オコシクダサイ」は東京ではもはや一般的ではなくて「イラッシャテクダサイ」が多いが、大阪では「イラッシャル」は敬遠されるらしく、「来テクダサイ」が多い。動詞「いたす」の使用は衰退して、かわりに「させていただく」（大阪では「さしていただく」も）の形式が多くなってきている。

(iv) また、東京では話し言葉に「れる・られる敬語」はあまり使用されないが、大阪ではかなり用いられる。

(v) 尊敬表現と謙譲表現の区別意識はかなりあやしくなっている。尊敬表現（「オ乗リニナリマスカ」）をすべき場合に謙譲表現（「オ乗リイタシマスカ」）を用いてもかまわないと答えた人は東京でも4割に達している。

(vi) 動詞が接続する場合には後の動詞を敬体にするのがよいと従來說かれてきたが、これも現実にはあまり行なわれていない（これは東京よりは大阪の方が、より多く伝統的な形式を用いている）。前後の動詞をともに敬体にする形式も（特に女性に多い）、前の動詞だけを敬体にする形式も（男性に多い）、どちらも敬体にしないぞんざいな言い方も（若年層・学生）、かなり用いられている。

(vii) 他人に話すとき、話し手の身内の者には敬語を用いず、また、より高い目上の人（例えば社長）に話すときは、より低い目上の人（例えば部長）には敬語を用いないという敬語使用のきまりも、現実にはあまり行なわれてはいない。

(viii) 東京・大阪におけるこのような現実態が何を意味するかは、今後の調査によらねばならないであろうが、ただ、次のことは言えるであろう。すなわち、戦後の民主化のかなり激しい社会生活の変動の中で、敬語使用もまたかなり変動しつつあるようであると。

6.3. あいさつ行動

言語生活調査の一つとして、簡単なことばによる日常のあいさつの習慣について調べた。本節ではその結果を以下のようにまとめて報告することとしたい。

あなたは、次の場合に例えば「おはよう」「いただきます」のような、きまったことばで、あいさつをしますか。

とたずね、「朝起きたとき」以下の15項目に「する」という反応を求めた。この15項目は次のような構成になっている。

- A {
 - 1. 朝起きたとき
 - 2. 夜寝るとき
- B {
 - 1. 食事のはじめ
 - 2. 食事のおわり
- C {
 - 1. 家を出るとき
 - 2. 家に帰ったとき
 - 3. 家人のだれかが帰ったとき
- D {
 - 1. 人を送り出すとき
 - 2. 人と別れるとき
 - 3. 人を迎えるとき
- E {
 - 1. 朝のうち人に会ったとき
 - 2. 昼間人に会ったとき
 - 3. 晩人に会ったとき
- F {
 - 1. おめでたのあった人に会ったとき
 - 2. 不幸のあった人に会ったとき

結果を、「する」と答えた人の、比率（パーセント）により、東京で多かった

表6-5 どんな場合にあいさつをするか〔%〕

場 合	東京	大阪	場 合	東京	大阪
E 1. 朝 会 い	83.3	78.0	F 1. おめでた	63.4	61.3
D 2. 別 れ	74.8	69.9	C 3. 人が帰来	62.4	59.6
E 2. 社 会 い	73.1	66.3	B 1. 食事始め	55.7	45.1
E 3. 晩 会 い	72.0	68.5	F 2. 不幸の人	54.6	53.8
D 1. 送り出し	69.3	55.7	A 1. 朝 起 き	52.1	45.4
C 1. 家を出る	67.1	58.5	B 2. 食事終り	52.1	45.1
D 3. 人を迎え	66.8	60.2	A 2. 夜 寝 る	51.0	46.2
C 2. 家に帰り	63.5	58.5			

表6-6 どんな場合にあいさつするか——その標準例——

標 準 例		東 京		大 阪	
		順位	比率	順位	比率
A	1. おはよう(ございます)	13.5	52.1	13	45.4
	2. おやすみ(なさい)	15	51.0	12	46.2
B	1. いただきます	11	55.7	14.5	45.1
	2. ごちそうさま	13.5	52.1	14.5	45.1
C	1. 行って{来 参り}ます	6	67.1	8.5	58.5
	2. ただいま	8	63.5	8.5	58.5
	3. お帰り(なさい)	10	62.4	7	59.6
D	1. 行ってらっしゃい	5	69.3	10	55.7
	2. さようなら	2	74.8	2	69.9
	3. いらっしゃい(ませ)	7	66.8	6	60.2
E	1. おはよう(ございます)	1	83.3	1	78.0
	2. こんにちは	3	73.1	4	66.3
	3. こんばんは	4	72.0	3	68.5
F	1. おめでとう(ございます)	9	63.4	5	61.3
	2. ごしゅうしょうさま(でした)	12	54.6	11	53.8

が、いちばん口から出やすく、人と別れるときの「さようなら」も、それと同等であることが、まず見える。

人に接することの始めと終り、すなわち、迎えるときと送り出すとき、また、自分が移動することによって家人との接触の始めと終りを作る「ただいま」や「行って来ます」が次のランクに位するようだ。

朝起きたときと、夜寝るときあいさつというのは、半数の人しかしていないわけで、意外に低い感じである。現在の家族構成とか、大家族でなくなった

順に示す(表6-5参照)。

東京の場合は、最高83%から最低51%、大阪では78%から45%の間に15ケースが並んでいるので間隔はぎっちり詰まっている。表全体を見ると、似たような数値が並んでいるだけで傾向というようなものが甚だ見つけにくい。

そこで、別の表を作ってみよう。15ケースを、もとのままの順序で掲げ、筆者の感覚で、一応標準的と思われるあいさつことばを示しつつ、東京・大阪における順位と全体比率とを示すことにする(表6-6参照)。

こうして見ると、一般に「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」で代表される人に会ったときのあいさつ

家庭の生活様式などから、家庭においては、朝の始まりと夜の終りが各人ばらばらになりつつあることを示しているのだろうか。

食事の始めと終りのあいさつも、同様で、やはり半数程度に終わっている。「いただきます」も言わないで食べ始める人が大都市住民の半分も占めていると考えれば、何だか変な気がするが、しかし、自分を振り返ってみると、自分も必ずしも言っていないことに気づく。昼食のラーメンをひとりで食べる場合に、「いただきます」とは、まず言わないだろう。また、相手がいても、社員食堂でわいわいと食べる場合に、やはり「いただきます」とは言いそうもない。家庭生活とか集団生活とか、いわゆる「しつけ」のある社会にいる場合、「いただきます」を言わないことは考えられないが、個別に放たれた開放社会では、私たちは、今「しつけ」を失いつつあるように思う。

「おめでた」と「不幸」については、前者の場合「おめでとう」が言いやすく、後者の場合、適切なことばがなくて困るのが現代の都会人であるが、数値で見れば、そんなに大きな差にはなっていない。「不幸」については、年齢別と職業別に一つの事実が現われている。最年少グループと学生グループでは不幸のあった人に会って然るべくあいさつする人が、東京でも大阪でも2割程度で、他のグループより目立って少ない。これは、それらの人々が不幸の際に言うことばをもたないということよりも、その年代の人が葬式に行くような機会が少ないことを反映しているだけなのかも知れない。

これらの表からいちばんはっきり言えることは、男女の間に明瞭な差があるということで、東京・大阪各15ケース計30ケースにつき一つの例外もなく女子の比率の方が高くなっている。やはり、あいさつのしつけは、間違いなく女子の方によく行きわたっているのだと言える。

その中でも差が大きく出ている項目は、

		男	女
C3. 家人の帰来を迎え	(東京)	44人	79人
	(大阪)	45	76
D1. 人を送り出すとき	(東京)	54	82
	(大阪)	43	70

で、これは、女子が家に居る存在であることを示しているのだろう。

		男		女	
B1. 食事の始め	{	(東京)	42 人	67 人	
		(大阪)	38	54	
B2. 食事の終り	{	(東京)	39	63	
		(大阪)	38	54	

これも、差の大きい方で、これは、一つには、しつけの問題であろうし、また一つには、男子の食事が職場か外出先かになりがちなのに対して、女子は家庭で食事をする人が多いということの現われであろうと思う。

7. 相関分析

はじめに

これまでの章では、個々の質問項目に対する被調査者の反応（回答）を、単純集計、クロス集計などを手掛かりとして分析を進めてきた。つまり、分析手法の観点からすれば、一つあるいは二つの数少ない変量により分析を行ってきたことになる。しかし、この種の分析だけでは、多くの質問項目間の関係（関連の度合）を全体として把握することは非常に困難である。この章ではこれまでとは観点を変え、「多くの変量を同時に処理して全体としての傾向あるいは構造を探ってみる」という立場で分析を進めていくことにする。具体的には“林の数量化理論”（我々の調査グループの一員である林知己夫の開発した多次元質的データの解析法）により分析を進めていく。

数量化理論は通常、「外的規準がある場合」の方法と「外的規準がない場合」の方法の2種類に分けられる。

外的規準がある場合の手法には数量化理論第Ⅰ類、数量化理論第Ⅱ類がある。これらは数種の要因と外的規準（予測や分類を行なう目的の情報。具体的には、予測されるべき変数、または判別されるべき群を意味する）との関連を分析する方法である。外的規準が数量で与えられている場合が数量化理論第Ⅰ類であり、回帰分析の拡張となっている。従って、これは予測のための分析法として位置づけられる。数量化理論第Ⅱ類は外的規準が分類で与えられている場合の手法であり、判別関数の拡張となっている。これは判別や分類のための分析法ということになる。具体的には、相関比（全分散に対する級内分散の比）をできるだけ大きくするように各要因に数値を与えることによって判別を行なうということになる。この数値は、固有方程式の解（固有値：相関比にあたる）に

対する固有ベクトルとして求められる。外的規準の個数が3以上の場合は、固有方程式の最大根に対する次元だけで判別を行なうことは困難なことがあり、その場合は、2番目に大きい根に対する次元を加えて分析を行なっていくことになる。このようにして得られた判別に対して、どの要因がどのくらい関与していたか（どのような要因によってタイプ分けされたか）を見ることがこの分析法の一つのねらいとなる。

外的規準がない場合の手法には数量化理論第Ⅲ類、数量化理論第Ⅳ類をはじめ、K-L型数量化、一対比較の数量化、MDA法など多くの分析法がある。これらの手法は要因間の相互の関連だけをたよりに要因を分類する、あるいは要因の構造を明らかにするための方法である。数量化理論第Ⅲ類については、言語研究の分野でも多くの適用例を見ることができる。これは、パターン分類の数量化（略して、パターン分類）とも呼ばれ、「種々の質問に対するそれぞれの回答に数値を与えることによって回答パターンを数量化し、これらを用いて、回答の類似性と回答した人々の類似性の両面を描き出そうとする方法」である。言い換えると、得られた調査結果の、人および回答についてそれぞれ並べかえを行ない、似たものが集まるようにする、いわゆる似たものの集めの数量化ということになる。これは、同じような回答をする人は何らかの意味で似ており、また、同じような性格の人によって選ばれる回答は何らかの意味で似ているという前提にたっている。従って、並べかえを行なった結果、近くに集まった回答あるいは人は何らかの意味で似ているということになる。この「何らかの意味」は分析者が後に主観的に解釈（意味づけ）を行なうことになる。これが、パターン分類の数量化の基本的な考え方であるが、実際の問題では、回答のパターンはかなり複雑なものとなる。そこで、数理統計学の方法を導入して、人と回答との相関ができるだけ高くなるように、人と回答の両方に数値を与えるといった操作が必要になる。この数値は数量化理論第Ⅱ類と同様に、固有方程式の解（固有値：相関係数の2乗になっている）に対する固有ベクトルとして何通りも求められることになる。このうち、最大固有値に対応する固有ベクトルの数値がⅠ軸の値、2番目に大きい固有値に対応する固有ベクトルの数値をⅡ軸の値（Ⅲ軸以下についても同様）として、その軸の持つ意味を解釈し、回答または人

の分類，あるいは構造の分析を行なうことが，このパターン分類の数量化の主なねらいである。また，軸の解釈は分析者の主観で行なうことになるが，これを適用する領域での常識が重要なカギとなることは当然である。

以上で，数量化理論第Ⅱ類，数量化理論第Ⅲ類について若干の説明を加えたが，詳しくは章末にあげた参考文献を参照されたい。

なお，7.1.，7.2. では数量化理論第Ⅲ類を，7.3. では数量化理論第Ⅱ類を適用した分析結果を示す。

7.1. ことばのイメージのパターン分類

ここでは、ことばのイメージ（3.2. 参照）に関して、数量化理論第Ⅲ類（以下、数量化Ⅲ類と略す）の結果を用いて、各回答の関連性を探ってみることにする。

3.2. で述べたように、イメージに関しては、東京調査では、「山の手のことば」「下町のことば」「関西弁」「アナウンサーのことば」について調査が行なわれ、大阪調査では、「船場（島之内）のことば」「河内のことば」「京都弁」「アナウンサーのことば」について調査が行なわれた。従って、「アナウンサーのことば」を除くと両者は直接比較の対象とはならないので、それぞれ別個に分析を進めていくことにする。

ここで用いたデータは、上記ことばのイメージに関する項目、属性項目（性、年齢、職業、出身地）及び属性に準ずる項目（東京人(大阪人)意識、都知事（府知事）の出身地、関心のある選挙）に関するアイテム・カテゴリー型データ（各アイテムのいずれかのカテゴリーに必ず反応している）である。また、図の中で用いた記号は下記の通りである。

東京調査の「山の手のことば」「下町のことば」「関西弁」はそれぞれ「山手」「下町」「関西」、大阪調査の「船場のことば」「河内のことば」「京都弁」はそれぞれ「船場」「河内」「京都」とし、「アナウンサーのことば」は「アナ」とした。「山手」「船場」などの後の1～4の数字は次の評価に対応している。

- 1：軽快—重苦しい
- 2：聞きやすい—聞きにくい
- 3：きれい—きたない
- 4：好き—きらい

また、「+」「-」「0」はそれぞれ、プラス評価、マイナス評価、ゼロ評価（プラス評価でもマイナス評価でもないもの。どちらとも言えないといった類のもの。無回答を含む）を示している。

なお東京調査では、「-山手3」「-アナ2」「-アナ3」の回答が極端に少なかったため、これらをゼロ評価に含めるという前処理を行なった。また、大阪調査では、「-船場3」及びアナウンサーのことばについてのマイナス評価が極端に少なかったため、東京調査同様、これらをゼロ評価に含めた。従って、「-山手1」は「山の手のことばは重苦しい」とする回答を、「+河内4」は「河内のことばは好き」とする回答を、また、「0アナ3」は「アナウンサーのことばはきれいともきたないとも言えない」「きたない」あるいは「無回答」のいずれかを意味している。

「東京人(大阪人)意識」「都知事(府知事)の出身地」「関心のある選挙」に関しては以下の記号を用いた。

「東京人(大阪人)意識」

- ☒ 東京人(大阪人)：完全あるいはかなり完全に近い東京人(大阪人)だと思っている
- ☐ 東京人(大阪人)：半分程度あるいは少しは東京人(大阪人)になっていると思っている
- ☐ 東京人(大阪人)：全然東京人(大阪人)とは思っていない
- ☒ 東京人(大阪人)：どれとも言えない及び無回答

「都知事(府知事)の出身地」

- ☒ 都知事(府知事)：都知事(府知事)の出身地は東京(大阪)でなければならない
- ☐ 都知事(府知事)：都知事(府知事)の出身地は東京(大阪)である必要はない
- ☒ 都知事(府知事)：どちらでも構わない及び無回答

「関心のある選挙」

- ☒ 選挙：都政(府政)レベルの選挙に関心あり
- ☐ 選挙：国政レベルの選挙に関心あり

☑選挙：区政レベルの選挙に関心あり

☒選挙：無回答及びその他の選挙に関心あり

属性項目は「●」で示した。なお、年齢は「15～24 歳」「25～34 歳」「35～44 歳」「45～54 歳」「55～69 歳」の 5 段階とした。出身地は以下のように 4 地域に分けた。

東京(大阪)出身：東京都または大阪府の出身

東日本出身：北海道，東北，関東，北陸，中部の出身

西日本出身：関西，中国，四国の出身

九州出身：九州，沖縄，その他の地域の出身

7.1.1. 東京におけることばのイメージ

「山の手のことば」「下町のことば」「アナウンサーのことば」及び「関西弁」が東京の住民によってどのように感じとられているのであろうか。ここでは数量化Ⅲ類により、これらに対するイメージの構造を探ってみることにする。

図 7-①は、結果をⅠ軸，Ⅱ軸について図示したものである。相関係数は，Ⅰ軸で 0.41，Ⅱ軸で 0.33 であった。

Ⅰ軸に着目すると，正の領域に「東日本出身」「西日本出身」「九州出身」などの他府県出身者が並び，ことばのイメージでは，ゼロ評価の回答がすべてここに集まっている。Ⅰ軸負の領域には「●東京出身」「■東京人」「■都知事」などが並び，ことばのイメージでは，山の手，下町のことばに対するプラス評価，マイナス評価の回答が集まっている。従って，Ⅰ軸は東京出身者と他府県出身者を分ける軸というように解釈できる。なお，アナウンサーのことば，関西弁に対するプラス評価，マイナス評価は 0 付近に集まっていて，ちょうど両者の中間に位置している。

Ⅱ軸に着目すると，正の領域に山の手ことばのマイナス評価，下町のことばのプラス評価が並んでいる。アナウンサーのことばのマイナス評価及びゼロ評価もこの領域に位置している。

Ⅱ軸負の領域には，山の手のことばのプラス評価，下町のことばのマイナス

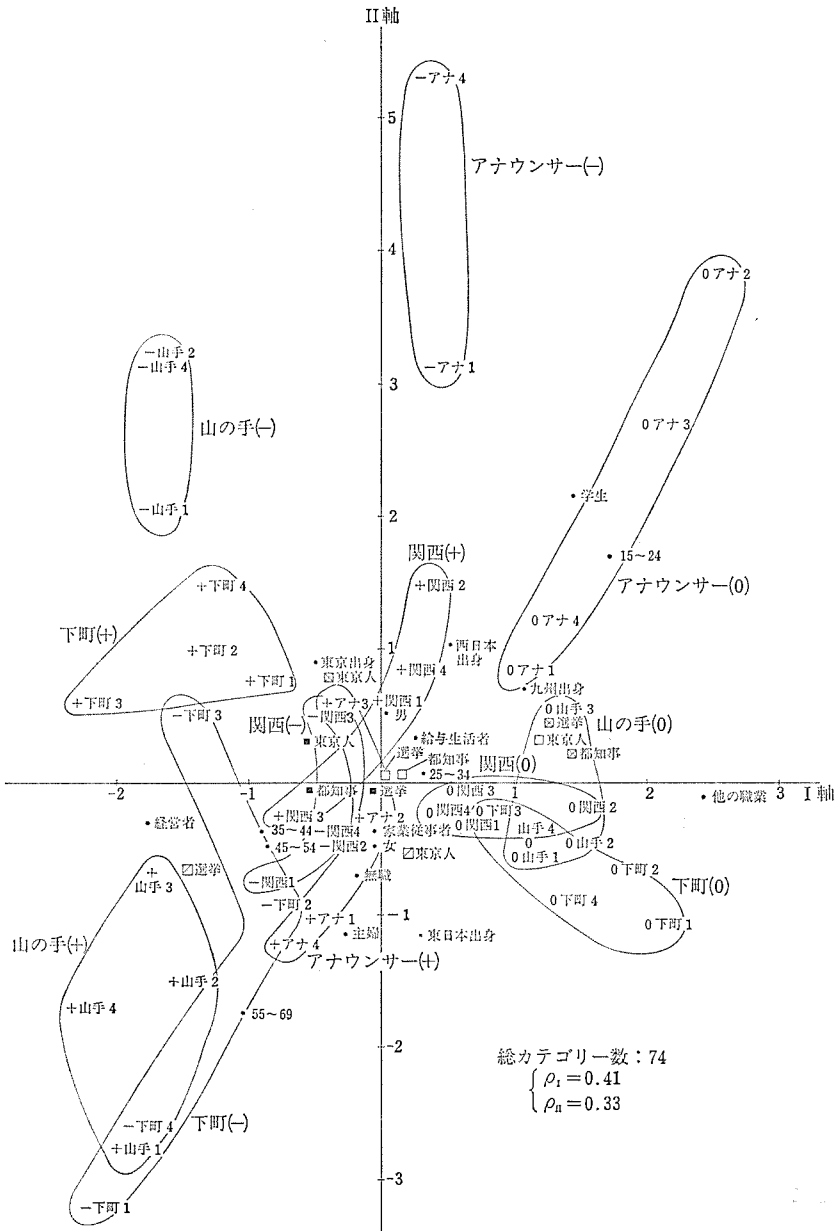


図 7-① ことばのイメージ・東京(出身地: 4 地域)

評価の回答が並んでいる。従って、Ⅱ軸は山の手のことばに対するプラス評価のグループと下町のことばに対するプラス評価のグループを分ける軸という解釈が成り立つであろう。アナウンサーのことばのプラス評価、山の手・下町のことばのゼロ評価、関西弁のすべての評価はⅡ軸の0付近にあり、山の手のことばに対するプラス評価のグループと下町のことばに対するプラス評価のグループとの中間に位置している。

Ⅰ軸、Ⅱ軸の図柄で見た場合、これらの傾向をさらにはっきりと読みとることができる。このようにして見ると、ゼロ評価の回答は他府県出身者によって支えられていることがわかる。言い換えると、他府県出身者は、山の手・下町のことばといった土着のことば及び方言としての関西弁に対して評価を差し控える傾向があるのであろう。関西弁のプラス評価、マイナス評価はほぼ同じところに集まっていて、両者にどのような構造の違いがあるのかはわからない。また、山の手のことばと下町のことばが分離されたことを考えると、東京出身者の中には山の手、下町という要素の対立が存在すると考えられる。

そこで、東京出身者を山の手・下町という観点で4地域に分け、また、在住地という新しい要因を加え、改めて数量化Ⅲ類により分析を行なってみることにする。なお、新しく加えたカテゴリーは次の通りである。

東京出身を次の四つの地域に細分した。

下町出身：中央区、台東区、墨田区、江東区、荒川区、足立区、葛飾区、
江戸川区の出身（94名）

内山の手出身：千代田区、港区、品川区、大田区の出身（89名）

外山の手出身：新宿区、文京区、目黒区、世田谷区、渋谷区、中野区、杉
並区、豊島区、北区、板橋区、練馬区の出身（50名）

都下出身：上記以外の東京都の出身（東京都の出身であるが区名のわからないものを含む）（54名）

在住地は都内50の調査地点を京浜東北線の東側（東東京）と西側（西東京）で二つの地域に分けた。おおまかにいって、東東京（254名）は下町に、西東京（385名）は山の手に対応していると考えられる。なお、具体的な調査地点については51ページの図1-④を参照のこと。

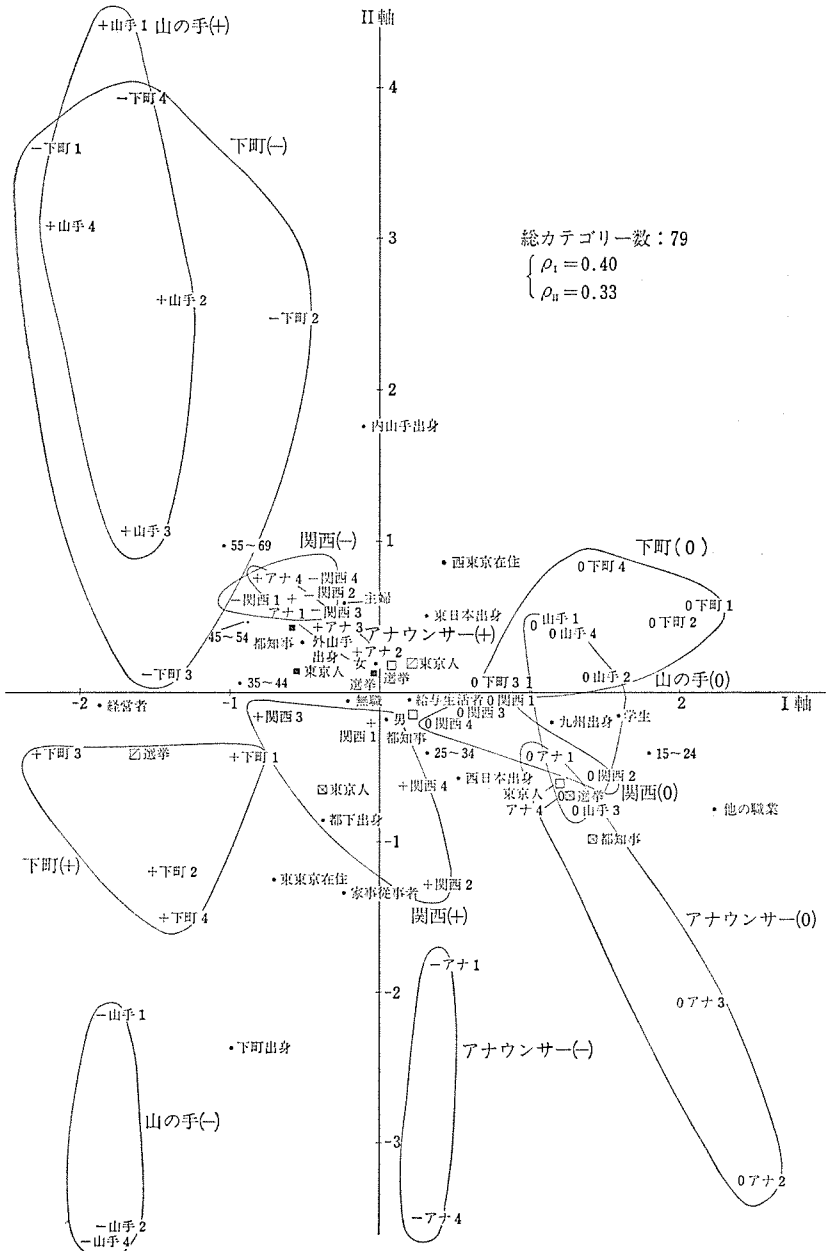


図7-②が、在住地などを含めて分析した結果の図である。相関係数は、Ⅰ軸で0.40、Ⅱ軸で0.33となり、図7-①とほとんど変わらなかった。図7-①と同様、Ⅰ軸は東京出身者と他府県出身者を分け、Ⅱ軸は山の手と下町を分ける軸となっている（Ⅱ軸の正負の方向が逆になっているが、数量化Ⅲ類では相対的位置が問題となり、正負の方向は重要な意味を持たないので無視して構わない）。山の手のことばに対するプラス評価のグループと下町のことばに対するプラス評価のグループが前図よりはっきりと分かれている。さらに、前図で原点近くに集まっていたはっきりしなかった関西弁やアナウンサーのことばの評価がきれいに分離されている点が注目される。関西弁のマイナス評価とアナウンサーのことばのプラス評価は、山の手のことばに対するプラス評価のグループの極めて近くに現われている。内山の手出身、外山の手出身の属性がこの近くにある。関西弁のプラス評価とアナウンサーのことばのマイナス評価は、下町のことばに対するプラス評価のグループの近くに現われている。さらに、Ⅱ軸正のグループ（つまり、下町のことばに対するプラス評価のグループ）は、下町のことばのプラス評価と山の手のことばのマイナス評価とに分かれるかも知れない。前者の近くに都下出身者と関西弁のプラス評価が、後者の近くに下町出身者とアナウンサーのことばのマイナス評価が現われている。

いずれにしても、大別すると山の手のことばに対するプラス評価のグループと下町のことばに対するプラス評価のグループに分かれる。前者は関西弁にマイナス評価、アナウンサーにプラス評価を与えている。このグループは山の手出身者によって支えられており、後者は関西弁にプラス評価、アナウンサーにマイナス評価を与えている。このグループは下町出身者、都下出身者によって支えられている。

また、東東京在住者は下町のことばに対するプラス評価のグループのほぼ中央にあり、西東京在住者は山の手ことばのプラス評価から少し離れたところに位置している。また、□選挙（区政に関心がある）が下町のことばのプラス評価の近くに現われている。この点から、下町住民の方が地域との結びつきが強いといえるであろう。以上のように、山の手と下町が互いに反発しあう要素として、数量化Ⅲ類によりはっきりと描き出された点が興味あることである。

7.1.2. 大阪におけることばのイメージ

「船場のことば」「河内のことば」「京都弁」「アナウンサーのことば」が、大阪の住民によってどのように意識されているのかを、7.1.1. 同様、数量化Ⅲ類により分析を試みる。

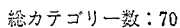
図7-③が数量化Ⅲ類の結果を図にしたものである。相関係数は、Ⅰ軸で0.40、Ⅱ軸で0.35と、東京調査の結果とほぼ同じ値になっている。大阪調査でも、Ⅰ軸は大阪出身者と他府県出身者を分ける軸になっている。ことばのイメージに関して、ゼロ評価のグループが他府県出身者によって支えられている点も東京調査と同様である。

Ⅰ軸正の領域に、すべてのことばに対するイメージのプラス評価及びマイナス評価の回答が並んでいる。これは大阪出身者によって支えられた回答のグループである。☒大阪人（どの程度大阪人かの質問に対して、どれとも言えないとする回答）が、■大阪人（完全あるいはほぼ完全な大阪人）と離れて位置している。東京調査では、東京人意識の■と☒は非常に近くに現われていた。地元人意識は、東京と大阪とは異なった構造を持っているようである。

Ⅱ軸正の領域に着目すると、船場のことばのマイナス評価、河内のことばのプラス評価、京都弁のマイナス評価の回答が集まっている。

Ⅱ軸負の領域には、船場のことばのプラス評価、河内のことばのマイナス評価、京都弁のプラス評価、アナウンサーのことばのプラス評価の回答が集まっている。アナウンサーのことばのマイナス評価はゼロ評価に含まれているので、Ⅱ軸正の方向に現われていると考えられる。

これらのことから、Ⅱ軸では、河内のことばに対するプラス評価のグループと船場のことばに対するプラス評価のグループが分離されていると考えられる。全体的な図柄で見た場合、これらのグループ及びゼロ評価のグループの三つのグループがきれいに分かれているのがわかる。大阪調査の場合、船場及び河内の出身者はほとんどいないので、出身地あるいは在住地の影響でこれらのグループが分離されているとは考えにくい。また、船場のことばを聞いたこと



$$\begin{cases} \rho_I = 0.40 \\ \rho_{II} = 0.35 \end{cases}$$

図7-③ ことばのイメージ・大阪

のない被調査者も少なくはないであろう。そのように考えると、作られたイメージで反応したグループとそれ以外の反応をしたグループ(数の上では少ない)がいて、その結果、このように両者がきれいに分かれたと考えることもできよう。

東京、大阪の両調査の結果とも、I軸は地元出身者と他府県出身者を分けていた。これは、東京、大阪といった大都市では、地元の人と他府県から移ってきた人との間にはことばに対する意識の面で大きな違いがあるということであろう。このように、ことばに対して異なったイメージを持つ人々によって大都市の言語生活が営まれている点が地方の中小都市と大いに異なっており、今後とも、大都市での言語生活、言語変化などを見ていく上で大きな意味を持つであろう。

7.2. 言語行動の類型化

ここでは、前の3.3.（1日の言語生活）で述べた項目の一部についてパターン分類の数量化を行ない、各回答の結びつきを調べることにする。なお、この分析で取り上げた回答及び属性は以下の通りである。なお、（ ）内の記号は、以下に示す図で用いたものである。「話す」行動は□系（□, ■, 図）, 「聞く」行動は○, 「読む」行動は×, 「書く」行動は△, 属性については●で示してある。

話しましたか

家で（□）；相談、言い争い、注意やごごと、用事の話、さしずした、さしずされた、御用聞き、客と応待、朝食時の雑談、昼食事の雑談、夕食時の雑談、お茶・夜食時の雑談

学校・職場で（■）；先生や上役と、友だちや同僚と、生徒や部下と、客と、心安くない人と、はじめての人と、質問、相談や打合わせ、交渉や話し合い、会議、さしずした、さしずされた、雑談

その他の場所で（図）；店の人と、医師・看護婦と、受付や窓口、待合室、電車・バスの中、レストランや喫茶店、隣近所、人の家訪問、連れと歩きながら、立話、道を聞いた、道を教えた

聞きましたか（○）；

宣伝カー、街頭放送、外国語、講義や訓話、案内や知らせ、ニュース、注意やごごと

読みましたか（×）；

週刊誌、教科書や参考書、辞書、外国語、小説、マンガ、はがきや手紙、書類、掲示、回覧板、広告のちらし、ポスター、看板

書きましたか（△）；

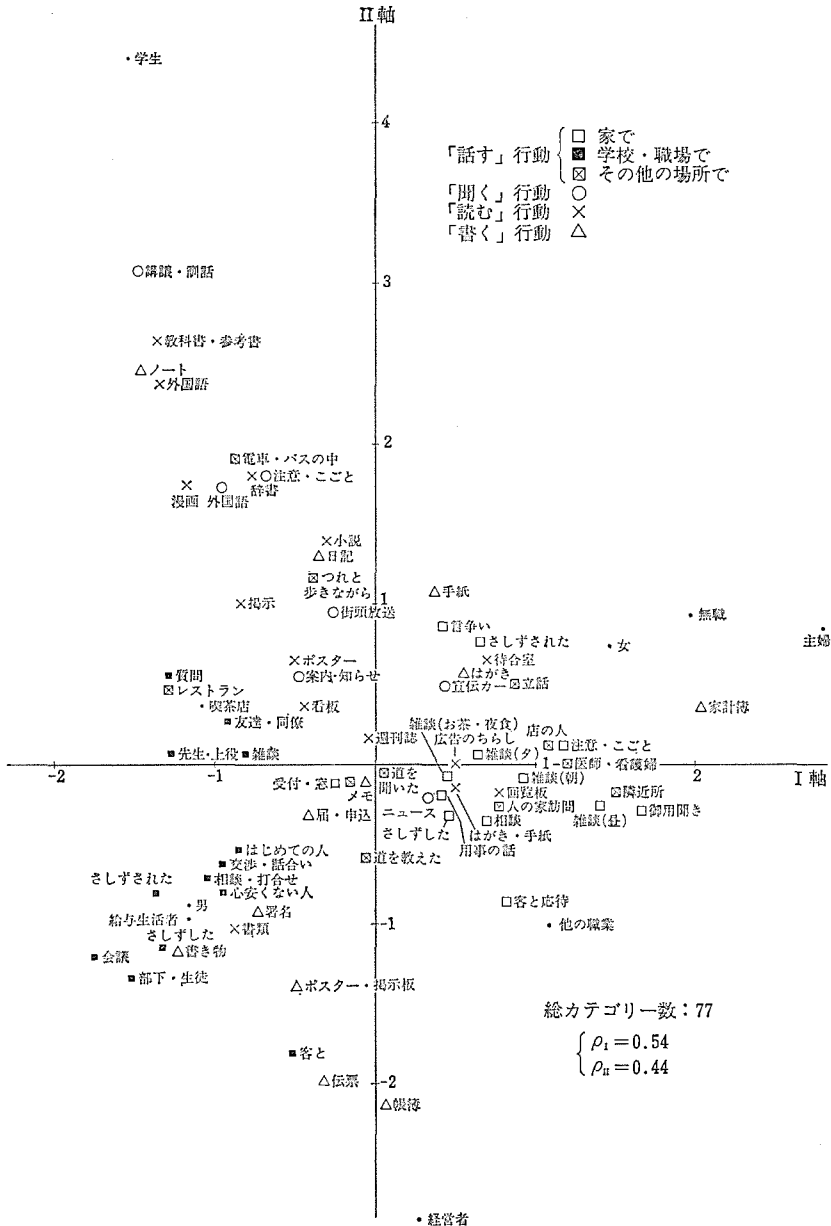


図7-④ 1日の言語生活

日記、はがき、手紙、ポスターや掲示板、書き物、署名、伝票、帳簿、家計簿、メモ、ノート、届けや申込

属性(●)；

性(男, 女), 職業(経営者, 給与生活者, 主婦, 学生, 無職, その他(家業従事者を含む))

これらの属性及び69個の回答についてのパターン分類の結果を図7-④に示した。用いたデータは、東京の被調査者639名分の0-1型データ(反応した回答には1, 反応しなかった反応には0が与えられている。フリーチェック反応とも呼ばれる)である。

相関係数はⅠ軸で0.54, Ⅱ軸で0.44, Ⅲ軸で0.37(以下の軸は略)と, まあまあの結果を得た。

まずⅠ軸で見ると, 正の領域には家庭での行動に関係した回答が, また, 負の領域には学校や職場での行動に関係した回答が多く現われている。つまり, Ⅰ軸は家庭などの私的な言語行動に関する回答と, 学校や職場といった公的な場での言語行動に関する回答を分ける軸になっている。

Ⅱ軸で見ると, 正の領域には学校に関係した回答が, 負の領域には職場に関係した回答が現われている。Ⅰ軸で分けられた, 公的な場での言語行動に関する回答が, Ⅱ軸で, さらに, 学校での言語行動に関する回答と職場での言語行動に関する回答に分けられたことになる。従って, Ⅰ軸, Ⅱ軸を座標として見た場合, 家庭, 学校, 職場といった, 三つの異なった場面での言語行動に関する回答のグループに分かれている。

Ⅲ軸の図は省略したが, 結果だけを述べると, Ⅱ軸で離れていた, 学生と経営者及び他の職業が近づき, 給与生活者, 主婦がほぼ同じ位置に現われている。年齢を加えた分析では, 15~24歳, 55~69歳が学生, 経営者の近くに, 25~34歳, 35~44歳, 45~54歳が給与生活者, 主婦の近くに現われている。Ⅰ軸に比べて鮮明さを欠いてはいるが, Ⅲ軸は, 学生, 経営者, 家業従事者などの比較的時間にゆとりのある若者や高齢者の言語行動に関する回答と働きざかりの者の言語行動に関する回答群を分けていると言えそうである。

このような傾向をさらに詳しく見るために, 「話す」という言語行動だけにつ

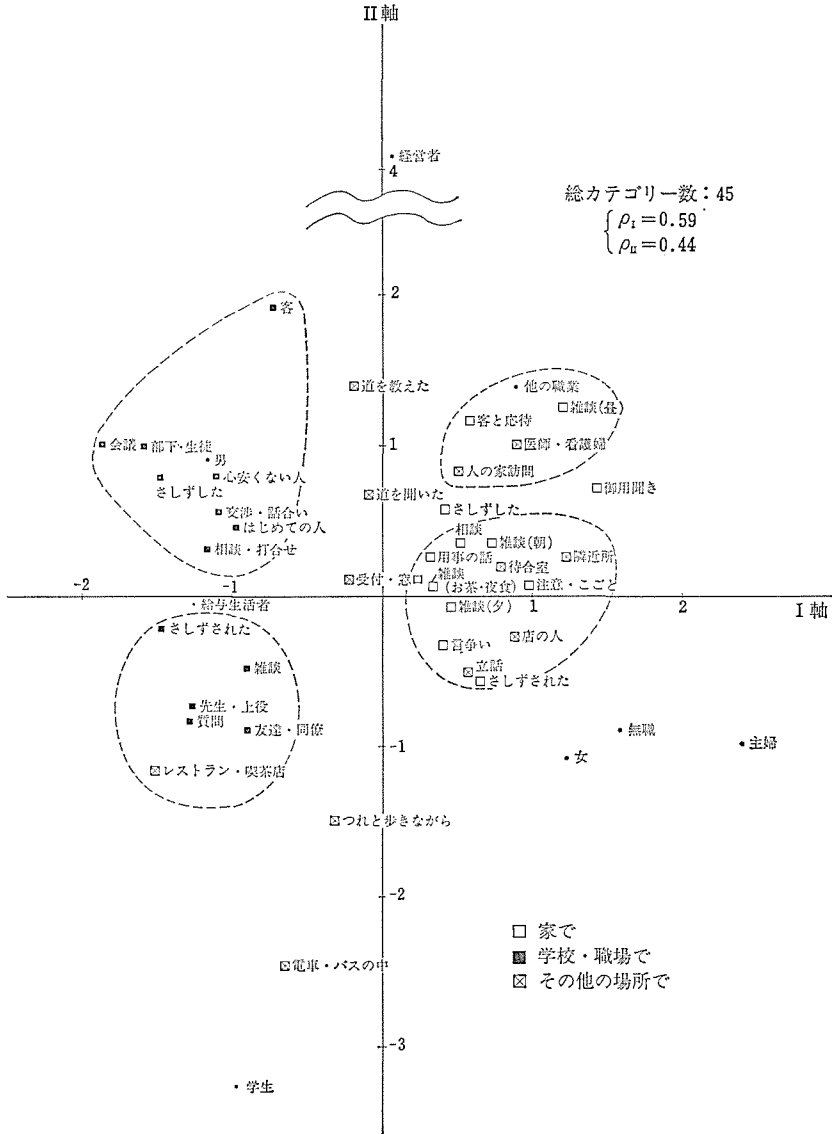


図7-⑤ 1日の言語生活(話)

いてパターン分類の数量化を行なったものが図7-⑤である。当然のことではあるが図7-④とよく似た図柄を示している(Ⅱ軸の正負の方向が図7-④と逆になっている)。

Ⅰ軸では図7-④と同様、家庭などのいわば私的な場面での行動と学校・職場といった公的な場面での行動とが分かれている。Ⅱ軸では、負の領域に「電車・バスの中」「連れと歩きながら」「レストラン・喫茶店」「友達・同僚」といった親しい人との行動が並び、正の領域に「客」「道を教えた」「心安くない人」「はじめての人」などの親しくない人との行動が並んでいる。従って、Ⅱ軸は親疎関係の軸と言えそうである。

Ⅰ軸、Ⅱ軸によって描かれる座標のなかで各行動をながめてみよう。学校・職場での行動(Ⅰ軸負の領域に集まっている)に着目すると、「さしずした」「部下・生徒」などの回答が近くに位置し、「雑談」「質問」「先生・上役」「友達・同僚」「さしずされた」などの回答が近くに集まっている。おおまかに見ると、前者は、いわゆる目上の者から目下の者への行動であり、後者はそれ以外、つまり、目下の者から目上の者への行動及び友達や同僚といった同レベルの者への行動である。つまり、職場の中での行動としては、親疎関係と上下関係が同じ軸上で解釈できる点が興味あることである。

また、Ⅰ軸正の領域に集まっている家庭での(私的な)行動に着目すると、Ⅱ軸正のグループとほぼⅠ軸上に集まっているグループの二者(図に破線で囲ってある)が、やはり親疎関係を軸として分かれている。このようにして見ると、同じ雑談でも、昼食時の雑談と他の雑談(朝食時、夕食時、お茶・夜食時の雑談)とは少し異質なものであることがわかる。

以上見てきたように、図7-④と図7-⑤とではⅡ軸の解釈が異なっていた。これは、「話す」行動、「聞く」行動と「読む」行動、「書く」行動とは本来構造が異なっているからだと考えられる。図7-④では、「読む」行動と「書く」行動がⅡ軸に強い影響を与え、その結果、学校での行動と職場での行動とを分けたとも考えられる。また、図7-⑤では、「話す」行動だけの分析であったために親疎関係がⅡ軸で現われたのであろう。

ここでは省略したが、大阪のデータもほぼ同ような結果を示した。この種

の言語行動は、大都市ではほぼ同じ傾向を示すと考えてもよさそうである。

以上の結果からわかるように、言語行動に関するこれらの回答は本来線条的なものではなく、二次元・三次元などの多次元空間に位置づけられる複雑な構造となっている場合が多い。言い換えれば、ある観点からはAとBとの行動は類縁関係にあるが、別の観点から見ると非常に異質だというようなことがありうるということである。

このような場合、従来は研究者の経験により言語行動の種々の区分けが行なわれてきた。しかし、ここで用いたような言語行動の結びつきの程度の数量化という方法で、より客観的な指標（枠組み）を得ることはこれからの研究にとって一つの新しい途を開くこととなろう。例えば、敬語やあいさつ行動などを調査するとき、行動の対象となる相手や場面についての客観的な枠組みが予め設定されているならば調査研究の効率は非常によくなるといえる。

このためには、この研究で得られた枠組みはまだ充分なものとは言い難い面がある。今後、場面の数を増やし、かつ、行動の内容的側面（頻度、ことは違いの程度など）を加味した上で新しい枠組みを作成する必要があるといえよう。

7.3. アクセントの型の形成要因

第4章ではアクセントの類別得点を算出し、この得点と各種要因（属性）との関係を論じた。ここではこの関係をより詳しく吟味し、どの要因が重要であるかを明らかにするために「数量化理論第Ⅱ類」と呼ばれる手法によって分析した結果を示そう。

この手法は本章の冒頭で述べたように外的基準が分類で与えられている場合の数量化であり、ここでは「類別語彙のアクセント得点」を基に群化したものを外的基準として与えた。

7.3.1. 東京都民のアクセント

(1) 外的基準と分析要因

東京在住者に対する類別語彙のアクセント得点は4.1.2.で示したように、東京（乙種）アクセントとの一致度として算出されている。この得点には粗点（単純一致数）および第1次・第2次補正を加えた得点の3種があるが、ここでは偶然の一致を排除した第2次補正後の得点を採用し、これを以下の3段階にまとめたものを外的基準分類とした（得点をそのまま外的基準とし第Ⅰ類を適用する方法もあるが、後の大阪調査と対比しうるように分類の形にまとめた）。

Ⅰ群：東京型アクセント群（36～40点） 433名

Ⅱ群：中間型アクセント群（10～34点） 96名

Ⅲ群：非東京型アクセント群（0～8点） 92名

一方、この3群を判別するための要因としては以下の9種の社会言語学的属性（計51カテゴリー）を用いた。

1. 性：①男 ②女
2. 年齢：① 15～19 歳 ② 20～24 歳 ③ 25～34 歳 ④ 35～44 歳 ⑤ 45～54 歳 ⑥ 55～69 歳
3. 学歴：①低学歴 ②中学歴 ③高学歴
4. 職業：①経営者 ②給与生活者 ③主婦 ④学生 ⑤無職 ⑥その他
5. 上京時の年齢：①東京生まれ ② 0～9 歳 ③ 10～20 歳 ④ 21 歳以上
6. 通算在京年数：① 0～10 年 ② 11～20 年 ③ 21 年以上
7. 出身地：①東京 ②北海道・北東北 ③南東北・北関東 ④南関東 ⑤北陸 ⑥中部 ⑦近畿・四国 ⑧中国 ⑨九州・沖縄・その他
8. 父親の出身地：7. に同じ。
9. 母親の出身地：7. に同じ。

なお、各カテゴリーごとの人数は 4.1.3. を参照されたい。

(2) 各群の判別

解析の結果、固有値（相関比）は第 1 根が 0.649, 第 2 根が 0.243 となっており分析の精度は全体としてよいといえる。

また、各群間の判別の程度を見ると、図 7-⑥に示すように、中間型群と非東京型群で楕円形が一部重なってはいるがやはりうまく判別されているといえよう。

なお、図は各群に属す被調査者ごとに算出されたサンプル・スコアの第 1・2 根（軸）の交点（図の×印の点）を中心に、標準偏差で囲まれる範囲を図示したものである。これにより、第 1 根

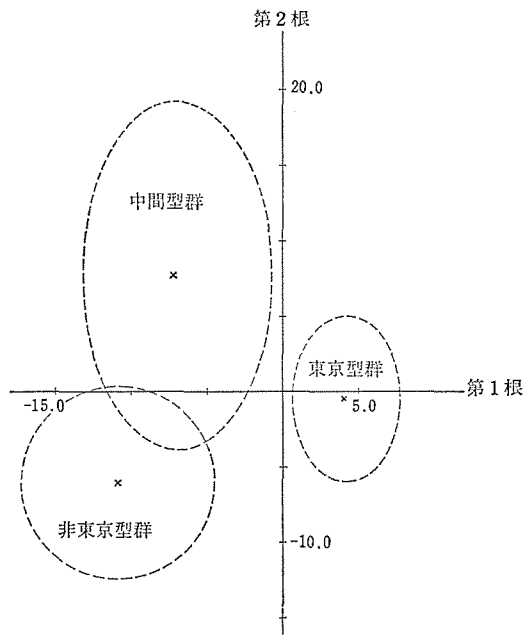


図 7-⑥ 判別グラフ(東京)

表7-1 偏相関係数とレンジ(東京)

要 因	第 1 根		第 2 根	
	偏相関	レンジ	偏相関	レンジ
出 身 地	0.652	17.76	0.448	34.18
年 齢	0.136	2.65	0.091	3.76
母親の出身地	0.117	2.57	0.162	10.76
性	0.113	1.30	0.093	2.78
上京時の年齢	0.101	1.85	0.050	2.01
父親の出身地	0.087	1.58	0.113	5.20
職 業	0.076	1.35	0.071	3.76
学 歴	0.063	0.97	0.073	2.82
通算在京年数	0.054	0.80	0.059	2.01

偏相関というまでもなく、三つ以上の変数が相互に相関しているときに他の変数の影響を除去した上で、純粹にその2変数間の相関関係を示すものである。例えば、外的基準との相関でいえば本人の出身地の要因は0.786、父親の出身地は0.404であるが、この2要因間には0.473という高い相関が見られている。この二つの要因間（実際は他の要因をも含めて）の相関を差引いて得られたものが偏相関ということになる。従って、表7-1で示した外的基準との偏相関の高い要因ほどその根での判別に大きく寄与していることになる。

また、レンジの大きい要因は、その要因内でのカテゴリーの選ばれ方がサンプル・スコア（被調査者個々に算出される）に大きな影響を与えていることになるので、偏相関同様に重要な要因を知るための手がかりとなるものである。

以下、この二つの数値を見ながら、3群のアクセント型を判別するのに寄与している要因（属性）を見てみよう。

(4) 各群の判別に寄与する要因

表7-1を見ると、偏相関でもレンジの大きさでも、第1・2根ともに出身地の要因の数値が最大であり、しかも他の要因を大きく引き離していることがわかる。つまり、アクセントの型の判別には出身地の要因が最も重要であり、かなりの部分は出身地によって決定されるというごく当然の結果が示されていることになる。

では、具体的にどの出身地域が3群の判別に影響しているか、また、ある出

で東京型群と他の群が判別され、第2根で中間型群と非東京型群とがある程度判別されたことがわかる。

(3) 偏相関とレンジ

表7-1は外的基準と各要因との偏相関係数および各要因内でのカテゴリー・スコアのレンジ（最大値と最小値との差）を示したものである。

身地域の人々はどの群に属す可能性が高いかを見てみよう。

図7-⑦は出身地の要因内での各カテゴリー（つまり出身地域）別の第1根のスコアを横軸に、第2根のスコアを縦軸にとったものである。この図と先の図7-⑥の判別グラフとを比べてみると非常によく似ていることがわかる。とくに、

右方中央の東京、中国、南関東および中部の4地域の位置は判別グラフの東京型群の楕円形の中心点、すなわち平均値付近に布置している。言い換えると、この4地域は東京型群とそれ以外の群とを判別するのに重要な役割を担うカテゴリーであるとともに、この4地域の出身者の多くは東京型アクセント保有者ということになる。同様に、左方に位置する南東北・北関東地域は非東京型群と他の群との判別に寄与する面が強いことがわかる。

これ以外の地域について見ると、北海道・北東北が中間型群の判別に影響していることを除けば、他の地域は出身地のカテゴリーとしては特定の群の判別にはあまり大きな影響を与えていないといえる。つまり、これらの地域の出身者は一つの群に集中するのではなく二つの群（例えば、近畿出身者は東京型群と非東京型群）に分散していることになる。

表7-①に戻って出身地以外の要因を見てみよう。

第1・2根ともに相対的に大きな数値を示すものは母親の出身地のみで、他の要因はいずれか一方または双方ともほとんど効いていないことがわかる。母親の出身地が第2根のレンジで他より比較的大きくなっているが、これは近畿・

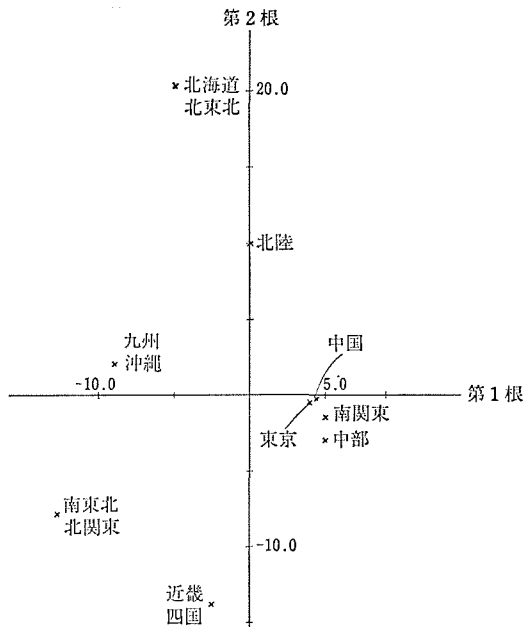


図7-⑦ 出身地別カテゴリー・スコア布置(東京)

四国出身のカテゴリー・スコアが9.04と著しくとび離れている結果に起因しているため（他はほとんど0近くの値）あるに過ぎない。従って、東京在住者のアクセントの型を区別する要因は本人の出身地のみに過ぎなく、他の要因はほとんど関与しないといっても過言ではなからう。

なお、先記の9要因に出生地（カテゴリーは出身地などと同じ）を加えて数量化し直した結果でも、固有値や判別グラフはほとんど変わっていない。また、要因の効き具合について見ると、予想通り出生地の要因が出身地に次いで第2位（偏相関で第1根が0.322、第2根が0.200）を占めた他は偏相関の順位や値はほとんど変化しなかったことをつけ加えておく。

7.3.2. 大阪市民のアクセント

(1) 外的基準と分析要因

大阪在住者の類別得点は東京アクセントとの一致（東京式得点）の他に、京阪式（甲種）アクセントとの一致（京阪式得点）との2種が算出されている。この2種の得点は一方が満点（40点）なら他方は0点というように相反するものであり、両者の合計点は40点を超えることはない性質のものである。ただし、両得点ともに低い値になることは少なくない（一型、二型アクセント話者などについて生じる）。

そこで、この2種の得点を基に4.2.4.で採用した28点以上を合格点として以下の3群に分類し、これを外的基準とすることにした。

I群：京阪型群（京阪式得点が28点以上の者） 237名

II群：東京型群（東京式得点が28点以上の者） 51名

III群：その他型群（京阪式、東京式得点ともに28点未満の者） 61名

また、この3群を判別するための要因としては東京の場合同様、

1. 性 2. 年齢 3. 学歴 4. 職業 5. 上阪時の年齢 6. 通算在阪年数
7. 出身地 8. 父親の出身地 9. 母親の出身地

の9種の属性を用いた。ただし、各属性内のカテゴリーの1～6までは東京と全く同じであるが、出身地以下は属する人数の関係上次の6種にまとめることにした。

①大阪 ②東日本（中部
地方以东）③近畿 ④中
国 ⑤四国 ⑥九州・沖縄
従って、カテゴリー総数
は東京の51に対し42カテ
ゴリーということになる。

(2) 各群の判別

解析結果は固有値が第1
根で0.651, 第2根で0.309
と東京の場合より若干よく
なっている。

判別グラフ図7-⑧を見
ると、第1根で京阪型群と
それ以外が、第2根で東京
型群とその他型群が判別さ

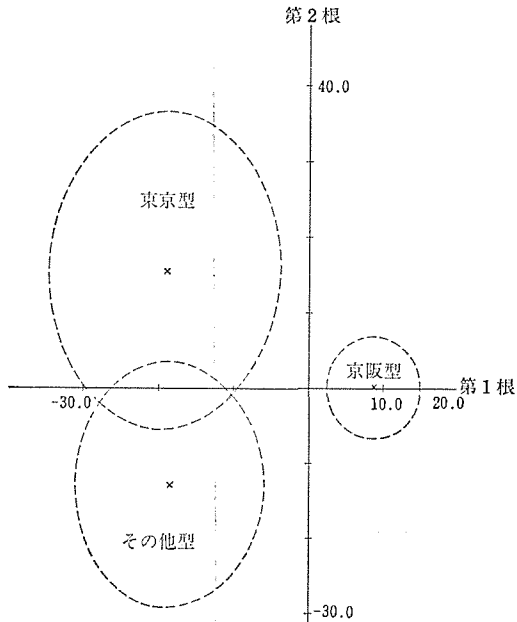


図7-⑧ 判別グラフ(大阪)

れていることがわかる。また、全体として見ると東京型群とその他型群とで楕円の一部に重なりがあるものの判別適中率はおおむね良好といえよう。

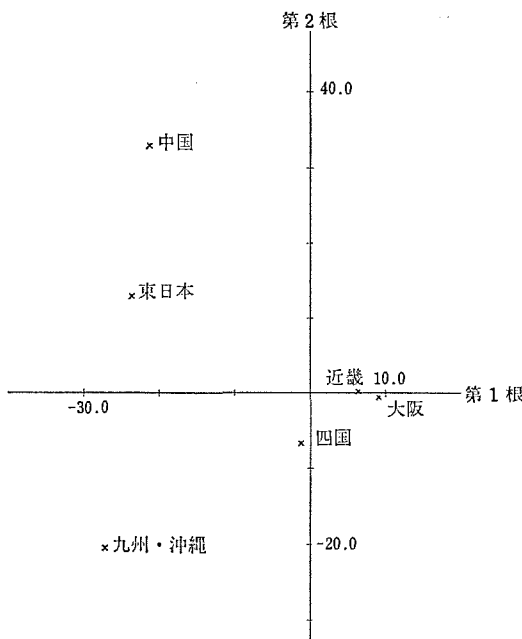
(3) 各群の判別に寄与する要因

表7-②を見ると、東京での判別同様、両根ともに出身地の要因が各群を判別するのに最も大きく寄与していることがわかる。

表7-② 偏相関係数とレンジ(大阪)

要 因	第 1 根		第 2 根	
	偏相関	レンジ	偏相関	レンジ
出 身 地	0.668	32.73	0.368	53.46
母親の出身地	0.193	7.91	0.169	18.37
上阪時の年齢	0.124	5.08	0.090	5.07
父親の出身地	0.100	3.58	0.120	11.12
年 齢	0.090	3.18	0.128	7.29
職 業	0.074	3.53	0.142	11.29
学 歴	0.053	1.62	0.023	1.02
通算在阪年数	0.045	1.43	0.213	12.21
性	0.022	0.59	0.094	4.21

そこで、出身地域別の第1・2
根のスコアを図示してみると図7-
⑨のような姿になっている。これ
を図7-⑧の判別グラフと突き合
わせてみると、大阪、近畿出身者
の大部分は京阪型群に属し、東日
本、中国の出身者は東京型群、九
州・沖縄出身者はその他型群に属



すという妥当な結果となっている。なお、四国出身者のスコアは京阪型群とその他型群との間に位置しているが、これはこの地域出身者 27 名が両群にほぼ同数に分かれて所属している（京阪型 13、その他型 11 名）ためである。

出身地以外の要因について見ると、母親の出身地がこれに次いでいる。この要因は東京の場合では第 2 根のみで第 2 位であったが、大阪では第 1・2 根とも第 2 位（レンジ）

図 7-⑨ 出身地別カテゴリー・スコア布置(大阪) となっており、しかもその数値は大きくなっている。母親の出身地域別のスコアで絶対値の大きい（つまり、判別により寄与する）ものを見ると、第 1 根では大阪が 3.05、中国 -4.86、四国 -3.45、第 2 根では東日本 7.66、中国 5.82、九州・沖縄 -10.71 と、四国の第 1 根を除き、出身地のスコアを全体に縮小したような形となっている。

第 3 位以下について見てみると、第 1 根では上阪時の年齢が多少関与しているように見える。つまり、「生まれてからずっと」と「0～9 歳」までに大阪にやってきた者が京阪型群の方向に、「10 歳以降」に上阪した者がそれ以外の方向に位置しているが両者の差は小さい。ちなみに、外的基準とこの上阪時の年齢は通常の相関係数では 0.552 と出身地 (0.783) に次いで高い相関が得られており、この種の処理を施さない限り、上阪時の年齢は被調査者のアクセントの型を決定する重要な要因として数えられることになる（この要因の偏相関が小さい主な理由は、これと出身地との相関が 0.627 と非常に高いためである）。

第 2 根について見ると、通算在阪年数のレンジが第 3 位（偏相関では第 2 位）となっている。これをカテゴリー・スコアで見ると、大阪での居住年数が 10 年

以下の者が4.78,「10～20年」が-7.43と分かれている。恐らく、大阪以外の出身者で、比較的短期間しか居ない者と長く居住する者とは出身地や階層が異なっているためではなかろうか。これらに次ぐのが職業および父親の出身地の2要因である。職業では「経営者」(-5.49)と「その他」(5.80)とが著しく離れている他はほとんど判別には寄与していない。また、父親の出身地では中国(-5.76)と九州・沖縄(5.36)とに大きな差が見られている。

他の要因では、年齢が多少関係している他は3群の判別にあまり効いていないことになるが、それでも東京在住者の場合よりも多くの要因が関与していることがわかった。なお、東京同様に出生地を加えた10要因について数量化第Ⅱ類を適用した結果は、出生地の要因は第1根で第2位(偏相関0.287)、第2根で第1位(0.375)となり、他の要因間の関係はあまり変化がみられなかった。

以上のように、被調査者の属性項目だけで判別を行なったところ、東京でも大阪でも判別の精度は非常に良好であった。しかし、判別を支えていた要因の大部分は本人の出身地・出生地であり、母親の出身地がこれに次いでおり、他の要因はほとんど効いていない状態であった。これは従来から言われているように、一度形成されたアクセントは容易には変化しないためである。

しかし、本稿では省略したが個々の被調査者ごとのスコアを見ると、例えば京阪型群に属すると思われる属性の者でも完全な東京型アクセント話者がいたり、その反対の事例も少なくない。これはその個人のことばに対する態度やその他の言語環境によっているからであろう。今後、この側面を明らかにするような研究を進めていく必要があるといえよう。

参 考 文 献

- 駒沢勉 1978 『多元的データ分析の基礎』朝倉書店
 林知己夫 1974 『数量化の方法』東洋経済新報社
 林知己夫・西平重喜・鈴木達三・野元菊雄 1973 『比較日本人論』中公新書
 林知己夫・樋口伊佐夫・駒沢勉 1970 『情報処理と統計数理』産業図書
 マーケティング・サイエンス研究会 1974 『マーケティング調査』有斐閣
 安田三郎・海野道郎 1977 『社会統計学』丸善

8. 調査結果のあらまし

以上の各章で、この調査で得られたことについて述べたが、ここではこれを簡単に概観してみよう。まず、章ごとにその章で述べられた主なことについてあげることにする。

(1) 大都市とその住民意識

「大都市」とはどういう性格を持っているかをまず考える。今、国民の約20%が10大都市に住んでいる。そして、この20%の人々が住んでいる面積は全土のわずかに2.3%にすぎない。すなわち、過密状態である。大都市はマス・コミや文化の中心地として全国に対する力を持っているが故に、そこでのことばは日本語にとって無視できないものであり、このことばの実態を知ることが重要である。

大都市住民の特色は、男性が多いこと、生産年齢の人口が多いこと、産業構成にいわゆる第三次産業が多く、ホワイトカラーが多く、昼間の人口が多いことなどである。また、生まれた時から住んでいる人の割合が低いことも特色の一つである。東京の場合半数が地方出身者である。すなわち、大都市は人口吸引力が強い。日本の場合、東京は東日本、大阪は西日本から人口を吸収しており、この点では二極構造になっている、といっているが、この力は等しくはなく、どちらかというと東京の力はやや強く、西日本にもやや及んでいる。

東京と大阪との人口は最近むしろ減少に転じたといっている。このことが将来の日本語にどのような影響を及ぼすかはこれからの問題であるが、そのためにもことばについての現状をつかむことは重要である。

さて、このような東京、大阪の住民の東京人意識、大阪人意識は当然のことながら全体として見ると低い。世代では1世より2世、2世より3世というように、世代が下がるに従って意識は強くなる。1世については、両都市とも年齢が高くなるにつれて、両都市人意識は強くなる。当然ながら、故郷に資産があるか、両都市に資産があるかによって意識が左右される。故郷の縁者、友人の有無も関係する。学歴では高学歴ほど両都市人意識が高いようである。

(2) 言語意識・言語行動について

第3章では、このような大都市である東京・大阪の住民がどのような言語生活を営み、ことばについてどのような意識やイメージを持っているかを扱った。

ことばについての意識については、標準語と方言、ことばとつきあい、男女のことばの違いなどを調査した。

標準語と方言に関しては、予想どおり東京の方が標準語的、大阪の方が方言的である。性では女性が、年齢では若い方が、学歴では低い方が標準語的であるが、これは意見であって、実際の言語生活とは違う場合がある。

ことばとつきあいに関しては、ことばを気にするのは男性より女性であり、人前で話せると思っているのは大阪の人より東京の人が多く、女性より男性が多いようである。近所の人とのつきあいは東京より大阪の方が程度が高いが、差は大きくはない。男性、若い方、高学歴の人がつきあいは悪いようである。

男女のことばの差については、将来とも今と変わらないだろうという予想は両都市とも多い。男女のことばの差は大きくなるべきだ、という意見は相当強く、東京では女性より男性に多いのに、大阪ではその逆となっている。学歴の高い方にそのような意見が多いようであって、将来とも差はなくならないのではないと思われる。これは、身なりや態度では男女差が小さくなったという大方の判断とは逆方向にあるといつてよからう。

ことばのイメージについては、まずアナウンサーのことばにプラス・イメージを感じている人が多いことはわかったが、軽快か重苦しいかでは、大阪の方がプラスにより傾いていることは注目してよからう。年齢では高い方、学歴で

は低い方がプラスの評価をする傾向がある。

第7章の相関分析によれば、東京の人が関西弁について、何か意見をいうほどは知らないということがはっきりしているが、そういうことを考えに入れたうえでいえば、東京在住者の見た関西弁で、半数以上が一致したのは「聞きやすい」のマイナス評定と、「きれい」の中立的回答であった。

大阪在住者から見た京都弁は、「軽快」を除いては非常にプラスに評価している。大阪在住者が感じている船場ことばと河内弁とでは、実質的返答は河内弁に対しての方が10%ほど多く、イメージ喚起度が高いようである。イメージとしては、船場のことばはプラスに傾き、河内弁はマイナスに傾く。

東京での山の手と下町とでは、イメージ喚起度は下町の方が10%ほど高い。第7章で述べたことであるが、山の手出身者は山の手のことばに、下町出身者は下町ことばにプラスの評価を与える傾向が強く、この二つは反撥し合うようである。この関係は、大阪で、船場ことばにプラス評価を与えるグループと、河内弁にプラス評価を与えるグループとにはっきり分かれるのと並行している。

大都市住民の言語生活を知るためにわれわれのとった方法は「きのうどんなことをしましたか」ということで、話し・聞き・書き・読んだことについて記入してもらう、というものであった。

家庭内では、用事の話が5割に達し、「客との応対」「注意・ことと」「相談」「さしずした」という答は3割前後である。性別では女性が「さしずされた」、男性が「さしずした」が多い。20歳未満では「さしずされた」、中年を過ぎると次第に「さしずした」になっていく。また、家庭内での雑談は夕食をとりながらが一番強い。

職場など公共社会ではどんな話をするかでは、友人・同僚など水平的コミュニケーションが約半数でもっとも多く、客やはじめての人との会話はそれぞれ1割にすぎない。これは職場的社會が半ば閉じられていることを示している。会議の低さは案外である。

以上述べた以外の場面では、買物の場合や隣近所の人との話が3割以上となっており、女性が多い。多数の人に対しての話は非常に少ない。テレビは9割、ラジオはその半分ぐらいが接しており、テレビは女性が多く、ラジオは男

性が多い。メモは4割前後の人が書き、その男女差はない。

第7章の「相関分析」の2番目に「言語行動の類型化」をあげてある。ここでは林の数量化理論第Ⅲ類を使って、いわゆるパターン分析をしている。

全体ではⅠ軸は家庭（私的生活）と学校・職場（公的生活）とを分けるものであり、Ⅱ軸はこの後者を学校と職場とに分けるものであり、Ⅲ軸は時間にゆとりのある人と働きざかりの人の言語行動を分けるものである。

「話す」行動だけに限って同じようにパターン分類をしてみると、Ⅰ軸は全体と同じであるが、Ⅱ軸は親疎関係を分けるものである。このように二つはⅡ軸で違っているが、このことは、言語行動が「話す」「聞く」と「読む」「書く」とで性格が違っているためであるようである。以上のことは、東京・大阪ともほぼ同じである。

(3) アクセントの実態

第4章では、両都市の住民のアクセントの実態を調べた結果を述べた。

この調査の方法は、両都市それぞれ一人のベテランが相当な数の全発話を聞きとり記録したという点で信頼性の高いものである。今までの経験によれば、違う調査員の得た結果を合わせて論ずることは危険である。客観的な機械的分析に耐える良質の録音を得られぬ以上、これは最上の方法である。

さて、東京調査での被調査者はアクセントの2拍語類別語彙による集計では、東京型70%、中間型15%、非東京型15%となっている。女性は男性より東京型が多く、非東京型が少ない傾向があり、学歴では低学歴は非東京型が多く、高学歴はその逆である。世代別では1世は非東京型が多い。非東京型とは、一型と京阪式とが主である。大阪では、70%ぐらいの人が京阪式のアクセントであり、20～25%が東京式アクセントである。

アクセントは個人が一度獲得したあとはそう大きくは変わらない。第7章の相関分析でも、アクセントの型は、出身地の要因が最も重要だ、とされている。これ一つが大きな要因で、他はあまりきいていない。次のものは母親の出身地があげられ、東京よりは大阪の方がきいていて、また、東京より多くの要因が関与しているようであった。大阪の場合、第4章では、9歳までに住んだ

ところが、一生のアクセントを決定するという結論を述べているが、第7章では、その要素は認めるものの、それほど強い要素とはしていない。

今まで東京で揺れているとされたアクセントは、優勢のアクセント型が決定しつつあるようである。調査語中「熊」だけが確定していない。これは年齢別の結果から見て、尾高から頭高へ移りつつある過渡期であろう。

大阪では大阪出身者の1拍語の京阪アクセントは安定している。2拍語では、いわゆる5類は $\bigcirc\bigcirc$ 型から $\bigcirc\overline{\bigcirc}$ 型へ移りつつあるかのようなものであるが、東京では、類全体の移動は今のところはない。また大阪で2拍語では今までいわれていたこととは違って、アクセント変化と無声化とは無関係で、無声の拍にアクセントを置く人もかなりいることがわかった。3拍語では「娘」は $\overline{\text{ム}}\text{ス}\text{メ}$ から $\overline{\text{ム}}\text{ス}\text{メ}$ に移りつつあるようであり、「東」はそれよりも変化が進んでおり、「鏡」は $\overline{\text{カ}}\text{ガミ}$ から $\overline{\text{カ}}\text{ガミ}$ へ、さらに $\overline{\text{カ}}\text{ガミ}$ と移っているということもわかった。この変化は大阪を除く近畿では進んでいるが、大阪周辺では $\overline{\text{ム}}\text{ス}\text{メ}$ 型がまだ多い。

以上のように多くの新しい結果が得られたのは、先に述べた方法をとったこと、および整理・数量化に工夫をこらしたからと思われる。

(4) 語彙・文法現象について

第5章では、単語や文法現象について、幾項目かの調査の結果を述べた。もっと多くの項目について調査したいところであるが、調査時間の制約上全体の語彙体系・文法体系からすればごく小部分しか調査できなかった。

「あさって」の翌日と翌々日を何というかについては、東京・大阪とも、今までいわれていることを結論的には実証したことになるが、これを住民（被調査者）の割合で示すことができたのは、調査をしたからである。

「あさって」の翌日は、シアサッテがもっとも多く、東京では77%、大阪では98%であった。東京の方が割合が低いのは、関東の方言のヤノアサッテが16%あったためである。

その翌日は一番多いものは東京でヤノアサッテ25%、大阪でゴアサッテ18%である。しかし、無回答が非常に多く、特に大阪ではそうであって、伝統的な名称はだんだん少なくなるのではないかと思われる。

両日の組合せについてみると、東京出身者はシアサッテーヤノアサッテという標準語タイプが42%もあり、シアサッテー無答の45%には及ばないものの、しばらくはこの形が標準語としてとどまるだろう、ということをおぼせる。また、ヤノアサッテーシアサッテは東日本に多く、特に南東北・北関東出身者では21%がそうである。

次に「可能表現」であるが、調査語でいえば「見レル」「起キレル」という言い方はだんだん多くなっているといわれているが、この実態を見てみたいと思ったのである。概していえば、東京と大阪との比較では、「見レル」「起キレル」は、大阪の方が多く使われているということができる。この両都市において、「見ラレル」「起キラレル」は若い人にはだんだん使われなくなっていくという傾向が見られる。両方使うという人が、大阪よりも東京で多いというのが、この両都市でのこの言い方の定着度をあらわしているものと思われる。

「見ラレル」の方でいえば、これの退歩は東京では相当のスピードである。これは年齢別の表を見ればよくわかる。大阪の「見ラレル」は高年齢でもそれほど高くないのに対して、若い方ではかえって東京の方が少ない。しかし「見レル」の方は大阪では東京よりもずっと進展しているということができる。つまり、ここでは「見ラレル」が東京で退歩し、「見レル」が大阪で進歩している、ということになる。このことは、全国的な分布と関係があると思われる。学歴とは関係はないようである。

一方、「起キラレル」の退歩は「見ラレル」ほどではないことから、同じ文法現象でも一斉にというわけにはいかないことが明らかになっている。

次に能力可能と状況可能は、関東・中部では区別しないところが多いのに対して、近畿では区別があるもののそれがあいまいになりつつある。この状況がどうなっているか知ろうとして、大阪での調査項目に加えた。ヨメナイ類とヨマレヘン、ヨーヨマンとを比べると、ヨーヨマンが能力可能を示すことははっきりしているが、ヨメナイとヨマレヘンとの区別についてははっきりしない。年齢では若い人はヨマレヘンを多用する傾向が、能力・状況とも見られる。つまり二つの言い分けはあいまいになりつつある。高学歴ほどヨマレヘンが多いようである。

陳述性を持っている、また持っていたとされる副詞についての調査では、「全然」「とても」「ちっとも」「てんで」の四つを取り上げた。まず、全体の数字から見ると「とても」を肯定的に使うことは既に認知されている、といってよからう。「てんで」を肯定的に使うことは他の三つのうちでは高いが、東京でもまだ過半数に達していない。

「全然」を否定で「使う」が高年齢で少なくなっている。これは、この語がかつては程度副詞で肯定にも使われていたことの反映であろうかと思われる。

「とても大きい」の是認が、東京ではある程度完成しているが、大阪では、年齢の低い方が多いということで、これもわずかながら進行中ということであろう。このことが東京の地元出身者が全体よりもわずかながら高いのに対して、大阪の地元出身者が全体よりもわずかながら低いのもいささかの関係があるかも知れない。これは世代でも東京と大阪とは逆方向にある。

「ちっとも平気だ」は年齢の若い方に多い。これについては、上に述べたことと関係があらう。学歴では低い方に多い。ともあれ、東京で10代の4分の1が使う、というのは驚きである。

「てんで」の肯定を見ると東京ではこれは相当な混乱状態にあることが見てとれる。ただ東京で（大阪でもそうであるが）「おかしい」は年齢とともに多くなるような傾向があることはわかるし、それと学歴とも合わせて考えると、どんな層からこのような言い方が拮がりつつあるかについてある想像がつく。

いずれにしてもこれらの副詞で、否定も肯定も「使う」の方は東京が常に多く、「おかしい」の方は大阪が常に大きいのが、一つの特徴といえようか。肯定にこれらを「使う」という新傾向はおそらく、東京を震源地とするのであらう。

「あかんや（わ）」とか「あんじょう直しといてや」などの大阪で使うとされている言い方を、大阪で「使う」が前者92%，後者が69%となっている。ともに高学歴では「使う」が少なくなっている。

大阪で「物の値段を聞くときのことば」に「イクラ」55%，「ナンボ」19%，あとは両方、「すてる」は「ステル」36%，「ホカス」28%，「ホル」10%となっている。ともに標準語形が多くて、方言形はそれほどではない。女性は標準語形が多い。

東京で近ごろ聞く「手紙がきない」は「使う」が8%であった。男性が多く35歳以上が多いから、近ごろ伸びているというわけではない。

「してしまった」をシチャッタというのが東日本的であるが、今は55%でありシテシマッタの20%をはるかに圧倒していて強固な地位を築いている。西日本の人には評判の悪い言い方もどうすることもできまい。シチャッタは若い人に多いから、今後ますます増えるであろう。

次はサ変動詞であるが、「察スル」—「察シル」、「感ズル」—「感ジル」では、それぞれのペアの后者が一段化ということで多くなる方だと一般にいられているが、調査の結果では逆に若い方が東京・大阪ともペアの前者が多くなっている。調査しなければ何事もはっきりいえない好例となった。東京と大阪とでは、「察スル」は大阪の方が多く、「察シル」は東京の方が多いという結果であるから、両都市では同じではないことになる。

「愛スル」—「愛ス」の組では、「愛スル」の方が多い。そして東京より大阪で多い。しかし、これは特に大阪で若い方がわずかに減少し「愛ス」が増える傾向がある。「愛シナイ」—「愛サナイ」では年齢が下がるに従って後者が増大している。五段活用の方が多くなっているわけである。

「勉強スル」—「勉強シル」では、前者が両都市で圧倒的である。「勉強シル」は東京の方が幾分多い。

(5) 敬語について

まず人称代名詞の使い分けでは一人称・二人称とも、女性より男性が使い分けを多くしている。学歴では高いほど使い分ける。一人称の方は大阪の方が種類が多く、二人称は東京の方が種類が多い。二人称では、東京でアナタ1語がきわだって使用率が高い。これに対して大阪では、アナタ・アンタの2語がこれに当たっている。東京の特色のある語はキミ、オマエであり、大阪ではオタクである。一人称には公私関係の基準によって使い分け、二人称は親族関係・性別関係の基準によって使い分けるようである。

このような人称代名詞について使い分けることは、東京・大阪とも4分の3の人が賛成している。したがって、この使い分けはそう急にはなくなるらないで

あろうと思われる。

なお、この人称代名詞の使い分けで、被調査者の使うと答えている語形の数に期待しているほど多くなかった。一つしか答えない人の数が意外に多いのである。しかしおそらく日常生活で一つの語しか使わない人の数はもっと少ないのではないと思われる。とはいえ、これを今確かめることはできない。このような質問による調査の一つの限界を示すように思われる。実態の把握のためには観察が大切だということになるが、多数の被調査者について調べるというわれわれの前提の中で、この観察による結果をどう結びつけていくかが今後の課題となろう。

敬語の使い方についての結果は次のとおりである。

「来てください」という依頼表現で、「オコシクダサイ」類は東京 10 %、大阪 22 % であった。「イラッシャツテクダサイ」類は東京 30 %、大阪 8 % であった。このような特殊な語については、それぞれの都市に特有なものがあるようである。しかし、このような特有な語は、「お聞きになる」という尊敬表現では「オ耳ニナサル」類で東京 6 %、大阪 2 % と非常に少ないことが示すように、あまり多くないし、また減少する傾向があるようである。

「お聞きになる」「乗られる」に当たるものでは「オ～ニナル」という形式は、前者の場合、東京 45 %、大阪 36 %、後者の場合、東京 56 %、大阪 46 % と、大阪より東京の方が多い。「～(ラ)レル」という形式は、前者の場合、東京 4 %、大阪 22 %、後者の場合、東京 7 %、大阪 25 % であって、東京より大阪の方が多。このように両都市の敬語の使い方は大いに違っている。なお、「～(ラ)レル」の方は東京で若い方では多いから、だんだん多くなるであろうか。

「キク」「ノル」などの、聞き、乗るという動作についての尊敬表現のないものは、前者は、東京 27 %、大阪 27 %、後者は、東京 11 %、大阪 9 % となっている。これは大体のところは男性、若い人、低学歴者に多い傾向にある。

目上の人動作に関して、「お乗りいたしますか」というのを「おかしい」とするのは、東京 62 %、大阪 66 % である。最近、謙譲表現を尊敬表現とする傾きがあるとされているが、まだ、多数が「おかしい」と感じるようである。

謙譲表現については「オ～申ス」は今はすたれて「オ～イタス」「オ～スル」

が一般的となったということが今回の調査でもはっきりあらわれた。

「聞く」に対して「ウカガウ」,「知る」に対して「存ズル」,「承知する」に対して「カシコマル」は、順番に、東京 39 %・大阪 23 %, 東京 39 %・大阪 27 %, 東京 15 %・大阪 9 %と、東京の方がいずれも多くなっている。

「聞く」について「聞キマシタ」は東京 21 %, 大阪 31 %というように謙譲表現のないものはこの「聞く」を最低として、他の二つでも相当多いし、若い人に多いからだんだん少なくなっていくものであろう。この謙譲表現のないものは、案に相違して大阪の方が多い。

謙譲表現では「見せる」に対する「ゴ覧ニイレル」「オ目ニカケル」の類はごく少ない。これらの特殊な用語を使うのはこれに限らず一般に壮年に、また高学歴者に多い。「ゴ覧クダサイ」「見テクダサイ」のような依頼表現は東京 44 %, 大阪 52 %と大変多くなっており、今後とも多くなるであろう。

この 15～20 年の間に関西の影響で東京に多くなったといわれる「サセテイタダキマス」は、「サシテイタダキマス」も含めて、東京で 53 %, 大阪で 59 %となっている。この言い方はもう東京でも一般的になったといつてよからう。「サセテイタダキマス」に対して「サシテイタダキマス」の率は大阪は格段に多く、これは大阪特有の表現であるといつていい。

「読んでいる」のように二つの動詞が連なる場合、それぞれの動詞が敬語がついているか無敬語であるかについてまとめてみると次のようになる。

敬体+敬体は東京 20 %, 大阪 12 %, 敬体+無敬体は東京 20 %, 大阪 13 %, 無敬体+敬体は東京 17 %, 大阪 33 %, 無敬体+無敬体は東京 17 %, 大阪 21 %, 両方敬体のものは東京が多いが、無敬体+敬体という本来の形は大阪の方が多い。若い人、低学歴、男性は両方に敬語を使わない類に多い。

自分の身内に関して「すぐ帰りますから」といって相手に「お待ち（になって）ください」というときはどういふかについて質問したもので、身内についての前半の敬語は、東京 34 %, 大阪 42 %, 相手に対する後半の敬語は、東京 78 %, 大阪 62 %となっている。二つを合わせて、無敬体+敬体という本来の形は、東京でも半数に達しないし、大阪でも 3 割ぐらいである。これがどのようなようになっていくかはこれからも追跡調査をすべきものである。

なお、全般的に東京の調査では、南東北・北関東の出身者は敬語をあまり使わないという点もはっきりあらわれている。

以上のような結果からするならば、敬語は少し軽い方へ動きつつあるようであるが、柴田武監修『都市の敬語の社会言語学的研究』（文部省特定研究「言語」、1980年出版）などで指摘されているように、都会化とともに敬語は複雑化することも一面には観察されているので、これと言語形式の単純化とがどう結びついていくのかが今後の研究課題になると思われる。

きまりことばによるあいさつの習慣は、15のケースで、東京では最高83%から最低51%、大阪は78%から45%であった。「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」がよく使われ、次に、「ただいま」「行ってきます」が使われる。しかし、家族の中に限ると、朝起きたときと、夜寝るときのあいさつをしないのは半数である。これは大家族でなくなったからであろう。すべて女性の方がよく使うようである。

なお、第7章の相関分析の結果は(2)、(3)で取り上げたので、ここでは述べないこととする。

(6) 調査の反省

最後に、この調査についての反省を述べる。

まず、運営上のことについて。調査組織を、それぞれ問題意識を持った研究者の集まりで作った。これはうまくいけば理想的であるが、少しばらばらで、まとまりがつかないうらみもあった。調査票も焦点が定まらない感じがしないでもない。このような調査で、時間的な制限がある場合、調査項目が多くなると少し雑になり、徹底さが欠けることになりがちである。

この報告書の執筆も、主に出題者が当たった。このことはもちろんいいことではあるが、執筆者間の連絡がよくないと論文集のようになり勝ちであり、この報告書についても多少そのうらみがないではない。

以上のことを総合すると、この調査が企画されたときは、研究者の独立というところにウエイトも置かれていたためであるが、今思うともう少し強いリーダーシップをとるべきであったと考える。理想論はなかなかそのとおりに最後ま

で実施することはむずかしい。

主として時間および費用の点から、準備調査・予備調査が十分でなかったために、無駄な調査項目が出た。このようにとすると多くなりがちな項目では、無駄なものが生ずることがないように項目を精選しなければならないはずである。

調査結果はもっと早くまとめて発表すべきであった。一つには、いろいろの調査を実施しなくてはならないという事情もあった。調査というものは、早く発表しないと価値を失うこともあるが、また、時の勢いや費用が得られたときに実施するというので、いくつも実施してしまうということもあるものである。調査して報告書を作成してから次の調査に着手する、とは必ずしもいかないものである。

調査の実施上では、もっと調査の達成率を上げるべきであった。特に都市化が一段と著しい東京ではやや達成率が低かった。達成率を高めるために、例えば宿舎を一つにして有機的に調査を運営すべきだったと思うが、これは勤務地が東京の場合宿泊費が支出しにくい、という会計規則上の制約も関係している。

調査結果の整理に関しては、上述の欠点から、各項目間の相関をもっと考えたらおもしろい結果も得られたと思うが今まで実行できなかったのが残念であった。今後はこの観点からさらに分析を進めたい。第7章で扱ったような考えでの相関分析もさらに進めるべきであった。

この調査は大量に大都市を扱った言語調査としては最初のものであり、それなりに経験を積み、いい結果を得ることもできたが、ここで言及した将来の大都市の言語、それが強い影響を及ぼすであろう日本語の姿を考えるためには、1回だけの調査では不十分である。少なくとも10年に1回というように国勢調査的な調査が必要である。われわれもこれからの2回目の調査を目指すべきであることを述べて報告の終わりとする。

Summary

Since the founding of the National Language Research Institute in 1948, sociolinguistic surveys have been made of the following communities : Shirakawa, Tsuruoka, Okazaki, Matsue, and other communities. These surveys have investigated the language usage of a large number of informants, and their results form the core of sociolinguistic research in Japan. The present study is in keeping with the precedents set by these earlier projects. Until the present study was made the concentration had been on middle-sized communities, and metropolitan areas had not yet been studied because of many problems involved in such an undertaking. However, the political and economic influence of large metropolitan areas has made them culturally influential centres in present-day Japan, and with the spread of the mass media the linguistic habits of urban areas have had a strong influence throughout the nation. For this reason we felt that a survey of the present kind was vitally needed, particularly in order to obtain a good approximation of future trends in modern Japanese.

In this survey we have elicited responses from informants by using the inquiry method in an interview situation. In order to gain insight into the real nature of a language, it is necessary to examine the way people actually use the language, as well as to analyze its structure. There are, of course, individual differences in language usage. One of the reasons for these differences can be attributed to various social factors, for example, the difference between men and women's speech, or young people's speech and that of elderly people. Different situations also give rise to various types of linguistic behaviour.

Human society is extremely complex. To gain an accurate picture of a particular sociolinguistic factor in language, it is necessary to investigate the linguistic behaviour of a fairly large number of people who hold this factor in common. It is also essential to eliminate factors other than the one under investigation. Thus, in order to satisfactorily account for a certain factor, it is necessary to increase the total number of informants.

On the other hand, surveying a large number of people would require a larger budget, more time, and manpower. Furthermore, in order to insure a high level of research work, it is important to keep the number of researchers at a minimum. With these various requirements in mind, we determined the appropriate number of informants to be interviewed, and decided individuals would be chosen by random sampling.

It must be kept in mind that this investigation was conducted in an interview situation, and was not the result of observation of linguistic behaviour in a natural setting. Observation of natural language behaviour is perhaps ideal for determining a true picture of language usage, but it is far less efficient than the method used here.

Based on these requirements, a survey was carried out in Tokyo in December, 1974, and another survey was conducted in Osaka in February, 1975. A random sample was made of 1,000 informants in Tokyo, and 500 informants in Osaka. After the survey was completed, analysis was made of the actual responses of 639 informants for Tokyo (an attainment ratio of 63.9 %) and 359 for Osaka (an attainment ratio of 71.8 %).

The proportion of residents who have actually spent all of their lives in Tokyo and Osaka is quite low. This is especially true of Tokyo where over half of the population originated from areas other than Tokyo. Consequently, there are relatively few inhabitants who feel that Tokyo or Osaka is their real "home" or "hometown."

We will outline some of the results of the survey below.

Accent was surveyed as the central part of the section on phonology. In Tokyo the percentage of those using the Tokyo accent was 70 %, and in Osaka the percentage using the Kyoto-Osaka accent was also 70 %. The number of people using the Kyoto-Osaka accent in Tokyo was very low, while the percentage of those in Osaka using the Tokyo accent was from 20 % to 25 %. This can be explained in part by the greater influence of the Tokyo accent pattern nationally. Another reason stems from the fact that one of the major sources of population for Osaka is the Chūgoku area, where most dialects have accent patterns close to the Tokyo accent.

We surmised from these results that the accent pattern acquired earliest by an individual does not change much throughout his or her lifetime. We can assume the strongest factor influencing an individual's accent pattern is the dialect of the place he was reared.

The Tokyo accent is relatively stable, while in Osaka it is apparent that the accent patterns of some classes of words are in the process of changing. For example, it was shown that words with two moras, what are called Class V words, are in the process of changing from a $\bigcirc\bigcirc$ pattern to a $\bigcirc\overline{\bigcirc}$ pattern, while words with three moras, such as *kagami* ("mirror") are changing in the following way : $\overline{kagami} \longrightarrow \overline{kagami} \longrightarrow kagami$.

Lexical and grammatical items investigated are as follows.

Potential expressions : The potential forms of *miru* ("to see"), *okiru* ("to wake up") are usually given as *mirareru*, *okirareru* in standard Japanese, and are

taught in this way at different levels of educational instruction. Nevertheless, it is generally thought that the forms *mireru*, *okireru* are becoming more prominent.

From the results of the survey it was determined that the number of people using the forms *mireru* and *okireru* is indeed great, particularly with young people, over half of whom responded that they use these forms. It seems to be just a matter of time before these forms do in fact become the norm. These new forms are used more frequently in Osaka than in Tokyo. Furthermore, the form *mireru* is more widespread in usage than is the form *okireru*.

Adverbs: One of the objects of this survey was to investigate the use of certain adverbs which require the co-occurrence of a negative predicate, or formerly required such a predicate, adverbs such as *zenzen* ("(not) at all, altogether, utterly"), *totemo* ("(not) at all, very, quite"), *chittomo* ("(not) at all, (not) in the least"), *tende* ("(not) at all, utterly"), as well as the relationship between the co-occurrence of affirmative and negative predicates.

From the survey it was learned that *totemo* used with an affirmative predicate has already become the norm. Among *tende*, *chittomo*, and *zenzen*, *tende* was found to occur most frequently with an affirmative predicate. However, even in Tokyo this usage has not been adopted by half of the speakers yet.

A larger percentage of speakers in Tokyo than Osaka responded that they used these adverbs both with the affirmative and negative forms of the predicate. We can assume that the tendency to use these adverbs with an affirmative predicate has spread outward from Tokyo.

Verbs of irregular conjugation:

Sassuru / *sasshiru* ("to understand, to conjecture, to imagine"); *kanzuru* / *kanjiru* ("to feel, to be conscious of"): It is generally thought that the latter member of each pair is used more often. From the survey, however, we discovered that the opposite is true. The number of young people who use the former members, *sassuru*, *kanzuru*, is greater in both Tokyo and Osaka.

Aisuru / *aisu* ("to love"); *aishinai* / *aisanai* (the negative form of *aisuru* / *aisu*): Both the latter members of each pair are more commonly used.

Benkyōsuru / *benkyōshiru* ("to study"): Speakers in both urban areas show a marked preference for the former member of this pair.

Honorific expressions: Men tend to differentiate more between the kinds of personal pronouns they use than do women. Greater differentiation is also related to higher levels of education. Speakers in Osaka use a larger number of first person pronouns, while those in Tokyo use a greater number of second person pronouns.

Honorific expressions using specialized lexical items are used to a certain extent, but their use seems to be on the decline. These items include some of the following: *okoshi kudasai* for *kite kudasai* ("Please come."); *mimi ni nasaru* for

okiki ni naru (an exalted expression for "to hear").

The use of the honorific verb endings *-reru* and *-rareru* is more prominent in Osaka than in Tokyo. However, with the number of young people in Tokyo using these forms steadily increasing, their usage will probably become more prevalent in the future.

There is a tendency among men, young people, and people with a low educational background not to use honorifics in conversation where they would normally be expected.

It is generally thought that there is a trend recently to use forms which were originally humble expressions as exalted expressions. However, many people still feel it is unnatural to use a humble expression, such as *onori itashimasu ka* ("Are you going to get on (the bus)?"), to describe the actions of one's superiors.

Our investigation clearly revealed that the humble expression *o-mōsu* has gradually fallen into disuse, and the forms *o-itasu* and *o-suru* have become the norm. However, the use of humble expressions in general has become less frequent.

Influences from the Kyoto-Osaka area during the past 15 to 20 years, have led to an increase in the use of the expressions *sasete itadaku*, *sashite itadaku* among speakers in Tokyo. This investigation revealed that over half of the speakers in Tokyo do, in fact, use these expressions, indicating that they have become firmly established among speakers in Tokyo.

Two verbs appearing in a sequence, such as *yonde iru* ("to be reading"), were investigated to find out what the relationship is between the use of honorific and non-honorific verbs in this pattern. For speakers in Tokyo the following pattern emerged :

- honorific + honorific (19.8 %)
- honorific + non-honorific (20.1 %)
- non-honorific + honorific (17.2 %)
- non-honorific + non-honorific (17.2 %)

In Osaka the combination (honorific + honorific) was used less frequently than in Tokyo, while the percentage of (non-honorific + non-honorific) was greater than that for Tokyo. Moreover, the combination (non-honorific + honorific), which is thought to be preferable, was found to be in greater use in Osaka.

It is generally thought that the Kyoto-Osaka dialect makes use of what we may call "absolute honorifics." This refers to the special use of honorifics, particularly exalted expressions, by a speaker consistently, even when speaking about members of his own in-group to a superior. The survey revealed that 42 % of the speakers in Osaka use this type of honorifics, and 34 % in Tokyo. These figures reveal that the difference between the two cities is not as great as formerly thought.

It is the accepted norm that honorifics are used in relation to one's superiors,

but not in referring to the members of one's own in-group. However, less than half of the speakers in Tokyo conform to this pattern, while only 30 % were found to fit the rule in Osaka.

In the survey made in Tokyo it was found that speakers originating from either North Kanto or South Kanto tended not to use honorifics to any great extent.

The overall impression gathered from this investigation is that honorific expressions are becoming gradually more simplified. However, along with increasing urbanization is the tendency towards greater complexity of diversified usage. This relationship between the simplification of honorific forms and the growing complexity of diversification of usage will be an important area for future study and research.

Chapter Three deals with the findings of a survey conducted to determine what impressions certain groups of speakers have of dialects other than their own. Impressions were gathered of the Kyoto dialect as viewed by speakers in Osaka, the Kyoto-Osaka dialect as viewed by those in Tokyo, as well as impressions of how people in Tokyo regard various dialects used in Tokyo itself, dialects used in Yamanote and Shitamachi, and how those in Osaka regard Kawachi and Senba dialects. Impressions speakers have of the speech of radio and television announcers are also reported.

Chapter Seven outlines the results of the application of Chikio Hayashi's theory of quantification to various correlation analyses. The results of the analyses were helpful in reinforcing findings of this survey not made by correlation analysis and in making evaluations. In future research it will be necessary to further enlarge in this direction.

As outlined above this survey has been able to lend statistical support to previously held assumptions, and has also revealed that some of these assumptions are, in fact, erroneous.

The linguistic behaviour of speakers in large urban areas are in the process of change in a number of ways. Studies like the present one should be carried out systematically, similar to the national census, in order to determine the changing shape of the standard language.

索引

- (1) 「 」で囲んだ項目は、調査における被調査者の反応語形を示す。
- (2) 本文中の記述と、索引に登録された形とが一致しないものも少なくない。
- (3) 数字はページ数を示し、ゴシック体の数字はその項目の定義が載っていることを示す。

あ 行

あいさつ行動	307
あいさつの習慣	307, 349
「愛シナイ」と「愛サナイ」	259, 346
「愛スル」と「愛ス」	258, 346
あかんや(わ)	250, 345
アクセント得点	179, 217, 330
アクセントにゆれのある語	187
アクセントの五つの類	166, 193
アクセントの型	342
アクセントの型の形成要因	330
アクセントの型の判別	332
アクセントの全国分布図	162
アクセントの表記	163
あさっての翌日	225, 232
あさっての翌日と翌々日	231
「あさっての翌日」の方言分布	228
あさっての翌々日	228, 232
「あさっての翌々日」の方言分布	229
「アタシ」	267
アナウンサーのことば	129, 314, 340
「アナタ」	272
あんじょう	250, 345
「アンタ」	272
「イクラ」	251, 345
移住の理由	96
「イタシマス」	289, 300
1日の言語生活	149, 324
一人称代名詞	263, 266, 346
一型アクセント	168
1世	71

1 拍語	343
1 拍語のアクセント	206
一般社会でどんな話をするか	156
「イマスカ」	292, 301
イメージ喚起度	136, 140, 341
依頼の表現	277, 296, 347
「イラッシャイマスカ」	292, 301
「イラッシャッテクダサイ」類	278, 296, 347
「ウカガウ」	284, 348
「ウカガイマシタ」類	284, 298
「ウチ」	267
お……いたします	281, 297
「オイデクダサイ」類	278, 296
「オウカガイイタシマシタ」類	284, 298
大阪市の人口の推移	85
大阪市への流入者	88
大阪人意識	94, 103, 314, 340
大阪府	72
大勢の人に話す機会はあるか	158
「オ帰リデス」	294, 302
「オ帰リニナル」	294, 302
「オ聞キイタシマシタ」類	284, 298
「オ聞キスル」類	280, 297
「オ聞キニナル」類	280, 297
「起キラレル」	235, 344
「起キレル」	235, 344
「オコシクダサイ」類	278, 296, 347
「オタク」	272
「オ〜ニナル」	279, 347
「オ乗リイタス」類	282, 297

「オ乗りニナル」類	282, 297
「オ引受けシマス」	287, 299
「オマエ」	272
「オ待ちタダケマセンカ」	294, 303
「オ待ちクダサイ」	294, 303
「オ待ちニナッテイタダキタイ」	294,
303	
「オ待ちニナツテクダサイ」	294, 303
「オ待ちネガイマス」	294, 303
「オ見セイタシマショー」	288, 300
「オ耳ニナサル」類	280, 297
「オ目ニカケマショー」	288, 300
「オ読ミ」	291, 301
「オ読ミナサル」	291
「オ読ミニナル」	291, 301
「オラレマスカ」	292, 301
「オレ」	267

か 行

回収率	56
外的規準	311, 330, 334
回答が得られるまでの時間	64
「帰ッテコラレル」	294, 302
「帰ッテミエル」	294, 302
「帰ラレマス」	294, 302
「帰リマス」	294, 302
「帰ル」	294, 302
家業従事者	71
書く行動	324
学歴	71, 73
下降調の拍	163
「カシコマリマシタ」	287, 299
「カシコマル」	348
学校	326, 342
家庭内でどんな種類の話をするか	150
可能表現	235, 344
河内弁	138, 314, 341
関西弁	132, 314, 341
「感ズル」と「感ジル」	257, 346
「聞カレル」類	280, 297
「聞キマシタ」類	284, 298, 348
聞く行動	324
「聞ク」類	280, 297
生粋の大阪人	78
生粋の東京人	78
「来テクダサイ」類	278, 296
きない	253
「キミ」	272
九州・沖縄	72
給与生活者	71
京都弁	135, 314, 341
居住地	75
近所とのつき合いの程度	117
近畿	72
クロス集計	77, 311
群の判別	331, 335
経営者	71
敬語	263, 346
敬語使用	277, 306
敬語動詞	306
敬語の使い方	277, 347
敬語の使い分け	264
敬体+敬体	293, 302, 348
敬体+無敬体	293, 302, 348
京阪型群	334
京阪式アクセント	168, 192, 200, 217,
221, 342	
研究組織	20
言語意識	107, 340
言語形成期	88, 182, 219, 222
言語行動	103, 326, 340
言語行動の類型化	324, 342
言語生活調査票	44
謙譲表現	281, 283, 298, 306, 347
「ゴアサッテ」	233, 343
語彙	225, 343
高校野球の声援	99, 101
公私関係	267, 274
高低曲線	198, 207, 213, 214
公的な言語行動	326
呼応の副詞	244
語ごとに見た類別語彙のアクセント	

.....	186
5歳から15歳までの主な居住地.....	75
古代の畿内アクセント.....	193
ことばが気になる.....	114, 119
ことばとつきあい.....	114, 340
ことばのイメージ.....	128, 314, 321, 340
ことばの差と身なり態度の差.....	127
個別語彙.....	166
個別語彙のアクセント.....	187
語法上の“ゆれ”.....	255
「ゴ覧クダサイ」.....	288, 300, 348
「ゴ覧ニイレマショー」.....	288, 300
「ゴ覧ニナル」.....	291, 301

さ 行

在住地.....	318
在住年数.....	72, 103
「サシテイタダキマス」.....	289, 300, 348
「サセテイタダキマス」.....	289, 300, 348
「察スル」と「察シル」.....	256, 346
雑談.....	150, 152, 155, 341
サ変動詞.....	255, 346
3世.....	71
サンプリング.....	51
「シアサッテ」.....	225, 228, 232, 343
時間帯別調査票記入状況.....	67
四国.....	72
下町出身者.....	318, 341
下町のことば.....	140, 143, 314, 341
下町の地域イメージ.....	145
「シチマッタ」.....	254
「シチャッタ」.....	254, 346
質問に対する問い返しの量.....	64
私的な言語行動.....	326
「シテシマッタ」.....	254, 346
「ジブン」.....	267, 273
自分の昔のことばを聞いたとき.....	110
「シマス」.....	289, 300
社会言語学.....	3, 10
住居形態.....	98, 101, 104
16歳から25歳までの主な居住地.....	75

出身地.....	71, 74
出生地.....	75, 88
状況可能.....	240, 344
上下関係.....	267, 274
上昇調の拍.....	163
「承知イタシマシタ」.....	287, 299
「承知シマシタ」.....	287, 299
職業.....	71, 74, 77
職場.....	153, 326, 341
職場や学校や会合で話しましたか.....	153
「知ラナイ・ワカラナイ」類.....	285, 299
「知リマセン」類.....	285, 299
資料の補正.....	171
人口吸引力.....	339
人口の移動.....	87
親疎関係.....	267, 274, 328, 342
親族関係.....	274
数量化理論第Ⅲ類.....	312, 314, 342
数量化理論第Ⅱ類.....	311, 330
「ステル」.....	252, 345
すてる.....	252, 345
スペクトログラム.....	198, 207, 210, 212
性別.....	73, 77
性別関係.....	274
世代.....	71, 74
前住地.....	88
全然.....	244, 345
船場のことば.....	136, 314, 341
相関分析.....	311, 341, 342, 350
その他（出身地）.....	72
その他（職業）.....	71
祖父母の出身地.....	75
尊敬表現.....	279, 297, 306, 347
尊敬表現と謙譲表現との区別意識	281, 297, 306
「存ジマセン」類.....	285, 299
「存ズル」.....	348

た 行

第1次補正.....	171, 173, 178
大都市とその住民意識.....	339

大都市の人口動態	85
大都市の性格	85, 339
大都市の良い点	90
大都市の悪い点	91
態度・心理状態	267, 274
第2次補正	171, 173, 178
高く発音される拍	163
だれと話したか	153
男女のことばの差	120, 126, 340
地域との結びつき	320
ちっとも	248, 345
中間型	179, 342
中間型アクセント群	330
中国	72
中部	72
調査時刻ごとの回収	59
調査実施時期	57
調査所要時間	63
調査地点	51
調査に対する態度	63
調査の手順	19
調査の場への同席者	63
調査の反省	349
調査日ごとの回収	59
調査票の回収	56
調査不能	68
調査を行なった場所	62
直前地	75
程度副詞	246, 345
「デスカ」	292, 301
テレビ	159, 341
てんで	248, 345
電話でどのくらい話すか	158
東京・大阪への移住者	87
東京型	179, 221, 342
東京型アクセント群	330
東京型群	334
東京式アクセント	168, 192, 200, 217, 221, 342
東京人意識	94, 103, 314, 340
東京都	72

東京都区部の人口の推移	85
東京都区部への流入者	88
動詞連接と敬語	291, 300
特別な敬語形式	306
特別な謙譲の動詞	283
とても	247, 345
どんな種類の話をするか	155

な 行

何をどのくらい書いたか	161
何をどのくらい聞くか	159
何をどのくらい読むか	159
「ナンボ」	251, 345
西日本	74
26歳以上の主な居住地	75
2世	71
二人称代名詞	270, 346
2拍語	343
2拍語のアクセント	210
人称代名詞	346
人称代名詞の使い分け	263, 345
人称代名詞の使い分けに関する意識	276
年齢	71, 73, 77
能力可能	240, 344
「乗ラレル」類	282, 297
「乗ル」類	282, 297

は 行

パターン分類	312, 324, 342
「話す」行動	324, 342
「ハリマスカ」	301
判別グラフ	331, 335
判別に寄与する要因	332, 335
東日本	74
低く発音される拍	163
非東京型	179, 221, 342
非東京型アクセント群	330
人前で話ができるか	115, 119
標準語で話す話の真実味が少ない	107

標準語と方言	107, 113, 340
副詞	244, 345
父母の出身地	75
ふるさととの結びつき	95, 100
ふるさとへ《帰る》というか、《行く》 というか	95, 98
ふるさとへの愛着心	95, 97, 100, 101
文法	343
平板アクセント	193
「勉強スル」と「勉強シル」	257, 346
偏相関	332, 336
方言まるだしでも話に通じればよい	107, 111
訪問回数	60
「ホカス」	252, 345
「ホカス・ホル」の分布	253
「ボク」	267
北陸	72
北海道・北東北	72
「ホル」	252, 345
本籍地	75

ま 行

「待ッテクダサイ」	294, 303
「待ッテクレハリマスカ」	303
身内敬語	294, 302, 304
「見セマショー」	288, 300
「見テクダサイ」	288, 300, 348
南関東	72
南東北・北関東	72
身なりや態度の男女差	127
「見ラレル」	235, 344
「見レル」	235, 344
無敬体＋敬体	293, 302, 348
無敬体＋無敬体	293, 302, 348
無職	71

無声化	195, 212
無声子音	214
無声拍	210, 212
面接調査票	22
物の値段のたずね方	251, 345

や 行

「ヤノアサッテ」	225, 228, 232, 233, 343
山の手出身者	320, 341
山の手のことば	140, 314, 341
山の手地域イメージ	145
曜日別調査票記入状況	67
「ヨマレヘン」	242, 344
「読マレル」	291, 301
「読ム」	291, 301
「読む」行動	324
読むことができない	241
「ヨーヨマン」	242, 344
「ヨメナイ」	242, 344
4世以上	71

ら 行

ラジオ	159, 341
「～(ラ)レル」	279, 347
類別語彙	166, 192, 221, 342
類別語彙のアクセント	178, 197, 217
類別語彙のアクセント得点	330
「～レル」	279, 236
れる・られる敬語	306
レンジ	332

わ 行

「ワカリマシタ」	287, 299
「ワカリマセン」類	285, 299
「ワシ」	267
「ワタクシ」	267



国立国語研究所報告70-1 大都市の言語生活 分析編

1981年3月25日 第1刷発行

定価 7,800 円

著 作 者 国 立 国 語 研 究 所

発 行 者 株式会社 三 省 堂
代表者 上 野 久 徳

発 行 所 株式会社 三 省 堂
東京都千代田区三崎町二丁目22番14号

電 話 編 集 (03) 230-9411

販 売 (03) 230-9412

総 務 (03) 230-9511

N. D. C. 分類番号801

振替口座 東京 6-54300

〈大都市言語分析・368pp.〉

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

国立国語研究所の

「社会言語学研究」報告概要

八丈島の言語調査（報告 1, 1950年）

創立後、最初の共通語化の調査。共通化の程度は共通語使用場面の量に比例することが示されている。

言語生活の実態（報告 2, 1951年）

福島県白河市で行なった共通語化の調査。日本での社会言語学的調査研究の先駆として注目されている。学歴、生育地、両親の出身地の3要因が共通語化に強く関与する等の結果が得られた。

地域社会の言語生活（報告 5, 1953年。報告52, 1974年）

山形県鶴岡市における約20年を隔てた2度の共通語化調査。両度の調査から、共通語化の要因は時勢により異なること、共通語化には四つの段階が考えられる等が明らかになった。

共通語化の過程（報告27, 1965年）

北海道入植者を対象に行なわれた世代差の調査。語彙は1・2世間で、文法や音韻は2・3世間で、共通語化の程度に落差がある等が指摘された。

言語使用の変遷(1)（報告53, 1974年）

福島県北部の農・山村での調査。年齢と学歴の2要因が共通語化に強く関与し、音声・語彙は共通語化しやすいが、文法は比較的方言形式が残りやすい等の結果が得られている。

敬語と敬語意識（報告11, 1957年）

三重県上野市・愛知県岡崎市での調査。敬語行動は、男性より女性が、また心理学的立場の弱い者ほどていねいになる等が明らかになった。

本書の姉妹編

国立国語研究所報告 70-2

大都市の言語生活 資料編

定価 12,000円

A 4 版 264 ページ

分析編では煩雑を避けて示さなかった詳細な資料を集録する